至高のレビュアーズ

エンピII

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オーバーロードと異種族レビュアーズのクロスです。

ギルメンが揃った状態で世界征服を成し遂げたモモンガさん達が、ＮＰＣ達の期待に応えるために、レビュアーズ世界にあっちの経験を積みに行くお話。

ギルメンがサキュ街でサキュ嬢さん相手に、レビューを書くだけのお話ですので、ご注意下さい。

色んなギルメンを出していくと思いますので、設定捏造、性癖捏造多数となります。

この作品はハーメルンで最初に投稿していきますが、ｐｉｘｉｖにものっけて行きます。

直接的な表現は無いので、Ｒ１８からＲ１５に変更。

まずそうならご指摘ください。

目　次

至高のレビュアーズ ―― 1
犬系獣人専門店　わんわんわんダーランド ―― 9
ニンフ専門店　マママニア ―― 21
性転換の宿屋＆おかしらのアジト　前編 ―― 31
性転換の宿屋＆おかしらのアジト　後編 ―― 39
低級淫魔の詰め合わせ部屋　淫魔の狂喜乱舞 ―― 51
禁忌と喪失のＮＴＲ専門店　扉のスキマ ―― 60
魔導士デミアプロデュース本店　前編 ―― 74
魔導士デミアプロデュース本店　後編 ―― 83
マイコニド専門店　男のキノコを天国へ… ―― 95
幕間―1 ―― 113
異世界レビュアーズ ―― 117
正座専門店　ナザリックの円卓 ―― 131
闇の精霊専門店　私たちがモテないのはどう考えてもオモテの店が悪い！ ―― 141
水槽のハーレム ―― 157
ドール・パペット・ゴーレム　性のマリオネット ―― 167
幕間―2 ―― 181
出会って数分で初夜なんてもったいない？ ―― 187
闇の競売　サキュバスムービーオークション ―― 207
こげつき亭の依頼　セッ○スしないと出られない部屋 ―― 220
幕間―3　茶釜さん達の異世界訪問　前編 ―― 237

至高のレビュアーズ

「……ふむ？」

弐式炎雷はナザリック宝物殿の奥、通称『物置部屋』と呼ばれる区画で、一つの扉を見つけた。

扉はユグドラシルのマジックアイテムだ。

アイテム名は『新たな扉』。

ユグドラシルは全盛期、様々な作品とコラボを催した。この扉は、ユグドラシルとあまりに世界観がかけ離れている作品とコラボする際に使われたアイテム。ユグドラシルプレイヤーがこの扉を通り、コラボ作品の世界に旅立つという方法で体裁を保っていた。

この区画に集められたアイテムは、通常では使えない物ばかりだ。期間の切れたアイテム引き換えチケット。

イベント開催中のみ効果が発揮するアイテム。

ユグドラシルは勿論、この転移して来た世界では使用できない、または意味が無い物ばかり。

この扉などその最たる例だろう。ナザリックが転移したこの世界ではただの大きな木製の扉に過ぎない。

だが、その扉が青白い光を微かに放っている。意図的に薄暗く設定されたこの区画では、それは目立つ。それゆえに弐式炎雷は、この区画に降り立つとすぐにその変化に気付いた。

恐らくだが、扉の効果が発動している。

すなわち、アイテムの効果を考えれば、ここでは無い別の世界に繋がっているという事だ。

弐式炎雷は腕を組んで悩む。

仲間に報告するべきだろう。この扉が何処に繋がっているかわからない。下手をすれば、転移したこの世界を平定したアインズ・ウール・ゴウン魔導国、その戦力すべてを動員しても抗えない何かがいる世界に繋がっている可能性すらある。

そんな危険性を秘めた扉だ。封印処置がとられるかもしれない。この扉の処置はギルドのメンバーの多数決に委ねられるだろう。そ

うなればどっちに転ぶかわからない。
そして封印されてしまっては、今胸に感じる弐式炎雷のワクワクは解消出来無くなってしまう。それは困る。
「……第一発見者の特権って事で」
悩みは一瞬だった。
弐式炎雷は扉に触れて押し開け、繋がった世界に足を踏み入れた。

◆

「未探索の異世界に繋がる扉を発見しました」
物置部屋に転移して来たモモンガ、ペロロンチーノ、ヘロヘロは青白く発光する扉の前で悪戯っぽい笑い声を含ませた弐式炎雷の言葉に絶句する。
「――異世界？」
モモンガが確認するように問い掛けると、弐式炎雷は楽しそうに頷く。恐らく頭巾の下では弐式炎雷は満面の笑みを浮かべているだろう。いや、あまり手を込んだキャラメイクをしなかったハーフゴーレムの彼は表情など作り出せないのだが、それでも笑っているだろうと声に含まれる感情から読み取れる。
「いや、ここがすでに異世界じゃないですか。俺達からしたらですけど」
ペロロンチーノの言葉にモモンガとヘロヘロが頷く。
ユグドラシル最終日にモモンガがナザリックと共に転移し、そして仲間達が続々と集結してきてくれた。
そして様々な事を乗り越え、この世界を平定し、アインズ・ウール・ゴウンの名を不変の伝説とした。
この世界そのものが、モモンガたちからすれば異世界である。
「この世界とはまた違う世界だよ。文明レベルはどっこいかな？こっちと同じく多種多様いろんな種族が暮らす世界みたいだね。言葉も自動翻訳がしっかり発動してるみたいだし、ちゃんと聞き取れるよ。文字は読めなかったけど、それはマジックアイテムを使えば解消する

と思う」
「アイテムが使えるという事は、私達のスキルもちゃんと使えるという事ですか？」
　ヘロヘロの問い掛けに弐式炎雷は頷く。
「だね、この世界と同じ感覚で戦えるよ。まあ、今のところ俺達の敵になりそうなレベルの相手は見つけてない」
「……その口ぶりだと、もう一人で随分探索したみたいですね……」
　モモンガの問い掛けに、弐式炎雷は悪戯がばれた子供の様な、反省していない態度で頷く。
　弐式炎雷は何かあれば自分を犠牲にしてでもナザリックへの侵攻を阻止する手段を講じて扉から繋がる異世界を探索したのだろう。それでもモモンガからすれば弐式炎雷はかけがえのない仲間だ。大事な友人の一人だ。勝手に危険な真似はしてほしくない。
「お願いですから、一人で危険な事はしないで下さい」
　モモンガの懇願に弐式炎雷は「ごめん、ごめん」と笑う。諦めてモモンガはため息をつき、扉に向き直る。
「本当にこの扉の先は異世界なんですか？この世界の何処かに繋がっているだけでは？」
「間違いなく異世界だね。扉の先はトブの森みたいな所だけど」
　確認するモモンガに、弐式炎雷は断言する。
「それならこっちの世界の何処かかも知れませんよ？何か異世界だという根拠があるんですか？」
「うん、その森を抜けた先の街まで足を運んだんだけどさ」
　ペロロンチーノの問いに答える忍者にモモンガは、一人でそんな所まで行ってきたのかよと、再び頭を抱える。流石はユグドラシル時代一人でツヴェーグ達がひしめく毒の沼地を探索し、ナザリック地下墳墓を見つけただけはある。もう少し自重してくれたらとも思うが。
「街の何処にも俺達の旗が無かった」
　そう言う弐式炎雷に思わずおおうと、ペロロンチーノとヘロヘロが声を上げる。
　この世界は、ナザリックが、ギルドアインズ・ウール・ゴウンが、魔

導国が平定した。それゆえに全ての街や村、果ては集落まで、必ずアインズ・ウール・ゴウンを示す旗が掲げられている。誰の支配下にあるのか、それを示す為に。
「俺達ならさ、どっかでそんな見落としもするだろうけど、うちの内政と外政を司ってるのはアルベドとデミウルゴスだよ？あの二人がそんな見落としする訳ないしさ。断言するけど、この扉の先は異世界だね」
そうだろうと思う。あの二人が街と呼ばれる程の規模の見落としをするはずがない。ならば本当にこの扉の先は異世界なのか。
「この扉がずっと繋がってたのか、それとも最近繋がったのか、それは分からないけど」
弐式炎雷の言葉に、徐々にモモンガも興奮してきた。これはもしかすればナザリック地下墳墓発見を超える大発見かもしれない。この扉の先にはモモンガたちの知らない未探索の、白紙の地図が広がっているのだ。
それはモモンガは一度経験している。この世界に転移してきた時と同じだ。だが違う事も有る。今度は最初から、仲間が揃っているという事だ。
興奮が隠せない。一人でナザリックと供に転移した来た時と違い、仲間がいる。それだけで、ここまで気分が変わるのか。
だがそれでもという思いが、モモンガにはあった。
なぜ弐式炎雷は、これほどの大発見をモモンガ達三人だけに伝えたのだろうか？
「でも弐式さん。なんでこの事を私達だけに最初に伝えたんですか？こんな大イベント、今すぐみんなを集めて方針を話し合わないと！」
新たな世界でも、アインズ・ウール・ゴウンの名を不変のものとしようか。
それともユグドラシルのように仲間達と共に白紙の世界を探索しようか。
様々な想いに馳せるモモンガは興奮を隠せず、弐式炎雷に問い掛けた。

「……まあ、ここからが本題なんだけどさ」
　モモンガの言葉になぜか弐式炎雷は少しだけ照れたように頬を指で掻くフリをする。その彼にモモンガ達はそろって疑問符を浮かべる。
「この先の異世界はちょっと特殊でさ。いや、本来こうあるべきなのかな？まあ、特徴があってね」
『特徴？』
　モモンガ達の言葉に弐式炎雷は頷く。
「……風俗産業が盛んなんだ。それもゲームセンターとかそういうのじゃなくて、性風俗の方。最初に言ったろう？いろんな種族が暮らしてるって。それはまあ、こっちも同じなんだけど、こっちとの違いはさ。……色んな種族の色んなエロいお店がある。それも沢山。サキュバス街って言うみたい」
「……はい？」
「……だからさ、エッチなお店があるんだよ。それも沢山。そこにまあ、なんというか……一緒に行きませんか？って事で三人に声を掛けたの」
　弐式炎雷が何を言っているかわからない。ゆっくり何度も彼の言葉を頭の中で反芻し、ようやく理解が追い付く。
「はぁ!?ちょっと弐式さん！何を言って―」
「落ち着けって！モモンガさん！万一でもこの話の内容がＮＰＣ達にバレたら不味いんだって！」
　モモンガの口を、モモンガの声が口から出ているかは不明だが、弐式炎雷は片手で押さえ、残った手で静かにしろと人差し指を立てる。
「いや！だって！というかそもそも何でＮＰＣ達が関係するんですか！」
「関係大ありだって！だって俺達童貞だろう!?」
　大声を上げるモモンガ以上の大声で弐式炎雷が声を上げる。童貞という言葉にモモンガ達だけでなく、ペロロンチーノとヘロヘロも静まり返る。
　だってこれは、デリケートな問題なのだ。

「……そう、これは俺達が童貞だから問題なんだ」
　自分で童貞と宣言しておいて自らもダメージを負ったのか、弐式炎雷の静かな声が続く。
「俺達は、魔導国は世界征服を完了させた。まあ、しばらくは法律の整備やらなんやらでドタバタするだろうけどさ、それだってすぐに落ち着く。アルベド達は優秀だからね。だからヤバいんだって」
「……それの何処がヤバいんですか？」
「……言っておくけど、今一番ピンチなのモモンガさんなんだからな？……こほん。まあ、落ち着いたらさ。俺達からもＮＰＣ達にご褒美を授けないといけない訳だ。よく頑張りましたって」
　弐式炎雷の言葉にモモンガ達は頷く。信賞必罰。罰の方は必ずではないが、モモンガ達はＮＰＣ達の功績には必ず褒美を取らせてきた。ＮＰＣ達がそれを望んでいるかと言われれば微妙だが。
「今回は世界征服完了のご褒美だから、今までとは比べ物にならない。ＮＰＣ達だって珍しく自分達から望みを伝えてくるかもしれない。特にアルベドなんて功績も大きいし、それこそモモンガさん自身を望んでくるかもよ？」
　弐式炎雷の言葉に、モモンガの背中に流れるはずの無い汗が一筋流れた気がした。
「……まあ、タブラさんの問題とか色々あるけどさ。モモンガさん、世界征服の褒美にアルベドから私を抱いて下さいとか言われたらどうするの？サキュバスのアルベドにさ」
　何も出来るはずがない。モモンガはそもそもアンデッドだし、さらには童貞だ。何も出来るはずがないのだ。
「世界を平定した魔導国。ナザリック地下大墳墓最高権力者。ギルドアインズ・ウール・ゴウンのまとめ役。そのモモンガさんが童貞で、女性を満足させる事も出来ないってバレたらさ。今まで何とか保ってきた威厳も何も、全部崩壊するかもしれないよ？」
　いや、まさかと思う。そんな事で崩壊するのか？ナザリックの、魔導国のすべてが？いや、そもそもそれを言ったら弐式炎雷達も一緒ではないか。その思いからモモンガは弐式炎雷にそう問い掛けた。

「そう、だからヤバいんだよ、俺達も。……ナーベラルがそんな事望んでくるとは思わないけどさ、万一望まれたらヤバいんだよ、俺も、勿論ペロロンさんもヘロヘロさんも」
そう声を潜める様に顔を突き付けて、男たちは小声で話し合う。
「で、でも、そういう経験するだけなら、こちらの世界でだって出来るのでは？こっちにだってそういうお店くらいあるでしょう？余程悪質で無い限り過度な取り締まりはしてない筈ですし……」
ヘロヘロの問い掛けに弐式炎雷は首を振る。
「至高の四十一人の俺達が？この世界の何処で、誰にお相手して貰うんだよ。そんな事したら速攻ＮＰＣ達にバレる」
確実にバレるだろう。モモンガ達の姿は各地にある神殿に築かれた石像によって知れ渡っている。お忍びで風俗なんて出来る筈も無い。
「いいか？俺達が取れる道は二つに一つ。甘んじて童貞であることを受け入れ、そのままＮＰＣ達と初夜を迎え自分だけで無く相手にも恥ずかしい思いをさせるか。それとも異世界で経験を積んで、彼女達を立派にリードし、すごい流石は至高の御方ってポジションを維持するかだ！」
弐式炎雷の言葉に沈黙が降りる。誰もがその光景を想像しているのだろう。その二つのどちらかしか選べないとしたら、選ぶのは、一つしかない。
最初に答えたのはペロロンチーノだった。
「……俺は行きます。異世界で経験を積んで、同性経験豊富なシャルティアを、立派にリードできる男になります！」
「シャルティアって同性経験は豊富なのかよ……。どんな設定にしてるんだ、ペロロンさん……。ま、まあ、それは置いておいてヘロヘロさんはどうする？」
「わ、私も経験を積みます。私の子達に恥ずかしい思いをさせる訳にはいきませんから……」
「これで三対一だな。……モモンガさんはどうする？」
三人の視線がモモンガに集まる。

モモンガはその視線に答える様にゆっくりと頷いた。
魔導国は、ナザリックは、仲間達のと絆でもある。それを自分が童貞であることが原因で、崩壊させるわけにはいかなかった。
三人を見据え、意志を籠めて答える。
「……行きましょう、異世界に」

犬系獣人専門店　わんわんわんダーランド

扉を潜り、森を抜け街に辿り着いたモモンガ達は酒場に来ていた。
キョロキョロと物珍しそうにペロロンチーノとヘロヘロが辺りを見回している。無理もない。モモンガもまたそうだった。
酒場は様々な種族で賑わっていた。人間にエルフといったナザリックが転移した世界でも見た種族に、同種族らしきものでも姿が違うもの。またはモモンガ達が見たことも無い種族の者も当たり前のように笑い、騒いでいる。
「……す、すごいですね。これ本当に異世界だ……」
信じられないというようにヘロヘロが呟く。モモンガもその呟きに頷いた。
「……私たちが当たり前のように受け入れられていますからね……」
酒場の安っぽい木製の丸テーブルに備え付けられた椅子に腰掛けるモモンガ達は、いつもの姿のままだ。
流石に周りに害のありそうなパッシブスキルは効果を切っているが、スケルトンにバードマンに粘体が、その姿のまま椅子に腰掛けているのだ。それなのにこの世界の人間達は酒場に入ってきたモモンガ達を一瞥しただけで、気にも留めていない。
「……ユグドラシルでも、あっちでも見たことの無い種族も居る。言葉も普通に通じる。……でも文字は読めませんね」
恐らく酒場のメニューだろう。テーブルに置かれたそれを開きながらペロロンチーノが懐から眼鏡ケースを取り出し、それを掛ける。
「ああ、本当だ。マジックアイテムが使える」
驚いて声を上げるペロロンチーノに倣い、モモンガもアイテムを懐から取り出し、確かめる。読めなかったメニューが、レンズを通すとモモンガにも読める日本語に変換される。
（……ビールにワイン。エールでは無いのか。いや、花蜜エールというのもあるのか。果実酒にジュースの類。食べ物も豊富だな。……オムレツだと？これはこの世界の料理をわかりやすく変換したものなのか？それともこの世界でも当たり前のようにオムレツが存在す

るのか？……ふむ、これは興味深いな）
ソーセージの詰め合わせ、ナッツの詰め合わせ、焼き飯、モモンガでも理解できる料理の名前に、思わずアインズモードで感心する。
「おまたせー、素材を換金してきたよー」
思い耽るモモンガが顔を上げる。
ここに来るまでの道中に遭遇し、モモンガ達に襲い掛かってきたモンスターを返り討ちにして得た素材、牙や角、皮や肉を弐式炎雷が街のそれらしい店で換金しに行っていたのだ。
……風俗資金を得るために。
「どうでした？ちゃんと売れました？」
「ばっちり。いやー、俺のサバイバルスキルがこんな所でも役に立つとは」
弐式炎雷が持つスキルの中には初歩的な採取スキルもある。ユグドラシル時代にはそれは多少モンスターからのドロップ率が上がるなどの効果だったが、転移した世界では手際よくモンスターを素材ごとに解体するスキルに変化していた。
「肉は不味いらしくて、買い叩かれた。でも牙と皮は結構金になったよ。どうせならもっと狩っておけば良かったかな？」
ずしりと重さのある革袋を三つ、弐式炎雷はテーブルに置く。確認するようにペロロンチーノが革袋を開くとこの世界の貨幣なのだろう、それが詰まっていた。
「これで幾らなんですか？」
「七万Gだって。音改さんならもっと高く買い取ってもらえたのかもしれないね」
「……それで私達四人分に足りるんでしょうか？」
「平気でしょう。ちょっと面白そうなものを貰って来たし。これ見る限り今日分くらいは問題ないっぽいよ」
そう言って弐式炎雷は懐から羊皮紙らしき束を取り出す。
騒ぎになると困るからと、必要そうなアイテムはボックスに収納せずに直接身に着けているのだ。
そしてテーブルに広げられた羊皮紙を、モモンガ達は揃って覗き込

む。
「……これ、レビューですか？風俗店の？」
「うん、そこの掲示板に張り出されてたから、バックナンバーも含めて買ってきた。凄いよな、点数も載ってるし、参考になるよな。所でみんな何も注文してないの？」
「いえ、適当に人数分の飲み物とおつまみを最初に頼みました。まあ、飲食出来るのはペロロンさんとヘロヘロさんだけですが、テーブルを占拠する以上、マナーですからね」
　弐式炎雷が持ち込んだ素材が本当に換金できるかわからなかった為に、一番安いソフトドリンクとおつまみを、入店したときにモモンガは注文しておいた。
　万一の時に備え、向こうの世界の金貨と貴金属をモモンガは懐に潜ませている。モンスターの素材が換金できなかった場合は、これで支払うつもりだったが、それは杞憂に終わったようだ。
「お待たせしました。ご注文のアップルジュースにナッツの詰め合わせです」
　丁度注文が届いたようだ。
「ああ。ありがとー」
「お……おおう……おちちっ……」
　礼を言って一番近かったモモンガが注文した品を受け取ろうと振り返った瞬間、給仕の子がよく分からない声を上げてトレイから四つのグラスとナッツの盛られた皿を零す。
「ご、ごめんなさい！すぐに新しいのを――ってあれ？」
　慌てて給仕の子が頭を下げるが、グラスとナッツの詰め合わせの乗った皿はテーブルにきちんと並べられている。落ちた瞬間に弐式炎雷とヘロヘロが動き、落下する前に水滴の一つにナッツの一欠けらも零さずに拾い上げていたのだ。
「あれ？　ボク今落としたと思ったけど――」
「ああ、大丈夫だよ。ありがとうね」
　ペロロンチーノが妙に紳士的な態度で給仕の子に、なんでもないと伝える。落下したグラスや皿の中身を零さずに掬い上げるなど、少し

離れていようが１００レベル近接職の二人には造作もない。
「……今の子、可愛かったですね。天使みたいですけど、ユグドラシルには居ないタイプですね」
　首を傾げて離れて行く天使の給仕の子を、ペロロンチーノが手を振って見送っていた。
「……妙に紳士的だったのはあの子がロリっぽいからですか、ペロロンさん。でもどうして私に驚いたんでしょうか？」
　モモンガの姿に驚いたという事は無いだろう。入店からずっと姿を晒しているし、給仕の子がトレイを零したのはモモンガが手を伸ばした瞬間だ。
「天使の子ですから、モモンガさんの属性にダメージでも受けたんじゃないですか？ほらモモンガさんって闇とか死とかそういう属性でしょう？」
「……パッシブスキルは切ってるんですが……」
「ああ、でもいいなー。ああいう子も居るんですね。天使のお店とかあるんですか？」
　色めき立つペロロンチーノが羊皮紙を探る。
「……いやー、あの子。どうも男みたいだぞ、ペロロンさん。ほら、このレビュー書いてるのあの子だろう？……つーか結構な数のレビューしてるな、あの子。経験豊富か……」
「嘘!?……本当だ。色んなお店のレビュー書いてる……。あれ？おかしいな？俺のセンサーは正常に作動してるのに」
「どんなセンサーだよ。……つーかヤバい。お、俺ドキドキしてきた」
「え、ええ。私もちょっと怖くなってきました。わ、私達これから風俗店に行くんですね」
「で、でも、どうします？ど、どこのお店行きましょうか？」
「い、いや、どこ行こうって、候補が多すぎて、さっぱりわからない……」
　そう言った情報が書かれたレビューを真剣に読み耽るモモンガ達の興奮は、次第に高まっていく。いや、興奮というよりは恐怖の織り交じった焦りの様な、そんな感情だ。

これから人生初めてのそういう事をするんだという興奮。どんな子が、どんな事を、どこまでしてくれるのだろうという期待。もしとんでもないのが出て来たらどうしよう、変な事をしてしまって怖いお兄さんとか出て来て、とんでもない金額を請求されらたどうしようという恐怖と不安。

世界を平定したアインズ・ウール・ゴウン魔導国の魔導王、そしてその仲間たる至高の四十一人。そんな大仰な肩書を持つ彼らだが、この世界においてはただの童貞四人組でしか無いのだ！

「ど、どうしましょう？いつもみたいにコインで決めますか？」

「コインで決めるにも候補を絞らないとですね……あの子に聞いてみます？」

ペロロンチーノが、天使の子に視線を送りながら提案する。

「い、いやー、リアルではいい大人だった俺達があんな明らかに年下の子を頼るのも情けなくないか？」

様々な意見が上がる中、最終的には三人の視線がモモンガに集まる。

俺が決めるのかよと、モモンガは思わず天井を仰ぎ見た。

どうすればいいんだと思うが、余程の低評価で無ければ、問題は無いだろうと思う。いくつかの低評価のレビューをはじき、候補を絞ってみる。

しかしそれ以上の決め手が見つからない。

こういう時、自分達は、ギルドアインズ・ウール・ゴウンはどうして来たか。

そうだ。自分達はいつだって未知に飛び込んでいった。馬鹿をやってきた。ならば今回も、アインズ・ウール・ゴウンらしく、自分達らしく行けばいいんだ。

モモンガはそう決意し、羊皮紙の束を集め、とんとんと机で角を揃えて綺麗に揃える。

「モモンガさん？」

「……あえてレビューの無い店はどうでしょうか？私たちは、ギルドアインズ・ウール・ゴウンはそういう集まりでしたから。だから今回

も未知に飛び込みませんか？」
　そう言ってモモンガは、三人を見渡す。彼らは一瞬顔を見合わせたが、すぐに決意した様に、力強く頷いた。
「そうだな、モモンガさん。俺達はそういう集まりだった」
「世界を平定するために、俺達は大事な事を忘れていたかもしれませんね」
「ええ、ここは原点に立ち戻って行きましょう。敢えて未知に！」
　そう言って男たちは童貞から漢になるために立ち上がる。全ては愛するＮＰＣ達の為に。
　そしてモモンガ達は酒場で支払いを終え、駆け足で一番近いサキュバス店に飛び込んだ。そういったお店に入る瞬間を、周りの人から見られるリスクを抑えるための判断だった。
　そしてそのモモンガ達が飛び込んだ店の看板にはこう書かれていた。
『犬系獣人専門店　わんわんわんダーランド』
　と。

◆

「こういうお店は初めてですかわん？」
「は、はい！は、初めてです！」
　薄暗い、ベッドルームよりお風呂場の方が広い不思議な部屋でモモンガは上擦った声を上げる。もはやモモンガでも、アインズ・ウール・ゴウン魔導王でもない、ただの鈴木悟がそこに居た。
「大丈夫、緊張することないわん。……最初はシャワーからだわん。まずは服を―」
　モモンガの骨の手を胸に挟み込み、こちらの服を脱がそうとしてくれる彼女の指示に素直に従い身を任せる。
「ふふ、不思議なお客様だわん。こういうお店は初めてって言う割には、随分脱がされ慣れてるわん」
　揶揄う様な上目遣いに、モモンガはドキリとする。

日常的にナザリックのメイド達に着替えを手伝われているために、誰かに脱がされるという行為が身に沁み込んでいるらしい。
「このお洋服も凄いわん。生前はお金持ちだったのかわん？」
モモンガがスケルトンだからだろうか。そんな聞かれ方をされた。
なんて答えればいいのかと悩んでるうちに、スルスルと彼女も身に着けていた薄着を脱ぎ捨てる。
脱いだ際にプルンと震えた豊かな双丘に、思わず唾を飲み込む、ような仕草が出る。彼女はモモンガの視線に気付くと、悪戯っぽく笑って胸を煽情的に両手で持ち上げる。
「きになる？」
悪戯っぽい笑みとともに、唇から真っ赤な舌が覗いている。
「あ、あ、いや！すみません！」
完全に童貞の反応で視線を逸らす。そんなモモンガの反応が楽しいのか、犬系獣人という彼女は、獣人と言ってもペストーニャよりも人間に犬耳の生えたルプスレギナの様な子だ、その彼女にまだ半脱ぎ状態だったモモンガはベッドに押し倒される。
「あ、あのシャワーは……？」
「ふふ、そんなのもういいわん。……お兄さんの匂いを嗅いでたら、もうこっちが我慢できなくなってきたわん」
老廃物を出さないモモンガの体に匂いが有るのだろうか。それとも犬系獣人だからこそ感じ取れるものがあるのだろうか。
「――ああン！」
「ふふふ、いい声あげるお客さんだわん」
（今の声、俺か!?）
考えに耽っていたモモンガの骨の体を彼女が一舐めした。その瞬間信じられない声をモモンガはあげてしまった。
「……少し噛んでも良いかわん？」
ゆっくりと時間を掛けて、全身の骨を舐め回されていたモモンガは呆けてしまって何も答えられない。
それを了承と受け取ったのか、彼女がモモンガの骨に軽く噛みつき、何かを吸い出す様にすする。その瞬間、モモンガにも強烈な快感

が押し寄せてくる。
「あっは。お兄さんの魔力とっても芳醇だわん。……お兄さんも、魔力の方が感じるみたい、ふふふ、もっと身を任せるわん」
魔力で感じるって何だろうか。そんな事を呆けた頭で考えながら、モモンガは彼女に身を任せるのだった。

「お兄さん、また来て欲しいわん。これ、名刺だわん」
「あ、ありがとうございます」
表に彼女の名前、源氏名なのか、それとも本名なのか、モモンガにはよく分からない、それを受け取りながら、頭を下げる。
何となく裏面を見ると何か書かれていた。帰ったら確認しようとモモンガは大事にそれを懐にしまい込む。
「……ふふ、お兄さんの初めて、とっても美味しかったわん」
別れ際にそう言いながら彼女が、つま先を立ててモモンガのむき出しの前歯に唇を押し当ててくる。
「!?」
突然の接触に目を白黒、目など無いのだが、させつつモモンガは店をフラフラとした足取りで出た。
出口には仲間達が既に待っており、モモンガも彼らに合流する。
妙な沈黙が流れる。
しばらくしてから、ぽりぽりと弐式炎雷が後頭部を掻く様な仕草をしながら声を上げる。
「……ははは、なんか気まずいね。気恥ずかしいっていうのか……」
「……ええ、私もそんな感じです」
ここに居るのはこの店に来るまでのモモンガ達ではない。一皮むけたモモンガ達なのだ。その彼らが並び合って歩き出す。ギルドの指輪を使えば、一気に扉まで転移できるのは確認済みだが、なんとなく歩きたい気分だったのだ。
ネオンに飾られた店を後にするモモンガ達の沈黙を、ヘロヘロが思い切ったような声で破った。

「……楽しかったですよね」
　その瞬間、堰を切ったように男たちが語りだす。
「なっ！良かったよな！」
「最高でした！ホント最高でした！」
「ちょっと、みんなの相手はどんな子で、どんな事をしました!?教えてください！」
「私の相手はですねー」
「まてまて、俺達もあれやろうよ」
「あれですか？」
　弐式炎雷の提案にモモンガ達は首を傾げる。
「そ、レビュー書こうぜ。それ皆にも見せてさ。こんな凄い世界、俺達だけで独占するのは悪いって。みんなも連れて行って、みんなでレビューし合おうよ！」

『犬系獣人専門店　わんわんわんダーランド』
◇オーバーロード　モモンガ
8
　お店のシステムが分からず、受付の人に言われるままフリーというのでお願いしました。女の人をお任せするって意味らしいですね。相手をしてくれたのは、ミックスタイプの、言葉は悪いですが、雑種の子でした。犬系だからか、私の骨の体を気に入ってくれたみたいで、色々してくれましたよ。ええ、色々と。
　これはアンデッドの特性でしょうが、気分の盛り上がりが最高潮に達し、何か来そう！ってなった瞬間、精神抑制が働きました……。これがアンデッドのイクって事なのかな？少しもやもやしました。それに一気に沈静化されるので、賢者タイムが酷い。でもすぐ回復します。
　お相手をしてくれた子が魔力操作にも長けた子らしく、アンデッドの私でも感じる方法を試してくれました。体内の魔力を操作して、快

感を得るらしいです。私には肉体よりも、そっちのほうが快感の度合いは強いみたいですね。私と同じ魔力系魔法詠唱者のギルドメンバーの方は、事前に魔力の扱いに長けた子でとお願いするといいかもしれません。

魔力イキって言うらしいですよ！

◇バードマン　ペロロンチーノ

１０

受付で好みの子を聞かれて、とにかくロリな子で！とお願いしたのは覚えています。案内してくれたのはチワワ系の犬系獣人の子。小さな体に、大きな耳、それにくりんくりんの大きな目をした可愛い子でした！どう見ても完璧なロリです。ありがとうございます。

それでも少し不安になったので一応年齢を聞いてみたのですが、なんか年上でした……。新手のロリロリ詐欺かと一瞬思いましたが、よくよく考えればシャルティアもロリババア属性だったりするし、ロリに貴賤はありません。

こういう時何をすればいいのか、知識では分かっていても体が付いて行かなかったので、大人しく初めてと伝えると、自然とリードしてくれました。サキュ嬢さん達は初物を喜ぶ事はあっても、馬鹿にする事は無いらしいので、初めての人はそう伝えた方が良いと思います。きっとその方が楽しめます。

次はハーフリングの子がいるお店に行きたいです！

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷

８

受付では黒の長髪の子でお願いしますとしか言えなかった。普段はギリギリの緊張感を楽しめるんだけど、やっぱこういうお店は緊張の度合いが違うね。心臓とか無いんだけどなー。出てきたのはブリアードって犬種の子でした。どんな犬なのか分からないけど、目元が隠れてて綺麗な黒髪？をしていたよ！

ポニーテールにしてもらってもいい？ってお願いすると笑って応

じてくれました。良い子です。そして服を脱がしてもらったんだけど、俺の身体を見ても「どこから声が出てるのか不思議」で済むあたり異世界の懐の広さが窺える。あとその段階でようやく思い出す。俺、アレが無い。

おもちゃで遊びましょうかと言われたので、フリスビーとかロープかな？って思ったんだけど、渡されたのはがっつり大人のおもちゃでした。ですよねー。

忍者だからか、器用なのかな？それとも彼女の感じてるフリが上手いのか分からないけど、反応が凄い良くて、自分が女の子を悶えさせてるって視覚的効果も相まって、凄い楽しかった。

またこのお店に来ることがあれば、この子を指名して、メイド服を着せたいです。

◇古き漆黒の粘体　ヘロヘロ

7

どうも粘体と犬系獣人の相性が悪いらしく、半分くらいの子は選べませんでした。水っ気が強いと毛がごわついて、好きじゃない子が多いらしいです。

その中でお相手してくれたのはゴールデン・レトリバーの犬系獣人さん。クリーム色の体毛が見ようによっては金髪っぽくて、好みでした。人型なんですが、ペストーニャに似た感じの子でしたね。大型犬だからか、胸もペストーニャ並みに大きかったですよ！

毛皮の防水性が高いらしく、私がまとわりついても嫌な顔するどころか、喜んでくれました。というか私が体に纏わりつく快感は凄まじいらしく、最後の方は少し呆けた感じになっていました。摘まんだ種族に快感効果のある粘体とかあったかな……？

呆けた彼女に「ポーションを渡しますので、取り込んで少し溶かしても良いですか？」と尋ねたら、掠れた声でそれは流石にＮＧと断られました。残念！まあ、当たり前なんですが。

でも帰り際ＮＧプレイ無しのお店を紹介して貰えたので、今度はそちらにお邪魔しようかと思います。タブラさんも脳吸いプレイとか

しそうだし、誘ってみようかなー。

『ゆえに！この魔導軽視の状況に歯止めをかけるべく！我は再び立ち上がったのである！どうか、この魔王デスアビスに！血塗られし一票を――！』

なにか、この世界特有の魔法だろうか。巨大な３Ｄホログラムの様な技術で、角の生えたきわどい格好の少女が自身の姿を空に晒している。魔王と名乗る少女をモモンガは見上げつつ、隣にいる弐式炎雷に声を掛けた。

「どう思いますか、弐式さん？」

「んー、覚醒した神人。もしくは真なる竜王級……かな？流石にワールドエネミークラスの強さは無いと思うけど……魔王ねぇ」

腕を組んで推測を口にする弐式炎雷に頷く。

神人や竜王クラスであれば対応は問題無い。だが万一にもこの魔王を名乗る少女がワールドエネミーと同等の力を持っているのならば、この世界の危険度は一気に増す。

「この世界の魔王。七大罪クラスを想定したほうがいいでしょうか？」

「ユグドラシル時代と違って今はナザリックを戦力として使えるから、例えワールドエネミー相手でも対応できないわけじゃ無いけどね。でも、一番の対策はやっぱ触らぬ魔王に祟り無しじゃない？」

「それが一番でしょうね。……この場にペロロンさんが居なくてよかったかもしれません」

「……だね。居たら絶対飛び上がってちょっかい掛けてただろうしね」

モモンガと弐式炎雷は二人で安心した様にため息をつく。

魔王と名乗る少女は、モモンガから見てもとても可愛らしい姿をしている。それでいてマイクロビキニとでも言うのだろうか、非常に際どい姿だ。ペロロンチーノならば、危険を承知で接触を図ろうとするだろう。

「しっかし、こっちは選挙なんてあるんだね。そこらへんは俺らも参

考にするべきかな？」
「どうでしょう？アルベドやデミウルゴスは反対しそうですが……」
「それかまた深読みしてきて賛成するパターンか。……やっぱこっちも面白いよな。水晶に動画を保存する技術なんてのもあるし。文明レベルからしたら、完全にオーバーテクノロジーって奴じゃないの？」
「私たちが転移した世界にも、蛇口なんてものもありますけどね。水道管も無いのに」
「口だけの賢者だっけ？……あっちでさ、居たことは確実だけど、その後の消息が不明ってプレイヤーらしき奴いるじゃん。そういう奴等って案外こっちに来てるんじゃない？俺達と同じでサキュバス店にハマって帰る気無くなったみたいな」
「……ありえそうで怖いですね。――あ、二人が戻ってきましたね」
モモンガが手を上げて二人に場所を示す。二人はすぐ気づいたようで、こちらに向けゆっくりと歩いて来た。
蔓で構成された体を揺らし、両脇になにやら紙袋を大量に抱えている。ヴァイン・デスと呼ばれる種族。その彼はギルドアインズ・ウール・ゴウンの諸葛孔明と呼ばれる男。ＰＫ＆ＰＫＫ担当軍師のぷにっと萌えである。
そしてその後ろを歩くのはギルド最年長で、リアルでは大学教授をしていた死獣天朱雀。彼もまた両脇に大量の紙袋を抱えていた。
「お二人とも、お待たせしました。無事に換金もできましたよ」
両脇に抱える荷物を見れば一目瞭然だ。今回は街までの道中に遭遇したモンスターから得た素材のほかに、ヴァイン・デスのぷにっと萌えが自身の種族特性を活かし、いくつか植物系の素材を採取していたのだ。
ぷにっと萌え自身は指揮官系のクラスを中心にとっているために、植物の採取スキルはあくまでも種族特性にくっついてきたオマケの様なものだが、それでも量を集めればそれなりの金額にはなったようだ。
「ぷにっとさん、大量に買い込んだね。それサキュバスムービー？」

「……そんな訳ないでしょう。こちらの本ですよ。主に戦記や戦史、そういったものをかき集めてきました」
「流石ぷにっとさん。こちらでも策士っぷりを発揮するつもりですか。朱雀さんも荷物は本ですか？朱雀さんは郷土史とか集めてそうですね」
　大学教授であった彼が大学でどういった事をしていたのかは、小卒のモモンガはあまり知らない。一度死獣天朱雀がやまいこ等を交え難しい話をしている場に参加したことがあるのだが、正直半分も理解できなかった。
「いや、私はサキュバスムービーの方だよ」
　笑いながら答える死獣天朱雀に、モモンガは弐式炎雷と共に笑う。こういう冗談も言える人なのだ。
「モモンガさんに弐式さん、ちょっと壁になってもらえますか？……荷物をしまったら早速行きましょうか」
　ぷにっと萌えの指示に従い、二人で壁になる。そのモモンガと弐式炎雷の影に隠れ、二人が抱えた大量の紙袋を虚空に開いたアイテムボックスに収納していく。
　……正直この世界ではアイテムボックスに収納する姿を見られても、「へー、あんな事出来る種族もいるんだー」で済みそうであるが。
「早速行くって、お店の目星はついてるの？」
　弐式炎雷が壁になりながら、ぷにっと萌えに尋ねる。ぷにっと萌えはその質問に頷いた。
「……これでよしっと。そうそう。お店ですが、ここまでの道中で面白そうなところを見つけましてね」
「面白そうなところ？」
　紙袋を仕舞い終えたぷにっと萌え達に向き直る。今回モモンガと弐式炎雷は、サキュバス店選びをこちらに初めて来たぷにっと萌えと死獣天朱雀に一任していた。
「うん、ニンフ専門店を見つけたんだ」
　答えたのは死獣天朱雀だ。そしてその答えにモモンガと弐式炎雷は思わず気後れしたように後ずさる。そもそも死獣天朱雀がサキュ

バス店巡りに付き合う事も驚きだったが、その店のチョイスにも驚かされる。
「……いやー、俺は流石に妊婦は無理だよ。……うん、無いわ」
「……私もちょっと抵抗感が……」
「いやいや、妊婦じゃなくてニンフですよ。ニンフ、ニュンペー。ユグドラシルでも居たはずですよ」
「あ、思い出した。確か精霊系のモンスターだよね」
弐式炎雷の答えに、生徒の答えを聞いた教師の様な笑みを死獣天朱雀は浮かべる。
「そう、正解だよ。……歩きながら話そうか。ニュンペーは元々ギリシャ神話に登場する下級女神、精霊でね。住居によって様々な種別に分かれている精霊だよ。ふふ、面白いと思わないかい？」
死獣天朱雀にそう問い掛けられるが、何が面白いのかモモンガと弐式炎雷は分からずに、揃って疑問符を浮かべる。
「ギリシャ神話に登場する精霊が、この世界で当たり前のように種族として存在している事がですよ」
疑問に答えたのはぷにっと萌えだった。その答えに再び死獣天朱雀は破顔する。
「そう、そうなんだよ。私たちに働く自動翻訳が、彼女達を判りやすい存在としてニンフと翻訳しているのか。それとも本当に、彼女達はギリシャ神話のニンフとして存在しているのか。はたまた私たちのリアル世界におけるニンフこそが、この世界における彼女達の存在を指し示していたのか。……非常に興味深いと思わないかい？」
死獣天朱雀の言葉に、弐式炎雷とモモンガはただ驚くばかりだった。正直、そんなことを考えても居なかった。確かにモモンガも最初はこの世界のオムレツなどの翻訳に興味を覚えていたが、サキュバス店に赴いてからは。そんな事はすっかり頭から消え去っていた。今だって「今日はどんなお店に行くのかな、ドキドキ」くらいしか考えていなかった。それは弐式炎雷も一緒だろう。
モモンガと弐式炎雷の思考を読んだのか、死獣天朱雀が柔和な笑みを浮かべる。

「まあ、若いうちはそんな事を気にせず、ただ溺れるだけで十分だと思うよ。……さあ、丁度着いたみたいだ。ここだよ」
言葉に顔を上げた。そして懐からマジックアイテムを取り出して、看板を見上げる。
看板には裸エプロンの可愛らしい女性のイラストと共にこう書かれていた。
『ニンフ専門店　ママニア』と。

◆

モモンガはキョロキョロと辺りを見渡す。案内されたプレイルームは、どうも見覚えが有る。ただの既視感だろうかと思うが、どうにもそわそわする。それでいて妙な安心感、懐かしさがあるのだ。そもそもここは本当にサキュバス店のプレイルームなのだろうか？リアルの、現実世界の一般家庭の間取りに酷似していた。
「お帰り、悟くん。――学校はどうだった？楽しかった？」
奥から黒髪の女性が姿を見せ、モモンガはこの既視感の、妙な安心感の理由に気付く。
（……信じられない。ここは……俺の家だ。それも母さんと二人で住んでいた……幼いころの家）
「どうしたの？ビックリした顔して。ほら、今日は悟くんの好物を作っておいたのよ」
優しく話しかけられて、思わずモモンガは自身の頬を骨の手で打つ。勿論そんな事で目に映る姿が、風景が、母の姿が消えるわけがない。
（……確かに楽しむ為にパッシブスキルの殆どは切っているが、ここまで見事に幻術に嵌るものなのか？）
幻術、この世界の魔法だろう。恐らくこのランパスという冥精のニンフの仕業だ。
世界を平定したアインズ・ウール・ゴウン魔導王としては、油断していたとはいえこうも鮮やかにアインズに幻術に嵌める術に警戒を

している。
ユグドラシルプレイヤーモモンガは、この自身の知らない未知の術にわくわくしている。
そして。
僅かに残った人間の残滓。鈴木悟はこの目の前の光景に、懐かしさ、安心感を覚えている。忘れかけていた母の姿に。
「……ううん、何でもない。何でも無いんだ。……母さん」
そしてアインズは、モモンガは、今この場だけ、オーバーロードの姿のまま、鈴木悟に戻る選択をした。

『ニンフ専門店　ママニア』
◇オーバーロード　モモンガ
１０
最高でした。この一言に尽きます。
お相手してくれたのは、ランパスという種族のニンフさんでした。冥精と呼ばれる彼女と、オーバーロードの私の魔力の波長が合ったのか、普段ではありえないほどのイメージプレイが出来たとはプレイ後の彼女の談です。（普段はあそこまで精巧な幻術は出来ないそうです）
幻術ですが、本当に、幼いころの自分に戻って、思いっきり甘えることが出来ました。人間の感情は残滓と表現していましたが、それでも母親の記憶は奥底でしっかり残っているんですね……。
私と同じ境遇の方は多いでしょうし、純粋にサキュバス店で遊ぶのとはまた違った楽しみ方が出来ると思いますよ。
勿論サキュバス店としても一級品です。
精霊の一種ですので魔力操作もお手の物。しっかり甘えさせてもらった後は、しっかりと魔力で気持ちよくさせて貰えました！

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷
８
ニンフ専門店。まあ、イメージプレイのお店だね。なんでママなの

か分からないけど。
どうも母親とするってプレイがしっくりこなかったから、受付で少し相談したところ同級生の母親に悪戯する悪ガキプレイなら可との事。そういうのはアリです。
同級生の家に入り浸って、人の家庭で悪戯三昧の悪ガキになりきった訳だけど、臨場感が少し足りない。結局のところ俺とサキュ嬢さんしか部屋に居ないからね。そこで閃きました。居ないなら、俺が増えればいいじゃんと。
スキルの分身を呼び出して、悪戯されるサキュママ嬢さん、悪ガキ（俺）、何も知らない同級生（俺）、同じく何も知らない親父（俺）。そして悪ガキに同調する悪ガキ２（俺）、悪ガキ３（俺）という複数人プレイ！俺一人五役！さすが忍者！この調子ならそのうち『ナーベ大好き弐式くんのＨなイタズラ』プレイが出来るようになるかも！
あ、ちなみに別人だと人数分の料金かかるらしいよ。俺の分身みたいに同一個体ならＯＫみたい。そこは気を付けよう！
あとニンフって言われても、俺にはエルフっぽい人間にしか見えなかった。

◇ギルド最年長　死獣天朱雀
１０
ニンフのイメージプレイが楽しめるお店だね。ママニアという名前なのは、ギリシア語でニュンペーが「花嫁」や「新婦」という意味があるからかな？でもそれなら花嫁プレイじゃないかなと、そう素直に聞いてみたらオーナーの趣味という答え。実に興味深い。
そもそも彼女達にギリシャ神話の知識は無いようだった。これは混血の進むこの世界で本来はあった伝承が途絶えたのか。それもとも元より違う種族だからなのか。本当に興味深いね。
おっと、これではお店のレビューになってないね。
ニンフらしく海精ネーレーイス、水精ナーイアス、木精ドリュアス、山精オレイアス、森精アルセイス、谷精ナパイアー、冥精ランパスと種類も豊富だ。自らの種族と照らし合わせ、相性の良さそうな子を選

ぶといい。きっと漠然と選ぶより楽しめるはずだよ。
それと我々は、異形種という様々なメリットとデメリットを抱えている。種族的に薬物に耐性のある者や、食事効果バフの恩恵を得られない者も多いと思う。その場合、ぷにっと君の指揮官スキルの恩恵にあやかるといい。色々と捗ると思うよ。そう、色々とね。

◇ヴァイン・デス　ぷにっと萌え
3
お店の特色や、在籍するサキュ嬢の特徴については、他の方が言及している事を期待します。
私と相性の良さそうなドリュアスを選択。イメージプレイも個人的には嫌いじゃないんですが……言っておきますが、私の指揮範囲に入って恩恵を受けるって事は、状況が私にも伝わるって事ですからね!?
知りたくなかった！聞きたくなかった！見たくなかったですよ！
あの朱雀さんが、見た感じ完全年下のニンフさんにバブみを感じてオギャる様子なんて！あの人プレイ中は全然違う人でしたからね!?私そんな姿を脳内で再生されつつプレイしてるんですよ！楽しめるわけないじゃないですか！
完全頭おかしいわあの人！確実に頭おかしいわ！朱雀さん絶対わかってて私の指揮範囲に入ってますからね!?
……という訳で、まったく楽しめませんでした。しばらくは桜花聖域に籠ってますので、放っておいて下さい。

◆

「……嘘だろう?あの朱雀さんに限って……」
「いやでも、ぷにっとさんが嘘つくメリット無いし。……実際あの人桜花聖域に籠ってるし」
ナザリックの円卓に戻ってきたモモンガ達は、今回のレビューを他のギルドメンバーに披露していた。

あの異世界に繋がる扉にはいくつかルールが、制約があることが発覚している。
一度に通れるのは四人まで。そして誰かが異世界に赴いている間は、扉は消えるのだ。
そのためギルドメンバーで
1、赴く四人が決まったら、扉の使用を申請する事！
2、異世界の滞在時間は二十四時間まで。超えたらペナルティ！
3、ＮＰＣや女性メンバーにバレないようにする事！
4、サキュバス店では紳士に。異世界では無闇に暴れない事！
5、戻ったらレビューを書いて、情報の共有をする事！
という基本の五か条を定めた。そしてその五つ目の条項、これが一番大事だが、それはギルドメンバーに自らの性癖を暴露するようなもの。
「……でも俺、オーレオールに見られながらスるのは興味がある……」
「フラットフットォォォォォ！お前何言ってるんだ!?」
「いや、俺だってぷにっとさんには見られたくないけどさ。……オーレオールにならアリじゃない？」
「いやお前、つるりんぺたんだろう!?どんな性癖も暴露してるんだ!?そもそもそれルール違反だろう！」
「ごめん、皆！俺、自分の気持ちには嘘を吐けない！」
そう言ってフラットフットが自身の影に消えていく。
「影に逃げ込んだぞ！だれかぬーぼーさんを呼んできてくれ！あの人じゃなければ捕捉出来ない！」
「いや、その前に桜花聖域を物理的に閉鎖するのが先だ！」
「影だ！影を潰せ！影さえ潰せばアイツは出てこれない！」
あわただしく動き出したギルドメンバーを横目で見送りつつ、モモンガと弐式炎雷はサキュバスレビューを円卓に広げていた。
「……見られたがりな暗殺者かよ。そんな趣味もってたんだな、あの人。俺ら結構長い付き合いだけど、未だに新しい発見があるな」
「ユグドラシルでは十八禁行為は処罰がありましたしね……。自然その手の話題は少なかったですし。……正直知らないままの方が良

かった気もしますけど」
「な。……あれさ、朱雀さん。本当にあの大量の荷物がサキュバスムービーだったのかな？」
「本当だったかもしれませんね。ちょっと引きます。……あ、弐式さん。次はこのお店でどうですか？私今回でイメージプレイの楽しさを知りました」
　ちょっと引きますと言いながらモモンガは、満面の笑みで一枚のレビューを掲げて見せるのだった。

性転換の宿屋&おかしらのアジト　前編

『性転換の宿屋』
◇オーバーロード　モモンガ
3

受付で性転換薬を飲み女体化、またはその逆を楽しむお店ですね。ゼルさんレビューでも紹介されていたので、ご存知の方も多いかと思います。

まあ、結果は予想通りですね……。薬の効果はユグドラシルのポーション等と同じく浴びても効果はあるそうなんですが……。私達異形種が楽しむには、やはりなかなか難しいお店であるとしか言えません。勿論効果がある方も居ると思いますが。

今回一緒に行ったメンバーでは、ペロロンさんだけはしっかりと変化していましたね。あのペロロンさんが見た目だけは完璧に女の人になったのは驚きでした。食酒亭のウェイトレスさんと同じような感じでしたよ。それと女体化したペロロンさんの顔は、何処かで見覚えあるような?どこだろう?

お店自体はペロロンさんのはしゃぎっぷりからして、自身の種族をよく吟味してから行けば、楽しめる人には楽しめるのかなーって印象です。

女体化もしてないのにこの宿屋でサキュ嬢さんを呼ぶのも抵抗があったので、ペロロンさんの薬の効果が切れるまで外で待っていようという話になったのですが、外に出してもらえませんでした。女体化したままでの外出は禁止との事。なら出られるのではと受付の子に尋ねると、こう言われました。

「骨格が女性に変化したままじゃないですか!申し訳ありませんが部屋にお戻りください!」

……俺はそういう変化かよ!

まあ、私にも効果がある強力な薬であることは証明されたのですが、それよりも女体化したペロロンさんの「折角だから俺が女の子になる瞬間(ロストバージン)を見て行って下さい」という発言の方に驚かされま

した。
普通にドン引きだよ、ペロロンチーノ！

◇バードガール？　ペロロンチーノ
１０
とても面白いお店でした！
薬を飲むまでは、ユグドラシルプレイヤーの俺達にも効果があるのか疑問でしたが、飲んでビックリ！確かな効果！徐々に変化するのではなく、ドロンッと一気に変化するのが面白いですね。
そして俺はこの異世界で運命的な出会いをしました。提携しているサキュバス店から来ていただいた、ハーフリングのピルティアちゃんです！
悪戯っぽい笑顔がとても印象的な可愛らしい子ですよ！おススメですけど、俺以外は指名しないで下さいね！
もうピルティアちゃんの何がすごいって、プレイ中の力加減も絶妙で
「ペロロンさん、始めてなのにこんなに感じちゃって……。ふふ、とってもエッチな女の子ですね」
と、こんな感じで終始いじめて貰えるところです！
いや、しかし。女の子の肉体って、あんなに気持ちいいんですね。ＴＳでよくある「嘘……。俺男なのに、こんなに感じちゃうぅ！」が体感できます。これって俺が女の子になって、総排泄腔に変化したからなのかな？処女膜が無いのはラッキーだったのか、それとも貴重な経験が出来なかったと嘆くべきなのか。うーん、よくわかりません。
唯一残念な所は、この薬の効果が出ている間はお店の外に出れない事と、お薬を販売して貰えない事ですね。あ、二つだ。
でもいつかこの薬を手に入れて、同性経験豊富なシャルティアに色々苛めて貰って、最高の百合百合プレイをナザリックで楽しみたいと思います！

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷

6

予想通りだけど、俺だけガチで性転換薬の効果が出なかった。いや俺、ゴーレムだけどハーフだよ？

今さらながらユグドラシル正式サービス開始時に、もう少しアバターの外装を拘っておけば良かったと悔やまれる。あの時はスタダしたかったのと、どうせ装備で見えなくなるから拘らなくていいやって思ったんだよ！

まあでも、友人が女体化するのは笑えるよ。あのペロロンさんがいきなり美少女に変化だからね。今度は建やん連れて行こうと思った。そういう楽しみ方があるって事で、この点数かな？性転換薬＋宿屋代だけなら、そんな高くないしね！

あとペロロンさんの女体化。顔と声に見覚えと聞き覚えがあるなって、ずっと引っ掛かってたんだけど、今ようやく思い出した。あれ茶釜さんだわ……。ピンクの肉棒の方じゃなくて、オフ会で見たリアル茶釜さんの方だよ。あの人に鳥の翼が生えた感じ。

姉弟だから女体化すれば似てて当然なのか、それとも違う理由で似ていたのか、ちょっと考えるの怖いな……。なんか触れちゃいけないペロロンさんの心の闇を知りそうで……。

あと最後に、ペロロンさん。「折角だから俺が女の子になる瞬間（ロストバージン）を見て行って下さい」は普通に引く。

◇古き漆黒の粘体　ヘロヘロ

4

あの、私。性転換飲んだらピンク色の粘体に変化したんですけど……。

ピンク色が粘体女性の証なんでしょうか？だから茶釜さんもピンク？いや、あの人は自分で選んでピンクですしね。

色は変わりましたが、ぶっちゃけそれだけです。

これは推測ですが、私を含め種族的に無性の異形種は、その精神によって性別が決められているんだと思います。ピンク色になったのも、私がピンクが女の子の色というイメージを抱いているからだと。

だから茶釜さんがこの薬を飲めば、同じ粘体でも茶釜さんが男らしいと思う色に変化するかもしれませんね。
　要するに私たちでは精神が男性である限り、多少肉体に変化が起きた所で普段と変わらないって事ですね。
　やはり性転換というからには、ペロロンさんぐらいの変化は欲しいです。
　なので色が変わっただけで、それ以外はいつもと変わりませんので、特に性転換対応のサキュ嬢さんを呼ぶ気にもならず、そこまでした。友人の変化を楽しむというのはアリですけど。
　あと、これだけは伝えておきます。「折角だから俺が女の子になる瞬間（ロストバージン）を見て行って下さい」は流石に無理です。

「どうしよっか？もう一軒行く？」
　弐式炎雷が、傾きかけた太陽を眺めつつポツリと言う。モモンガもその傾きかけた日に視線をやってから頷く。
「リミットにはまだ余裕ありますね。サキュ嬢さんを呼んだのはペロロンさんだけですから、お金の方も余裕がありますし」
「よし。ヘロヘロさんもそれでいいか？……ペロロンさんは二戦目になるけど、行ける？――あ、このいけるは変な意味でのイケるじゃないぞ？」
　確認する弐式炎雷に、妙につやつやしたペロロンチーノが仮面越しに微笑む。
「勿論イケます」
「ペロロンさん、今変な意味のいけるで答えませんでした？ああ、私も不完全燃焼なので問題無いです」
　昼過ぎに性転換の宿屋に入り、女体化経験を終えた男たちがごく自然に二件目の相談を始める。今回は女体化が上手くいかなかった事も有るが、少し前まではサキュバス店に入店する事すら恥ずかしがっていた男たちが、随分と余裕を見せる様になっていた。

「朝帰りは流石にＮＰＣ達も心配するだろうし、入る店はさっくり決めちゃおうか？」
「あ、それなら私行ってみたいお店があります。レビューもあったので、皆さんもご存じだと思いますが」
「ゼルさんレビューですか？」
「ええ、私はあそこのゼルさんとクリムさんのレビューを参考にするとほぼ外れ無しですので」
「俺は魔力とか分からないしさ、スタンクさんだなー。あとカンチャルさんか。……食酒亭は偶に行くけど、未だに会えないんだよな、あの人たちに」
「クリム君には会えますけどね。俺はそれで充分です」
「俺、ぶっちゃけあの人達のレビューをユグドラシル時代のニャル測よりあてにしてる。やっぱ他のレビューチームより安心感があるよ」
「ですねー。……あ、もう着きましたね」
　雑談をしながらモモンガを先頭に歩いていた男たちは、一つのお店の前に辿り着き、その看板を見上げる。
　看板には海賊旗に書かれるような髑髏のイラストと共にこうあった。
『イメージサキュバス店　おかしらのアジト』

◆

「あー、アインズ――いえ、くふふ、モモンガ様！あー、モモンガ様！モモンガ様！モモンガ様！」
　アルベドは奇妙な声を上げながら跳躍する。パタパタと腰から生えた翼をはためかせ、速度を殺しながらモモンガのベッドにダイブする。
「私の愛しのモモンガ様！もうすぐ、もうすぐ全ての些事を終え、貴方様のアルベドは本当の意味で、モモンガ様だけのアルベドにー！」
　アルベドはモモンガのベッドの上でゴロゴロ転がりながら、奇妙な声を上げる。

魔導国による全世界の支配体制は、ほぼ完了した。各国に対する魔導国主導とした法の改正などまだまだやることはあるが、一度帝国で経験済みの事だ。それほど時間は掛からないだろうし、法整備が終われば、あとはアルベド抜きでも上手くやるだろう。

「今度のご褒美で、モモンガ様と、くふふふふふー」

アルベドは特別に第三者の居ない場所、至高の御方々しか居られない場所であれば、アインズでは無くモモンガと呼ぶことの権利を、既に褒美として受けていた。

「……そうよね。そろそろ私とモモンガ様の式場の手配をしないと。それに座席順も考えないとよね。……至高の御方が最前列なのは確定として、どう座って頂こうかしら？やはりお付き合いの長い最初の九人に連なる方々から座って頂こうかしら？……いえ、至高の御方はモモンガ様を含め、全員が同格であらせられるのだから、そこに順序を付けては駄目だわ」

アルベドの声は非常に悩ましげなものだが、浮かべる表情は幸せそのものだ。

「……デミウルゴス、いえ、お父様に相談するべきね。ああ、ごめんなさい、姉さんにルベド。お父様がお持ちになる個人資産の全ては、私とモモンガ様の結婚式で底を突いてしまうかもしれないわ。くふふふ、駄目な妹を、姉を、許してちょうだい」

そう言うアルベドの顔はとても許しを請う者のそれではない。

「あー、幸せ。もっと働きたいー。もっと働いて、はやくモモンガ様と一つになりたいー」

アルベドはモモンガの枕に顔を埋めつつ、足と羽をバタつかせる。

アルベドとしては昼夜関係なく働き続け、早々に支配体制を完了させたいのだが、長時間の労働は固く禁じられている。魔導国の労働時間は管理者であろうとも厳しく定められているし、それを守らせる立場であるアルベドが、自分の欲望の為に定められた労働時間を逸脱するわけには行かない。基本休憩込みの九時～十七時である。正直この制度はナザリックのシモベ達には不評だが、至高の御方達は頑として譲らないのでしょうがないのである。

「あー、やっぱり仕事終わりはこれよねー。くふふふー、あーモモンガ様の匂いがするー。く！くふふふふふぅぅぅ！」
アルベドは枕に顔を埋めたまま、大きく呼吸を繰り返す。
デミウルゴスはモモンガ様はベッドを使われないのではなんて言うが、彼は知らないのだ。我らが主人は夜はベッドで本をお読みになられたりで、頻繁に横になられている。これは一時期あったアインズ様当番を仰せつかった一般メイド達からも確認が取れている。きっとその習慣は、その当番が十七時以降は禁止になった今でも続いているだろう。
そう、モモンガは今でもこのベッドで横になっているのだ。
「う、ん？」
枕に顔を埋めていたアルベドは唐突に顔を上げる、
「……この匂いは……？」
ベッドから香るのは、アルベドのみが嗅ぎ分けられるモモンガの微かな匂い、そしてアルベド自身の香り、アルベドが使用する香水の香りだ。それらの匂いに紛れ、微かな、ほんの微かな違う香りがある事にアルベドは気づく。
「メイドの子かしら？……いえ、違うわね」
ベッドメイクを担当する一般メイドが、主人たる至高の御方が眠るベッドに、匂いが残る程強く香水を噴きかける事はしないだろう。いや、そもそも使用しない筈だ。
ならばこの匂いは何処から来たのだろうか。強い香りでは無い事から、アルベドの様に誰かが、モモンガ以外の誰かがこのベッドで眠ったという事は無い。あるとすればモモンガの体や装備に誰かが抱きつくなどで移った香りが、このベッドにも移った。そのくらいの微かな匂いだ。
「……シャルティアね。まったくあの子も、ペロロンチーノ様からあれほどのご寵愛を受けておきながら、未だにモモンガ様を諦めてないのね」
それも無理もないと思う。それほどモモンガが魅力的という事だ。他の至高の御方に対する不敬と分かっていても、そう思ってしまうの

は仕方がない事だ。
シャルティアならば、モモンガに抱き着き、その匂いを残すこともあるだろう。そうアルベドは自身を納得させる。
だがしかし、シャルティアがこの香りの香水を付けていた記憶はアルベドには無いし、この香りは彼女の趣味からも外れている気がする。
「……シャルティア……よね？」
そうぽつりと呟くアルベドの瞳には異様なほどの硬質な輝きがあった。

性転換の宿屋&おかしらのアジト　後編

「くっ……殺せ！お前たちのようなケダモノに辱めを受けるくらいなら……いっそ殺せッ！」
「くくく……はっーははははは！」
　女騎士の悲痛な叫びに、白い尋問服に身を包んだ男は哄笑で答えた。
「何が可笑しい!?」
「……いや、すまない。笑うつもりは無かったんだ。だが、お前があまりにも見当違いな事を言うのでな」
　くつくつという笑い声が、尋問服の下から聞こえてくる。この男は本当にそう思っている。名誉と誇りを守り、辱めを受けるくらいならば死を選ぼうとする騎士の気高き魂を、本気で嘲笑っているのだ。
「――教えてやろう」
　言葉と共に、尋問服が一瞬で燃え尽きる。
　尋問服が燃え尽きた後に現れたのは白い骨の体。スケルトン。生きとし生けるもの全てを憎むアンデッド。
「くッ！」
　女騎士は気丈にもスケルトンを睨みつける。その視線を受けて、スケルトンの窪んだ眼窩がゆっくりと女騎士に向けられた。
　右の眼窩に、暗い炎の様な光が灯る。
「お前は自分を殺せというが、死はこれ以上の苦痛を与えられないという意味で慈悲である。……お前には私が、それほど慈悲深い存在に見えるのかな？」
　スケルトンが女騎士に向け歩み寄る。
　豪華な指輪が嵌められた骨の指がゆっくりと、ゆっくりと女騎士に向け伸びていった。
「あ……ああ……あああッ！」
　恐怖に、声にならない呻きが漏れる。歯がガチガチと音を立てる。震えが止まらない。
　怖い。殺される。いや、死よりも恐ろしい何かが、あたしに起ころ

うとしている。
あたしは再びこのアンデッドに死を望むだろう。今度は誇りを守るのでもなく、苦しみから、生という苦しみから解放されるために死を乞うだろう。そしてこのアンデッドは再び笑うのだ。あたしの苦しみを、ただただ楽しむために。
「楽に逝けると思うな……ニンゲンよ」
骨の指が顎に触れた瞬間、女騎士というたがが外れた。そして――
「ふえーん」
盛大に泣き出した。

「……えっ？」
泣き出した女騎士のコスプレをしたサキュ嬢に、モモンガはどういう事と尋ねる様に弐式炎雷達に振り返ってくる。
先ほどまでモモンガが着込んでいたものと同じ、白い尋問服に身を包んだ弐式炎雷が呆れたような声を上げる。女騎士が泣き出すのも無理ないだろうと、心底呆れた声を。
「……うん、モモンガさん。やり過ぎだから。ガチアインズモードなんて、普通の人は耐えられないから」
「い、いえ、私としてはやり過ぎたつもりは……。本当なら同時に絶望のオーラも噴き出させるんですが、今回はプレイという事で控えましたよ？さ、最後の台詞だって『逝ける』と『イケる』を掛けた私なりのユーモアで……」
「絶対通じてないし。……ああ、もう」
弐式炎雷がぽりぽりと後頭部を掻くふりをしながら、盛大に泣き続ける女騎士――そのイメージプレイをするサキュ嬢に歩み寄る。
長い金髪の、恐らくだが人間だろう、その泣き続けるサキュ嬢の前にしゃがみ込みポンポンと頭を優しく叩く。
「あー、ごめんね。あの人さ、死の支配者ロールが本職みたいな人だからさ、ちょっと驚かせちゃったよな」

恐らくちょっと驚いた程度では無いだろう。先程までは天井から垂れ下がった鎖を掴んで拘束されているフリをしていたが、今はもうそういう体裁も無しにガン泣きである。
「……ぐすんっ……あ、あたし、殺されないの？死ぬことが慈悲って思えるほど、ひどい目にあわないの？……ぐす」
「大丈夫大丈夫。そんな目に合わせないから。だから泣き止んでくれよ。そうだ、何かお詫びは出来る？何でも言ってくれていいよ」
「ぐす……じゃあ、あたしが出演してるサキュバスムービー買っていって……」
「……逞しいな。うんうん、買う買う。どこで売ってるの？」
「……店頭でも販売中……ぐすんっ。……旧作一本１０００Ｇで、最新作は２０００Ｇ。全部買うと９０００Ｇだけど、わたしを指名してくれたら、８０００Ｇにまけられる」
「……結構出演されてますねー……。うん、俺が君を指名するからさ、機嫌直してくれよ」
「……お買い上げ、ありがとうございます。じゃ、じゃあ、個室に一緒に……だ、だめー。さっきので腰が抜けちゃって、立てないー」
「了解了解。……ほいっと」
腰が抜けたという女騎士を弐式炎雷が担ぎ上げる。お姫様抱っこの状態だが、ナーベラルにもこんな事したことないなと弐式炎雷は思う。
「悪いけど、この子は俺が指名するよ」
女騎士を抱き抱えながら、弐式炎雷は仲間達にそう宣言する。
本当はラビットガールと言えばいいのか、長いウサギ耳とウサギのようなふわふわした尻尾が生えた子が気になっていたのだが、今回はしょうがないだろう。弐式炎雷はナーベラルに三つある兎さん魔法を全て覚えさせるほど、ウサギさん好きなのだ。
そういや個室ってどこにあるんだと、弐式炎雷は辺りを見渡し、ついでに他のサキュ嬢の様子も観察する。他の囚われた女騎士たちは、直接モモンガの支配者ロールに付き合わされたこの子程のショックは受けて無さそうだ。フォローは必要なさそうで、ほっと胸を撫でお

ろす。
「おー、盛り上がってるかー？でも、ここでヤるんじゃねーぞー」
安心した弐式炎雷の前に、受付に居たこの店の店長、いやおかしらか、が姿を見せる。
「お前はその女騎士か。アンタらはどの女騎士にするんだ？」
「私は、その一番おっぱいの大きいミノタウロスの女騎士さんでお願いできますか？」
おかしらの問い掛けに、シーツを頭から被ってオバケの真似をした幼児そっくりのヘロヘロが女騎士の一人を指名する。どうやらこの世界では、粘体も外装を着込むことができるらしい。
「おう、いいぞぉ。有翼人のアンタはどうする？」
「うーん、ちょっと大きい子ばかりですねー。ロリの女騎士はいますか？」
「あと少し待ってくれれば、攫ってこれるぞ。それでいいか？」
恐らく出勤待ちのサキュ嬢にロリな子が居るのだろう。わざわざ出勤を攫ってくると言うあたり、演出が細かいなーと弐式炎雷は感心する。ペロロンチーノはそのおかしらの言葉に小躍りしながら頷いていた。
「じゃあ、私は―」
そういってモモンガが次は自分の番だと女騎士達を見渡すが、途端全員が激しく首を振って拒否をする。先程のモモンガのアインズロールっぷりを見せられては、無理も無いだろうと思う。
「えええええ……」
「……悪いが、アンタはご褒美無しだな。今回は我慢してくれよ」

『イメージサキュバス店　おかしらのアジト』
◇オーバーロード　モモンガ
1
NGを喰らいました……。
女騎士のイメージプレイという事で、アインズとして蓄積した経験値をフル活用し、私なりに全力で女騎士を捕まえたアンデッドを演じ

たのですが、それが裏目に出てしまいました……。
弐式さんがフォローしてくれたおかげで出禁になる事はありませんでしたが、残念です。前回レビューしたニンフさんのイメージプレイ店程、がっつり演技ってお店では無いんですね。
燃やした尋問服代もしっかり払わせられましたし、これはまあ、私が悪いんでしょうけど。今回はおとなしく、皆さんのプレイが終わるのを外で待っていました。
でも皆さん。延長するなんて、聞いていませんでしたよ！

◇バードマン　ペロロンチーノ
１０
奇跡って、あるんですね！
ビビビッと来るロリな子が居なかったので、おかしらにお願いして攫って来てもらう事に。個室で一人待つこと数十分。とうとうその時は訪れました。
「あれー？ペロロンさんじゃないですかー」
ピピピピピ、ピルティアちゃん!?どうして君がこの店に!?
軽装の騎士鎧に身を包んだピルティアちゃんがそこに居ました。なんでもピルティアちゃんは色々なお店に在籍しているらしく、このお店にもたまに出勤しているそうです。ハーフリングはコスチューム指定アリのメニューが大人気で、こういうお店は指名を取りやすいらしいですよ。
「ロリコンばっかりですよーｗ」
とはピルティアちゃんの談。
肝心のイメージプレイは、突如偵察中にゴブリンに襲われ、先輩騎士と従者が全滅した中、騎士叙勲を受けたばかりの新人女騎士のピルティアちゃんが一人残され、ゴブリン達に凌辱されるのをただ待つばかりだった絶望する彼女の前に、金色の粒子を鎧から曳きながら颯爽と登場する謎の仮面騎士と恋に落ちるという、壮大なストーリーをリクエストさせてもらいました。あ、謎の仮面騎士は勿論俺の事ですよ？

二人で役作りから始めたため、時間延長をお願いしました。ダブルって言うらしいですね。
今日はピルティアちゃんに女の子にしてもらって、男の子の俺もピルティアちゃんに気持ちよくして貰えた、大大大大大満足な一日でした！
―追記―
いや、これサキュバス店のレビューじゃなくてピルティアちゃんのレビューだろうと、今回のレビューを弐式さんに渡したらそう怒られました。
なので、もう少しお店の事にも触れておこうと思います。
お店的には色々な種族のサキュ嬢さんが在籍しているので、イメージプレイ抜きでも手っ取り早く異世界を体験したいというサキュバス初心者向けのお店とも言えます。まだサキュバス店を経験してない方達はこのお店で異世界デビューするのも、俺はアリだと思いますよ！

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷
9
なぁ、逆膝枕ってどう思う？
お店に関してはペロロンさんが書いてくれると思うから、割愛するよ！
今回はモモンガさんのアインズモードに腰を抜かした長い金髪の女の子を指名。お店一番の演技派って事で、モモンガさんの支配者ロールのお相手をさせられた可哀想な子です。
個室まで俺が運んでベッドに寝かせたんだけど、シャワーにも入ってないから当然そのままプレイするなんて事はせず、折角だから買ってきたサキュ嬢さんのサキュバスムービーを一緒に見る事に。
いや、あれだね。そういうムービーに出演している女優さんと一緒に、そういうムービー見るって、逆に俺の方が照れるね。
俺もベッドに腰掛けたんだけど、そしたらサキュ嬢さんがモゾモゾと這いずって俺の膝にポスンって頭を置いてきた。その状態で自分

が出演してるサキュバスムービーの解説を笑顔でしてくれてたんだけど、やべえ、なんかすげえ照れる。けどこの子すげえ可愛い。
しばらく一緒にサキュバスムービー観てたんだけど、だんだんお互い口数が少なくなってきて、そういう雰囲気に。
この時点ではまだシャワーも浴びてなかったし、俺もいつもの忍者装束で姿をまだこの子に晒してなかったから、驚かしちゃうかなってちょっと躊躇ったんだけど、サキュ嬢さんから「人間種じゃないんでしょう？膝枕してもらってたから、わかるよ」って言ってくれた。そういや途中で股間を、さらりと撫でられたかも。
サキュバスムービーを全部購入してくれたお礼に女騎士以外のプレイもしてくれるというから、長い金髪をポニーテールにしてもらって、彼女の私物の深い茶色のローブという変哲もない服装をお願いした。一緒にこういう性格の子でって説明すると、「畏まりました。弐式さ――――ん」と。
もう我慢できませんでした。俺が襲い掛かると「な、何を!?弐式炎雷様！」って、そういう所でナーベからナーベラルに戻っちゃうところも凄い演技派だ。反応が、俺が伝えたナーベラルっぽい。
延長ですか？勿論しました。
別れ際に「……次は黒髪のウィッグとバニーガールの衣装も用意しておくから、また遊びに来てね」と耳打ちしてくれた。はい、絶対来ます。我ながらチョロイな、俺。
ペロロンさんのレビューに駄目出ししたけど、これ俺も大差ねーな、ごめん、ペロロンさん。

◇古き漆黒の粘体　ヘロヘロ

9

すっごい大きな胸をした子がいたので、思わず指名してしまいました。
ミノタウロスの女騎士とは斬新ですね。とにかくおっぱいです、それにつきます。勿論理想のサイズはソリュシャンなんですけど、男はおっぱいの大きさには抗えないんですよ。帰りにペロロンさんには

全否定されましたが。
　プレイ的には折角の女騎士さんがお相手ですので、私は知性の無いエロスライムに徹することに。エロゲーＲＰＧの序盤に出てくる、アイコンにピンク色のハートマークが浮かんでいるタイプの粘体です。
「ピギィー！（生殖本能の赴くまま女騎士に襲い掛かる私）」
「う、うわぁー。このー、わるいすらいむめー、騎士として……えーと……とにかくやっつけてやるぅー」
「ピ、ピギィ？（余りにもな演技力に、このままイメージプレイを続けていいのか躊躇う私）」
「……ごめんなさいー。色々な格好するのは好きなんだけどー、演技はあんまり自信ないんだー。でも、その分体は丈夫だから、好きな事をしてくれていいよー」
「ピギィー♡（ある程度無茶出来るとわかり喜ぶ私）」
　こんな感じでした。
　まあ、無茶をするといっても、流石に再生能力の無い種族のサキュ嬢さんを溶かすのは可哀想なので、覆いかぶさって丸ごと私の体の中に取り込む程度に収めましたよ。あ、ちゃんと呼吸は出来るように工夫はしてますよ？
　取り込んだサキュ嬢さんを、私の体の一部をあれっぽくして作った触手で、ありきたりですが上の口と下の口に咥えさせて楽しみました。自分の体の中に取り込んだ女の人の中に、自分の一部が侵入していく快感は、粘体ならではでしょうね。取り込んでいるのに、取り込まれるというんでしょうか？これはハマってしまいます。
　延長ですか？ええ、勿論しましたとも。

◆

「……私が外で待ってるって知ってるのに、延長までしてくるなんて……。おかげでこんな時間になっちゃったじゃないですか！」
　ナザリックの宝物殿に戻ってきたモモンガ達は淡く発光する異世界に繋がる扉に、光を通さない扉をすっぽりと覆る事のできる大きな

布をかぶせる。この場に入れる者は限られるし、わざわざ来ることも無いだろうが、そうしないとこの扉の存在がバレてしまうからだ。
「ごめんごめん。いやー、楽しいお店でさ。すっかりハマっちゃった」
「ですね！まさか今日二回もピルティアちゃんに会えるなんて、夢のようでした。あ、ピルティアちゃんってなんか、シャルティアに名前が似てません？これって運命なんでしょうか？」
「どういう運命ですか。でもそうですね、私も二軒目のお店は楽しめました」
「……私は二軒続けて失敗でしたけど……」
　つやつやした仲間達に、モモンガは恨み言を述べる。その恨み言を聞くと、弐式炎雷は嫌らしい笑みを、表情は無いから雰囲気だが、浮かべる。
「あれー？モモンガさん、そんな事言っていいのかなー？」
「な、なんですか、弐式さん？」
「いやー、俺もモモンガさん一人外で待たせるのは可哀想だなーって、一体分身を送ったんだけどさー」
「ほうほう？」
「ちょ!?弐式さん!?」
「では外で一人待つ我らがギルマス、アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下の物真似です。『……ショートコースなら行けるな……』。そう言ってモモンガさんはサキュバス街に消えていきました」
「やめてー！それ以上言わないでー！」
「ねえねえ、モモンガさんが歩いて行った方向さ、この前行ったニンフ専門店の方だよね？いいのかなー、モモンガさん。二回も、それも一人で行っちゃうなんて、完全オキニだよね」
「そ、それを言ったら弐式さんだって、今回のお店の子が完全にオキニじゃないですか！また次行く約束をした――」
「アインズ様、オキニってなんですか？」
　モモンガの台詞を遮り、今回扉を使ったメンバー以外の声が、突如聞こえた。
「う、うぉ！アウラ!?」

「ぶぃ！」
　振り返るモモンガ達にアウラが両手にピースを作って微笑んでいる。
「だ、駄目だよ、お姉ちゃん。御方達がお帰りになられたんだから、まずはご挨拶をしないと……」
　アウラの影からマーレが姿を見せ、そして二人揃って跪く。
『お帰りなさいませ！アインズ様、ペロロンチーノ様、弐式炎雷様、ヘロヘロ様！』
「う、うむ、出迎えご苦労。しかしなぜお前たちがこの場に？ここはギルドの指輪無く入れる場所では無いが……」
　尚且つ指輪を使い転移した場所からも離れている。マーレの指輪を使い、宝物殿に転移してくることは可能でも、わざわざ来る場所では無いはずだ。
「お、お出迎えありがとうね、アウラにマーレ！あ、俺用事を思い出しましたから、先に寝ますね。お、おやすみなさい――」
　用事を思い出したから寝るという訳の分からない言い訳を使い、ペロロンチーノが自身の指輪で転移し、消える。
「あ、私もソリュシャンに話があるんでした。二人とも、ご苦労様です。それじゃあ失礼しますね」
　そう言ってヘロヘロも転移して宝物殿から消える。逃げたとモモンガが確信すると同時に、最後に残った弐式炎雷も影に沈もうとしていた。
「逃がすかぁ！《グラスプ・ハート／心臓掌握》！」
　モモンガは即座に魔法を詠唱し、弐式炎雷の行動を阻害する。
「ぐぉ！ふ、普通いきなり友達に第九位階魔法を使うか!?」
「逃げようとする弐式さんが悪いんですよ！」
　スキルでの魔法強化を全て外した状態で使用した為、当然の様に弐式炎雷の抵抗レジストが成功する。目的は朦朧状態にさせ、弐式炎雷のスキル発動を阻害する事だ。もっと安全な方法もあっただろうが、咄嗟だったために、一番の得意魔法が出てしまった。
「だ、大丈夫ですか!?」

慌てて双子が弐式炎雷に駆け寄る。弐式炎雷は当然ダメージなど受けていないが、行動を阻害され尚且つ心配する二人に縋りつかれ、諦めたように影から這い出てくる。
「……ありがとう、アウラにマーレ。いやほら、全然大丈夫だから。モモンガさんも手加減してくれてるし。で、どうして二人ともここに居るんだ？」
弐式炎雷にダメージも無く、喧嘩したわけでもない事に安心したのか、双子は胸を撫でおろしてから口を開いた。
「はい！最近至高の御方々が忙しくされてるとお聞きして、何かお手伝いすることは無いかなって、二人でお探ししていました！」
質問に元気よく答えるアウラに、モモンガと弐式炎雷の、二人揃ってない筈の心臓がチクリと痛む。
「あの、その！御方の皆様が宝物殿によく出入りされていると、ぶくぶく茶釜様からお聞きして、ぼ、僕達も何かお手伝いしようってお姉ちゃんと」
さらに無いはずの心臓が痛んだ。
「……ああー、ありがとうね。二人とも。でも俺達は大丈夫だし、その気持ちだけ受け取っておくよ、な、モモンガさん？」
「ありがとう、アウラにマーレよ。弐式さんの言う通りだ。……二人とも、もう夜も遅い。このことは茶釜さんは知っているのか？」
「……実は、黙ってきちゃいました」
気まずそうにしゅんとする二人に、モモンガと弐式炎雷はそのいじらしさにアウラとマーレの頭を思わず撫でてやる。
撫でられた二人は嬉しそうに破顔し、くすぐったそうにモモンガと弐式炎雷に身体を摺り寄せる。
「……このことは私達だけの秘密としよう。私たちがこの場で何かしているのは事実だが、危険は一切ない。安心して二人とも休むと良い」
そうモモンガに諭され、二人は元気よく返事をし、マーレの指輪を使い転移していく。モモンガはその二人に手を振る弐式炎雷を、恨めしそうに振り返る。

「……弐式さん？」
「……悪い。完全油断してた。いくらアウラ相手でも、あそこまで接近されてて気づかなかったのは忍者失格だな」
　項垂れる弐式炎雷に、油断していたのは自分も一緒だと、非難めいたことを言ってしまった事をモモンガは謝罪する。
「あの二人が、お手伝いをしてくれようと私達を探し回ってる間、私達はサキュバス店で遊んでいたんですね……」
「……やめてくれ、モモンガさん。その台詞は俺にも突き刺さる」
「あんな純粋でキラキラした目で見つめられて、私達はあの二人が尊敬してくれる大人になれたんでしょうか？」
「いや、設定的には二人とも七〇歳以上で、俺らより年上だし！」
「設定じゃないですか、それ」
「……じゃあ、これからサキュバス街に行くの控える？」
「いえ、それは……。……また行きたいです」
　絞り出すようなモモンガのうめき声に、弐式炎雷も頷く。
「……ですよねー。俺だって、また行くって約束しちゃったし」
　色々と覚えたてで、まだまだ色々と知りたがりな二人は、出る筈も無いため息を、揃って吐き出すのだった。

低級淫魔の詰め合わせ部屋　淫魔の狂喜乱舞

「はっははははは！いいぞ！かかってこい！」
武人建御雷は挑発するように手を動かし、敵を招く。
眼前に立ちふさがるは無数の敵。そのすべてが自分と同等か、それ以上の力を持っている事だろう。勝てるはずの無い無謀な勝負。自殺行為に近い。
それを理解しながらも、建御雷は口元に獰猛な笑みを浮かべる。
そうだ、俺がしたかったのはこういう戦いだと、求めていた戦場（いくさば）は此処だと、そう言わんばかりの笑みだ。
思えばナザリックが転移した世界でも数々の戦いがあった。プレイヤーの血を引く神人、始原の魔法を使う真なる竜王、そのすべてがあちらの世界では強敵ではあった。
だが建御雷には、その全ての戦いが物足りなかった。
ナザリックには、アインズ・ウール・ゴウン魔導国には、様々な智者がいる。万全に準備を重ね、確実に勝てる戦力を用意し、無数の策すら張り巡らせた。
それはナザリックを、ＮＰＣ達を守るためには仕方の無い事だと建御雷は理解している。犠牲がゼロでなければならない。そうしなければ、今の形での世界征服は出来なかった。
それでも、それでもと思う。
ナインズ・オウン・ゴールは馬鹿の集まりだった。
それを知っている、ずっと仲間達と共に馬鹿をやってきた身には、それは本当に物足りないのだ。
「さあ、やろうぜ！また俺達で！最高の馬鹿をな！」
建御雷が吠える。求めていたものが此処にある。最高に馬鹿な真似が、最高の仲間達と、再び出来る。
半魔巨人の醜悪な顔を獰猛な笑みで歪め、建御雷は自身の大太刀を構え、歓喜と共に無数の敵にと駆けて行った。

「いいですか？この部屋に入ったら、向こう側から解放されない限り、出してはもらえません」
　悪魔の血が混じっているのか、今まで見てきた獣人種とは違いが見える受付の説明を、モモンガ達は受けていた。二人は、そのうち一人は頭巾で顔を隠しているが、困惑や恐れ、そういった負の感情を浮かべ、もう二人はこれから起こる戦いにワクワクした様な笑みを浮かべていた。
「……なあ。本当に行くのかよ？」
「私も弐式さんに同意です。ここのゼルさんレビューでの評価は、お二人も目を通しているでしょう？」
　負の感情を浮かべているのは、モモンガに弐式炎雷だ。
「ああ、大マジだ。面白いじゃないか。俺はこういう馬鹿な真似がしたかったんだわ」
「それで全滅したら本当に馬鹿だろう……」
「しねえよ、全滅なんて。俺達はいつだって馬鹿な真似をしてきた。だが最後は何とかしてきた。俺達には仲間がいたからな。そうだろう、ペロロンさん？」
「建御雷さんの言う通りですね。俺たちはそういう馬鹿をしてきたから、ナザリックの一発攻略も出来たし、ギルド連合との戦いも勝つことが出来たんです」
「良い事言うじゃないか、ペロロンさん。そうだ、俺達だからやってこれたんだ。つーかあのレビュー最高。こんな面白そうなサキュバス店紹介してくれてるんだからな」
　笑う建御雷に、弐式炎雷が再び説得を試みる様に声を上げる。
「あのなー」
「わかりました。行きましょう」
「はあ？モモンガさんまでどうしたんだよ」
　弐式炎雷の言葉をモモンガは遮る。モモンガは少しだけ、付き合いの長いギルドメンバーにだけ伝わる様な困り顔で、弐式炎雷を見た。
「ナザリックが転移した世界では、建御雷さんも意に沿わない戦いがあったはずです。それでも建御雷さんは、いつも先頭に立って何も言

わず付き合ってくれた。だから今度は、私が付き合うべきなんです。それに、こうなった建御雷さんが譲らないのは、弐式さんが一番良く理解しているでしょう？」
「はっは！流石モモンガさん。俺の事良く理解してくれてるじゃねーか！」
　モモンガ、建御雷、弐式炎雷は、ギルドアインズ・ウール・ゴウンの中でも、最初の九人と呼ばれる最初期のメンバーだ。それだけ付き合いが長い。だがその中にあっても、この二人の付き合いはさらに長い。ユグドラシルが始まるもっと前から、建御雷と弐式炎雷の付き合いは始まっていると、かつて聞いたことが有った。
「マジかよ。……ハイハイ、わかりました。付き合いますよ、チクショウ」
　諦めた弐式炎雷が呆れたように頭を振る。全員の同意を得られたことで中断していたお店のシステムの説明、いや警告か、その続きを聞くためにモモンガ達は受付に向き直る。
「話はまとまりましたか？それではみなさん、もう一度確認します。この淫魔の部屋に入ったら絞りきられるまで出してもらえません。泣いても喚いても、叫んでも漏らしてもです。絶対途中で解放してもらえませんし、私も助けに行けません」
　受付の言葉と共にモモンガ達は、部屋の中が見えるガラスのような素材の壁に向き直る。
「途中、やり過ぎで死ぬようなことになっても、当店は一切責任を持ちません」
　獲物を待ち望む目でこちらを見つめる低級淫魔の群れに。
「ふっふ、これは一気に経験値が稼げそうですね！ロリな子は任せてください！」
「頼りにしてるぜ、ペロロンさん！モモンガさん！いつものを頼む！」
「了解です！＜上位全能力向上（グレーターフルポテンシャル）＞＜自由（フリーダム）＞＜上位抵抗力強化（グレーター・レジスタンス）＞＜不屈（インドミタビリティ）＞＜竜の力（ドラゴニック・パワー）＞＜上位硬化（グレーターハードニング）＞＜吸収（アブソープション）＞＜超常直感（パラノーマル・イントゥイション）＞＜抵抗突破力上昇（ペネトレート・アップ）＞＜混沌の外衣（マント・オブ・カオス）＞――」
　モモンガは立て続けに魔法を発動し、仲間達を強化していく。

「ああ、もう！やけくそだ！ユグドラシルプレイヤーチームの力、アインズ・ウール・ゴウンの力、こっちの世界に見せつけてやる！」
弐式炎雷が自らを鼓舞するかのように、そう叫ぶ。
「さぁ、行くぞ！」
魔法強化を終えた建御雷の言葉に「おう！」と一斉に、威勢の良い返事でモモンガ達は応える。
その返事に建御雷は笑い、大鎧を脱ぎ捨てた。
こうしてギルドアインズ・ウール・ゴウンの、ナザリック攻略、ギルド連合との戦い、その二つの激戦に並ぶであろう最大クラスの挑戦が、今始まった。

『低級淫魔の詰め合わせ部屋　淫魔の狂喜乱舞』
◇オーバーロード　モモンガ
6
ゼルさんレビューで圧倒的低評価だったサキュバス店ですね。あまりの地雷店っぷりのレビューに、記憶に残ってる方も多いかと思います。
最初に書いてしまうと、威勢よく乗り込んだのは良いんですが、私と弐式さんは速攻で追い出されました。低級淫魔の方々には、アレの無い私たちは用無しだったようです。
その後受付のお姉さん、豹型の獣魔さんらしいですね、を交えてお喋りをしていました。色々興味深い事を聞けたので、私はこの評価です。
どうも低級淫魔はサキュバスと違い、相手から直接精気を吸い取る事しか出来ない様で(白いアレや唾液だったりですね)、そう言ったものを分泌出来ない私たちは、そもそも彼女達のエサにならないそうです。
これがサキュバスになると、私なら魔力だったり、弐式さんだったら得意のオモチャを使った攻めでしょうか、そういった相手から得ら

れる快感を精気に変換し、それを摂取することで自身を満たすことも出来るそうです。だからサキュバス相手なら私も弐式さんも摂取対象になり得ると。

これはユグドラシルのサキュバスも、そうなんでしょうか？色々気になるけど、デミウルゴスの配下のサキュバスに聞くのも、アルベドなら余計に聞けませんね。そんな事を聞いたら最後、私はどうなるかわかりません。

まあ、そんな感じでお喋りをして、途中からは三人でＵＮＯをして遊んでいました。

ＵＮＯ、楽しかったです！

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷

6

速攻で追い出された。

まあ追い出された後は、色々興味深い話を獣魔のお姉さんから聞けたし収穫はあったかな？

最初の一時間は、友人が出演しているバスツアー的なエロ動画を見てる感じでまあまあ楽しめる。

二時間を超える頃には、建やんとペロロンさんが居るであろう場所に低級淫魔のサキュ嬢さん達が群がってるだけで、ガラスっぽい壁越しだと何してるのかさっぱり分からない。ペロロンさんの悲鳴は、ちょくちょく聞こえるんだけどね。

三時間を超えるともう偶にサキュ嬢さんの声に混じって「うっ」とか微かに聞こえるだけ。その頃は三人でＵＮＯに夢中だったから、よく覚えてないや。

四時間か五時間たった頃かな？ゴブリンの一族さんが総出で来店してきた。まあ、こういう人たちには需要があるみたい。お客さんが来たことで受付のお姉さんも忙しくなって、そこでＵＮＯを中断した。んで、用無しとばかりに放り出された建やんとペロロンさん回収して、ナザリックに帰ってきました。

帰り際受付の獣魔のお姉さんに挨拶すると、このお店の低級淫魔さ

ん達を全員一人で満足させた人が、過去にいたと教えてくれた。……すげえ、こっちの世界のワールドチャンピオンかよ。
まあ最後に。このお店はユグドラシルのワールドチャンピオンに何度負けても挑み続ける男の心を、たった一日でへし折ったとだけ書いておく。

◇半魔巨人　武人建御雷
0
しばらく女の人とかいいです。

◇バードマン　ペロロンチーノ
判定無
出して！ココから出してよ！もうヌルヌルは嫌だ！ヌルヌルは嫌なんだ！
助けて！助けてよ!!助けてよ！モモンガさん！弐式さん！建御雷さーん!!
い、いやぁ！おっぱいがぁ！おっぱいがぁ来るよ！おっぱいが一杯来る！来ないでくれよ！
嫌だ！もうイヤだ！
助けて！助けて姉ちゃん！助けてよ、姉ちゃん！怖いんだ！ヌルヌルが！ヌルヌルが！お願いだから助けてよぉ、姉ちゃ――――――ん!!
（うなされるペロロンチーノの寝言から　代筆モモンガ）

◆

「――はい。アインズ様達は突然私の感知範囲内に転移されてきたと思います。それまでは一切気配はしませんでしたし。これはマーレの魔法でも確認済みです」
第九階層「ロイヤルスイート」。その中の至高の四十一人の私室で跪くアウラとマーレの報告に、三つの異形が頷く。

粘液盾　ぶくぶく茶釜。
脳筋女教師　やまいこ。
そしてアインズ・ウール・ゴウンで、三人しか居ない女性メンバー最後の一人、餡ころもっちもちである。
「……宝物殿に直接転移？それも物置部屋に？そんな事が出来ると思う、かぜっち？」
やまいこの問い掛けに、ぶくぶく茶釜が粘体のピンク色の肉棒を振動させて応える。本人としては首を振っているつもりなのだろうが、傍からは卑猥な振動にしか見えない。
「出来ない。宝物殿は他のエリアから独立しているから、ギルドの指輪なしでは侵入出来ないようになっている。……いや、ギルドの指輪を使っても、転移先は決まっているし……。あそこは世界級アイテムの防壁も厚い。絶対にそんな事出来ない筈だけど、アウラがそう感知したなら間違いない。……どういう事だ？」
考え込むぶくぶく茶釜に、餡ころもっちもちがちっちっちと、異形の指を振りながら口を開く。
「いやいや、かぜっち。一つ見落としてるよ。あそこには一つだけそのルールを破れるアイテムが置いてある」
「世界級アイテムの防壁を破れるのは、世界級アイテムだけでしょう？物置部屋には世界級アイテムは無いし。あの四人だって、モモンガ玉以外はその時持っていない筈だよ」
餡ころもっちもちの言葉に、やまいこは首を傾げる。だがそのやり取りで何かに気付いたぶくぶく茶釜が、答えを口にする。
「そうか、『新たな扉』だ。あれはユグドラシルのルールから外れたアイテムだから、世界級アイテムの防壁も飛び越える」
「正解！……まあ、あれはコラボアイテムだからってだけだし。効果もコラボした相手先のフィールドに突入するってだけだしね。それも設定だけの」
「それなら余計におかしいよ。この世界でコラボアイテムの効果が発動する訳ないし。そもそも最初にかぜっちが物置部屋に様子を見に行った時は、いつもと違う所はなかったんでしょう？」

「うん。……でもその時に、あの扉は無かったと思う。確実に置いてあるはずなのに。ねえ、アウラにマーレ。他に何かあの四人の様子にいつもと違う所はあった？」
　うーんと双子は考え込み始めた。その様子を見ていた餡ころもっちもちが、明るい声でぶくぶく茶釜に話しかける。
「かぜっちの考えすぎじゃない？宝物殿の転移はよく分からないけどさ、ペロンの奴の様子がおかしいなんて、いつもの事じゃん。というかあたしはペロンの様子がまともだったら、逆に不安になるけどねー」
　餡ころもっちもちが自身と同じ、アインズ・ウール・ゴウン最年少組の片割れの名を呼び、ケラケラと笑いながらそう評する。
「ちょっと、あんちゃん。そういう事言っちゃダメだよ。それに弟君も、たまーにだけど、凄い良い所を見せる事もあるんだよ。たまーにだけど」
「うん、やまちゃん。それあんまフォローになってない。まあうちのバカ弟の評価はそれでいいとして、確かに私の考えすぎだったかな？」
　ギルドメンバー女性陣がそう納得し始めたころ、何かを思い出したようにマーレが口を開いた。
「そ、そういえばお姉ちゃん。アインズ様と弐式炎雷様はオキニって仰ってたよね？」
「ああ、そう！意味は教えて下さらなかったけど……」
『オキニ？』
　ギルド女性陣の声が重なる。
「オキニってお気に入りって事だよね？」
「だと思うけど、物置部屋になんかあの四人が気に入るアイテムあったけ？」
　やまいこと餡ころもっちもちはそう疑問を口にしあうが、ぶくぶく茶釜だけはひとり深く考え込み始めた。
「アウラ、マーレ。他に何か無い？どんな細かい事でもいい、思い出せるかな？」

双子に問い掛ける声に、微かに震えがあった。まるでぶくぶく茶釜だけ、何か気付き始めたように。
「……そういえばアインズ様と弐式炎雷様。私たちの事褒めて頭を撫でて下さったんですけど、お召し物に少しだけ香水みたいな匂いが残ってました」
『香水？』
再び女性陣の疑問気な声が重なる。だがその声の重なりに、ぶくぶく茶釜の声だけは無い。何かを確信した様に、双子に問い掛ける。
「……その香水の匂い。もしかしてモモンガさんと弐式さんの二人、別々の香水だった？」
「そうです！その通りです、ぶくぶく茶釜様！流石ですね！たったこれだけで、そこまでお分かりになるだなんて！」
双子がキラキラと尊敬の眼差しを、自らの創造主に向ける。だがぶくぶく茶釜はその視線に気付かず、別の言葉を絞り出す。
「……マジかよ……。アイツら、マジで何やってるんだ……。どっかでそんな事してきて、ナザリックにどうにかして帰ってきたって事か、もしかして……」
そう微かに震えたぶくぶく茶釜の言葉に、オキニと香水の繋がりが理解出来無い残りの四人は、揃って疑問の目を彼女に向けて、首を傾げるのだった。

禁忌と喪失のＮＴＲ専門店　扉のスキマ

妻と知り合ったのは、大学のサークルでだった。

やや面長で秀麗な顔立ちに白磁の様な肌。下世話なサークルメンバー達は彼女の豊かな胸をよく話題にしていた。それでいてふとした仕草が非常に楚々としており、育ちの良さが、両親に愛情をもって大切に育てられたのだろうというのが窺えた。

そんな彼女のサークル内での人気は当然高かった。よく言い寄られているところを目撃したものだ。そのたびに彼女は困っていたし、度が過ぎる様ならば私が間に入りもしていた。

そんな彼女だからこそ知り合ってすぐに意気投合、と言った事は無かった。彼女はあまり自分の意思を伝える女性では無かったし、私も積極的に異性に話しかける人間では無かったからだ。彼女が気になりこそしたが、会えば少し話をする、その程度の関係が三か月ほど続いていた。

親しくなったきっかけは今も覚えている。メンバーとのちょっとした会話、小さいころに何が好きだったか、そんな話題が挙がった時だ。

私は古い特撮もの、特に変身ヒーローが好きだ。それに憧れ、今も警察官を目指している、そう正直に語った時だった。

当然、大いに笑われた。

そんな反応は慣れっこだったし、女性のサークルメンバーからはそういうのが好きだったなんて意外と、揶揄われもした。一通り笑われ、話題が移り替わる頃、彼女が小さく、揶揄う様な笑みでは無く純粋な笑みで、私に話しかけて来てくれた。

「私も、特撮ヒーロー好きですよ」

そう、言ってきてくれた。

それからは親しく話すようになり、すぐに自分から想いを伝えた。あの時の驚いたような彼女の顔、それでも嬉しそうに、そして少しだけ潤んだ瞳は忘れない。

二人で色々なところに行き、色々な思い出を作り、共有していった。

男性と付き合うのは初めてという彼女。自分も今まで付き合ってきた女性とは違う魅力を持つ彼女に、初めて女性に強い感情を抱くようになっていった。

自分が警察キャリア試験に無事合格し、その頃に家族を紹介し合った。お互い自然結婚を意識し始め、卒業と同時に入籍した。

幸せな毎日だった。

忙しく、中々二人の時間を取れない自分を、彼女はいつも笑って献身的に尽くしてくれた。順調にキャリアの道を歩み収入も安定し、二人で相談し、少しだけ無理をしてアーコロジーに家を持つことにした。

本当に幸せな毎日だった。

家を持ち、その家を彼女が、妻が守ってくれる。幼いころの夢でもある正義の味方にもなれ、傍らには美しい妻。何一つ不満など無い、充実した、本当に充実した毎日。

そう、あの日までは。

切っ掛けは、家の中にあるほんの僅かな違和感。職業柄些細な差異には聡い。微かに残る痕跡に、すぐ気づいてしまう。

妻は白絹の様な美しい髪をしている。その彼女とインセクトの自分が住まう家にはあり得ない痕跡。

床に落ちていた黒い、そして短い毛髪。訝し気に拾い上げると、その正体に気付く。

黒く細い、柔軟で独特のぬめりがある毛髪。これはカシミヤだと、気付いてしまった。

気付いた瞬間、思わず口を手で押さえた。凄まじい嘔吐感。自分の異変に妻が慌てて駆け寄ってきて、体を支えてくれた。

こちらを、私を心配するその表情に、嘘は無い。嘘が無いだけに信じられなかった。この彼女が、妻が、不貞を働いたかもしれない。

あり得ない。妻の、彼女の愛情を疑うなど、私はどうかしてしまったのだろうか。だが、一度気付くと、痕跡は様々な場所から見えてくる。

僅かに動かされた形跡がある家具に、使われたと思われるスリッ

パ。普段なら気にしなかった変化が、たった一本のカシミヤによって、全てが異変となりこちらを狂わせる。
翌日は病院に行くと偽り、仕事を休んだ。
付き添うという彼女を安心させるように無理やり微笑み、その足ですぐさま盗聴器一式を用意した。一般販売されているものでは無く、ツテが無ければ手に入らない高性能のもの。職業柄、そういったものが何処で手に入るのかはわかっていた。帰るなり妻には疲労がたまっていただけと嘘をつき、彼女が寝静まったころを見計り、家の至る所に盗聴器を設置した。
盗聴器を設置し、数日は何の異変もなかった。仕事は年次休暇を強引に使い、無理やり休んだ。家の近くに車を止め、盗聴を続ける毎日。ほんの僅かな物音に動悸が激しくなり、汗が噴き出してくる。
だが無理やりに取得した休暇が残り少なくなっても、何の異変も起きなかった。その頃には、やはりすべては自分の勘違いだったと思えるように感情が変化していた。
今まで疑ってしまっていたことを妻に正直に伝え、謝ろう。誠心誠意、心を籠めて謝れば、妻もきっと私の行いを許してくれるだろう。
そうだ、詫びるだけは無く、久しぶりに外に二人で食事に出掛けよう。店は二人で初めて訪れたあの店が良いだろう。予約をしようと、携帯端末に手を伸ばす。
瞬間、心を、心臓を掌握されたような衝撃に襲われる。
玄関が開く音。そして盗聴器から聞こえる微かな硬質な足音。音の間隔から歩幅も知れる。男の足音だ。そしてこの硬質な音は――――蹄。
『ククク、待たせてしまったかな？』
『……貴方なんて、待ってなどいません』
『これは失礼。扉の鍵は開いていたので、歓迎されていると勘違いをしてしまったよ』
くつくつと嘲笑うかのような声。この声に、私は聞き覚えがあった。良く知る男。
「……ウルベルト・アレイン・オードル……」

漏れる怨嗟の声。なぜあの男が家に、妻しか居ない私の家に現れるのだ。
『では私はこれで失礼するとしよう。歓迎されていない場に長居をするほど、無作法ではないのでね』
ウルベルトが踵を返す。そうだ、そのまま送り出すんだ。そうすればすべては無かった事に、再び二人で笑いあえるあの日常が帰ってくる。頼む、どうか送り出してくれ。
『……あっ……ウルベルトさんっ……』
妻の漏らした声に、踵を返した蹄の音がピタリと止まる。絶望のあまり、思わず手で顔を覆う。
なぜ、なぜ声を、なぜウルベルトの名を呼び、引き留めた！
「くっ！……ぐぅ……！」
思わず涙が零れそうになるのを、必死で堪える。力任せに拳をハンドルに叩きつけた。声が、嗚咽が漏れる。胸奥に、感じたことの無い暗い感情が生まれ、それがちらちらと心を舐めてくる。
『随分愛おしそうに、私の名を呼ぶじゃないか。それほど私が恋しかったかな？』
『そんな……貴方が恋しい訳ありません……。貴方は……ただのセフレです』
（セフレっ!?）
貞淑な妻から発せられる筈の無い言葉に、体が震える。一体私は、俺は何を聞かされている。
『……それはそれは。フフ、それほど私が良かったのかな？あの男と比べて？』
『……あの人の話は、しないでぇ……！あんッ……ああ、そんな……いじわるをばかりを』
『言わないと、続けないよ？』
『ウルベルトさんがッ……！ウルベルトさんの方が、ずっといいんですぅ！あの人の交接器より、ウルベルトさんの動物―』
「……っ！」
衣擦れの音と、私が聞いたことも無い妻の甘い声。その甘い蜜に、

いや毒に誘われた蟲のように、私のハンドルを叩きつけた手は、別の場所にと伸びて行った。

『禁忌と喪失のＮＴＲ専門店　扉のスキマ』

◇オーバーロード　モモンガ

８

ＮＴＲ専門店という事で、色々とルールのあるお店でした。

それ自体は問題無いのですが、いきなりＮＴＲと言われても、女性と付き合ったことの無い私は正直ピンときません。そんな私がこのお店を訪れた理由は、ペロロンさんから寝取り役を依頼されたからです。

私にそんなプレイは出来ませんよと正直に伝えたのですが、どうしてもと頼まれました。まあ、内容的には私は玉座に座っているだけの簡単なものでしたが。

諸王の玉座を模した、わざわざあまのまさんに依頼したそうです、アイテムに座り、その私の上で、シャルティアのコスプレをしてくれたサキュ嬢さんが跨るという、よく分からないプレイ。

ハーフリングのピルティアさんという、ペロロンさんのオキニです。このお店にも在籍しているらしいです。その子が悪戯っぽく微笑みながら私の体を弄るのは、正直視覚的に興奮してしまいそうでした。

まあ、興奮しそうでしなかった理由は、その光景をガン見しながら号泣するペロロンチーノが、目の前に居たからなんですけどね。

泣くほど辛いならもう止めましょうと言ったのですが、結局時間一杯そのままでしたよ……。

高得点の理由は、ペロロンチーノがどれだけ泣いても叫んでも、彼からストップがかからない限り躊躇無くプレイを続けた、ピルティアさんに対してですね。

◇インセクト　たっち・みー

１０
素晴らしいお店ですね。
何よりも、こちらの熱意に応えようとしてくれるお店のその姿勢に、心を打たれました。こちらが望めば望むほど、力を入れれば入れるほど、その上を行く拘りを見せてくれる、そういうお店でした。持ち込んだシークレットハウスを使ったプレイにも対応してくれて、感謝に堪えません。
妻とは幼馴染だったのですが、やはり現実とプレイは切り離すべきと、シルキーのサキュ嬢さんに合わせ設定を変えました。こういう要望にもすぐに対応してくれる素晴らしい女性でした。シチュエーション的に盗聴器越しというプレイ内容にさせて貰いましたが、水晶レターにプレイ内容を録画するサービスもありますのでその点も安心ですね。ナザリックに戻りこのレビューを提出次第、内容の確認をしたいと思います。
本番無しというのも、元警察官としては安心できます。私と同じくパートナーを持つ方は、このお店に足を運ばれるのも、良いのでは？
最後に、寝取り役という難しい役柄を演じて下さったウルベルトさん。忙しいなか、私のリアル世界での自宅と車を模したシークレットハウスを作成して下さったあまのまひとつさん。お二人に最大の謝辞を述べさせて貰います。
お二人とも、ありがとうございました！

◇悪魔　大災厄の魔　ウルベルト・アレイン・オードル
８
あの人は、なんで俺を寝取り役に指名するんでしょうね？
意味が分かりません。どういうイメージを俺に持ってるんだ、アイツ。
どうしてもと頼まれたので、音声のみ、台本は全てたっちさんが仕上げるという二つの条件付きで了承しました。
はっきり言って、ＮＴＲというものが理解できません。理解できませんが、悪魔の嗜好はそういうのが有りみたいですね。あくまでも寝

取られでは無く、寝取りにですが。
元人間の感情が悪魔の嗜好に付いて行けなくて、久々に吐きそうになった。
高評価は、完璧なロールを魅せたシルキーの彼女に敬意を表して。

◇バードマン　ペロロンチーノ
１０
うう、俺にはＮＴＲは無理でした……。
シャルティアが、シャルティアがあんな愛おしそうにモモンガさんの骨の体を……。なんで、なんでそんな動物みたいな真似が出来るんだよぉ！
こんなのって、こんなのって無いです！あんまりです！
シャルティアの瞳がモモンガさんに向けられるたびに！シャルティアの吐息がモモンガさんに触れるたびに！シャルティアの白くて細い指がモモンガさんの体を弄るたびに！
俺は死にそうになりました！
なのに！なのに！シャルティアが悪戯っぽい瞳で俺をチラリと見るたびに、俺はどうしようもない程に興奮しちゃうんです！
うううぅ！前回のショックから立ち直るためにリハビリで選んだお店で、新しい扉を開いてしまった、そんな感じです……。

◆

「……お店は高評価だけどさ、俺は行かないで正解だったよ。寝取られるのも寝取るのも個人的に無理」
そう円卓で零すのは、今回のレビューを集め纏めている弐式炎雷だ。レビューの発行は彼が取り仕切っているために、発行と言ってもギルドメンバーで流し読む分だけだが、こうして同行していないお店にも、必ず一度はチェックが入る。
「正直私もそうですね。ペロロンさん的にはアリなのかナシなのかよく分かりませんが……」

「そもそもペロロンさんは１０点連発しすぎだよ。聞いたら『俺は相手をしてくれた女の子に１０点以外は出せません』とか言うし。その理論で行くと淫魔の詰め合わせ部屋も１０じゃん、あの人」
「まあ、ペロロンさんですしね」
そう締めくくり、モモンガも弐式炎雷を手伝うべく、今回のレビューに特別小冊子を同封する作業を続ける。今回はおまけにたっち・みーのＮＴＲシナリオ台本付きなのだ。
現在円卓に腰掛けているのは、弐式炎雷とモモンガ、そしてもう一人。モモンガはそのもう一人、不機嫌そうに頬杖をつきながら指でトントンと円卓を叩くウルベルトを見やる。
視線に気付いたのか、ウルベルトが芝居がかった仕草で大きく息を吐き、やれやれと両手を広げる。
「俺は散々でしたよ。こんな猿芝居まで演じさせられて」
口元に笑みを浮かべながらも、やはりどこか不機嫌そうだ。
「いやでも、このたっちさんのシナリオそこまで悪くないんじゃない？だから今回おまけに採用したんだし」
弐式炎雷のたっちに対するフォローらしきものに、ウルベルトはにやりと笑う。
「ここを見てください」
そういってウルベルトは近くにあった台本を広げ、一点を指さして見せる。広い円卓で距離はあるが、モモンガ達には問題無く見て取れる。そこには使用された形跡のある客用スリッパに妻の不義を疑うと書かれていた。
「俺は蹄ですしね。スリッパは使いたくとも使えません。まあ、そこは目を瞑ったとしても、次には俺の登場の演出でわざわざ蹄の音と書いてある。色々おかしいんですよ、この台本。それだけじゃありませんよ？次の寝取り男の声を聞いたたっちさんが、不義の相手が俺と確信するこのシーン。ここで俺とたっちさん――――寝取り男と寝取られ男に面識があるのもおかしい」
「そうなんですか？」
モモンガの質問に、ウルベルトは頷く。

「間男の正体が分からないのであれば、問題はないのですけどね。妻が不貞を働く切っ掛けを、自分で想像することが出来ますから。でも寝取られ男と寝取り男に面識があるのならば、妻が間男と知り合った切っ掛けの描写は不可欠です。まさかあの時既に……？となりますからね。これは重要ですよ。なのにたっちさんは、そう言った寝取られの醍醐味である部分を色々とすっ飛ばしている。おかしいんですよ、この台本は」

ウルベルトが丸めた台本でペシペシと円卓を叩く。その子供っぽい仕草に思わずモモンガは苦笑いを浮かべる。

「ああ、言われてみるとそうかも。最初の大学での出会いからして無理あるね。これ最初は人間だった頃をイメージさせてるのに、いきなりインセクトとかカシミヤとか出て来てる。そもそもアーコロジーで家を建てたとか書いてるのに。俺らはリアルでも異形種か」

弐式炎雷の指摘に、モモンガはその部分の台本を改めて目を通してみる。なるほど。確かに最初は人間だった頃を彷彿させるのに、途中から異形種の特徴が唐突に描写されている。

「家とか車とか盗聴器とか。小道具ばかりに力を入れて、肝心のストーリーが穴だらけなんです。ＮＴＲをやりたいなら、そんな小道具なんかに拘る前に破綻の無い台本を寄こせと、俺はそう思いますね」

そうウルベルトは悪態を吐く。

「まあ、たっちさん特撮好きですし。そういった小道具の方に、力を入れてしまうのかもしれませんね」

「変身ベルトじゃあるまいし、もう少しＮＴＲを勉強してから誘ってこい」

「ウルベルトさんこそ随分詳しいね。そっち系が好みだっけ？」

弐式炎雷の指摘に、ウルベルトは少し迷いを見せてから、忌々し気に口を開く。

「……勉強したんです。ペロロンさんとタブラさんに教わりながら。幸い図書館にはそういったデータが山ほどありましたから。たっちさんから盗聴器越しってシチュエーションだけは聞いていましたから、声での演技に説得力を持たせるために、茶釜さんに演技指導まで

お願いして……」
　そのウルベルトの言葉に、モモンガは素直に感心する。
「凄い、ウルベルトさん」
「流石だわ、ウルベルトさん」
「そんなところを感心されて――」
　ウルベルトの台詞を遮る様に円卓の扉が開いた。転移して来れる円卓に、わざわざ歩いて扉を開いて入ってくるのは誰だろうかと、三人がそちらに視線を向ける。
　扉を押し開き姿を見せたのは、今まさに話題になっていた男、たっち・みーだった。
「……ウルベルトさん」
　フルフェイスの兜に覆われ、たっち・みーの表情は伺えない。だがその声は、何処か暗かった。その声に何かを察したのか、ウルベルトがやれやれと立ち上がる。
「……ふぅ。たっちさん、まさかまたお誘いですか？一度限りだと約束したじゃないですか、我儘言うべきじゃないと思いますけどね」
　そういう事か、たっちさんハマってるなーと、モモンガと弐式炎雷の両名がのほほんとたっち・みーを見る。どうせこの後はいや、我儘言ってるのウルベルトさんの方ですよとでも言うのだろう。向かい合うウルベルトとたっち・みー達の成り行きを見守る。
「……どうしてもと言うのならば、せめて台本を、いえ、そもそもＮＴＲがどういうモノなのか、ペロロ――」
「黙れ」
　成り行きを見守った結果は、ウルベルトの台詞を遮るたっち・みーの斬撃。
「ぬお!?」
　ウルベルトが普段の彼らしくない危機感に満ちた声を上げつつ、両手を上げ仰け反ってその斬撃を躱す。普段見せる事の無い仰け反るウルベルトを注視するべきか、それともいきなり斬り付けるという、こちらも普段見せる事の無い姿を見せたたっち・みーを注視するべきか、モモンガと弐式炎雷の視線が二人の間を泳ぐ。

「……お……ま……はぁ？いきなり何を――」
「ウルベルトさん。あれは何の真似ですか？……いえ、ウルベルト・アレイン・オードル。貴方は私の妻を、何処まで辱めれば気が済むんですか？」
「―妻？……もしかして、シルキーのあの子の事か？あの子はあの店のサキュ嬢であって、たっちさんの妻じゃ、いや、そもそも台本を手掛けたのはたっちさんで―」
「彼女が水晶レターで見せたアヘ顔ダブルピースの事だッ！」
　再び鋭い斬撃。ウルベルトは寸でのところで、その斬撃から身を躱す。
「な、何を言って――いや、まて。水晶レターだと？……たっちさん、まさか、頼んでいたのか？録画サービスを？俺に一言も断りなく？」
　扉のスキマはプレイ内容を録画できるサービスがあり、たっち・みーもレビューにその事に言及していたが、どうやらウルベルトには許可を取っていなかったらしい。ウルベルト自身もレビューを出した後は、たっち・みーのレビューに目を通すことはしなかったのだろう。そう推測するが、そんな事よりも衝撃的な事がモモンガと弐式炎雷の二人にはあった。
「……モモンガさん、たっちさんの口からアヘ顔ダブルピースなんて言葉が飛び出してきたぞ」
「……ええ、正直聞きたくはありませんでした。あの人、私がユグドラシルで憧れた最初の人なんですけど」
　恐らく水晶レターの最後に、ウルベルトの知らない所でサキュ嬢のアヘ顔ダブルピースシーンが追加でもされていたのだろう。そしてそれを観たたっち・みーが激高している。そういう事だろうが、いくらなんでも今日のたっち・みーは酷すぎる。ＮＴＲプレイにのめり込み過ぎに、引きずられ過ぎだ。
「俺だってそうだよ。俺はまあ、建やんにくっつく感じでつるむようになったけどさ――あ、ヤバい」
　弐式炎雷の警告じみた声に、モモンガも素早く円卓に潜り込み身を隠す。キレたウルベルトが哄笑を上げ始めたからだ。

「クク……ク……フハハハハハハハハハッ！この！このウルベルト・アレイン・オードルが!?他人の妻を寝取るなどという下衆な真似を演じさせられ、尚且つその様子を録画されていただと？ハハハハハッ！これ以上の、これ以上の笑い話があるか！セフレ呼ばわりされる事にも堪え、必死に耐えた結果がこれか!?たっち・みー!!」
「やっぱたっちさんの為に、無理して付き合ってくれてたんだな―、ウルベルトさん」
「なんだかんだで、仲間想いですからねー、ウルベルトさん」
　円卓に身を潜めながら、僅かに顔だけを出してモモンガと弐式炎雷が様子を窺う。
「たっちさんも、きっといい笑顔で頼んだんでしょうねー」
「無垢というか邪気が無いというか、純粋だからね、たっちさんは。だからこそのめり込め過ぎて、自分で頼んでおいて寝取り男役のウルベルトさんにキレてるんだろうけどさ」
　モモンガと弐式炎雷は呆れた顔で、たっち・みーと相対するウルベルトを見守る。
「いいだろう！お前が掲げるアインズ・ウール・ゴウン最強の金看板！今日この場で、このウルベルト・アレイン・オードルが燃やし尽くし、灰燼と化してみせよう！」
「私は誰にも負けません。……妻を辱めた罪。その身で贖え、ウルベルト・アレイン・オードル！」
「だからあの子はお前の妻じゃねぇだろうがァ！」
　そしてアインズ・ウール・ゴウン魔法職最強と戦士職最強が、円卓で激しくぶつかり合い始めた。
「あー、不味いなー。ウルベルトさんロールを忘れ始めてる」
「キレてても、ウルベルトさんが無意識にロールを演じてる間はまだ安心出来るんですけどね。――よし、アルベドに連絡して、この区画には誰も近づけさせないようにしました」
「サンキュー、モモンガさん。あとは俺らの身を守るだけだな」
「ですねー。――おっと」
　ウルベルトの放った魔法がたっち・みーによって弾かれ、モモンガ

と弐式炎雷の頭上を掠める。慌てて頭をひっこめた二人は、円卓を盾にしながらひそひそと相談を始める。
「……どの辺で止めに入りますか？」
「……もう少し待とうよ。スキルの使用回数と魔力を消耗させてからじゃないと、俺達の方が返り討ちにあう。……問題はそれまで円卓がもつかだな。ここ他の区画より強化されてるんだけどなー」
「修繕費、いくらになるんでしょうね……」
　背中を預けた円卓が衝撃に揺れる。戦闘は激しさを増していくばかりだ。争う二人と同じ百レベルプレイヤーのモモンガと弐式炎雷の二人でも、安全とは言い難い。強化された区画内にあっても、さらに頑丈な円卓を盾にしているとはいえ、不安でしょうがない。
「会議は踊る！されどすす――」
　暴れる音に混じり、声が聞こえた。疑問気にモモンガは顔を上げようとするが、その瞬間たっちー・みーの斬撃が鼻先を掠めた為に慌てて円卓に隠れる。
「今の声は？るし★ふぁーさんの声だった気がしますが？」
「ああ、トラップゴーレムでしょう？速攻ぶっ壊されたみたいだけど」
「……大浴場のトラップゴーレムは、私と守護者達でそれなりに苦労させられたんですが……」
「まあ、あの二人だし……」
「あの二人ですしねー……。でも、あの二人もこうして直接ぶつかり合えるようになったのは、少し感慨深いです」
「ユグドラシル時代はぶつかるにしても、ちょっとお互い嫌味っぽかったからね。根っこでは仲良かったんだろうけど、あの頃を知ってる身だと、確かに感慨深いよ」
　激しい戦闘音と揺れる衝撃から身を守りつつ、モモンガと弐式炎雷は軽く微笑みあう。あの頃も、こうして全力でぶつかり合えば良かったのにと。
「でもさ、モモンガさん。俺ちょっと不安になってきた」
「あの二人を止めに入る私たちの未来にですか？」
「いや、それもだけど、セバスだよ」

「セバス？」
「うん。セバスって設定が『執事である』くらいしか書き込まれてないだろう？だからＮＰＣの中でも一番創造主に似てて、もしたっちさんのＮＴＲに興味津々な性癖まで受け継がれてたら、不味くない？」
「……あー、それは不味いですね……。私たちに話を持ちかけてくるなら止めようがありますが、セバスがデミウルゴスにそういう事を持ちかけでもしたら……」
「ウルベルトさんのレビューを読むかぎり、寝取りは悪魔的に有りみたいだしね。セバス相手だといっても、デミウルゴスはナザリックの仲間達には優しいし、頼まれれば断らないかもよ。あのデミウルゴスの寝取りプレイ。興味はあるけど、止めないとヤバいでしょう」
「……これが終わったら、デミウルゴスと遠回しにですが話をしてきます」
「俺はセバスとツアレさんに会いに行ってくるよ。……よし、そろそろ行くか。セバス達の為にも、ここで死ねないぞ、モモンガさん！」
「私達あの二人のＮＴＲプレイの喧嘩で、どれだけ悲壮な決意をさせられているんでしょうね……。でもナザリックの為にも、ここで死ねませんから！行きましょう、弐式さん！」
「生きて帰るぞ！行きたいサキュバス店は、まだまだ一杯あるんだ！」
「ええ！私もです！」
　そう誓いあってモモンガと弐式炎雷は、争う二人を止めるべく円卓から飛び出していく。
「ウルゥベルトオオオオッ!!」
「たぁぁぁぁっちぃぃぃぃぃっ!!」
　互いの名を叫び合う、最強の二人に挑むべく。
　そして今回のレビューにこう付け加えておこうと思った。
　プレイをプレイと割り切れる人でないとＮＴＲプレイは難しい、と。

魔導士デミアプロデュース本店　前編

「うぐぅ……ふぐぅ……シャ、シャルティアが……モモンガさんにぃ！ぐすぅ！シャルティアぁ！俺じゃ……俺じゃ駄目なのかな？あんな愛おしそうにモモンガさんをお……ぐす……」

シャルティアにネクロフィリア設定を付けた創造主（張本人）であるペロロンチーノが、第九階層「ロイヤルスイート」の自室内のベッドで悶えている。

ＮＴＲ専門店『扉のスキマ』を訪れて数日経過しているが、未だにこんな感じであった。枕は溢れる涙でべちょべちょで、悔しさに噛み締めたシーツはボロボロである。

勿論ペロロンチーノも常時この状態ではない。普段はいつも通りである。だがベッドの傍らには『扉のスキマ』で頼んだ水晶レターが転がっており、録画された映像をホログラムの様に映し出していた。

モモンガとシャルティア（正確にはシャルティアのコスプレをしたハーフリングのピルティア）の痴態（ピルティアが玉座に跨ったモモンガの体を弄るだけの映像である）が録画された、向こうの世界のアイテムである。ペロロンチーノは定期的にこの水晶を起動させ、その映像を眺め視ては、こうして一人鬱に閉じこもっているのである。

最愛の人が、最高の親友に寝取られる。その映像を繰り返し見ては、悶え苦しみ、泣き叫ぶ。苦行ともいえる。恐ろしいまでの強敵だ。これほどの強敵は、大好きなエロゲシリーズ数年越しの新作、そのヒロインの声優が自身の姉であったあの時以来だ。ワールドエネミーすら霞んで見えるほどだと、ペロロンチーノは映像の中の二人のプレイを眺めながら思う。

何故ペロロンチーノはこれほどの苦行を、自ら進んで行うのか。それには理由があった。ペロロンチーノは理解しているのだ。

ＮＴＲの真の醍醐味は、この苦しみの先にある事を。

この苦しみの先にある扉を開けば、ペロロンチーノは更なる進化を遂げる事を。

それを理解しているからこそ、繰り返し水晶レターを起動するので

ある。
「ちくしょう……モモンガさんめ……俺は負けないぃ……この先にある快感を、必ず手にしてみせる……ぐすず！うううぅ……シャルティアがモモンガさんを、あんなに愛おしそうにぃぃぃぃぃ!!」
技術の発展は最初に軍事、次にエロと医療に使われるのだ。これはエロの偉大さを物語っている。
ペロロンチーノの持論である。そしてエロは例え今が苦しかろうと、必ずその先に新しい扉を、ご褒美を用意してくれているのである。限界は無いのだ。エロは、必ずその先に快楽と快感の楽園が広がっている。それをギルドで、いや、ナザリックで一番理解しているのが、ペロロンチーノなのである。
「ふぐぅぅぅぅ！俺は負けない！もっと俺は強くなるから、待っててね、シャルティア！あああああああ!?シャルティアがモモンガさんの頬骨を舐めたぁぁぁぁぁ！ふぐぅ……ぐず！うううぅ……新たな扉はまだ見えてこない……ぐす……。……っ!?」
何かを感じ取ったペロロンチーノは水晶レターの映像を停止する。
なぜ急に苦行を止めたのか、それはペロロンチーノに予感が走ったからである。誰かがこの部屋を訪れようとしてる。そんな予知にも似た先読みが発動したのである。
ペロロンチーノは、長距離広範囲爆撃に特化したガチビルドだ。探知系スキルは持っていない。それなのになぜこうも素早く第三者の接近を感じる事が出来たのか。
それは、長年姉と同居していた弟だから持ちえたリアルスキルである。姉の方も姉の方で、弟に予知すらさせずにおっぱじめた瞬間に扉を開けるリアルスキルを持っているのだが。結局のところ、姉弟同士では間に合う事も、間に合わない事もあるが、今回は間に合ったようだ。ペロロンチーノは水晶レターを、バレないように手早くベッド下に潜り込ませる。
そして扉が開くと同時に、ペロロンチーノはベッドに潜り込んだ。
最初は一般メイドの子だと思っていた。涙でぐしゃぐしゃになったベッドのメイキングに来てくれたのであろうと。だがその予想に

反し、来訪者はノックも無しにペロロンチーノの自室の扉を開けた。そんな真似をするＮＰＣはいない。ギルドメンバーにだって二人しかいない。そして扉を開けたのはピンク色の肉棒では無かった。という事は必然的に一人である。

その一人がのしのしと異形の体を引きずり、頭からベッドに潜り込んだペロロンチーノの所までやってくる。そして大きく息を吸うと

―――

「あたしはーもーちー♪あんころもっちもーちー♪どこにいるーのー♪あたしのーペットぉー♪」

大声で歌いだした。

ペロロンチーノは、駄目が付くが絶対音感の持ち主である。それが災いし、拾わないで良い音階も拾ってしまう。要するに、ものすごく煩いのである。向こうもペロロンチーノの音感を理解し、あえて音階を外してきている。完全に嫌がらせだ。

負けては駄目だとペロロンチーノは自身に言い聞かせる。ここで負けるから、相手も調子に乗るのだ。これ以上折れてはいけない。

「あーあ♪ぺェットー♪さがしてーるぅ♪」

「人の部屋でうるさいな！なんだよ、もう！ジャイアンリサイタルか！」

だが、結局は堪えきれずに叫んでしまう。

「あたしはもち。ジャイアンじゃない。可愛いペットを探しているの」

「知ってるよ！ハムスケがいるだろう!?」

部屋にノックも無しに入ってきた異形、餡ころもっちもちにペロロンチーノは怒鳴る。怒鳴られた餡ころもっちもちは不満そうに口を開いた。

「ええー、だってハムスケさぁ。最近は、某は殿にお仕えすると心に云々でござるよーっとか言ってモフらせてくれないし、餡ころもっちもち王国にも出勤してくれないんだもーん」

「出勤制だったのか、あの動物園!?」

トブの大森林を一部切り開いて作られた餡ころもっちもち王国の

知られざる事実に、ペロロンチーノが叫ぶ。実態はただの動物園なのだが。
「だよ？有休もあるし、育児産休も完備。福利厚生はバッチリ。まあ、それはいいとして」
「勝手に部屋に入られてジャイアンリサイタル開かれた俺は良くない」
「あたしはもち。ジャイアンじゃない。あとペロン、なんであたしにだけ敬語じゃないの？失礼でしょう？」
「俺のが年上だろう！」
「同い年じゃん」
「俺は三月生まれで、お前は四月生まれ！学年が違う！というか同い年だとしても、俺にだけ敬語を使わせるつもりだったのか!?どんだけジャイアンなんだよ！」
「あたしはもち。ジャイアンじゃない」
「そのフレーズ、気に入ってますよね!?ああもう、マジで何の用なんだよ？用があっても無くてもどっちでもいいから、とりあえず出て行ってくれますか？俺、餡ころさんと違って忙しいんで」
「あたしだって忙しいさー。というかさ、なんで世界征服も終わったのに、ペロン達忙しいの？モモンガさん今日も出掛けてるしさー」
「……なんだっていいだろう？」
「そりゃいいけどさー。行先も告げずに魔導王陛下が出掛けるのはさ、不味くない？供回りも付けないから、アルベドが乱心してたよ？モモンガ様をお守りするーって。ついでにお父様もーって」
「……タブラさんついでか。まあモモンガさん達には、弐式さんにヘロヘロさんも付いてるから問題ないって。それに三日後には帰ってくるよ」
「そう、そこだよ、ペロン。メンツは違うみたいだけど、なんで四人で出掛けてるの？あたしたち、ユグドラシルのプレイヤーが一番強いのは、バランスの取れた六人チームでだよ？それなのに、なんで毎回毎回四人でナザリックから消えるのさ？」
「……なんでもないって。だからいい加減出てってくれませんかね？

さっきも言ったけど、俺忙しいんで」
「ソロプレイに励んでるの？ベッドでシコシコと」
「違うし！マジでそういう事言うの止めてくれませんか!?……少しはやまいこさん見習えよ」
　ペロロンチーノが呆れながら、しっしっと餡ころもっちもちを追い出す様に手で払う。その仕草に餡ころもっちもちはやれやれと両手を広げてから、ペロロンチーノに背中を向けた。
「はいはい、お邪魔しましたっと。じゃ、頑張ってね。かぜっちにはペロンがオナ――」
「ホントいい加減にしてくれませんかね!?」
　餡ころもっちもちの背中をベッドの上で見送ったペロロンチーノは、あからさまなため息をついた。
「なんだったんだ、アイツ。……まあいいや、つづきつづきっと。……あれ？」
　ベッド下を覗き込んだペロロンチーノが疑問の声を上げる。
「水晶レターがない……」

「……ペスゥー、エクレアー。上手くいった？」
　ペロロンチーノの部屋を後にした餡ころもっちもちが、歩きながら問いかける。問い掛けに餡ころもっちもちの背後から、アイテムによる不可視化を解いた二人が姿を見せる。
　ナザリックメイド長ペストーニャ・S・ワンコに執事助手エクレア・エクレール・エイクレアーである。
「ハッ！万事滞りなく、完了致しました」
　そういってエクレアが両のフリッパーで持った水晶らしき玉を、餡ころもっちもちに差し出す。
「ご苦労様。……なにこれ？水晶？……本当にこれをペロンがベッド下に隠していたの？」
　餡ころもっちもちの問い掛けに、エクレアがぶんぶんと何度も頭を

振って答える。餡ころもっちもちがペロロンチーノの相手をしている間に、アイテムによって不可視化したこの二人がベッド下を探っていた。餡ころもっちもちの歌は、姿を隠していた二人の物音を誤魔化す為だったのだ。

　ペロロンチーノは見られたく無い物をベッド下に隠す。これはぶくぶく茶釜からもたらされたギルド女性陣の共通認識だ。その為とりわけ最近様子がおかしいペロロンチーノのベッド下を、二人に探らせたのである。

「その水晶のみ、ベッド下に置かれていたモノの中で＜魔法感知（ディテクト・マジック）＞に反応がありました」

「ほー？＜道具鑑定（アブレーザル・マジックアイテム）＞の結果は？」

「鑑定不能と。……込められた魔力量からして、魔法による妨害対策が施されている訳ではないようですが……あっ、わん」

「魔力量は大したことないのに、鑑定不能のマジックアイテムねぇ？」

　餡ころもっちもちは異形の手で水晶を玩びながらしげしげと眺める。

「ですが、宜しかったのでしょうか？至高の御方の許可なく、ご寝室から勝手にアイテムを持ち出してしまって……」

「平気平気。責任はあたしが持つから。それにペロロンのモノはあたしのモノ。あたしのモノはモチロンあたしのモノ。問題ないでーす。……かぜっちはしばらく放っておこうとか言ってたけど、アイツら間違いなくなんかしてるなー」

　そう言って、餡ころもっちもちはくくくと笑う。ぶくぶく茶釜からは放っておこうと言われていたが、こんなものすごく面白そうな予感がするものを放置して置けない。

「面白そうな予感がするなー。なんか新しい子（ペット）、新しい甘い物に出会える予感がするぞー？よーし、まずはこの水晶から探ろうか。原産地とか分かるかな？ふふふ、二人ともー、いそがしくなるよー」

　特に男どもがしていることはＮＰＣに知らせるなと、そうぶくぶく茶釜から注意されていたことも忘れ、餡ころもっちもちはスキップを始める。

そしてその彼女に創造された二人のＮＰＣは、嬉しそうな創造主に微笑み、一人はしずしずと、一人はトコトコと、ついていくのだった。

◆

「……ぜぇ……ぜぇ……。着いたぞ――――――――――――！」

地図と目の前の都市を何度か見比べ確認した後、ここが『魔法都市』で間違いないと確信した弐式炎雷は両手を突き上げ叫ぶ。呼吸等していない弐式炎雷の息が荒くなることは無いのだが、元人間の感覚からどうしてもそんな感じになる。

「ほら、着いたぞ！俺一人走らせやがって！」

そう言って弐式炎雷は自身の影に振り返る。声に、三つの異形が影から這い出る様に姿を見せた。

「流石ですね、弐式さん！ケンタウロスの足で四日掛かる道程を、たった半日で走破するなんて！」

感嘆した様に、影から這い出た異形の一つ、オーバーロードのモモンガが弐式炎雷を褒め称える。

「ま、まあね！タブラさんから特製の薬も貰っていたし、これくらいの距離、俺なら余裕だよ」

褒められて満更でもない弐式炎雷が照れくさそうにそう言う。そして影から這い出た残り二つの異形も弐式炎雷の労を労う。

「ご苦労様、弐式さん。私の薬が役立って何よりだよ。それとモモンガさん。さっきの上がり、ＵＮＯ宣言してないでしょう？」

そう言ったのはブレインイーター、大錬金術師タブラ・スマラグディナである。

「ちゃんとしましたよ」

タブラの指摘に憤慨したようなモモンガに、残る最後の異形、古き漆黒の粘体ヘロヘロが口を開いた。

「いえ、私も言って無かったと思います。あ、弐式さん、ご苦労様です。そもそも終盤のスキップ戦術はなんなんですか、いやらしい」

あからさまにおざなりな感謝に、弐式炎雷は疲れたようにがっくり

と肩を落とす。
「こっちは＜闇渡り＞に＜縮地＞も使って全力で走ってたのに、みんなしてＵＮＯしてたのかよ……。まあ、いいけどさ別に……」
「私達の中でここまでの高速移動が可能なのは、弐式さんだけだからね。まあ、ギルド内にはそれが出来るのが後二人いるけど、片方は筋金入りのロリコンで、もう片方は貧乳至上主義だしね」
　タブラがそう云々と魔法都市を見上げながら頷く。
「スタンクさんのレビューを読む限り、あの二人はこのお店は合わなそうですし。しかしやっと来れましたね！ＮＧ無し！オール４０点レビューのお店！私ずっと来たかったんです！」
　そうヘロヘロが嬉しそうに粘体の諸手を挙げて喜ぶ。その姿にモモンガも微笑み頷く。
「ここまでの物理的な距離と、期間が三日というのがネックでしたからねー」
「最初に扉の使用は一回に付き２４時間というルールを作ったからね。私もヘロヘロさんからこのお店に誘われてから、ずっと興味あったんだよ。まあこれで、私とモモンガさんが＜転移門＞を使えるから、移動はぐっと楽になるはずだよ」
　タブラの言葉に、モモンガも頷く。扉から魔法都市までの移動手段はこれで確立された。これでモモンガとタブラは「また行くんですか？しょうがないなー、私が＜転移門＞を使いますよ」と、他の仲間がこの都市を訪れる際に優先的に同行出来るはずだ。
「とりあえず、街の中まで行こうよ。扉を三日も占有するんだから、急ごうぜ」
　そうですねと四つの異形が歩みだす。全員に自然と笑みが零れる。
　これから行くのは、ギルドアインズ・ウール・ゴウンの全員が全幅の信頼を寄せる食酒亭を拠点とするゼルさんレビューだけでなく、様々なレビューチームが満点評価をたたき出したサキュバス店なのだ。どうしても期待をしてしまう。
『いざ行かん！オール４０点レビューのお店！』
　四つの異形の声が重なる。目的はただ一つ。

『身代わり魔法デコイ人形のお店　魔導士デミアプロデュース本店』
である。

魔導士デミアプロデュース本店　後編

「お兄さん、スッゴイ魔力ですね！モテるでしょうー？」
「も、モテるなんて、そんな事ありません！」
　ぶんぶんと骨の手を振って否定する彼に、思わず私は笑ってしまう。
「フフフ♪ほんとかなー？」
　そう言って私は骨の体をベッドの上に押し倒した。大した抵抗も無く押し倒された彼の腰骨に跨り、肋骨に手を添える。
「……あ、あの、デミアさん？しゃ、シャワーとかいいんでしょうか？」
　狼狽えたように、いや、本当に狼狽するアンデッドのお兄さんに優しく微笑んで、頬骨に私の頬を触れさせる。
「あっ！」
　見た目に反し、本当に反応が良くて、そして可愛い。
「シャワーを浴びる前から、こうやってエッチなお店の女の子に押し倒されたの、初めてじゃないでしょう？」
「は、はい」
「お兄さんの魔力にアテられたら、魔力が強い子なら我慢出来無くなっちゃいますよ♪」
「そ、そういうものなのですか？……あっ」
　スルスルと衣服を脱ぎ捨て、骨の体を擦りながら軽く魔力を同調させる。骨の体でそう表現していいのかわからないが、私の魔力が彼の体内で循環し、快感に変わっている頃だ。
「ああああっ……！」
「フフ、いっぱい気持ち良くなってくださいねー♪」
　そう言って魔力の同調を強める。深く、深く、奥底に。彼が意図的に抑えているだろう魔力の深淵に潜り込ませていく。
　ああ、本当に凄い。今まで感じた事の無い、とんでもない魔力だ。
　恐らく今まで彼の相手をした子達は、上澄みの魔力を感じ取っていただけだろう。この本質の魔力には、触れてこなかったはずだ。普通の子がこの魔力に触れてしまえば、気が触れるか、さもなくば壊れて

しまうだろう。
この魔力は、死、そのものだ。
「あ……っ♪私もお兄さんの魔力にあてられてぇ、どうにかなっちゃいそぉ♡」
今まで感じたことの無い溢れ出る死の魔力の奔流に、身悶える。狂いそうなほどの快楽に快感だ。制御できているのは、私だから。
ああ、デコイじゃなくて、本体で相手をすればよかった。私は本心から、そう思っていた。

◇オーバーロード　モモンガ
１０
大魔道士デミアさんプロデュースのお店、その本店にお邪魔してきました。
本当に凄いです。魔力操作の技術のレベルが断然違います。今まで感じたことの無い、何と言えばいいのでしょうか、深い所まで弄られて、混ざり合って、そんな感じです。
魔力が強い子とのプレイは何度も体験しているのですが、これはまた一味違いますね……。
アンデッドの特性ゆえに、あまりに快感が強すぎると私は精神抑制が働いてしまうのですが、デミアさんにかかるとそのギリギリのレベルで責め続けてもらえます。人間だった頃を思い出して表現すると、その、達しそうな、一番気持ちいい状態を、ずっと維持され続けるというんでしょうか？
本当にものすごいですよ！たぶんこれ、私が人間のままだったら狂っていたでしょうね。こんな快感をずっと味わっていられるなら、アンデッドでも良かったなと、そう思ってしまいました。
それだけでも満点ですが、何より三日という時間が素晴らしいです。
デミアさんは魔法都市の観光ガイドも出来るそうで、あちこち案内してもらいました。魔法図書館とか、こちらの魔法使いが沢山いて、なかなか見ごたえありましたね。

興味を持たれた方は、是非私に声を掛けて下さい。＜転移門（ゲート）＞でご案内しますよ！

「ふむふむ、デコイ魔法ってのは普通は単純動作しかできないんだ？」
「ですです。こうやって会話できるレベルのデコイを作れちゃうのは、私が世界最高位の魔道士だからですよ」
そう言ってベッドに腰掛ける、顔すらも頭巾で覆った彼に胸を張る。
一般的なデコイと私との違いを問われ、簡単に説明すると、納得した様に何度か頷いている。
目の前に居るのに、気配が恐ろしく薄い。怖いくらいだ。
「でもぉ、お兄さん魔法使いじゃないですよね？デコイ魔法に興味あるんですか？」
「ん？ああ、そうだね」
種族すら分からない彼が頷く。そして―
「きゃっ！」
「俺も、分身が得意なんだ。魔法じゃないけどね」
声と共に、背後から腰を抱かれた。彼は当然目の前にいる。驚いて振り返ると、そこにはもう一人の彼。
「じゃじゃーん。俺も分身体です。俺忍者だからさ」
「同一個体なら追加料金無しって所多いみたいだけど、ここも大丈夫？」
「不味いなら追加料金払うか、分身ひっこめるけど」
「というか、もう少し広い部屋取り直そうよ。俺だらけで狭い」
「この狭さが良いんじゃないか！なんかＡＶみたいで！」
「俺にそんな趣味ないだろう？本当に俺か、お前」
気配も、魔力も、何も感知することなく、無数の彼が部屋に溢れている。種族特性でもない。初めから居たのではなく、唐突に現れたのだ。魔力反応も、目の前に居る私に気配も感じさせずに。

「あんっ♡……お、お金はだ、だいじょうぶぅ……んんっ！……やだぁ……そんな、みんなに同時に触られたらぁ…あぁ♪」
無数の手で触られ、弄られて、私は容易く絶頂に達してしまった。
ああ、ニンジャって、すごいぃ！

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷
１０
いや、ヤバいよ、ここ。
三日間、それでいてたったの５０００Ｇ。
何よりデミアさんのレベルがすっげぇ高い。普段の魔道士の服の時点で凄い。揺れるおっぱいとか、すんごいスリットの入った足とか。心臓無いのにドキドキする。
そんな子を三日間独占出来るんだよ？ヤバすぎだろう、ここ。
三日間も一緒にいるとさ、デミアさんもこっちの好みとか自然に把握してきてくれるし。ちょっと目を離したら裸ワイシャツに着替えてくれてた時は、マジで心臓が跳ね上がった。いや、心臓無いんだけどね。
あと俺、おかしらのアジトでも思ったんだけど、いちゃいちゃするのが好きみたい。女の子を責めるのも好きなんだけどさ、ベッドでゴロゴロしながら、映画見たりとか、いや見てたのはサキュバスムービーだけど、そう言うのが好きだ。
うわ、自分で書いてて気持ち悪いし、それ以上に恥ずかしいな。
でもそういうプレイだって、三日もあると自然に出来るよ？
不満だって、ここを知っちゃうと、次から別の店のレビュー評価が辛口になりそうだなって事くらいだよ！

「……ふぅむ。肉感的で妖艶な美女。素晴らしい」
「あははっ！ありがとうございますー」
私をそう評価する、水を吸って大きくなった死体の頭にタコが取り

付いたような彼にお礼を言う。
「お客さんは、なんていう種族の方なんですかぁ？」
「ああ、すまない。こちらには居ないのかな？私はブレインイーターだ」
ブレインイーター。聞いたことの無い種族だ。そのままの意味で受け取れば、脳食いという事だろうか。
「教えてくれて、ありがとうございます！それで、お客さんはどういうプレイがお好みですか？」
察するに脳を吸うのだろうか。そういう事が目的のお客さんも少なくはないし、そう言う事を売りにもしているので、問題は無い。だが返って来た答えは、私の予想を超えるものだった。
「……パパと、呼んでくれるかな？」
彼の見た目からは想像も出来ない要望だが、私はにっこりと微笑んで頷く。
「パパですか？勿論良いですよ、パパァ♪」
そう私が呼ぶと、彼はプルプルとタコの様な頭を震わせる。
「……素晴らしい。肉感的で妖艶な美女から、どこか幼い声でパパと呼ばれるこのギャップ。素晴らしい、素晴らしいギャップ萌えだ！」
「あっは♪褒めて貰って嬉しいなぁ♪」
そう言いながら、彼の右腕を両腕で掴み取り胸で挟み込む。
伝わってくる。彼が秘めた魔力もまた生物を超えた、神の領域。
「じゃあ、パパ♪三日間どう過ごすぅー？」
「ふふふ、素晴らしい！アルベド達とはまた違う魅力に溢れているぅ！……決めた。私はこの三日間、キミを本当の娘として思って接し、全力で愛情を注ごう。愛だけでなく、私から与えられるものは、何でも与えよう」
「ええー？良いんですかぁ？」
「構わないとも。アイテムは……仲間達との取り決めがあるので、そう大したものは渡せないが、まあ、聖遺物級なら問題無いだろう。それに私はこれでも大錬金術師を名乗っていてね。知識も与えられるはずだ」

「すごーい、パパ♪」
「ふふふ、良いね。実に良い。……それで最後に、私からもお願いがあるんだが」
「うん！何でも言ってパパ！」
「三日間の終わり。キミが消える直前で構わない。……私との思い出が詰まったその脳を、最後に啜らせてほしい」
うわー、レベル高い。それでも私はニッコリと笑うのだ。
「いいよぉ、パパ！それまで一杯愛してね！……それじゃあ、最初は私のおっぱい揉む？」
「……揉む」

◇ブレインイーター　タブラ・スマラグディナ
１０
愛娘と過ごす充実した三日間。
愛を注ぎ、彼女もまた、その愛に応えてくれた。
別れの三日目。
愛娘デミアはゆっくりと目を瞑る。
私はその彼女の耳元に、口をゆっくりと近づける。そして口元から伸ばした捕食器官でデミアの頭蓋に侵入して行く。
彼女の体が震えた。恐怖だろうか、痛みだろうか。その答えも直知れる。
捕食器官が、デミアの脳に達した。一際強く彼女の体が震える。
両手でデミアの体を押さえつけ、私は啜る。
私との思い出が詰まったその脳髄を、私は啜るのだ。
啜るたびに伝わってくる。デミアの記憶が、感情が、想いが、この三日間、どれだけ私を愛してくれていたのか、が。
愛娘が、デミアが、その命が、消えていく。
私はその喪失感に涙し、同時に満たされた種族的欲求に、歓喜するのだった。
あ、一応言っておくけど、普段はこんな事しないからね？そう言うロールだからね？

まあ、それは良いとして。私が一番素晴らしいと感じたのは、デコイのデミア氏の記憶は記録されているって所だね。凄い。何が凄いって、通いつめれば、私との記憶がぱんぱんに詰まったデミア氏の脳を啜れるって事だよ。

あ、もう一度言うけど。普段は本当にこんな事しないよ?

「きゃっ、あんっ♪せっかちですね♪」

宿の個室に入るなり、私は粘体の触手に絡み取られる。

「す、すみません。このお店に来ることを、ずっと楽しみにしてたので!」

興奮した様子の粘体が、足から這いずり私の体を取り込もうとしている。恐怖は勿論無い。ただ凄まじい快感が、彼の粘液からもたされる。その強烈な快感に、私は体を悶えさせる。悶えれば悶えるほど、彼は逃がさないとばかりに纏わりついてくる。

「……んもう、しょうがないにゃあ……あっ♪だいじょうぶですよぉー、私は逃げませんからぁ、ゆっくり楽しんでぇ♡」

「はっ、はい!そ、そうですよね。三日もあるんだから、ゆっくり楽しまないと……」

「んっ♪そ、そうですぅよぉ……あああっ!それ気持ちいいぃ♡……んっ、でもぉ、したいことがあったら、遠慮なく言って……んん……くださいねぇ」

「そ、それじゃあ、全身を取り込んで、溶かしても良いですか!?」

小さな赤ん坊の様な可愛い粘体なのに、怖いことを要求してくる。でもそれ自体は良くある事だ。酸性系粘体のお客様は、たいてい最後にそれを望む。

「いいですよぉ!……んッ……あはっ……お客さんは私を一気に溶かしたい方ですか?それともぉ、ゆっくり溶かしていきたいぃ?」

「そ、その。……ゆっくり時間をかけて溶かしたいですぅ。でも平気ですか?苦しくないですか?」

そんな事を望みながらもこちらを気遣う彼に笑う。
「大丈夫ですよぉ、私はデコイですから。……でも一度離してもらってもいいですか？んんん！……これだと、あ、すごい！……んッしゅうちゅう……できなぁいんっ♪」
「わ、分かりました！」
そう彼が言ってから、ようやく解放される。私は演技では無く本気で荒くなった息を整え、魔法を本体からローディングする。
「対酸性抵抗力向上魔法完了……肉体再生魔法完了……対魔防御膜魔法完了……うん♪これで幾らでも溶かしてくれて大丈夫ですよー♪」
幾重にも魔法を唱え、抵抗力を高める。
「で、では行きますね」
デコイの私が使える魔法では無く、本体の私が唱えた最高位の魔法による防御だ。
全身が漆黒の粘体に包まれる。
私が今まで相手をしてきた粘体では、突破できない防御魔法。まずダメージも受けない。過剰、やり過ぎともいえるほどだ。
それでも―
「あああ、デミアさん！大丈夫ですか!?デミアさ――――――――――――ん！」
デコイの私の意識は一瞬で消えて、漆黒の粘体に溶かし尽くされた。

◇古き漆黒の粘体　ヘロヘロ
１０
すっごいんです！このお店、すっごいです！
ＮＧ無しで、たったの５０００Ｇ！このコストパフォーマンスは凄いとしか言えません！
だって５０００Ｇで何でもやりたい放題なんですよ？
こ、この三日間で何と八回もデミアさんをおかわりしちゃいました！は、恥ずかしいぃ！
おかわりするたびに、デミアさんの記憶も受け継がれているので、

どんどんお互いの事がわかって行って、すごい充実感があります。
デミアさんもおっぱいがとても大きくて、綺麗な金髪で、その辺りもソリュシャンと同じ特徴で、本当に楽しかったです。あのデミアさんが溶けちゃう瞬間の目、ソリュシャンみたいなレイプ目で、ああ、本当に堪りませんでした。
これは病みつきになってしまいます。
ただ、このお店にハマって、いや、十分ハマってますけど、慣れ過ぎちゃうとかな？酸性の加減を間違えそうで、普通のサキュバス店に行けなくなっちゃいそうですね。
このお店で出来る事は、あくまでもこの店だけだと、しっかり意識しましょう！

◆

「先生ー、デミア先生ー。今年度の性転換薬原液の受け取り完了しました。証明書にサインをー……」
「ちょっとティエス」
「はい？」
「アナタの街に現れた神級の四人組、私のところにも来たわよー。それと性転換薬改良品が出来上がったから、試しておいてちょうだい」
魔道士デミアに呼ばれた性転換の宿屋店主ティエスは、頷きながら闇の眷属を召喚し、改良型の新薬を受け取り運ばせる。
「この新薬は今までの性転換薬とどう違うんですか？」
「そうね、性転換に加減が出来るって所かしら。女性から要望があった自分の身体のままアソコだけ男性のが生えてくるとか、男性の場合は性別はそのままで綺麗な女の子みたいになれるって感じね」
「……ようするに、フタナリと、男の娘になれる薬って事ですか？」
「そういう事。効果と安全性は確認できているから、アナタはこの改良型がどれだけ人気が出るか、リサーチしておいてちょうだい」
嬉しそうにデミアは新薬、改良型だろうか、それが詰まった試験管をひと舐めする。

「わかりました。それじゃあ証明書にサインを戴いたら私は戻りますね」
「ちょっと、本命の話が残っているでしょう？この薬だって、パパからアイディアを貰って改良出来たんだから」
「……私としては聞き流したかったんですけど。だってあの人達……人？人でいいのかな？……とにかく超級にヤバいですよ。絶対関わっちゃまずいです」
「そう？三日間付き合ってみると、意外と普通の人達よ。まあ、力は確かに超級、間違いなく神級ね。あはは、あのスケルトンのお兄さんが魔力を解放して歩くだけで、この街は確実に死の都になるでしょうね」
　面白そうに話すデミアに、ティエスは項垂れる。そこまで分かっていながら、なんで笑っていられるのだろうかと。
「それでティエス。あの人たちは、アナタの街でどんな風に過ごしてるの？」
「四人組の見慣れない異種族ですからね。目立ちはしてますけど、それ程話題にはなっていません。たぶんあの人たちの力に気付いてるのは、よっぽど高位の存在だけです。そういう存在は、あの人達にみだりに近づかないようにしてるみたいですよ」
「藪を突いたら蛇どころじゃ無いものね。……確認出来ているだけで、あの人たちは何人くらいいるの？」
「酒場の冒険者や利用したサキュバス店からの情報を統合すると、恐らく三十人以上。ですが同時に現れるのは決まって四人。三十人以上の中から、四人だけがどこからか現れるようです」
　ティエスの三十人以上という絶望的な数字に、デミアは盛大に笑い出す。
「あはははは！本当に凄い！一人だけでもヤバいのに、それが三十人以上!?本当何処から現れてるのかしら!?」
　本当に嬉しそうにデミアは笑う。ティエスは、そんな自らの師に呆れながらも問い掛ける。
「先生なら使い魔を使って、この都市から出たあの人達を追いかけた

りしなかったんですか？」
「勿論したわよー。様々な魔法を掛けて、絶対に知覚できない私自慢の目達を一杯ね。魔法都市内ではちゃんと監視出来てたんだけど」
「だけど？」
「魔法都市から出た途端ぜーんぶ倒されちゃった。忍者って本当すごいわ。魔法都市内では見逃されてたみたいね」
　何が面白いのか、デミアはお腹を抱えて笑っている。追跡をしていたのがデミアの使い魔だとバレたらどうするつもりだったんだろうと呆れながらも、自らの師が施した隠蔽魔法ですら容易く見破る彼らに恐れを覚える。
「まあ、しばらくは様子見をしましょう。きっと面白くなるわよー」
「どうしてですか？」
「うふふ、私のデコイ。あのスケルトンさんと、この魔法都市で一杯デートしたの。きっと今頃私を出し抜こうって考えてるこの都市の魔法使いたちが、こぞって策を練っている頃よ。どうにかしてあの人達から装備を奪えないかってね」
　そのデミアの言葉に、体が震える。彼らが身に着けているモノ、あれも彼らと同じく神級の装備だ。あれらは全て、神話の類に記される伝説の装備ではないのだろうか？
「あの人達に怒られたくないから、私たちは直接関与しないで、そういう野心をもった連中を痕跡を残さずに操って、うまーく情報を収集しましょう」
「あああ、私も巻き込まれるんですね……。だから無視してたのにー……。でも、先生。情報を収集するって言っても、それが出来るくらいの間あの人達と相対できる存在なんて、そうそう見つかりませんよ？私達に出来ないことが、この都市の魔法使いたちにできますか？」
　ティエスの質問に、デミアはうーんと考え込む。暫く考え込んでから、楽しそうにティエスに語り掛ける。
「そうだ。アナタの街を拠点にしている冒険者のチーム。あの天使くんのお仲間達に頼みましょうよ。勿論私達から直接依頼するんじゃなくて、この都市の魔法使いを使って」

「……天使の輪っか事件で痛い目にあったのに、懲りてないんですか？」
「そんな事もう忘れちゃった。……それとね、ティエス。アナタはあのスケルトンさんに抱かれた？」
「だ!?抱かれてませんよ！私はサキュ嬢じゃないんですから！」
「あら、勿体無い。あの人すごいわよー。勿論パパも凄いんだけど。フフフ、アナタも見えたでしょう？スケルトンさんのお腹の部分にある紅玉」
　そう、見える範囲で彼らが持つアイテムでは、アレが間違いなく抜群にヤバい。感じるエネルギーが桁違いだ。
「ふふふー、あれはもう世界ソノモノって言っても良いアイテムよねー？ああ、欲しいなー、アレ。どうにかして手に入らないかなー。私あれに、すっごい興味あるな～♪」

マイコニド専門店　男のキノコを天国へ…

「はぁ!?水晶レター失くした？何で!?」
　弐式炎雷の声が異世界の森に響く。ペロロンチーノからＮＴＲ専門店『扉のスキマ』でプレイ内容を録画して貰った水晶を失くしたと、そう告白されたからだ。
「ペロロンチーノ!?アレがＮＰＣ達に見られたら、俺が今まで築き上げた威厳も何も全部吹き飛ぶんだぞ!?」
　モモンガとシャルティア（のコスプレをしたサキュ嬢のピルティア）の絡みを収めたものであるために、モモンガもまた普段の口調を忘れ声を上げる。
「ううぅ……ごめんなさい……。どこを探しても見つからなくて」
　ペロロンチーノが肩を落として謝罪を口にするが、弐式炎雷とモモンガの追及は止まらない。何処で失くしたんだ。何処に保管していたんだ。何故失くしてすぐに報告しなかった。というかそもそもなんで異世界に来てるんだよと、口々にペロロンチーノを責め立てる。
　そのたびにペロロンチーノは泣きそうな声で謝罪するが、失くしたモノがモノだけにそれで済まされるわけがない。
「まあまあ、二人とも。ペロロンさんも反省してるし、それくらいにしておこうよ」
　低い声で二人を宥めたのは、シャベルをもった森司祭（ドルイド）のブルー・プラネットだ。
　今回の異世界訪問は彼の要望によるものだった。扉から少し離れた森を散策したかったらしい。異世界に繋がる扉を利用する理由は何もサキュ街巡りだけではない。こういった調査や研究、または観光目的で扉の利用を申請するものも多い。
「ペロロンさんが此処に来るまで言い出さなかったのも、言うと今回の異世界訪問が流れて、俺に迷惑掛かると思ったからだろう？それにあの水晶レターは確か個人機密だから、ちょっとしたパスの入力がいるらしいじゃん」
　この異世界は妙なところで、モモンガ達のリアル世界に近い文明レ

ベルを見せる事がある。今回の水晶レターもそうだった。だがその事を『扉のスキマ』に同行していないブルー・プラネットが知っている事が意外だった。
「詳しいね、プラネットさん」
「たっちさんから聞いた。というか聞かされた。まあ、だからさ。見つかってもすぐにどうこうは無いだろうし。戻ったら探そうよ。俺も手伝うからさ」
　そう言ってブルー・プラネットがポンポンと、シャベルを持っていない方の手でペロロンチーノの頭を優しく叩く。
「うううぅ……ありがとうございます」
　そんな姿を見せられては、モモンガと弐式炎雷もそれ以上の追及をする気も起きない。諦めて一度ため息をついて、気持ちを切り替える事にする。
「……まあ、ここで云々言ってもしょうがないか。戻ったら俺も探すの手伝うからさ」
「大事なものは、ちゃんとアイテムボックスに仕舞うんですよ、ペロロンさん」
「……うん。ありがとう」
　なんだかんだで、ごく一部の例外を除き、ギルドのメンバーはペロロンチーノに甘い。そのごく一部の例外が恐ろしく厳しいのだが、その分というか、どうしても全員が最後には不出来な弟を慈しむような感じで終わる。
「さあ、切り替えて行こう。まあ、今回は俺に付き合って貰った感じだけどね。本当こっちも面白い。見てよ、これとこれ」
　そう言ってブルー・プラネットが、森に群生するキノコを二種類シャベルと、握っていないもう片方の手で指し示す。一つは幾年にも亘って繰り返し生えてるキノコで、もう一つは大きなビニール傘の様なキノコだ。
「こっちは舞茸。リアルでは人工栽培しかされてないけど、みんなも聞いたことはあるだろう？」
　ブルー・プラネットの問いかけに頷く。

舞茸はモモンガも聞いた事が、食べた事も有る。リアルでは自然食品は高級品だし、モモンガが人間だった頃は食事にお金を掛ける事をしてこなかった。それでも数少ない付き合いの場などで、口にしたことはある筈だ。それくらいにはポピュラーなキノコだ。
「それでこっちなんだけど」
そう言ってもう一本のキノコを指さし、ブルー・プラネットが愉快そうに笑う。
「どうしたの？」
「いや、ゴメン。こっちのキノコはさ、俺も見たこと無いんだ。リアルの方はデータベースに無かっただけかも知れないけど、このキノコは俺達が転移した世界でも見たことがない」
ほぉーと、ブルー・プラネットを除く三人が謎のキノコを眺めながら声を上げた。
「俺達が転移した世界は、どちらかというとユグドラシルの生態系に近いんだけど、こっちはどうも俺達のリアル世界に近いっぽいんだ。こんなキノコが生えてるくせにさ。……もし世界という器に雛形があるなら、この世界はリアル世界に近いのかもしれない。この世界は俺達のリアル世界とは違う成長を遂げた、兄弟みたいな世界かもしれないね」
「やっぱプラネットさん、ロマンチストだね」
そう弐式炎雷が言うと、ブルー・プラネットは照れ笑いを浮かべる。モモンガはその異形の顔にブルー・プラネットのリアルで見た岩の様な顔を思い出し、微笑んだ。
「それで、プラネットさん。結構森の奥にまで来ましたけど、これからどうするんですか？地質調査でも？」
「ああ。もう着くころかな？初めてこっちに来た時俺も食酒亭に寄ってさ。フェアリーの子と仲良くなったんだよ。その彼に面白いお店を教えて貰ったんだ。みんなもレビューで知ってるんじゃないかな？」
「あ。もしかして、この森ってマイコニドの森ですか？どうりで異様に大きなキノコがあちこちに生えてると思いました」

モモンガ達はこの世界に訪れ、サキュバス街に出掛ける前によく食酒亭に足を運ぶ。そこで新たなレビューを購入しては、ナザリックの円卓で自分達が書いたレビューと合わせて読み合うのが最近の日課だ。

そのためサキュバス街以外殆ど探索をしていないのに、レビューされていたサキュバス店の場所や地名だけは妙に詳しくなっていた。

「ははは、なんだ。プラネットさんもこういうサキュバス店に興味あったんだ？」

「まあね、俺も今はこの身体だけど男だし。ああ、見えてきた。あれだよ」

そういってブルー・プラネットがシャベルで遠くに見える看板を指し示す。

その看板には、アイテムを使わなければモモンガ達が読めない字でこう書いてある。

『男のキノコを天国へ…』

と。

◆

「ヒヒヒヒ……股ぐらの森の粘菌に男キノコをご案内。エッチな菌でアソコボッキンキン。ようこそマイコニドのスケベ店に、四本のタケリタ……」

そこで言葉が止まる。何百年もスケベババアをやってるけど、これだけ妙な四人組は初めてだ。

「……初めに聞いときたいんだけど、アンタたちは股間のキノコは生えてるのかい？」

私の質問に、四人組は顔を見合わせる。

「生えてません」

「生えてないよ」

「生えてます」

「それっぽいのはあるよ」

……四人中しっかり生えてるのは一人だけかい。そもそもシャベルを持った兄ちゃん。それっぽいのってのは、一体何なんだい？

「……股間のキノコの胞子はピュッピュ出来る？」

更なる質問に、再び顔を四人組は顔を見合わせる。

「出来ません」

「出来ないよ」

「出来ます」

「それっぽい事は出来るよ」

「だからそれっぽいって何なのサ!?……コホン。ま、まあ、キノコっ娘は何百種類もいるから、おばちゃんが見繕ってあげるよ」

私がそう言うと、四人組は素直に頷く。私も頷き返し、改めて妙な四人組を観察する。

まずは、スケルトンの兄ちゃんだね。……うまく隠してるけど、とんでもない魔力を秘めてるねぇ。神聖属性や炎には多少弱そうだけど、他の耐性は高そうだ。

いや、でも……んん？なんだい、これ？この兄ちゃん、魔力が随分若くないかい？目も無いのに随分期待した目でこっちを見てる……。性に興味津々な少年みたいだね。こんな数千年前から死の魔王やってますー、みたいな見た目をしてるくせに。

「ちょっとお兄ちゃん。ただのアンデッドじゃないね？なんて種類のスケルトンなんだい？」

「あ、死の支配者（オーバーロード）です」

そんなスケルトン聞いたことも無いよ！

やばい…全然わからん……。

ううーん、私と同じ霊芝系の娘がいいかねぇ？いや、それとも冬虫夏草の娘？股間のキノコが無いなら、魔力で気持ちよくなるタイプだろうし、チチタケかねぇ？でもこのお兄ちゃんじゃ乳液を味わえないか……。腐生菌系の娘なら確実だろうけど、そもそも腐りきって骨になった人の相手はどうなんだろう？

ああ、もう！全然わからん！

「あの……どうかしました？」

「えっ!?いや、別にっ!?……一口にキノコ娘といっても、数百種類いるからね。お兄ちゃんに合う子も一杯いるから、これがピッタシって娘を絞り込むのは少し時間が掛かるのさ」
「ああ、なるほど。それもそうですね」
うんうんと頷くスケルトンのお兄ちゃんに安堵する。こう言っておけば少し時間が稼げそうだ。その間に他のお兄ちゃんの相手を決めておくかねぇ。さてお次は――
「んじゃ次は俺?」
全身黒衣の頭巾をかぶった正体不明の男。男でいいんだよねぇ?体格は間違いなく男だし、声も男なんだけど、このお兄ちゃん?も股間のキノコが無いって言ってたねぇ……。
「……ちなみにお兄ちゃんは何て種族なんだい?人間じゃ無いんだろう?」
「ああ、ハーフゴーレムだよ」
だから聞いたこと無いって!ゴーレムなのにハーフって、一体どういう種族なんだいぃ!
……いや、落ち着きな、私。伊達に何百年もスケベババアをしてないよ。ほら、どんな相手だって目を見ればだんだんとそいつの性癖がわかって――
「なんで人が見定めしてるのに、頭巾をしてるのサ!?」
「フッ、忍者は素顔を晒さぬのだ」
なんなんだい、今日のお客は……。ゴーレムって事は頭巾の下は岩っぽいのかね?それなら地衣類の娘を、今日は岩茸の娘が生えてたかねぇ?
「ちなみにお兄ちゃんは頭巾の下はごつごつしてるのかい?」
「いや、ツルツルしてるよ。のっぺりしてるとかよく言われる」
「……ゴーレムなのに?」
「俺ハーフだし。いやー、キャラメイクをもっとしっかりやっとけば良かったんだけどねー」
だからキャラメイクってなんだいぃ!!
訳が分からないよぉ!……駄目だ。このお兄ちゃんも保留にしと

こう。情報が少なすぎるね。
「あ、アンタも絞り込むのはもうちょっと待っててくれるかい？今日は妙に森の状態が良くてね。生えてる子も多いんだ」
「プラネットさん、何かした？」
「ああ、森に入った時、大地の実りを豊かにする魔法を使っておいた。その方が楽しめるかなって」
「さすがドルイド。森とマイコニドを愛する司祭」
「ははは、個人的には海の方が好きだけどね。ほら俺、ブルー・プラネットだし」
「んじゃ今度は海底神殿って所まで足を延ばしてみようか？確かゼルさんのレビューにもあったろ？」
　四人組がわいわいと騒いでる。当然私はこの正体不明の連中の情報を集めようと必死だ。どんな話題でも良いから手がかりを零して欲しかった。
「ちょっとみんな。お店の人を前に失礼ですよ」
　だが、それを一人の有翼人の男が遮る。
　金色の、一目でヤバいとわかる鎧に、こいつも仮面を着けているために、表情はよく分からない。
　私は情報収集を諦めて、三人目の男に向き直る。どうせこいつもただの有翼人じゃないんだろう？そんな諦めを持って男を観察する。
　……おや？こいつは、わかりやすい。
「アンタはロリコンだね？」
「なんでそれをっ!?」
　一目で見破られた三人目の有翼人が驚いた顔で私を見る。そう、普通はみんなそんな反応をするのサ。
「……一目でロリコンと見破られる元社会人って、どうなの？」
「……まあ、ペロロンさんですし」
「ペロロンさんだしねー……」
　残りの三人が呆れてるって事は、周知なのかね？まあ、私としてはそんな事は関係ない。性癖さえわかっちまえばこっちのもんだよぉ。おまけにコイツは股間のキノコもしっかり生えてるみたいだし、余裕

だね。
「ふふふ……。長年男を見定めてるとなんとなくわかるのサ……。今日は生えたての娘も多いし、アンタは選び放題だよ。勿論私がアンタにピッタシのキノコっ娘を見繕ってあげ――」
「あ、俺あの子が良いです」
私の言葉を遮って、有翼人の男が迷いも無く一直線に歩き出す。ああ、不味い。そっちにはあの娘が生えてるんだよ。
「一目見てビビッと来ました。俺はキノコお姉さんの見定めより、俺の直感を信じてみます」
「おや、お姉さんだなんて、嬉しいことを言ってくれるじゃないかぁ。アンタがロリコンじゃなけりゃ、私が相手をしてあげるんだけど――って、そうじゃない！アンタが選ぼうとしてるのは、カエンタケのマイコニドだよ！」
「真っ赤でいいじゃないですか。シャルティアの伝説級（レジェンド）装備みたいで。うん、俺はあの子にします」
「あの娘の毒は有翼人のアンタじゃ触っただけで皮膚が爛れて、すぐに死んじまうよ!?」
「俺は有翼人じゃないですよ。俺はバードマンです」
バードマン？なんだい、それは？
そんな事はどうでもいいんだよ。そりゃ私だってある程度の毒キノコ娘なら笑って「アンタじゃ一週間で死ねる毒持ってるけどいいかい？」なんて軽口叩くけど、あの娘は本気でヤバいんだ。触っただけでも症状が出ちまう。
「プラネットさん、カエンタケって？」
「うん、毒キノコ。毒性が凄い強くてね、触っただけで皮膚が爛れるくらい。カエンタケのマイコニドなら、もっとヤバいだろうね」
「へー。でもあの子、確かにちょっとシャルティアの伝説級（レジェンド）の鎧着てるみたいだけどさ、体型とか全然ロリじゃないよな？出る所はしっかり出てるし、スレンダー系の美人な子だよなー。なんでペロロンさん、あの子にするって言いだしたんだろう？」
「なんでだろうね？そもそもシャルティアの鎧だって、別にあの姿が

ペロロンさんの趣味ってわけじゃ無いだろう？普段のシャルティアはそりゃ趣味全開だろうけど、戦闘形態はガチビルド派のペロロンさんが見た目で妥協する訳ないだろうし」
「ですね……。ペロロンさん、どうしたんだろう？」
「アンタたちも暢気に話してないで、止めておくれよぉ！こっちは足が埋まっててすぐには、ああもう！」
　埋まった足を私が抜き出す前に、バードマン？の男はカエンタケの娘の元に辿り着いちまう。
「――ダメ、近づかないで。私の肌は、貴方には毒なの。だから私は、こんな真っ赤な姿をしている……。誰も近づかないようにって。そう誰も、私には触れられないの……」
「そんな悲しいことを言わないでください、美しいお嬢さん。さあ、俺の手を取って、一緒に踊りましょう」
「……良いの？私を抱いたら、貴方はきっと死んじゃうわ。ううん、ダメ。貴方はいい人そうだから、死んで欲しく無いもの……。ありがとう、こんな私に話しかけてくれて。だから貴方は、私以外のマイコニドの娘を選んであげて？」
「俺は、キミに触れたいんです。そんな悲しそうな目をしている子を放っておけません。だから、どうか、この手を取って下さい。いえ、キミが望まないなら、ボクが貴方を無理やりにでも攫います」
「キャッ」
　そこまで言って、金色の鎧のバードマンがカエンタケを抱き抱える。真っ赤なお姫様を抱き抱える金色の騎士のようだ。仮面でよく分からないが、笑みすら浮かべて、平気そうな顔で。
　……ええ？……その娘に触れて、なんとも無いのかいい？
「ペロロンさんの奴、一人称がボクになったぞ。なんで急に騎士っぽく口説き始めたんだ？」
「……ああ、そういう事か」
　四人目のシャベルを持った男が何かを理解したように頷く。
「たぶんあの子は毒キノコという理由で、あまり指名が取れないんだと思う。その彼女にペロロンさんが気づいたんだよ。女の子が寂し

そうにしてるって」
「……なるほど。ふふ、そう言う所は、本当にペロロンさんですね」
「うちの稼ぎは殆ど森の管理に使う共有財産だよ？指名争いだって、それ程ないんだ」
「それでもサキュバス嬢として、毒の無い子ばかり選ばれているのが、悲しかったのかもしれない。そういう事ですよね」
「……はー、納得。ホント、ペロロンさんらしいや。あの人そういう機微には聡いよなー。問題児の癖に」
「ふふふ、そうですね。ええーと、受付のお姉さん。私も毒キノコの子でお願いします。普段指名が取れないような、毒性の強い子で」
「ほへぇ!?」
「あ、俺も。一杯群生するタイプの毒キノコの子が良いな。毒性はどれだけ強くてもいいから、そんな子をお願いするよ。ここはペロロンさんに乗るしかない」
「ユグドラシルプレイヤーの俺達は、毒だからって敬遠する必要ないしね。良いね、これは俺達しかできない楽しみ方だ。おねえさん、俺も毒キノコの子を紹介して下さい」
「ああ、もう！わかったよ！毒性たっぷりでいくから、覚悟しておくれ！」

『毒キノ娘は旨みたっぷり！マイコニド専門店　男のキノコを天国へ……』

◇オーバーロード　モモンガ

9

今回はマイコニドのお店です。色々ありまして、今回は毒キノ娘縛りでお願いすることに。
お相手をしてくれたのはドクツルタケのマイコニドさん。真っ白で、とても可愛らしい子ですね。ブルー・プラネットさんに聞くと、猛毒キノコ御三家に数えられる程の毒性があるそうですが、そもそも私はワールドエネミーの毒でもない限り、種族耐性で無効ですからね。

問題ありません。
今回は私としては珍しく責めに回りました。毒キノ娘の子はやはり指名が取れないらしく、あまり経験は無いそうです。私が触れるたびにビクッと体を震わせて、とても可愛らしかったです。
いつも受け身でしたので、こういうのもアリだなと。
最後にですが、私達ユグドラシルプレイヤーならではのサキュバス店の楽しみ方を教えてくれたペロロンさんに、ありがとうと伝えておきます。

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷
９
色々言いたいことはあるけど、やっぱペロロンさんだよな。あの人問題も良く起こすけど、挽回の仕方というか、リカバリーが上手いんだよ。流石ギルドの末っ子。茶釜さんの影響かな？まあ、お店のレビューとは関係ないし、今はいいか。
俺は今回ドクササコのマイコニドをチョイス。この子も食べるとヤバいらしいんだけど、そもそも俺は飲食不可だし、毒も無効だから、ぶっちゃけ関係ない。
お店的には、やっぱ複数人プレイがタダの子が多いのが、個人的におススメかな。根っこのところで繋がってるから、結局は同一個体なんだろうけど、それは俺の分身も同じだしね。ドクササコちゃんの反応がイイのも俺の好み。これはたぶん普段あんまり触られる機会がないからかな？
とにかく、俺達が百レベルのユグドラシルプレイヤーだって事を意識した楽しみ方ってのは、確かにあると思うよ。

◇バードマン　ペロロンチーノ
１０
カエンタケの女の子を選びました！すらっとしたスタイルの良い、美人さんですよ！真っ赤な、シャルティアの伝説級鎧を身に着けた女の子って感じですね。

いっぱい触って、いっぱい抱きしめてあげました！
うん、女の子を癒すのはそれで充分です。俺の羽毛は、泣いている女の子を包み込んであげる為にあるんですね。きっとそうですよ！

◇森司祭　ブルー・プラネット
9
自然を愛するモノとして。少しペロロンさんに教わった気がする。
お相手は猛毒キノコ御三家のタマゴテングタケのマイコニドさん。オリーブ色の、傘が大きい子。傘を優しく触ってあげると、プルプルと震えて、可愛かった。
イボテン酸は俺達でもしっかり旨味として感じられるし、リアルでは昔毒キノコだって分かってるのに食べちゃう人がいたというのも納得。
たぶんペロロンさんがカエンタケの子を選ばなかったら、俺は受付の霊芝のお姉さんのおススメに従うか、人間だった頃好きだった食用キノコを選ぶか、無難な選択をしてたと思う。それが間違えてるとは思わないけど、折角の異形の身体を生かすのもアリだと思う。というか、それに最初に気付けなかったのは悔しいな。
まあ、ペロロンさんはそんな気は無くて、可哀想な女の子がいるってだけの理由だろうけどね。俺はそういうペロロンさんのシンプルなところが好きだね。
マイコニドの森自体もしっかり手入れされてて、見どころが多い。フィールドワークだけでも、また来ようと思う。とても楽しかったよ。

◆

「……よし、書けた。みんなどう？」
「俺も書けました」
「私もです」
「俺もだよ」

全員がレビューを書き終えた事を口々に伝え、レビュー発行責任者の弐式炎雷に手渡していく。モモンガ達のレビューを集めた弐式炎雷は大事そうにそれをアイテムボックスに収めている。
モモンガ達は未だにマイコニドの森から出ていない。ここは森の外れで、この森の中では開けた場所だ。
『男のキノコを天国へ……』を出た時に、多少暴れても問題無い場所をモモンガ達は受付の霊芝のマイコニドに尋ねていた。霊芝のマイコニドは流石に嫌な顔をしていたが、後始末用にブルー・プラネットが自身の魔法を籠めた魔法封じの水晶を渡すとしぶしぶ了承してくれた。事前に唱えてみせたブルー・プラネットの土壌を豊かにする位階魔法を目にしたからだろう。
「さて、悪いけど、ペロロンさんとプラネットさんは先に戻っててくれる？俺達が四人だから警戒してるのかもしれないし」
「了解。結局レビューを書いてる間に襲ってこなかったしね」
「ええー、俺も暴れたいです」
「暴れるなって。それにペロロンさんは先にナザリックに戻って水晶レターを探せよ。ぬーぼーさんに事情を話して、見つけて貰えって」
弐式炎雷の言葉にモモンガも頷く。アレが見つからないと、モモンガも安心できない。ペロロンチーノには早急に水晶を見つけ出してもらいたかった。
「それじゃあ、俺達は先にナザリックに戻っておくよ。あの扉、帰りは一緒じゃなくても平気なんだよね？」
「大丈夫。行きは一緒じゃないとダメだけどね。んじゃプラネットさんも水晶探しよろしく」
「うん、わかった。ほら。ペロロンさん、行くよ？」
「ううう、分かりました」
そう言ってペロロンチーノとブルー・プラネットがギルドの指輪を使って、こちらの世界とナザリックを繋ぐ扉にまで転移していった。
二人きりになったモモンガと、弐式炎雷は襲撃を待つように、相手が襲いやすいように油断しているかのように他愛の無いお喋りを始める。

「襲ってきそうですか？」
「だね。人数が減ったからチャンスと思ったみたいよ。そろそろ来そう」
「だけど、弐式さん。いつから私達尾行されてたんですか？」
「この森に入る前からだね。お店の近くで襲いそうな雰囲気になったら、速攻で分身に取り押さえさせるつもりだったけど」
「私たちモンスターならともかく、こっちの人間種に襲われる覚えは無いんですけどねー」
「だよなー、お店でも紳士的に過ごしてるし、お金関係もトラブルは無いはずだし。なんでだろう？まあ、捕まえて聞けばいいよ」
「ちなみに相手はどれくらいの強さですか？」
「うーん？たぶん２０～３０レベル位。……こっちの世界の相手は力量がちょっとわかりづらいんだよね。……ああ、一応言っておくけど、殺さないでよ？」
「殺しませんよ。この世界は警察機関もありますからね。指名手配なんてされたくありません」
「サキュバス街に遊びに行けなくなるから？」
「です」
　そこまで言って二人で笑いあった。本当に、ここまでハマるとは自分でも思っていなかった。いや、少し違うか。モモンガは楽しいのだ。仲間達と何も考えずに、愉快にこの世界に遊びに来ることが。非常に、楽しいのだ。
　そうモモンガが自覚した瞬間、森の木々の一部が揺れた。勢いよく長大な蛇の様な何かが飛び出してくる。ナーガの男、いや、こちらの世界ではラミアか。それがかなりのスピードで迫り、モモンガの身体に巻き付く。
「捕まえたぞ！」
「残念だが、捕まってなどいないぞ」
　ラミアの男がその尾でモモンガの身体を締め付けた瞬間、拘束がほどける。上位拘束無効。ただの締め付けでモモンガを拘束することは出来ない。

「さて、死んでくれるなよ？」
モモンガは杖を空間から取り出して、ラミアに振るう。特別な魔法の力は無いが、殴打ダメージを与える事にそれなりに特化した杖だ。モモンガの一撃を受けて、ラミアが容易く弾き飛ばされた。
「いってぇえ!!なんて力だ、アイツ！」
弾き飛ばされラミアが殴られた頭を押さえながら、よろよろと立ち上がってくる。
「ほお？」
モモンガとしては殺さないように手加減はしたが、それなりに力を籠めていた。よろよろとした動きではあっても、立ち上がってくるとは予想外だった。
「ふむ、ならばこの程度ならば平気かな？……＜龍雷（ドラゴン・ライトニング）＞」
モモンガの肩口から発生した白い電撃が、骨の指の延長にいるラミア目掛けのたうつ白い龍の様に中空を駆けていく。
白い電撃がラミアに触れる前に、その進路上にエルフと青肌の男が割り込むのをモモンガの目は捉えていた。
二人の男が電撃に向け手を伸ばし、そして障壁の様なもの生み出す。白い電撃が障壁に弾かれ、天に昇っていく。
「それがこの世界の魔法か？第五位階とはいえ私の魔法を弾くとはな。……面白い。もっと見せてくれないか？」
モモンガが笑いながら、一歩を踏み出す。エルフと青肌の男は後ずさりながらも、ラミアの男を庇う様に立ちふさがる。
「こいつ、相当ヤバいのである！」
「冗談じゃねえ！こっちは今の魔法を防ぐのでも必死だったんだぞ！それなのにアイツ全然本気じゃないだろう!?」
「先に手を出してきたのはそちらだ。悪いが、無理矢理にでも付き合ってもらうぞ？」
さて、次は何位階の魔法を試すか。それともスキルを使って強化した魔法を試してみるか。久しく感じていなかった戦闘の興奮に、モモンガがその身を委ねつつある。そしてそれを止めたのは――
「おーい、モモンガさーん！やり過ぎるなよー！」

少し離れた所から聞こえる仲間の声。視線を向ければ、弐式炎雷が犬系獣人の大男と、咥え煙草の人間の男相手に立ち回っていた。
犬系獣人の振るったバトルアクスが大地に叩きつけられ、その隙を狙わせないように人間の男が最小の動きで弐式炎雷を斬り付ける。
かなりの力量だ。
戦士の訓練を積んだモモンガだからこそわかる。戦士化の魔法を使わずに、素の状態で魔法職のモモンガが二人同時に相手をすれば苦戦を免れないだろう。それほどの腕だ。
勿論モモンガが時間停止などの魔法を使えば話は別だし、前衛職としても十分戦える弐式炎雷ならなおさらだ。すぐに彼も本気を出すだろう。
弐式炎雷が犬系獣人が振るうバトルアクスの柄を蹴り上げる。それだけで犬系獣人は武器を弾かれた。追撃をしようと弐式炎雷が踏み出すが、牽制するように咥え煙草の男が剣を振るいながら間に入る。
「早く武器を拾え！」
「ああ！」
斬撃を避けるために僅かに弐式炎雷が退いた隙に、犬系獣人の男がバトルアクスを拾い上げる。良いチームだ。お互いがお互いをフォローし合う事でその力を最大限に引き出し、決して勝てない相手ともこうして渡り合えている。
まるでかつての自分達を見ているようで、モモンガが笑う。
「どうですか、弐式さん？」
「驚いた。俺の予想よりもずっと強い。傷つけずに無力化するのは結構骨が折れそう」
「ふふ、弐式さん、骨ありましたっけ？」
「……無い。ちょっと本気出していくか」
そう言って、無手だった弐式炎雷が空間から二本の小太刀を取り出す。天照と月読。彼の神話級（ゴッズ）装備だ。それを彼が手にした瞬間、場の空気が変わったのだろう。咥え煙草の男が、口元から火のついた煙草を落とす。

「……なんだ、ありゃ？おいッ、ゼルッ！何が簡単な密猟者の捕縛だ！滅茶苦茶ヤバいじゃねぇか！俺の人生最大のピンチだぞ、これ！」
「うるせぇ！俺だって３００年生きてて最大のピンチだよ！お前だって報酬に釣られたんだから、文句言うな！それにヤバそうだから、二人になるまで待ったんだろう！死にたくなかったら、必死で戦えスタンク！」
　人間の男と、エルフの男が武器を構えたまま、そう言い争っている。
　だが今の会話で二人が口にしていた名前に、モモンガと弐式炎雷は衝撃を受け、その身を震わせて居た。モモンガに至っては、握っていた杖を落としたほどだ。
　今この二人は、何と言って呼び合っていた？
「生きて帰れたら、奢れよ、ゼル！」
「ああ、何だって奢ってやる、スタンク！」
　間違いない。風貌だって、あのレビューに書かれたイラストと一緒だ。
　決死の覚悟を決めた男たちが、今にも襲い掛かってきそうだ。その気配に、弐式炎雷は小太刀を収め、慌てて手を上げる。抵抗するつもりは無いと示す為に。
「待て待て待て待て！待ってくれ！アンタたち、もしかしてゼルさんとスタンクさんか!?じゃあ、そっちの獣人さんはブルーズさんで、青肌の悪魔はサムターンさんなの!?」
　急に名前を呼ばれた事に驚いたのだろう。男たちの瞳に疑問の光が宿る。それでも油断なく構えた武器を収めないのは、熟練の冒険者ゆえだろう。だからこそ、モモンガ達は先にこちらの武装を解除して争う気はないとアピールする。
「少し離れた所で様子を窺ってるハーフリングが、カンチャルさん！モモンガさんに殴られたのがナルガミさん！どうだ！合ってるか!?」
　弐式炎雷の言葉に、今度こそ彼らは顔を見合わせ、武器を降ろす。
「……俺達を知ってるのか？何者だ、オマエら？」
　今は無いが咥え煙草の男、いや、スタンクの質問にモモンガと弐式炎雷は顔を見合わせる。そして頷きあってから声を合わせて言う。

そう自分達は彼らの――
『ファンです。いつもレビュー、読んでます』
そう、自分達は。
彼らを真似てサキュバス店のレビューを始めたのだから。

幕間――1

アルベドは執務中の自分の部屋に誰かが近づいてくる気配を感じ、顔を上げる。自分の部屋と言っても、ナザリックではない。アインズ・ウール・ゴウン魔導国の首都となったエ・ランテル。その中心部に築かれた巨城。その一室だ。

気配の主がノックをする。ノックにアルベドはどうぞとだけ答えた。ノックの仕方から相手が誰なのか、既にアルベドに伝わっていたからだ。探知系スキルを持たないアルベドがノックの前に気付けたのも、相手があえてこちらに自身の気配を伝えていたからであろう。

「精が出るね、アルベド」

アルベドは机の書類に落としていた視線をあげて、来訪者に微笑む。

「ええ、いくつか今日中に処理しておきたい案件があったの。でも、もう終わるわ、デミウルゴス」

既に夕刻だ。そろそろ至高の御方が定めた労働時間の定刻になる。この部屋にアルベド以外いなかったのも、定刻が近いからと全員退室させていたからだ。

アルベドの言葉にデミウルゴスが懐から懐中時計を取り出し、時刻を確認していた。そのデミウルゴスに、アルベドが微笑む。

デミウルゴスが、今の時間を把握していない筈がない。それなのにわざわざ懐から時計を取り出し、時刻を確認したのは単純にそれそのものに触れたかったからに違いない。よく見れば随分と悪魔的なデザインの時計だ。

「ウルベルト・アレイン・オードル様から戴いた時計？」

アルベドが少しだけ揶揄いの感情を籠めて尋ねると、それに気付いているであろうデミウルゴスは満面の笑みで微笑む。

「ええ、先日ご下賜していただきました」

嬉しさを隠そうともしないデミウルゴスに、アルベドも微笑む。その気持ちは至高の御方々に創造された者であれば誰でも理解できる。アルベドも、今は再び理解出来るようになっていた。

自分達は、自分は、愛されていたし、愛されている。捨てられてはいなかった。それが理解できたのだから。
「ふふ、デミウルゴス？今日はわざわざ自慢に来たの？」
「はい。と言いたいのですが、用があった訳ではありません。敢えて理由を付けるならば、なんとなくでしょうか？」
「なんとなくね。あなたの口から、そんな言葉が出てくるとは思わなかったわ」
アルベドが小さく笑う。デミウルゴスも笑ったようだった。理由が無いという事が、とても可笑しかった。
ならばと、アルベドもここ最近ずっと気になっている質問をデミウルゴスにすることにする。同性では無く、異性に尋ねたいと思っていたので、この意味の無い来訪は丁度いい。
「そうね、なら私もなんとなくデミウルゴスに質問してもいいかしら？これはナザリック第七階層守護者としてではなく、そう一人の男として答えて欲しいのだけど……」
「アルベドの口からなんとなくという言葉が出てくるとは、私も思いませんでした。それで、アルベド？質問というのは？」
デミウルゴスの口調が、僅かに変化する。守護者統括に対する第七階層守護者のものから、至高の御方に創造された同胞に対するものに変化したのだろう。
「……殿方の寝室から、女の匂いがする原因に何か思い当たる事はあるかしら？」
「女性を連れ込む以外にあるのかね？」
バキッ、という音と共にアルベドが握っていた羽ペンが折れた。アルベドはその折れた羽ペンを不思議そうに眺める。
「あら？不良品かしら？」
「……アルベド、この場にある物は全て魔導国所有の物。言い換えれば至高の御方々の物だ。備品とはいえ、大事に扱うべきだよ」
「そうね、その通りだわ。それで、デミウルゴス？どうしてそういう理由になるのかしら？」
「殿方の寝室から。女の匂い。答えは既に出ているように思えます

が。……やれやれ、アルベド。構わないから、はっきり言いたまえ」
困ったようなデミウルゴスに、アルベドは少しだけ不貞腐れた様な顔をしてから、渋々口を開く。
「……アインズ様のご寝室から、私が付けた事の無い香水の匂いがしたの」
アルベドがそう言うと、デミウルゴスは呆れを隠さずに言う。
「……アルベド、まだそんな事をしていたのかね？」
呆れるデミウルゴスに、アルベドはそっぽを向くことで答えた。
「……まあ、それは今はいいだろう。しかし、アインズ様のご寝室から別の香水の匂い……。私に相談するくらいだから、ナザリックのメイド達ではないと、もう調べているのだろう？シャルティアの移り香では？」
アルベドは首を振る。それはアルベドが最初に考え、そして確認した事だ。シャルティアはアルベドが感じ取った香水を持っていなかった。
そう伝えると、ふむと一言いいデミウルゴスが思考し始める。アルベドが唯一、至高の御方々を除いてだが、自分を上回る頭脳を持つと認める相手だ。自分とは違う答えを導き出すかもしれない。
「……情報が足らないね」
だが直ぐに、デミウルゴスが肩を竦める。いくら彼でもこれだけの情報で、答えを導き出せるはずが無い。だが一つだけと前置きをし、デミウルゴスが口を開いた。
「至高の御方々には女性もおられる。もしそうであるならば、それはこれ以上私たちが、あれこれと詮索するべきではないはずだよ」
「……匂いがしたのは、至高の御方々がお出かけになられた後の事よ」
至高の御方々が頻繁にナザリックから出掛けられているのは、周知の事実だ。だがその中に女性の御三方は含まれていない。
「やはり供回りは必要だと思わない？デミウルゴス」
帰ってくる答えを理解しつつもアルベドはそう問いかけてしまう。
「必要ないと思うがね。私たちは本来至高の御方々の留守の間、ナザリックを守るために創造されたのだから」

だからこその守護者。それは守護者統括であるアルベドも理解している。
「……至高の御方々はお戻りになられた。その一点だけを信じたまえ、アルベド」
少しだけ強い口調で言うデミウルゴスに、アルベドは頷く。
「まあ、アルベドが何を心配しているのかは理解したがね。その心配は必要ないと思うよ。……こういう言い方は不敬かもしれないが、私たちは至高の御方に愛されている」
「ええ、そうね。それは疑い無いわ。私たちは愛されている」
「そうだとも。さあ、もう刻限は過ぎている。今私たちが為すべきことはナザリックに戻る事だ、アルベド」
そう言って背を向けるデミウルゴスに頷く。
そう、アルベド達は愛されている。疑いようがない。間違いなく。確実にだ。
だからこそ、だからこそ理解出来無い事もある。愛されていることが分かるから――
「ペロロンチーノ様すら、シャルティアをお連れにならない事が理解出来無いのよ……」

異世界レビュアーズ

「だははははっ！じゃあ何か、お前ら!?サキュバス街巡りの資金を得るために、密猟なんてしてたのか!?」
「……はい、すみません」
俯いて頷くモモンガと弐式炎雷の答えに、食酒亭に集ったスタンクとゼルの笑い声が響く。特に盛大に笑っているのはスタンクだ。
「ふひっ！お前らみたいな化け物が!?俺らのレビューを見て、サキュバス街に通い詰めてた？だははは！いかん！苦しい!!」
仰け反り過ぎて、座っている椅子がひっくり返りそうだ。レビューで読んだイメージ通りの人間だが、ここまで笑われると椅子をひっくり返してやろうかという気持ちがモモンガに沸いてくる。
「あのー、それで……、密猟ってどれくらいの罪の重さになるんでしょうか？」
揉み手をして問いかける弐式炎雷の今の姿は、ナーベラルには決して見せられないなとモモンガは思う。だがその弐式炎雷の質問の答えはモモンガも知りたかった。この世界にはしっかりとした警察機関がある。それのお世話にはなりたくない。
「実際どうなんだ、ゼル？」
スタンクがゼルに問いかける。ゼルは広げた羊皮紙を眺めながら、筆で自分のこめかみを数度叩く。羊皮紙には先ほどまで聞かれていた内容が、モモンガ達のこの世界の主な資金源だ、書かれていた。調書の様なものだろう。
「お前たちの話を聞いた限り、ぶっちゃけ問題無いな。換金してた素材だって見境なく襲い掛かってくる怪物の奴だし、採取してた素材も量からして十分許容範囲だ。森にダメージを与えるものじゃない」
「だそうだ」
二人の言葉に、モモンガと弐式炎雷はほっと胸を撫でおろす。お咎めなしになりそうな雰囲気に安堵しつつも、一体誰がスタンク達に密猟者の捕縛、すなわち自分達だ、の依頼をだしたのだろうか。
「あれー？あんたたちいつの間に仲良くなったの？」

木のジョッキと料理を両手に持ってやってきた給仕係が、スタンク達とモモンガ達を見比べて問いかけてくる。
「こんにちは、メイドリーさん」
「こんにちは、メイドリーさん。ごめん、俺とモモンガさんの注文がまだだったね。適当にお願いします」
「はい、こんにちは、モモンガさんに弐式さん。ふふ、二人は食べたり飲んだり出来ないんでしょ？おかみさんも気にしないって言ってるから、無理に注文しないで大丈夫ですよ」
何度か通っているうちに顔見知りになった給仕係のメイドリーにモモンガと弐式炎雷は挨拶をする。二人が飲食出来ない事は彼女も承知のため、マナーとして注文をしようとした弐式炎雷の言葉に笑って首を振る。テーブル料代わりに毎回注文をし、飲食可能な仲間達に食べて貰っていたのだが、今回は必要なさそうだ。
「メイドリーはモモンガ達を知ってるのか？」
スタンクの質問に、テーブルに料理と木のジョッキを並べ終えたメイドリーが頷く。
「あたりまえでしょう、常連のお客さんだもん。……そういえばモモンガさん達が来てくれてる時に、あんたたちはいつも居なかったかな？でも、よくあんた達のレビューは買ってくれてるわよ？代金はクリム君から貰ってるでしょう？」
「……あれモモンガ達だったのか……。おーい、クリムー！お前も交ざれよ！」
スタンクが大声でクリムを呼ぶ。
「ちょっと、クリムくんも仕事中なんだから……」
メイドリーが小さく不満を漏らすが、慣れているのだろう。諦めのため息をついて、給仕の仕事に戻って行く。入れ替わる様に、ふわふわと光を帯びた奇妙な翼で浮くクリムが、空のトレイを手にもってこちらにやってくる。
「どうしたんですか、スタンクさん。ボク仕事中なんですけど――――お、おちちぃ」
忙しさで距離をはかりかねたのだろう。闇属性に弱い天使のクリ

ムが、死の支配者オーバーロードであるモモンガからダメージを受け空のトレイを落とす。
「――ほい、クリム君」
だがそのトレイは床に落ちる前に、離れた所に座っていた弐式炎雷に拾われて、クリムに返された。弐式炎雷はスキルの＜縮地＞を使ったはずだ。その事に気付いたのはモモンガだけだろう。
「ありがとうございます、弐式さん。……それといつもすみません、モモンガさん」
モモンガに対しまともに接客出来無い事を詫びているのだろう、クリムがぺこりと頭を下げる。
「構わないよ、クリム君。こちらこそ、すまないな」
「なんかモモンガさん、クリム君にはアインズっぽい話し方になるよな」
「なんとなく、そっちの方が出ちゃうんですよね」
ハハハと軽くモモンガ達は笑いあうが、一連の動きを見ていたスタンク達からは笑顔が消えていた。
「……今のトレイを拾い上げる動き、見えたか？」
「んにゃ。やっぱ化け物だわ、こいつら。……ゼル。今回の依頼は何処からのだ？」
スタンク達の話題が密猟者の捕縛の依頼者に変わったことに、モモンガと弐式炎雷の注意もそちらに移る。自分達を捕まえる依頼を出した相手だ。気にならないはずは無い。その依頼の御蔭でスタンク達に出会えたのは事実だが、場合によっては少々仕置きも必要だろうとモモンガは思う。
「依頼主はこの街の商店主だ。モモンガ達が換金に使った店とは違う店のな。モモンガ達の話を聞く限り、こいつらが希少な素材が他店に持ち込むことを妬んだんだと思うが……。なあ、モモンガと弐式。ぶっちゃけて聞いていいか？」
ゼルの問いかけに、モモンガは向き直り、弐式炎雷は先ほどまで座っていた席に戻る。
「お前たちは何者なんだ？何処から来た？森を通ってこの街まで来て

るのは分かったが、森にお前たちみたいのが居るなんて聞いたこと無い。少なくても俺が生きてきた二百年以上の間には、な」
ゼルの質問にモモンガと弐式炎雷は顔を見合わせる。どこまで話して良いものか迷ったからだ。
正直に話してしまう事は、三つの理由から問題無いと思う。
一つ、物置部屋にはブラッド・オブ・ヨルムンガルドの効果が発動している。
一つ、この世界とナザリックを繋ぐ扉は宝物殿にあり、物理的に独立しているためギルドの指輪無しでは移動できない。
一つ、スタンク達は本気で自分達を敵に回せばどうなるか、理解できている。
もっとも底を見せていないのはスタンク達も一緒だろうが、無闇にこちらと敵対することも無いはずだ。
無いと言えるほどには、実際に話してみたスタンク達にモモンガは好感を持っていた。仲間達以外に、友達と呼べる関係が作れそうなのだ。この出会いはサキュバス街云々抜きに、大事にしたい。勿論サキュバス街巡りでの情報源になるという下心もあるが。
話していいものか弐式炎雷に視線で確認すると、彼は一度頷いてから、首を振った。
話すのは構わないが、ここでは不味いという事だろう。モモンガはそれに頷き席を立った。
「……森の奥まで、ついてきて貰えますか？そこでなら、全てをお話します」
モモンガに頷き、ゼルとスタンクも真面目な表情に変わり、席を立つ。支払いを済ませ出口まで向かうと、モモンガ達が店を出るよりも先に扉が開かれた。
「あれ？ゼル達、もう調書は取り終わったの？」
食酒亭に姿を見せたのはハーフリングのカンチャル、それに悪魔のサムターン、犬獣人のブルーズだ。そういえば彼らとはマイコニドの森で別れたきりだった。
「おう、そっちも終わりか？随分早かったな」

「それくらい雑な工作をしてたんだって。こんな短時間でわかっちゃうくらいのね。これくらい依頼を受ける前に確認しといてよ、ゼル」
「……つーことはクロか」
「クロもクロ。これ見て」
　そう言ってカンチャルが革袋らしき物を掲げて見せる。中に何か生き物でも入っているのだろう、袋が動いている。
「あ、コラ！暴れるな！っと、ほら見て！」
　カンチャルが袋から取り出したのは大きな目玉に羽が生えた妙な生物だ。口らしいものも無く、生物として異常だ。その異常な生物から生えた蝙蝠のような羽を、カンチャルが両手でつまみ広げて見せた。
「魔法使いが使う使い魔か。どこで見つけた？」
　スタンクが咥え煙草を揺らしながら、使い魔を観察する。吹きかけられる煙を嫌がったのか、目玉の使い魔が激しく身を捩りカンチャルを困らせていた。
「依頼主の商店の周りをうろついてたよ、監視されてたんだろうね」
「店主自身にも魔法を使用されていた痕跡があった。もっとも、解印済みであったがな」
　サムターンが続けて言う。察するに、スタンク達に依頼を出した店主自身が操られていたという事かとモモンガは理解する。話の流れから、今回の依頼主をカンチャル達が探りに行っていて、今戻ってきたという事だろう。
「使い魔も当然切られてるか。こいつから飼い主に辿り着けると楽なんだが。……カンチャル、そのまま羽を押さえてろよ」
　そう言ってゼルはモモンガにはよく分からない呪文を呟き、指先で使い魔に触れる。触れた瞬間目玉の使い魔の姿が崩れ、ぼんやりとした魔法陣らしき光が浮かび上がる。
「人間がよく使う術式か」
「構成式も、遊びの無いつまらぬものだな」
「ああ、術者は頭でっかちな研究者タイプか？理論だけが先行している奴だ」

ゼルとサムターンが魔法陣を眺めながら、何やら相談しているが、話の内容はモモンガにはさっぱりわからない。こちらの魔法は、モモンガが使うユグドラシルの位階魔法とは根本的に違いがありそうだ。
(フールーダを連れて来たら、喜びそうな光景だな……)
色々と興味はあるが、突っ込んだ質問をして妙なところでボロを出したくないので、モモンガは黙っていた。弐式炎雷も興味ありそうに眺めているが、質問はしていない。
聞いてみた結果、逆に自分達が使う位階魔法の原理を尋ねられても困る。魔法が使える事と、それがどういう理論と原理で魔法という現象が起きているのかを説明する事が出来るのかは別の話なのである。
「魔法の話をされてもわからねえよ。要するに今回の依頼主はどっかの二流魔法使いに操られていたって事だろう?んな事より、今はもっとデカい話をしようぜ」
スタンクがそういうとゼルが指先を僅かに動かす。同時に魔法陣が消え失せる。
「だな。モモンガ、こいつらも同行していいか?」
「なに、ゼル?どっか行くの?まあ、行くから出ようとしてたんだろうけど、行くなら当然ボクも行くよ!」
カンチャルが両手をあげて騒ぎ、サムターンとブルーズも頷いている。
「クリムの奴もちらちらこっちを見てるな。サキュバス店に行くわけじゃないのに。アイツもすっかりエロくなったなー」
「クリムも連れて行ってやるか。モモンガいいか?」
「ええ。弐式さん、今監視はされてますか?」
ゼルに頷いたモモンガが弐式炎雷に振り返る。もう日が暮れる。そんな時間にクリムを連れて行くのだから、ショートカットが必要だろう。
「大丈夫。全部始末した。酒場の裏手なら平気じゃない?」
「ちょっと待て、お前たち。何をするつもりだ?」
質問には意味深な笑みで答え、モモンガを先頭に酒場の裏手に向けぞろぞろと歩き出す。人通りと監視が無い事をもう一度弐式炎雷に

確認してから、モモンガは笑う。
「こちらの世界の魔法を見せて貰ったからな。そのお礼だよ。……＜転移門（ゲート）＞」
何も無い酒場の裏手に半球体の闇の扉が開く。その光景にあんぐりと口を開くゼルやスタンク達に、モモンガは意地悪そうに笑ってみせた。

◆

「……異世界か。これまた突拍子もない話が出て来たな。だけど、あんな魔法を見せられちまうとな。失敗率ゼロで無限の距離を瞬時に移動可能って、どんだけチートな魔法だよ……。くそ、欲しい」
＜転移門（ゲート）＞を通り、森奥のユグドラシルアイテム『新たな扉』までやってきたモモンガと弐式炎雷は、スタンク達に一通りの説明を終えていた。
自分達は、スタンク達からすれば異世界の人間、異形種で、その世界を平定したという事。世界を平定したギルドの仲間と共に、世界を超える扉を使いこの世界に訪れている事。
当然だが、童貞だったのであっちの経験を積むためにやってきましたー、とは言っていない。絶大な力を持つがゆえに戯れに訪れてみた的なニュアンスで、モモンガは伝えておいた。見栄は張りたいのである。
呻くゼルに、カンチャルが何かを思い出したように手を打つ。
「結構前だけど、召喚事故で迷い込んだ異世界の学生が働いている事を売りにしてるお店なかったっけ？」
「ああ、未成年の学生働かせてて摘発くらったやつか？行った事はないが、聞いたことはあるな。働いてた本人はノリノリだったらしいが……」
「……そんな店まであるのか。マジでそっち方面はなんでもありだな、この世界。ちなみにその働いてた子ってどうなったの？」
「送還されたはずだ。詳しい事は分からないが、興味あるのか？」

「一応ね。俺達の世界の子なら、まあ征服した責任もあるし」
　弐式炎雷の言葉に、ゼルが少し情報を集めておくと頷いていた。
「まあ、それはいいじゃねえか。それで、モモンガ達が使ってる異世界の扉って何処にあるんだ？」
　スタンクの言葉に、モモンガと弐式炎雷は顔を見合わせる。何処にも何も、目の前でほんのりと発光している木製の扉がそれだ。
「いや、ここにあるじゃん」
　弐式炎雷が扉に触れてアピールする。
「俺にはお前がパントマイムしてるようにしか見えないぞ」
「……モモンガさん、扉に隠蔽魔法使ってたっけ？」
「いえ、この場所自体には仕掛けてありますが、扉そのものには……」
　扉付近に第三者が近づかないように隠蔽魔法等は施しているが、扉そのものには何も魔法的な処置を施していない。下手に魔法を施し、扉が別の場所にでも繋がったら困るからだ。
「スタンク、本当に見えないのか？」
　弐式炎雷が扉を押したり寄りかかったりしている。モモンガには普通にそう見えるのだが、スタンク達には本当に扉が見えていないらしい。弐式炎雷が大道芸をしているように見えるらしく、喝采していた。
「……でも、モモンガさん達が言っている事は、本当だと思います」
　そう言ったのはふよふよと浮かぶクリムだ。近眼の者がするように指で目を細めて、扉の方を見ていた。
「ほんのりですけど。確かに何か見えます」
「そういやクリムは、ウィルオーウィスプの光も見通してたな」
　クリムの言葉に、ゼルが手を顎において考え込み始めた。クリムとサムターンも、ようするに魔術の心得が有る者は興味深そうに扉の前で手をかざしたりと、色々と探っている。
「ウィルオーウィスプのお店って実際どうなの？うちらの仲間が一人興味津々なんだよ。でもその人貧乳至上主義でさ、スタンク達のレビューにあったあのイラストに怖気づいてるみたい」
「ああ、貧乳至上主義ならあの店は止めておけ。女の子は全員胸が大

きいぞ」
「ボクはあの頭の中までオープンな感じが苦手。精霊系ってそういうの多いけどね」
　一方魔術の心得が無い組は見えない扉には興味が無いようで、別の話題で盛り上がっている。その光景に弐式さん打ち解けてるなーとモモンガは感心していた。
「そういやお前らはどんな店行ってるんだ？」
「殆どスタンク達の後追いだよ。あ、今日はマイコニドのお店に行ってきたんだけど、俺達のレビュー読む？」
「ぷっは！レビューまで書いてるのかよ、お前たち」
「見せて、見せて！ボク、マイコニドのお店行った事無いんだよね」
　弐式炎雷が虚空からモモンガ達が書き終えて預けておいたレビュー用紙を取り出し、スタンク、カンチャル、ブルーズにそれぞれ渡している。
「ほー、結構高評価じゃねーか……って、おい！お前たち毒キノコ試したのか！」
「うん、俺らあれくらいの毒なら問題ないし」
「あの毒が平気ってマジかよ……。……実際どうなんだ、毒キノ娘は？」
「初々しくて、俺は好き。こう、なんて言えばいいのかな？触られるのに慣れてないんだけど、触ってもらえるのが嬉しくて堪らないって感じかな？モモンガさんの相手もそんな子じゃなかった？」
　弐式炎雷から話を振られ、モモンガも彼らの輪に加わる。
「ええ、私が触れると、嬉しそうに見悶えるのは可愛かったですね」
「あ、ボクの相手をしてくれたホコリタケさんもそんな感じでした。触るとビクッって体を震わせてくれるんですよね！」
　話の輪にクリムも加わった。
「ドクツルタケちゃんがいけるって、羨ましいなー。レビューも、まあ身内ネタが多いが、俺達とは違う目線で結構面白いな。なあ、弐式？これ毎回書いてるのか？」
「うん、サキュバス街に行ったらレビュー書くのがルールだし。まあ、

ゼルに言われた通り、どうしても身内ネタが多いな。でも今回で異形種ってメリットを活かす事も意識できたし、これからはゼル達とは違う楽しみ方もできそうだよ」
　弐式炎雷に問い掛けたゼルも輪に加わり、気付けば全員で今回書いたレビューを楽しんでいた。
「異形種、異形種か。……うん、面白いな。それに異世界か。異世界」
「異世界だなー。まあ、異世界しかないだろう。……弐式達はこれからもちょくちょくこっちに来るんだろう？」
　ゼルが何度か異形種と言う言葉を転がした後、異世界という言葉をスタンクと共に口にする。その二人に合わせる様に、カンチャル達、クリムを除く全員が妙にいやらしい笑みを浮かべていた。
「いやー、それは来たいんだけど。次から俺達どうやってこっちの資金得ればいいかなって。蓄えはあるけど、向こうの金とか素材をこっちに持ち込みたくは無いんだよね。無用なトラブル招くだろうし」
「それが正解だね。見たことも無い金貨なんて、それだけで人とトラブルを集めるよ」
　カンチャルが意地の悪い笑みを浮かべながら言う。その言葉にモモンガも頷いた。しかしこれからの資金繰りはモモンガも先ほどから気になっていた。遊びたいが、遊ぶには先立つものが必要なのだ。
「よし！それならお前たちの異世界サキュバス街ライフを、俺達が全力でサポートしてやる！」
　ドンッ！と右拳で自身の胸を打ちながら、スタンクが力強く言う。
「お前たちの狩猟許可も取っておいてやる。ついでにどうだ？俺達とギルド同盟を組まないか？そうすれば、お前たちのレビューも各地の冒険者酒場に張り出してやれる。俺達はケンタウロスの輸送隊とも提携しているからな。レビューだって、それなりの収入になるぞ」
　ゼルの言葉は非常に魅力的だった。レビューを張り出すのは気恥ずかしいが、狩猟以外に資金を得る手段が増えるのは、モモンガ達もありがたい。
「それは俺達からしたらありがたいけど、どうしてゼル達はそこまでしてくれるんだ？」

弐式炎雷の質問に、モモンガも頷く。スタンク達に、そこまでしてくれるメリットが無いはずだ。その問いに、スタンク達は再びにやりといやらしい笑みを浮かべた。
「俺達には見えないが。そこに異世界の扉があるんだろう？」
スタンク達が扉のある方に視線を向ける。モモンガはそれに頷く。
「……まあ、要するにだ。異世界にもスケベな店はあるのかなぁ……ってなことだ」
『……はい？』
スタンクの言葉に、モモンガと弐式炎雷の疑問符が揃う。
「あ。これ知ってる流れだ」
クリムが何か言っている。いや、それ以上にスタンク達が何を言っているのか分からない。
「レビューを読んでくれているなら知っていると思うが、俺達はありとあらゆる種族とエッチするために、ジャングル！海底！砂漠！雪山！ダンジョン！」
スタンクが威勢のいい声で言う。それにゼルが続いた。
「あらゆる場所に冒険に行くんだ！そこに可愛い子がいるのなら！」
そして最後にモモンガと弐式炎雷、そしてクリムを除く全員の声が揃う。
『天界でも魔界でも、異世界でも！俺達は行く！』
スタンク達のレビューを読んで、そして今日語り合ったイメージそのままに、力強く言う彼らにモモンガと弐式炎雷は言葉も無い。
「……要するに、サポートするからスタンク達を俺達の世界に連れて行けって事？」
「おう。お前らが支配する世界なんだろ？俺らの真似してレビューを書くぐらいだ、そっち方面も結構発展してるんじゃないか？」
「いやー、異世界風俗か。どんな店があるか楽しみだ！」
「うん！モモンガみたいなとんでもない奴らが支配する世界だしね！きっとそっちにも度肝を抜かれるはずだよ！」
「ふはっはっは！異種族をレビューする我らに、異形種がレビューをするモモンガ達！異種族レビュアーズと異形種レビュアーズが交わ

り、異世界レビュアーズの誕生であるな！」
「お！サムターン、上手い！んじゃ同盟名は異世界レビュアーズで決まりだな」
　スタンク達が異世界風俗という言葉に異常に盛り上がっている。弐式炎雷が、その盛り上がりに対し申し訳なさそうに口を開く。
「いや、盛り上がっているところ悪いけど、俺達の世界――」
「勿論スタンク達の想像するモノ以上だ」
　モモンガは弐式炎雷の言葉を遮る。弐式炎雷が驚愕したように、こちらに勢いよく顔を向ける。だがそれにモモンガは気づかないフリをする。
「やっぱりか！」
「私達は悠久の時を過ごす異形種。この世界を訪れたのも戯れに過ぎない」
　モモンガの言葉に喰いつくスタンク達に、モモンガは右眼窩に炎を添えて力強く言った。
「教えてあげようじゃないか、君達にも。私が仲間と共に築き上げた、至高の美と快楽を……な」

◆

　パタンという音と共に、『新たな扉』が閉められた。
　ナザリック宝物殿物置部屋に戻ってきたモモンガと弐式炎雷は、無言で閉められた扉を確認する。まるでスタンク達の世界に、こちらの声が漏れないか確認をするように。
「……モモンガさん？」
「……はい」
　扉がしっかりと閉められていることを確認した弐式炎雷に問い掛けられる。
「……なんで…見栄……張っちゃったの？」
「……だって」
「だってじゃないし！なんで、あんな事言っちゃったんだよ!?至高の

快楽を教えてあげるとか、俺達が教わってる立場だっつーの！」
「認めたくなかったんです！私とＮＰＣ達！何より皆さんと一緒に築き上げた魔導国が、あちらに劣っているだなんて！」
「いやいや！性風俗に関しては完敗でしょ！完全負けてるでしょ！そのさ、俺達が絡むと負けを認めたがらない所はいい加減治そうよ！」
「あっ！そういう事言います!?そんな事言うなら、弐式さんがあの場で私を止めてくれれば良かったじゃないですか！」
「とーめーらーれーるーかぁー!!クリム君なんてめっちゃ期待した目でこっちを見てたぞ!?あんなアウラとマーレみたいなキラキラした目で見られて、俺達の世界の風俗は大したこと無いよなんて事言えるか！」
「じゃあ黙って見てた弐式さんも同罪ですね！」
「なんでだよ!?ああ、もう！マジどうするんだよ！今回はブラッド・オブ・ヨルムンガンドの効果で死ぬから無理だで納得してたけど、アイツら絶対対抗策見つけてくるぞ！」
「珍しいじゃん。二人が喧嘩するなんて、どったの？」
「いや喧嘩はしてないけどさ、聞いてよ、茶釜さん。モモンガさ――」
「いえ、私の話を聞いて下さい、茶釜さん。弐式さんが――」
そこでモモンガと弐式炎雷は二人の言い争いに第三者の介入があったことに気付き、声がした方に勢いよく振り返る。
「ははぁ。二人して私に聞かせたい話があるの？いいよ、いくらでも聞いてあげる」
そこにはピンク色をした肉棒が立っていた。その肉棒がプルプルと震えながら、笑っていた。モモンガと弐式炎雷は先ほどまでの言い争いも忘れ、言葉を失う。
「まあ、でもさ。先に私の話を聞いて貰っていいかな？うちの愚弟がナザリックに戻ってから、ずっとここで待ってたんだ」
そこまで言ってぶくぶく茶釜の声が切り替わる。
普段の声から、少しだけイラついたような低い声に。
ぶくぶく茶釜が、弟のペロロンチーノを叱る時の声に。
「ようやく尻尾を捕まえた私の話を、先に聞いて貰っていいよなぁ？」

近寄ってきたピンク色の肉棒に伏せていた顔を下から至近距離から覗き込まれ、モモンガと弐式炎雷は絞り出すように声を出した。

『……はい、ごめんなさい』

正座専門店　ナザリックの円卓

今のナザリックはホワイト企業である。
働きたがりな社員たち、働いてないと不幸と言い切るＮＰＣ達をあの手この手で言い包め、休養を、自分の時間を取らせている。仕事時間として定めた九時～十七時以外に働くことを、ナザリックの支配者達は基本認めないのである。
その為夜半のナザリックは、それも第九階層は、人の気配も人じゃない生物の気配も生物ですら無いモノの気配も無い。
そのシモベすら配置されていない夜半の『スイートルーム』から、円卓に向け歩く異形の姿が二つある。
たっち・みーとウルベルト・アレイン・オードルの二人だ。
「見てください、ウルベルトさん。今度の台本は自信作ですよ。あのタブラさんにお墨付きも貰いましたから！」
白銀の騎士が嬉しそうに隣を歩く黒山羊に話しかける。話しかけられたウルベルトは皮肉気な笑みを浮かべ答えた。
「随分嬉しそうですね、たっちさん。……あらかじめ言っておきますが、俺は付き合いませんよ」
二人はギルメン会議夜の部に参加するために、こうして円卓に向け歩いているのだ。
夜は大人の時間である。通常の定例会では話せない話題、すなわちサキュバス街巡りの相談をするために、至高の四十一人男性陣は夜な夜なＮＰＣと女性ギルメンに隠れ集っていた。
二人が指輪の転移を使わずにこうして歩いているのは、ウルベルトがたっち・みーに誘われたからだ。その誘いにウルベルトは嫌な予感を覚えていたが、どうやらそれは当たりだったらしい。
「どうしてですか？ウルベルトさんも、あのお店は高評価だったじゃないですか」
「アンタ、俺のレビューを読んでいないのか？……失礼。とにかく俺は付き合いませんから、他の人を当たって下さい」
「そんな、もうすでに私の寝取り役はウルベルトさんでイメージが固

まってるのに。いまさらそんな我儘言わないで下さい」
「これは確実に我儘じゃないだろう。……たっちさんは役にのめり込み過ぎるんですよ。円卓を壊して皆からさんざん責められたのを、もう忘れたんですか？」
「円卓を壊したの、ウルベルトさんじゃないですか？」
「どうしてそこで疑問形になるんだ!?……たっちさんから先に斬りかかってきたんでしょう。忘れたとは言わせません」
「とにかく、一度この台本を読んでみてください。きっとウルベルトさんもその気になりますよ」
そう言ってたっち・みーがウルベルトに台本を押し付けようとする。だがウルベルトは押し付けられたその台本を無視し、丁度辿り着いた円卓の扉に触れる。円卓の扉を押し開き、そして異変に気付いた。
「……一体……なにが……？」
ウルベルトが状況を理解できず呟く。
円卓には当然だが、ギルドのメンバーが腰掛けるための席がある。だがウルベルトとたっちの眼前に映る円卓は、今まで見たことの無い使われ方をしていた。
三十を超す異形が円卓の席に腰掛けずに、なぜか床に正座をしているのである。黒曜石の輝きを放つ円卓に腰掛けず、それを取り囲み正座する異形の集団の姿は、まさしく異様だった。
死獣天朱雀が背筋を伸ばした綺麗な姿で床に正座をし、ギルド最強の一角を担う武人建御雷がまるで介錯を待つサムライの様な佇まいで正座をしているのだ。
「フラットさん！一体何があったんですか!?」
たっち・みーが一番近くに居た暗殺者フラットフットに駆け寄りそう訊ねる。問い掛けられたフラットフットは、まるで自身が暗殺されたかのような弱弱しい動きで顔を上げる。
「……たっちさん……」
フラットフットは最初の九人に名を連ねる、最初期のメンバーである。それだけに付き合いも長い。その彼がここまで悲壮な顔をして

いるのは、ウルベルトもたっち・みーも記憶になかった。
「……バレた」
「え!?」
「……茶釜さんに……全部バレた……」
ゆっくりと、フラットフットは腕で指し示す。ウルベルトもたっち・みーもそのフラットフットの指し示す先に視線を動かし、そして声を失った。
なぜ今まで気づかなかったのだろうか。この異形の集団の中でも一際異彩を放つピンク色の肉棒。それがこの場で唯一円卓の席に腰掛けていた。
ぶくぶく茶釜。
ギルドに三人しか居ない女性メンバーの一人。両手に盾を持ち、ギルド最硬の盾役。粘液盾。
その彼女が、遠目からでもわかる、弐式炎雷が発見し、今日まであの異世界に訪れるたびに書き溜めてきたサキュバスレビューを無言で読み漁っているのである。
「……俺、向こうで試したい事まだまだ沢山あるのに……」
悲壮感に満ちたその声に、たっち・みーもまた膝から崩れ落ちた。
純銀の聖騎士。ワールドチャンピオン。ギルド最強。
様々な二つ名を持つ男が、ぶくぶく茶釜の姿を確認しただけで、膝を折ったのである。
「クク……ク……フハハハハハハハハハッ!」
ギルドアインズ・ウール・ゴウンもう一人の最強が哄笑を上げる。バサリとスーツに一体化したマントを翻し、カツカツと蹄を打ち鳴らしながら歩いて行く。
そして大災厄の魔ウルベルト・アレイン・オードルが円卓の自分の席に辿り着くと、蹄の脚を器用に折り曲げて綺麗に正座をした。
「ウルベルトさん……」
その非常に彼らしくない姿に、たっち・みーが声を漏らす。その声に、ウルベルトは自嘲気な笑みを浮かべた。
「フフフ……恨みますよ、たっちさん……。俺を巻き込んだのは他で

もない……貴方だ……」
理解しているのだ。この場に居るもの全てが。ペロロンチーノの普段の怒られっぷりを間近で見続けてきた、ギルドアインズ・ウール・ゴウンのメンバー全てが。
そしてたっち・みーもまた崩れた膝を折りたたみ、背筋を伸ばし床に正座する。
最強などという言葉は、その状況で移り変わる非常に曖昧なものだ。そんなものに、それ程の意味はない。そんな言葉など、意味は無いのだ。
そう、最恐の前では。
たかが最強が最恐に、敵う筈が無いのだ。

◆

「……ふーん、なるほど。こういう事だったんだ」
男たちのレビューを読み終えたぶくぶく茶釜が、そう言って顔を上げる。
そして自身を除くギルドのメンバーが、なぜか席に腰掛けずに正座している事に気付く。
「みんな、どったの？」
ぶくぶく茶釜がそう訊ねると、全員死んだような顔で視線を微かに逸らしてくる。その仕草にぶくぶく茶釜が首を、首はないのだが、傾げた。
「……その、茶釜さん、当たり前だけど……怒ってるでしょう？」
答えは背後から来た。腰掛けたまま振り返ればそこには四つの異形。
モモンガ、弐式炎雷、ペロロンチーノ、そして弟のペロロンチーノが正座をして控えていた。そういやこの四人が一番最初に異世界に訪れたメンバーかと、ぶくぶく茶釜はレビューの束をめくりながら思った。
ぶくぶく茶釜の問いかけに答えたのは、異世界を発見した弐式炎雷だ。ぶくぶく茶釜はその彼に問い返す。

「私が怒ってる？なんで？」
「いや、だって……。俺ら隠れてそういう事してたし……。やっぱ女の人は嫌だろう？そういうの」
「ああ、そういう事？」
　ぶくぶく茶釜は理解する。なんで自分を除く全員が床に正座しているのかを。ぶくぶく茶釜に怒られると思っているのだ、この男どもは。こいつらにどんな目で見られてるんだ私はと思いながらも、ぶくぶく茶釜は微かに笑う。怒っていないと伝えるために。
「物置部屋で二人を捕まえた時は確かに少し機嫌悪かったけどさ。今は別に怒ってないよ。むしろ安心してる」
「……え？」
　ぶくぶく茶釜の言葉に口を開いたのはモモンガだ。その彼にぶくぶく茶釜は今度ははっきりと笑う。
「異世界の風俗店ってのは完全に予想外だけどさ。みんながそんな事してるだろうって、私は思ってたし」
「ど、どうしてそう思ってたんですか？」
　この世界に共に転移して来たヘロヘロは完全に怯えている。そんなに私ヘロヘロさんに怒ったっけ？と再び首を傾げながらもぶくぶく茶釜は答える。
「香水の移り香。そういう所は気を付けた方が良いよ。女って結構そういうの気付くから」
　そう言ってやると、目の前で正座する四人組以外からも驚いたような声が聞こえた。少し離れた所で非常に感心したように何度も頷いている純銀の聖騎士がいるが、それくらいは既婚者なんだから分かっていて欲しかった。
「まあ、このレビューを読んで知らない方が良かったみんなの性癖知っちゃって、正直ショックも受けてるんだけど。それとは別に怒ってないから、いい加減みんな立ってよ」
　そう言ってやると、モモンガ達四人組を除く全員が安心した様に立ち上がり、わいわいと話しながら各々の席に腰掛ける。
「何人かハメ外し過ぎな人もいるみたいだけど、お店のルールはしっ

かり守ってるみたいだしね」
少しだけ声に警告の色を籠めてそう言うと、身に覚えはあるのだろう、ヘロヘロとタブラがびくりと体を震わせていた。
「……やまいこさんと餡ころもっちもちさんも同じ意見ですか？」
モモンガに尋ねられ、少しだけぶくぶく茶釜が考え込む。
「あの二人も私と仲が良いくらいだから、下ネタ平気だし。特にやまちゃんはそんな事に動じる人じゃないしね」
勿論やまいこはこのレビューに書いてあるお店に無理矢理とか犯罪とかが絡んでいたら、静止を振り切って殴り込みにいくだろうが。
「あんちゃんに関しては……まあ、後で話す。とりあえずこの事は私から話しとくし、心配しないでいいよ」
ぶくぶく茶釜の言葉に、今度こそモモンガ達も立ち上がり、席につく。その姿に内心では笑いながらも、緩んだ場を引き締める様に、少しだけ声を落として問いかける。
「とりあえず何をしてたかはレビューを読んで理解したけど、どうしてそうなったかは聞いて無いから、そこは説明して貰っていい？」
一度モモンガと弐式炎雷が頷きあうのを確認する。主導はこの二人かと、安心する。今のこの二人なら無茶をすることは無いだろう。モモンガは、ギルドのメンバーやＮＰＣが馬鹿にされたなどの条件が付くと一気に不安になるが。
「……実は」
そういってモモンガから切り出された話に、思わず呆れた。
童貞云々は人それぞれの感じ方もあるし、むしろ男の方がその事にネガティブになるのは理解できる。だからってわざわざ異世界で童貞を捨てる選択肢に呆れる。いや、転移して来た自分達では、もう異世界で捨てるしかないのだからそれはしょうがないかとぶくぶく茶釜は自身を納得させる。
「……ＮＰＣに見栄張りたいって気持ちはわかるし、世界征服完了した私たちがこっちでそういう事できないのも理解できるけどさ。レビュー書くほどハマっちゃうもんなの？特に最初から童貞じゃない人達」

そう訊ねると、ギルドの何人かがびくりと肩を震わせた。まあ、この手の話題は自分には言いづらいかとぶくぶく茶釜は質問を取り消す。
「とりあえず、向こうの世界に迷惑かけてないなら、私からは何もいう事無いよ」
「え！茶釜さん、それってこれからも向こうに遊びに行って良いって事？」
聞いてきたのはフラットフットだ。ぶくぶく茶釜はその質問に頷く。
「当然でしょう？そもそも私達に気兼ねする必要ないじゃん。社会人の皆が、ルールを守ってそういうお店で遊んでるならさ」
そう答えると、円卓に歓声が沸き起こる。
こいつらそんなに行きたいのかよと呆れながら、仲間達を眺め見る。男って大変だなと思いつつも。
「ぶっちゃけさ、そう言うのは今の私達に必要だと思う」
ぶくぶく茶釜の呟きの様な言葉に、子供の様に、やっていることは子供はしちゃ駄目なのだが、はしゃいでいたギルドメンバー達が驚いたように再び静まり返る。
「私たちはこんな異形の体だし、精神もそれに引っ張られてる。そんな私たちがこれからも人間性を維持していくにはさ、そういう事も必要なんだと思うよ。魔導国の為にもね」
ぶくぶく茶釜の言葉に、何人かが考え込み、何人かが首を傾げていた。
思えば最近の仲間達は、どこか昔を思い出させる。馬鹿をやっていた、最高に楽しかったユグドラシルの頃を。その気持ちを忘れず維持していけるなら、自分達は八欲王のようにはならない筈だ。
その為にあの扉は異世界に繋がったのではないだろうか。そんな事すら思ってしまう。
「ＮＰＣ達に対する配慮は忘れないようにね？この事を知ったあの子達がどう動くかは、私にも予想出来ないから」
「……女の人の茶釜さんでも？」

「女って言っても、私達もこの体だしね。精神もどうしたって異形の姿に引っ張られてるし。そもそもＮＰＣ達の気持ちを、普通の人間の感情に置き換えて想像していいものか。普通の人間だったらこうするだろうって想像して、何度も痛い目見てきたからなー。」
　ぶくぶく茶釜の言葉に、心当たりがある者もいるのだろう。納得した様な事を言っている者もいた。
「ＮＰＣ達に対しては、協力する。私なりにそれとなく探ってみるから」
　最後に締めくくる様に、これだけは伝えておこうと仲間達に改めてに向き直る。
「最後に。怒るとすれば、それは私たちにずっと隠れてこそこそしてた事かな。それはＮＰＣ達も同じかもって思っておいてね。私もやまちゃんもあんちゃんも、勿論ＮＰＣ達も、最近寂しかったんだよ？」
　そう伝えると、神妙に頷く仲間達に笑う。
「これで私の話はお終い。時間取らせてゴメンね」
「……いえ、私達も済みませんでした。茶釜さん」
「理由が理由だしね。言いづらいのは分かるよ。ああ、それと―」
　謝罪するモモンガに笑いながらも、ぶくぶく茶釜は円卓を見渡し、お目当ての人物に視線を合わせる。この場で先ほどから一言も口を開いていない人物を。
「弟、おめえはちょっとこっち来い」
「なんで!?」
「なんでじゃねえよ。これ、お前のだろう？」
　そう言ってぶくぶく茶釜は虚空から一つのアイテムを取り出す。水晶で出来た、ユグドラシルでもこちらの世界の物でもないアイテムを。
「あ、それは……」
　モモンガが驚いたように水晶を指さす。まあ、当然の反応だろう。
　なにせこの水晶に収められた人物は、モモンガなのだから。
「あんちゃんは今ショックで寝込んでる。無理もないよなぁ？こんな映像が収められた水晶を、お前が大事にベッド下に隠していたらなぁ

？」
「アイツ！アイツが犯人か！」
「勝手に人の部屋の物を持ち出したことに関しては、私とやまちゃんで後であんちゃんに説教しとく。だがな、弟。それとこれとは話が別だ」
「なんでだよ！なんでみんなは無罪放免で、俺だけ怒られる流れになってるんだよ！」
「あたりまえだ。お前は身内だろう。……お前が二次で抜く分には何も言わないけどさ。とうとう三次に手を出しやがって……」
「抜くとか言うなよ！みんな居るんだぞ!?」
「黙れ、愚弟」
　言葉と共にユラユラと立ち上がり、ぶくぶく茶釜はその見た目から想像しづらい素早い動きで弟の元に辿り着く。
「わかるか、お前に。水晶に仕掛けられた弟のパスが、１１６６（いいろり）一発で開けたって聞かされた姉の気持ちが。なあ？お前にわかるのか？」
「ご、ごめん」
「シャルティアの格好をした小さい女の子が、モモンガさんの身体を嬲るってどんなプレイだよ、お前。あんちゃんキャパオーバーで一発ダウンだぞ？」
「勝手に見たのはアイツであって、そ、そこは俺が悪いわけじゃ……」
「最初は私も意味不明だったがな。お前のレビューと合わせて読んだら理解できたよ。確か『なのに！なのに！シャルティアが悪戯っぽい瞳で俺をチラリと見るたびに、俺はどうしようもない程に興奮しちゃうんです！』だったか？馬鹿かお前は？」
「ご、ごめんなさい。そ、それと俺の声真似はしないで。恥ずかしいから……」
「恥ずかしい？あんなレビューを毎回晒しておいてか？なあ、おい、冗談だろう？あれ以上に恥ずかしいものなんてあるのか？」
「も、もっともです」
「……あんな小さい子に手を出しやがって、どんなに馬鹿でも、超えちゃいけないラインは理解してると思っていたんだがなぁ」

「ピルティアちゃんは俺より年上……」
「年下だったとしても『こういうお店で働いてればＯＫですよね!?』とか言って手を出したんだろう？」
「だから、お願い、俺の声真似は……。そ、それとちゃんと毎回年齢は確認して、みんな未成年じゃないって……」
「今日行ってきた、もう昨日か？マイコニドの娘は未成年だったんじゃないのか？」
「い、いや、あの子は、マイコニドだし！そもそもマイコニドって何歳から成人なのか分からないから！」
「そうやってお前はだんだん判断基準が甘くなってくるんだよ。私にはわかる」
「そもそもカエンタケちゃんロリじゃないし！」
「来い。今日までお前の性癖を野放しにしてた私のせいでもある。リング・オブ・サステナンスは装備しとけ。徹底的に説教してやる」
　ぶくぶく茶釜はそう言って盾を持つための触腕を使いペロロンチーノの首根っこを掴み、引き摺り始めた。
「やだ！いやだ！助けて、助けてみんな！お願いだから助けて下さい！モモンガさん！弐式さん！」
「いえ、そこは家族の問題ですので……」
「うん、俺達が口出ししていい問題じゃないから……」
　助けを求められた二人は首を振って、あっさりとペロロンチーノを見捨てる。せっかく怒られずに済んだのだ。巻き込まれたくない。
「は、薄情ものー――――――――！」
　そういってぶくぶく茶釜に引き摺られるペロロンチーノを、助けるものは円卓に一人として居なかった。

闇の精霊専門店　私たちがモテないのはどう考えてもオモテの店が悪い！

「んじゃさ。本物の女騎士さんが働く『くっ、ころ店』とかどう？レメディオスさんだっけ？　あの人にお願いしてさ」
　ナザリックのモモンガの自室で、テーブルを挟み弐式炎雷が広げた用紙に何かを書き込みながら提案する。その提案を聞いたモモンガは苦々しく首を振る。
「あれは『くっ、殺せ』ではなく、『くっ、殺す』だと思います……」
「……ああ、それっぽい。……モモンガさんは何かアイディアはある？」
　弐式炎雷に問われ、モモンガは考え込む。
　直前の会話にレメディオスが出ていた為に、聖王国が思い出された。あの国が性王国だったらなんの問題も無かったのだがという馬鹿な考えが浮かぶほどに熟考してから、モモンガは一つのアイディアを提案してみる。
「本物に拘るなら、本物の姫や女王を集めたお店はどうでしょうか？」
　そのモモンガの提案に、弐式炎雷は腕を組んで考え込んだ後、ゆっくりと首を振った。
「相手がいる人もいるだろうし、それは不味くない？　……というか俺達がいくらここでアイディアだしたって、意味ないか」
　そう言って弐式炎雷はテーブルに広げた用紙をクシャクシャに丸め、宙に放り投げる。丸めた用紙が落下を始める前に一瞬炎に包まれ、灰も残さず燃え尽きた。弐式炎雷は体術重視の為あまり使用しないが、忍術が使えない訳ではない。何かしらの術を使用したのだろう。
「……そうですね。こちらとあちらでは前提条件が違いすぎます」
　モモンガ達が支配するこの世界も多種多様の種族が住まう。だがあちらの様に十世代も遡ればサキュバスの血が混じってるなどという事は当然ない。混血などほとんどないのだ。

モモンガと弐式炎雷が頭を抱えているのはそこだ。お店のアイディア云々では無く、そういうお店で働ける人材が居ない。勿論人材確保だけならば、容易い。一言命じればいい。それだけで済む。
だがそれをする訳には行かない。したら最後、ツアレ以上の悲劇のオンパレードだ。そんな事を仲間達が許すはずもないし、モモンガ自身もするつもりは無い。
「やっぱあっちの世界のサキュバス店は凄いよ。サキュ嬢とはいえ、働いている女の子たちがあんなに笑顔なんだもん」
弐式炎雷の言葉に、モモンガは頷く。あの世界のサキュバス店には、モモンガ達が知る限りだが、悲劇や悲哀はない。だからこそ自分達は気兼ねなく、仲間達と楽しめるのだ。
「……やはり、次にあちらの世界に赴いた際に、私から謝っておきます」
頭を悩ませる原因はモモンガが吐いた嘘、見栄だ。スタンク達の盛り上がりに冷や水を掛けるようで悪いが、正直に伝え謝るしかないだろう。
「――いや」
俯くモモンガに弐式炎雷は首を振る。
「やっぱ負けっぱなしは、俺も性に合わない。作ろうぜ、こっちでも。健全で、誰も悲しまない、女の子が心から笑ってられる、そんなお店をさ」
「……難しそうですね。世界征服よりもずっと」
「うん。まあでも、スタンク達もしばらくは扉を通る方法を見つけられないだろうし、見つけたとしても毒がーって言い訳もできるし。焦らず行こうよ」
弐式炎雷の言葉にモモンガは頷く。自分達は異形種だ。幸いと言うべきか、時間はたっぷりとあるのだ。
「とりあえず他の連中にも声掛けて、相談しよう。後はやっぱこっちの風俗に詳しい人に協力して貰いたいよ。誰か――」
そこまで言って、弐式炎雷の言葉が止まる。その事を疑問に思い、モモンガは首を傾げる。彼が頭巾の下で驚いたような顔をしている

と思ったからだ。
「誰か心当たりはあるか、フラットさん？」
その名に、モモンガは驚いて振り返る。振り返ると確かにそこにフラットフットが立っていた。モモンガの真後ろに立っているが、今の今までまったく気づかなかった。
「なんの心当たりだよ。さっぱりわからん」
そういって笑うフラットフットに、弐式炎雷は悔しさを滲ませて肩を落とす。
「くっそ。影から出てくるまで全然気づかなかった。油断してたわけじゃ無いのに」
「忍者の本気警戒網掻い潜るゲーム楽しかったです。まあ、気にするなって。俺だって弐式が本気で隠れたら探知出来ないし」
そう言って暗殺者フラットフットが笑う。
「……驚きました。でもフラットさん。わざわざどうしたんですか？」
モモンガがそう訊ねると、フラットフットは笑みを強めて頷く。
「今日扉使ったグループが帰って来たんだ。残りの時間は自由に使って構わないって」
「まだ昼前なのに、もう帰って来たんですか？」
「早朝割引き使ったみたいよ。まあ、それは兎も角さ。せっかくだから俺達もあっちに遊びに行かない？」
扉の使用は基本一回に付き二十四時間だ。それを超えればペナルティが発生するが、早まる場合は問題ない。次のグループが使用する時間まではフリーになるので、むしろ歓迎される。
「行くか」
「行きましょう」
そしてそれは早い者順だ。
モモンガと弐式炎雷の決断は、それはもう早かったのである。

◆

「はい、お待たせしました、スタンクさん。野菜とお豆のごろごろスープです」
「お、待ってました」
　食酒亭のテーブルで注文をクリムから受け取ったスタンクは、腰に下げた革袋から乾燥した草を取り出し、それをスープの上で手で細かく刻みスプーンでよくかき混ぜる。
　そのスタンクの行動に疑問を覚えたのだろう、クリムが首を傾げながら問いかけた。
「香草ですか？」
「いや、毒草」
「死んじゃいますよ!?」
　毒草入りのスープを笑顔で口にするスタンクに、クリムが悲鳴のような叫び声をあげる。
「くっぐぐぐぐ……。この舌先から痺れていく感覚、すぐに広がる全身の倦怠感に熱っぽさ。流石ゼルが選んだ毒草だ。良い具合に責めてきやがる……」
「何やってるんですか!?　早く吐き出して下さい！」
「……大丈夫だ、死なない程度に量は調整してある」
　そう言ってスタンクは勢いよくスープを掻き込み、口を押さえながら一気に飲み干す。その姿を少し離れた所からメイドリーがものすごく冷たい目で見ているが、スタンクは敢えてその視線には気付かないフリをする。少しでも気持ちが折れたら、毒に負けてしまいそうだからである。
「ククク……こ、これでまた一歩、異世界に近づいたぞ」
　そういってスタンクが少し虚ろな目で口元を袖で拭う。スタンクとて意味もなくこんな事をしている訳では無い。毒に対する耐性を高めて、モモンガ達の住まう異世界に繋がる扉、スタンクには見えないが、その先に広がるという毒の効果に耐えるために、こうして体の内側から鍛えているのだ。
「……モモンガさん達の言うブラッド・オブ・ヨルムンガルドですよね？　もしかしてそれに耐える為ですか？」

クリムの指摘にスタンクは頷く。そう言えばと、目の前の天使は毒も石化も効かないんだよなとスタンクは思い出す。
「クリムは良いよな。天使は毒が無効なんだろう？」
「……どうでしょう？　モモンガさん達の毒ですから、ちょっと自信ありません。スタンクさんなら余計でしょう？」
人間ならばもっと耐えられるはずが無い。そう暗に伝えてくるクリムにスタンクは笑う。
「いいかい、クリム。男には決して引いてはいけない時がある。モモンガの言う至高の美と快楽が待っているんだ、君ならわかるね？」
「わかりますが、手段はもう少し考えた方が良いと思います」
そう指摘するクリムに何か続けようとしたスタンクが、急に自身の腹を両腕で抱えた。
「ぐお！　もう腹に来た！　駄目だ！　まだ出すな俺の肉体！　もっとギリギリまで耐えて、耐性を身に付けるんだ俺！」
異様な音を奏でる腹を抱え、スタンクが叫ぶ。クリムは片手でトレイを胸に抱きながら、残った手でスタンクの背中を優しく擦る。
「もう、ここで出さないで下さいよ？　ゼルさーん！　スタンクさんに回復まほ――あれ？」
呼んでからクリムがお目当てのエルフの姿が見えない事に気付き、探す様に辺りを見渡す。そんなクリムにスタンクがお腹を押さえ、呻きながら答える。
「ぐぬぬぬ……。ぜ、ゼルなら俺達を嵌めた魔法使いの調査に向かってるぞ。あああ！　あ――――！　た、耐えろ俺！　こ、この苦しみの先に至高の快楽が――」
「お願いですから、トイレに行って下さい。……スタンクさんはゼルさんと一緒に行かなかったんですか？」
席を立とうとしないスタンクに呆れながら、諦めたようにクリムは尋ねる。ゼルが調査に向かっているのに、同じチームを組むスタンクが一人ここに居る事を疑問に思ったからだ。
「お、俺は荒事になるまで待機。魔法使い相手の調査だと、魔力の残滓がわからないと役に立たないからな」

なるほどと頷きながら、クリムはスタンクの背中をトントンと叩く。痛みというか波が引いたのか、少し落ち着いたようにスタンクは額に浮かんだ脂汗を袖口で拭う。
「そういや今日はモモンガ達は来たのか？」
「ボクはまだ会ってませんけど。あ、噂をすればですね」
そういってクリムがふよふよと浮きながら入口に向かう。スタンクはそのクリムの背中を視線で追っていき、扉から姿を見せた三人組に向け手を上げる。
「よお、モモンガ、弐式」
「こんにちは、皆さん。今日はフラットフットさんと一緒なんですね」
挨拶に応えながら、モモンガ達がスタンクが居るテーブルの席に座る。
「そっちは新顔か？」
スタンクがクリムからフラットフットと呼ばれた異形に視線を向けた。不躾な視線を向けられた異形は気にもせず、恐らく笑顔だろう、それをスタンクに向けてくる。
「うお、マジで生スタンクだ。すげえ！　俺はフラットフットって言います！」
「おう、よろしくな」
差し出された異形の手をスタンクは迷いなく握る。
「そのユグドラシルで有名実況配信者に出会いました的な反応止めてくれ。俺らの方が恥ずかしい。今日はゼル達は？」
弐式の質問に、スタンクは先ほどクリムにした説明を再度異形の三人組にするが、その事にはあまり反応が無かった。恐らくモモンガ達にとっては、誰かから狙われる事等日常茶飯事なのだろう。
「所でスタンクさん、これから少し時間はありますか？」
モモンガの質問に、スタンクの股間の羅針盤がピクリと反応する。
それにしてもモモンガも面白い男だ。尊大な、支配者然とした態度をスタンクやクリム達にする事も有れば、こうして丁寧な口調で話しかけてくることもある。まあ色々あるのだろうと、そこにはあまり触れず、股間の羅針盤が反応した話の続きを促す。

「ちょっと行ってみたいお店があってさ、良ければ一緒に行かない？
人数は多い方が面白そうなお店なんだよね」
「ほう？」
フラットフットがテーブルに身を乗り出して言う。スタンクは懐から煙草を取り出し、口に咥えた。火をつけ、煙をゆっくりと吸い込み、毒で弱った身体に馴染ませる。こういう誘いを受けたスタンクの答えは、明らかなハズレ店と分かっていれば別だが、一つだ。
「よし、行くか」

◆

「それでフラットさん。お目当てのお店ってのは？」
サキュバス街を三体の異形と一人の人間が連れ立って歩く。きょろきょろとお店を探しながら歩くフラット達は、客引きからすればいいカモだ。しきりに客引きが寄ってくるが、それはスタンクが上手くあしらっていた。
ギルドアインズ・ウール・ゴウンの面々も怖気ずにサキュバス街を歩けるようになる程度には成長したが、やはりスタンクとはサキュ街の経験値が圧倒的に違う。一行にスタンクが同行するのは、お子様カモ達の中に、親カモが交じっているような安心感がある。
「もう少し先のはずだけど、こういう場所ってどうしても目が泳いじゃって目印を見落としちゃうんだよな……」
弐式炎雷に尋ねられたフラットフットが、様々なサキュバス街に興味を引かれたように、視線を彷徨わせていた。その初心者丸出しの姿に、スタンクは甘噛みした煙草をひょこひょこと動かしながら、眺めていた。
「まあ俺も気付いたらお目当てじゃない店に入ってて、戻ってから気づくなんて事もあるぞ。言ってみりゃ、これは男の冒険だ。まるで違う場所に辿り着く時もあるさ」
スタンクの言葉に、異形の三人組が感心した様に頷いている。一人一人があり得ないほどの強さを誇る三人組のこういう姿に、スタンク

はこいつらの股間の羅針盤を俺が鍛えてやるかとにやりと笑う。股間に羅針盤があるのかどうかは分からないが。
「あ、一番の目印が見えてきた」
そういってフラットが一つの店を腕で示す。スタンクもその先を視線で追えば、まだ日は高いというのに、その目印は日光よりも強い光で建物が発光していた。
「なんだ、フラット。お前ウィスプの店に来たかったのか？」
ウィルオーウィスプ専門店、『は』が落ちて『なぞの光』になっている看板を眺めながらスタンクは、そういやこの店に興味津々な奴がいると弐式が言っていたなと思い出し、フラットフットに尋ねる。尋ねられたフラットフットは首を振って否定する。
「いや、ここじゃなくて、裏手の店。前に偵察に来た時に見つけたんだ」
「裏手？」
裏に店なんてあったかと疑問に思いながら、フラットフットを先頭に全員で裏手に回る。
そして気付いた。
確かに裏手にもサキュバス店がある。光の精霊が放つ圧倒的な光によって生まれた深い影に隠れて、ぱっと見では気づきそうにない。暗がりというよりも、光によって生まれた濃い闇の中に佇むその店の看板にはこうあった。
『闇の精霊（シェイド）専門店　私たちがモテないのはどう考えてもオモテの店が悪い！』
「なげぇ店の名だな……」
感じるキワモノ臭にスタンクの股間の羅針盤が、しおしおと萎えていく。だがスタンクとは違いフラットフットが興奮した様に躊躇わずに入店していく。それにモモンガ達も続いて行った。
スタンクは怖気づく事無く未知に飛び込んでいく彼らの姿に、サキュバス店レビュー向いてるなこいつらと思う。
「ウヒッ!?　お、お客さん!?」
店の受付、闇の精霊だろう、がスタンク達に驚いたように声を上げ

る。
「ウヒヒ……、う、嬉しいな！　お久しぶりのお客さんだぁ……。お、表の店と間違えて無いよね？　間違えて無いよね？」
普段喋る事の無いキャラが、突然饒舌になって語りだしたような口調の受付に、スタンクはドン引く。
レベル自体は高い。闇の精霊らしく腰元まで届く長い黒髪に、それとは対照的な白い肌をしている。その対比が素晴らしいし、長い前髪で顔を半分隠しているが、精霊らしく非常に整った顔立ちをしている。ただし、胸は全くない。すとーんといった、なだらかどころでは無い、ほぼ完全な絶壁だった。ただし全裸。
スタンクの股間の羅針盤がむくりと反応するが、いまいち弱い。光の精霊と同じく受付から全裸でお迎えしてくれているが、肝心な部分が黒塗り規制されている為に、まったく見えないからだ。
「肝心なところは黒塗り規制かよ……」
「ご、ごめんね。ヒヒ……ごめんね！　こ、この黒塗り私たちじゃ、けけけ消したりでで出来ないんだぁ」
アソコどころか乳首も見えない。光の精霊に対比する闇の精霊だけあって、その辺は同じかと思う。
だが、そんなスタンクの感想とは余所に、フラットフットが突然倒れ込んだ。
「フラットさん!?」
慌ててモモンガが駆け寄り、フラットフットの身体を起こす。弱弱しく差し出されたフラットフットの手をモモンガが掴み、声を掛けた。
「大丈夫ですか!?　しっかりして下さい！」
「……も、モモンガさん。俺……この世界に転移して来れて本当に良かったよ……。またこうして皆や、動いているナザリックのＮＰＣにも会えて……。それだけじゃない、このお店とも出会う事が出来た」
「……私も転移して来れて本当に良かったです。皆さんと再会出来て、こうして一緒にサキュバス街巡りが出来るんですから……」
「ああ、俺達は幸せだよ。ナイス。ナイスちっぱい。ナイスつるりん

ぺたん！」
　フラットフットが横になりながらモモンガに握られていない手でサムズアップしていた。
「いや、俺達が転移して来た世界はこっちじゃねーし。……でもいいのかよ、これ。入口からしてすでに全裸じゃん……」
　弐式炎雷が頭巾の上から手で自身の目を隠すようにしながら言う。そういやクリムもやっていたなとスタンクは思う。勿論弐式炎雷も手で目を隠すのはポーズだけで、指の間が広がっている。しっかりと闇の精霊を見ているのだが。
「お、お客さん？」
「す、すごい。四人も、四人も来てくれてる。ウヒヒヒヒ」
「い、いらっしゃいませ。よ、ようこそ闇の精霊店に、入って入って。いいい、いっぱいサービスするから」
　闇の精霊たちが集まって来て、入り口から奥にと手を引かれていく。入口から入ってすぐに薄暗い空間が広がっており、スタンクは口に咥えた煙草から吸い込んだ煙をくゆらせた。
「システムは表の店のパクリか……」
「ぱ、パクリじゃないもん！　私達が元祖だもん！」
「本家ともいう。ひ、光の連中がパクってる」
「そう、料金だって表の四分の一だよ？　お、お得だもん」
「うんうんうん、それなのに私たちがモテないのは絶対におかしい！」
　闇の精霊がドンドン集まって来て、辺りの闇が深くなる。深すぎて、もはやスタンクには声が聞こえてくるだけだ。
　光の精霊たちは、明るすぎて個室だと見えなくなるからああいうシステムだった。しかし闇の精霊だと闇が深くなる一方で、この乱交スタイルは完全に向いていない。
「闇が深すぎて何も見えねぇ……。ちなみに表の店とこっちはどっちが先に出来た店なんだ？」
「向こうだよ？」
「やっぱパクリじゃねえか……」
　スタンクは呆れて項垂れる。この暗闇の中では何も見えないし、乱

交スタイルでも恥ずかしさが無く問題ないかもしれないが、長所も完全に潰している。闇の精霊の口ぶりからして流行って居なさそうだし、客も自分達以外に居ない。

何も見えない乱交店など、そもそもなんの意味も無い。

だが一緒に訪れた異形組は違うらしい。

「すげえ！　見渡す限りのつるりんぺたん！　俺の理想郷は此処にあったんだ！」

「それナザリックでは絶対に言うなよ？　いやでも、すごいね。自分多数の乱交はよくやってるけど、こんな大人数の女の子に囲まれるのは初めてだ。マイコニドのお店と違って、こっちは完全別人だし」

「これで料金が光の精霊と比べて四分の一なら、どうして流行らないんでしょうか？」

興奮した様な声がスタンクに届く。もはや闇に包まれて、一緒に訪れた三人組の姿も見えないが、向こうはしっかりと見えているらしい。

「モモンガ達は見えているのか？」

「ああ、スタンクには見えてないのか。モモンガさん頼める？」

「ええ――＜魔法距離延長化・完全視覚＞」

モモンガの声と共に、スタンクの視界に変化が起きた。

「おおお？　……おおおお！　すげえ！　これがモモンガの魔法か！」

視界が急にクリアになり、闇を見通せるようになる。広がった視界では多数の闇の精霊がスタンク達を歓迎するように集まっている。

「ほ、ほかにお客さんも居ないし、全員でお相手するから、楽しんで行ってね？」

「おっほー！」

おっぱいは無いが、多数の可愛い子に囲まれて、スタンクの股間の羅針盤の反応が強くなっていく。これなら独占できる分、お店には悪いが、人気が無い方が客としては楽しめて良い。料金だって表の四分の一なら、長時間居ても大した金額にはならない。

８、いや９か？

スタンクは闇の精霊に身を任せ、外套を脱ぎ捨てながら今回の評価を始めていく。いやいや、まだ始まったばかり。ここはしっかりプレイに集中しないと、女の子に失礼だなと全裸になったスタンクは鼻の下を伸ばす。
「ぐへへへ、それじゃあ――うん？」
背後から聞こえた黄色い声、と言う程には高くないのだが、闇の精霊たちの歓声にスタンクは振り返る。魔法でいつもより開けた視界の先に、モモンガが数体の闇の精霊に囲まれていた。声をあげていたのは、彼女達だろう。
「ほ、本当に大丈夫なんですか？」
「う、うん、もう一回さっきのやって」
「では……負の接触（ネガティブ・タッチ）」
そう言いながらモモンガが闇の精霊に触れた瞬間、女の子は身を仰け反っていた。まるでそれだけで絶頂したかのような感じだ。
「す、すごい！　お、お兄さん、もっとやってもっとやって。すっごい気持ちいいから」
「ほ、ほかには無いの？　もっと闇の属性は無いの？」
「色々ありますが……。苦しかったりしたら言って下さいね？　スキル発動＜絶望のオーラⅠ＞」
「あ、あああああ！　こ、これすごい！　き、気持ちいいよぉ」
モモンガの身体から、何かオーラの様なものが吹き上がる。その効果内なのだろうか、周囲の闇の精霊が快感に仰け反りながら歓声をあげていた。
「あいつ何やってるんだ？」
スタンクでは理解できない何かをモモンガがしている。そしてそれはどうやら闇の精霊には大好評らしい。
「じゃあこれはどうですか？　スキル＜絶望のオーラⅡ＞」
「い、いいよぉ、お兄さん……。もっと……もっと浴びさせてぇ」
すっごいメロメロにさせてる。そしてスタンクの隣からごくりと生唾を飲み込むような音が聞こえた。
「ご、ごめんね、人間のお兄さん。す、すぐ戻るから」

「はあ？　ちょっと――」
　スタンクの伸ばした手が空を切る。スタンクの相手をしてくれていた女の子が、モモンガの方に駆け寄って行った。
「ふふ、楽しくなってきた。じゃあ次はこれです。スキル＜絶望のオーラⅣ＞！」
　さらに深いオーラがモモンガの身体から吹き上がる。オーラを浴びた闇の精霊たちはさらに大きな歓声を上げて、身を悶えさせていた。モモンガの身体から噴き出たオーラがスタンクの近くまで伸びてきたので、興味本位で手を伸ばしてみる。
「それ不味い奴だから」
　声と共に肩を引かれる。オーラに触れる寸でのところで止められた。スタンクを止めたのは弐式炎雷だろう。頭巾を脱いだ姿を初めて見た為に疑問形になるが、その弐式に肩を掴まれていた。
「そんなにヤバいのか？」
　尋ねると弐式炎雷はそののっぺりとした顔を、恐らくだが、苦々しく歪める。
「相当不味い。永続効果のあるバッドステータス。あの子達は平気みたいだけど」
「あああー。女の子全部モモンガさんに持っていかれてたー」
　スタンクと同じく相手が居なくなったのだろう。フラットフットもスタンクの方に歩いてくる。
「皆さん、即死耐性はありますか？　これより凄いのもありますよ？」
「うんうんうんうん！　やってやって！　私たちは大丈夫だから、くうぅぅぅぅ！　む、夢中になっちゃう！」
　気を良くしたモモンガはさらに濃いオーラを吹き出し、そのオーラを闇の精霊たちが残らず吸い取っていく。
「……あのオーラには絶対触れるなよ、スタンク。つーか調子に乗りすぎだろう、モモンガさん」
「あの子達が吸い取ってるから問題無さそうだけど、街中でなんて真似してるんだあの人」
　弐式炎雷とフラットフットの反応から、あのオーラはさらにヤバい

らしい。
「はっははは！　それでは、私の切り札をお見せしようじゃないか」
普段のモモンガから、たまに見せる支配者然とした口調に変わる。同時にモモンガの背後に十二の時を示す時計が浮かび上がった。それが浮き上がった瞬間、弐式炎雷とフラットフットが驚愕したように叫ぶ。
「ばッ！＜あらゆる生あるものの目指すところは死である（The goal of all life is death）＞!?」
「止めるぞ、弐式！　俺の理想郷を、潰されてたまるか！」
二人の異形が駆けだすころには、スタンクの股間の羅針盤は、すっかりとしおしおになっていた。
『闇の精霊（シェイド）専門店　私たちがモテないのはどう考えてもオモテの店が悪い！』

◇オーバーロード　モモンガ
10
ごめんなさい。少し調子に乗りすぎました。
ですが、闇の精霊さんと死の支配者（オーバーロード）である私との相性は非常に良い！
＜絶望のオーラ＞がここまで喜ばれるとは。私の行動一つで女の子が悶える様は快感です。最近は女の子を責める喜びに目覚めましたが、今回も非常に楽しめました。誘ってくれたフラットさんに感謝です。また一緒に行きましょうね！

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷
7
女の子のレベルは高い。料金も安い。集団でそういう事するのも俺には合ってる。
もっと高評価でも良いんだけど、やっぱり俺的にもうちょっとおっぱいは欲しい。綺麗な黒髪は好みなんだけどさ。
種族的な特徴なんだろうね。女の子は一杯いるんだけど、みんなそ

んな感じだったよ。
というかモモンガさん止めるのに疲れたわ。

◇暗殺者　フラットフット
１０
ついに辿り着いた俺の理想郷！　つるりんぺたん天国！
貧乳が好きであってロリでは無い俺には、ハーフリングの子とかは無理筋なので、シェイドの子達は凄い魅力的。女の子はドストライクだし、周りからプレイを覗かれているって興奮もあって、マジで俺向きの店だと思う。
思うんだけど……モモンガさんに女の子全部持ってかれたよ……。同道する人は良く選んだ方が良い。自分よりシェイドの子にモテる相手だと、惨めどころか、相手してくれる子も居なくなるよ！
という訳で、俺と一緒にこのお店に付き合ってくれる人募集中です。ただモモンガさんは駄目だぞ！

◇人間　スタンク
５
闇の精霊のお店だな。光の精霊のお店に対抗しているのか、システムはほぼパクり。だがシステムは同じでも、料金設定が向こうより安かったり、闇の精霊の特徴が光の精霊と真逆なので、棲み分けは出来る。
向こうは大部屋でも目が疲れるくらいに眩しいんだが、こっちは逆で集まれば集まるほど闇が深くなる。というか暗すぎて何も見えない。この時点で集団乱交の長所を完全に潰してるな。対策無しでは暗がりでヤッてるだけなので、それ目当てならおすすめできないぞ。
料金は安くて良いし、女の子も貧乳が受け入れられるならレベルは高い。だけど、陰気な女の子が無理やり陽キャを演じてる感はある。根底に精霊らしい抜けてる感じはあるけどな。
人気が無いお店らしいので、自分達だけで女の子を独占出来るのは高評価。ただし連れて行く奴は、良く選んだ方がいい。闇の精霊に特

効な奴が居ると、女の子を全部持っていかれる、チクショウ。

水槽のハーレム

「バカ！　バカペロン！　なんだってそんなお店行くんだよ！　モモンガさんまで巻き込んでぇ！」
「痛い！　マジ痛いから！　羽を抜くな！」
　餡ころもっちもちがペロロンチーノに馬乗りになり、鎧に覆われていない無防備な部位から遠慮なしにブチブチと羽を毟っていた。
　やまいこは、ナザリック第九階層ロイヤルスイートのぶくぶく茶釜の自室の椅子に腰掛けながら、ため息をつきその光景を眺めていた。
「あんちゃん、やり過ぎたらダメだよ？」
　そう一言忠告するが、餡ころもっちもちの羽を毟る勢いは弱まらない。再びやまいこはため息をつく。反撃しない弟君は、本当に良い子だなーと感心しながらも。
「た、助けて！　助けて下さい、やまいこさん！」
「……うん、＜大治癒（ヒール）＞」
　やまいこの位階魔法が発動し、ペロロンチーノの傷が癒される。即ち抜かれたばかりの羽毛が再生する。
「ちがっ！　そういう助け方じゃなくて――いたいぃ!!」
　再び生えてきた羽毛を、餡ころもっちもちがこちらも再び遠慮なしに毟る。
　弟君が良い子なのは事実だけど、反省も必要だよねとも思うから、根本的な助け方はしない。
　やまいこは三度ため息をついて、興味を失ったように対面に座るぶくぶく茶釜に向き直る。
　弟の悲鳴に眉根、眉は無いけど、一つ動かさずに、ぶくぶく茶釜は円卓から持ち帰ってきたレビューを眺めていた。
「異世界でそういうお店に行ってたなんて、ちょっと信じがたいね、かぜっち」
「信じられないのは、異世界の存在？　それとも男どもがそういうお店行ってた事？」
「……両方かなぁ？　異世界もだけど、まさか先生とたっちさんまで

関わっていたなんて想像もつかないよ」
「確かに二人のイメージからはかけ離れてるかもね」
そう言ってぶくぶく茶釜から、二枚のレビューを差し出される。おっかなびっくり中身に目を通して、今日何度目かのため息をついた。
死獣天朱雀とたっち・みーのレビューを読んでるだけで、軽く頭が痛くなる。
「まあ、男の子だもんね」
そういってやまいこは頷く。ギルドの男性陣は男の子なんてリアル年齢じゃないが、自分の生徒たちを重ねて思えば、可愛いものだ。
「さすが、やまちゃん。……おい、弟」
ぶくぶく茶釜はレビューから顔を上げて、ペロロンチーノの方を向く。
「痛い！　何、姉ちゃん!?　だから痛いって！　今話しかけられてるんだから、勘弁してくれませんかね!?」
「うるさーい！」
「ほらほら、あんちゃんも。暴力ヒロインは流行らないぞ？」
「いや、姉ちゃん、俺はロリなら暴力ヒロインもアリだとぉ！　だから止めろって！　つーか餡ころも叱るって話はどうなったんだよ!?」
「あんちゃん、めっ！」
ぶくぶく茶釜に触腕を向けられて叱られた餡ころもっちもちは、素直に羽を毟る動きを止めて、馬乗りになっていたペロロンチーノから立ち上がる。
「人の部屋の物を勝手に持ち出しちゃだめだよ？」
「……ごめんなさい」
ぶくぶく茶釜の注意に続いたやまいこの言葉にも、餡ころもっちもちは素直に頭を下げて謝罪をする。
「それで終わりかよ!?　弟に対する説教と違いすぎませんかね！」
そう叫びながらペロロンチーノが立ち上がる。
所々容赦無く羽を毟られて悲惨な姿だが、それ以上は何も言わない所はすごいなとやまいこは感心する。

「んで、何、姉ちゃん？」
「ああ、今日もモモンガさん達は出掛けてるんだろ？　今日は何処行ってるんだ？」
「さっきまで耐久説教を喰らってて、ようやく解放されたら餡ころさんに今の今まで、羽を毟り続けられていた俺に聞くか？　いたいぃ！　不意打ちで尾羽を抜くな！　モモンガさんに怒れよ！」
餡ころもっちもちにペロロンチーノが怒鳴る。
モモンガに怒れと怒鳴ってはいるが、ペロロンチーノも餡ころもっちもちの気持ちを半分しか分かってないなーとやまいこは思う。勿論勝手に伝える事はしないが。
「良いから教えろよ。モモンガさんから＜伝言＞受けてたのは知ってるんだぞ？」
「……何処に行くかは知らないし、＜伝言＞は弐式さんからだよ。一個問題を片付けてくるって」

◆

「……いらっしゃいませ。お客様方は当店初めてですか？」
丸メガネの受付に、モモンガ達は頷く。
『水槽のハーレム』。
モモンガ、ヘロヘロ、武人建御雷、そして忍者装束の彼の四人で、このお店に訪れていた。
「……おい、大丈夫か、モモンガさんにヘロヘロさん？」
「な、何がですか!?」
「わ、私達はいつも通りですよ！」
建御雷の指摘に、上擦った声が出る。冷静を装ってみるが、無理もない。こんな緊張感は、初めてサキュバス店に訪れた時以来だ。
受付の説明は聞いてはいるが、耳には入ってない。
お店のシステムは、ゼル達のレビューで理解している。改めて説明を受ける必要はない。ただ、心を落ち着かせる時間が欲しいだけだ。
モモンガ達は案内された椅子に腰掛けながら、目の前に並ぶ水槽を

食い入るようにじっと見つめる。
「ひょ、憑依店。とうとう来てしまいました。こ、これ上手くいったら私達本当の意味で卒業できるんですね！」
「おおお落ち着きましょう、ヘロヘロさん！　大きく深呼吸をするんです！」
「……アンタらって、呼吸してるのか？　というかよ、貝とか海老相手に卒業って逆に悲しくないか？」
　呆れた様な建御雷にモモンガとヘロヘロは目も無いのに睨みつける。
「最初から経験者だった人が余裕こいてますよ、モモンガさん」
「ええ、建御雷さんみたいな元リア充には私達の気持ちはわかりませんよ」
「俺だって別にリア充では無かったけどよ。普通社会人ならそういう感じになる事が一、二度はあっただろう？」
「あー。あー。あ――。聞こえないー。聞こえませんー」
　ヘロヘロが嫌々するように触腕で、もし人間なら耳がありそうな部位を押さえる。
「それではそろそろ始めますが、大丈夫ですか？」
　受付の言葉にモモンガは頷き、再度自身のパッシブスキルなどが切れているか確認する。あとは耐性のせいで憑依失敗する事だけが怖いが、女体化は上手くいっていたので、なんとかなるだろうと思う。
「では行きます。目を閉じて――――無い方達は心の目を閉じてください。そのままゆっくり……」
　そしてモモンガ達の意識は落ちて行った。

◆

「やっほー☆ソールちゃん、また来ちゃったー」
「デ…デミア先生っ!?　それにティエスも！」
　突如姿を見せた師であるデミアと、同門であるティエスの姿に、ソールは思わず声を上げる。

神格存在と思われる四人組に憑依魔法術式が上手く作用するか不安だったが、向こうが完全に受け入れてくれたので問題無く発動した。
あとは何か不具合があればすぐ対処出来るようにと、彼らの隣に腰掛けていた。幸い今のところ問題無さそうだが、神格存在達が水槽内にダイブしてから三十分もしない内にデミアが現れ、様々な魔術実験道具を使い魔を使役してどかどかと搬入している。
「え!?　え!?　一体どうしたんですか？」
「んー？　だって分身の監視も無くて、意識も無いなんて、こんなチャンス早々無いでしょう？」
そう言ってデミアが、スケルトンの姿をした神格存在の前に立つ。
「ん。相変わらず凄い魔力ね、お兄さんの魂はしっかり水槽に憑いてるみたいだけど、やっぱりこの赤い球を外すのは無理そうか」
「ねえ、先生ー。止めておきましょうよー。バレたら私達殺されちゃいますって」
デミアの後ろで使い魔に指示をしながらも、ティエスが物騒な事を言う。
「何言ってるのよ、ティエス。ちょーっと調べさせて貰うだけよ。水槽から戻ってくる数時間でどこまで調べられるか分からないけど、ほんのちょびっとサンプル片でも取れれば御の字よね～♪」
笑いながらデミアが、ソールでは扱えない高位魔法を何重にも指先に籠めていく。
「……デコイとシてる時は、触れただけじゃ何も防壁は作動しなかったけど、念には念を入れてね」
そう言ってゆっくりとデミアが赤い玉に向け指先を伸ばしていった。
その指先が、玉に触れるか触れないかの寸でピタリと止まる。
「はい、そこまで」
男の声と共に、デミアの喉元に恐ろしい力が込められた短剣の刃が触れていた。
「ひっ!?」

思わずソールは腰を抜かし、デミアの背後に佇む、一瞬前までは居なかった筈の黒衣装束の男を見上げる。
「……あら、忍者さん。今は水槽内でお楽しみじゃなかったのかしら？　分身体も消えてたはずだけど？」
デミアの言葉に、ソールは慌てて神格存在の一人を確認する。黒衣装束の男は今も椅子に腰掛け、憑依魔法もしっかり発動している。彼の魂は、水槽の中にあるはずだ。
「そこに座ってるのは、俺の装備を着込んだスタンクだよ。憑依魔法が発動したなってタイミングで、分身全部ひっこめた。今着てる俺の装備はサブ装備。体格でバレないかって冷や冷やしてたけど、モモンガ玉に夢中で気づかなかったみたいだね」
短剣を喉元に添えながら、デミアが忍者と呼んだ男はつらつらと疑問に答える。
「弐式達のレビューに、アンタの店があったからな。絶対に目を付けてると思ったぜ」
「自分以外の魔法都市の魔法使いを使うのは良い手だと思うけど、痕跡を消し過ぎだね」
声と共に、エルフとハーフリングの二人組も店の入り口から姿を見せる。以前この店に訪れたこともある冒険者たちだ。
「狙いはモモンガの紅玉だろう？　魔法使いなら、誰だって気になるよな」
エルフの指摘に、デミアは何も言わずに降参するように手を挙げた。その仕草に忍者の男も短剣を降ろす。
「……まったく勘弁してくれよ。この人最近は落ち着いてるけど、俺らが絡むとヤバいんだって」
忍者は、やれやれと腰に手を置き武器を仕舞う。ソールには隙だらけに見えるが、デミアが動けない所を見る限り、自分では分からないだけなのだろうと怖くなる。
「そんなにヤバいのか？」
「ヤバい。俺達と一緒に手に入れた世界級アイテムに悪戯されたなんて知ったら、モモンガさんがどんな行動起こすか想像するだけで怖

い」
「……マジ？」
「恩には恩を、仇には仇を。過剰すぎる報復が俺達のモットーでもあるけど、モモンガさんはその辺のタガが俺達の中で一番外れてるから」
　忍者の言葉に、全員が言葉を失う。神格存在にそんな事をさらりと伝えられて、冷静で居られるはずが無い。
「俺達がこっちで作るのは、友達とオキニだけで十分だっての」
　呆れる様に言う忍者に、エルフがニヤニヤしながら気安く肩を叩く。
「友達って俺らか？」
「恥ずかしいから言わせんな」
　もしかして照れているのだろうか。忍者が顔を伏せる。
「じゃあ、オキニは私達ですか？」
　ティエスが指を立てて笑顔になる。
「いや、まあ、そうですね……。お世話になってます……」
　これまた照れたように忍者が言う。
「もう、先生ー。おとなしく謝って、私達も仲良くなっちゃいましょうよー。その方が絶対いいですって」
「諦め早いわよ、ティエス！」
「だって。この人達を出し抜くより、そっちの方が絶対楽ですって」
「どうせ抜くならあっちの方か」
「……ゼル。スタンクみたいな事いうのは止めてくれ。つーか何でゼルとカンチャルはズボン脱ぎ始めてるの？」
　忍者が手で顔を押さえながら、呻く様に言う。嫌な予感を覚えたソールはエルフとハーフリングに視線を向ける。
「まあ、どっちにしろイタズラのお仕置きはしないとだしな」
「だね！　こういうのはしっかりやっておかないと、癖になるから」
「いや！　それ普通に犯罪だろう!?」
「犯罪じゃないですよー。合意の上ですから～」
「ちょっと、ティエス!?」

「いやいやいや！そう言うお店なら兎も角、こんなの駄目だろう。駄目だって」
「じゃあ、この娘ならどうですか？」
そう言ってティエスが、ソールを指し示す。
「受付ですけど、ここのお店の娘で、忍者さんも一人だけ遊べてなくて、丁度良くないですか？」
「ティエス！　勝手に！」
生贄にされそうな雰囲気に、ソールが憤慨する。デミアとティエスが何をしていたのかも知らないのに、そんな事をされる訳には行かない。
「この子、巻き込まれてるだけだし!?　つーかマジでゼルとカンチャルはズボンを履けって！　スキルで拘束するぞ！」

『水槽のハーレム』

◇オーバーロード　モモンガ

1

魔道師デミアさんプロデュース店の系列なんでしょうね。相変わらず私達にも効果のある魔法技術には流石だなと思いました。
３０００Ｇで憑依してる間は無制限と、コストパフォーマンスには優れると思いますが、私はその間何もすることが出来ませんでした……。
受け身には辛いとクリム君から聞いてはいましたが、その通りでした。
というかここでガツガツ行けるなら、リアルで童貞では無かったはずですよ。

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷

1

なんだろう。
あそこでそういう流れに乗れないから、俺リアルで童貞だったのか

なー。
問題は一個解決したけど、なんか少し悲しくなった。
あ、デミアさんプロデュース店共通割引券一杯貰ったので、欲しい人は声掛けてね。
デミアさんのところは元々何処も安いけどさ。

◇古き漆黒の粘体　ヘロヘロ

1

海老の身体でも、真の意味での大人になれると意気込んでいきましたが、散々でした。
素人の女の子に積極的になれるなら、そもそも扉通って異世界まで来てませんよって話です。
触ろうとして若干怯えた表情で「……イヤ」とか言われて、首フルフルされたら私は何もできなくなっちゃいますよ！

◇半魔巨人　武人建御雷

2

経験値稼ぐにはもってこいの店だ。
体が海老とか貝だから自分の動きに違和感はあるが、すぐに慣れる。
慣れるし、美的感覚も同化してるから、女の子は可愛く見えるんだが……。
なんか沢山の女の人に囲まれるのが、低級淫魔の詰め合わせ以来トラウマになってるのか、体の震えが止まりませんでした。

◆

「ははは！　ここまで低評価だと、逆に行きたくなるね！」
ナザリックに戻り今回のレビューを発行し終え、それを読んだ生産職のあまのまひとつが愉快そうに笑う。
「俺もナザリックに籠ってばかりいないで、偶には遊びに行こうかな

……ってみんなどうしたの？」
なぜか『水槽のハーレム』をレビューしてきたモモンガ、ヘロヘロ、武人建御雷の様子がおかしい事に気付いたあまのはひとつは首を傾げる。
「あ、ヤバい。今の仕草マズいです」
「……ええ。私もちょっときちゃいました」
「……これどれくらいで戻るんだ？　ずっとって事は無いよな？」
「そもそもオスの海老は普通に海老だったんですけど、なんであまのまさんだけ……」
モモンガの漏らした言葉に、あまのまひとつの傾げる首の角度が深くなる。
「俺がどうかした？」
あまのまひとつの疑問にモモンガ達は顔を見合わせ、そして声を合わせて伝える。
『あまのまさんが可愛く見えます』

ドール・パペット・ゴーレム　性のマリオネット

「モモンガさん、この前メコンさん達がアマゾネスさんのお店に行ったレビュー読みました？」
　円卓に腰掛けるヘロヘロが、対面に座るモモンガに笑いをこらえる様にしながら問いかけてくる。何が面白いのだろうかとモモンガは思いつつも、ヘロヘロの問いかけに頷く。
「ええ、勿論読みましたよ。なんでもアマゾネスと戦って勝てば料金がタダになるというお店でしたね」
「そうです、その通りです。メンバーも戦い大好きな人達で行ったみたいですね。まあ、それはいいんですけど……うふふふ」
　もはや笑いが隠せていないヘロヘロが楽しそうに続ける。
「今はそうでも無いらしいんですけど、アマゾネスの人達って戦闘時に弓を引きやすいように、おっぱいを斬り落としたりするんですって。ほら、大きいと弓の弦が当たっちゃうじゃないですか」
　その話の何が面白いのだろうかと、モモンガは若干引く。だが、ヘロヘロの笑みの正体はそれではないらしい。
「その話を聞いて、私茶釜さんがめちゃめちゃアマゾネス向きだなーって。ぷーー、くすす。そ、そう思っちゃったんです」
　モモンガは吹き出すヘロヘロの後ろに、いつの間にか円卓に現れたピンク色の肉棒が近寄って来ていることに気付く。
「だって、茶釜さんのおっぱいサイズなら何の心配もないじゃないですか。こんなんですし、あ、もちろんリアルの方の茶釜さんの話ですよ」
「……」
　胸がありそうな場所を、笑いながらスカッスカッスカッスカッと粘体の触腕を振るヘロヘロを、ぶくぶく茶釜が背後から無言で覗き込んでいる。
（ヘロヘロさ――――ん！）
　ブレーキを踏めと心の中で叫ぶモモンガの思いは、ヘロヘロには届かない。

「逆にやまいこさんは向いて無いですね。だってあの人こんなんですもん、こんなん！」
「……」
　触腕でボインボインと、大きな胸を持ち上げる様なアピールをするヘロヘロを、こちらもまたいつの間にか円卓に現れたやまいこが無言で見つめていた。
「あの巨乳に弓の弦がビシバシあたって大変な事になりますからね。あ、もちろんリアルのほうですけど――」
　やまいこが無言で女教師怒りの鉄拳を拳に嵌めて、一度感触を確かめる様に打ち合わせる。そのガツンという大きな音に、ヘロヘロがようやく何かに気付いたようで背後を振り返った。
　そして気付くと同時に――
「ごめんなばぁぃ!!」
　謝罪を口にする黒いフルーチェが鉄拳制裁を受け、モモンガの頬を掠めてものすごい勢いで壁面に激突し、べちゃっという音を立てる。
　モモンガは恐る恐る振り返り壁の染みになった友人を眺め、すぐに視線を円卓の自身の席に腰掛けたぶくぶく茶釜に向けた。怖かったからだ。
「私達を気にする必要無くなったからってさ。いくら何でも油断しすぎじゃない、ヘロヘロさん？」
　壁の染みがドロドロと壁面を伝わって床に落下し、顔を起こす。
「も、申し訳ありません」
「これで聞いてたのがソリュシャンだったらどうするのよ。ＮＰＣにバレないようにって、みんなでルール作ったんでしょう？」
「め、面目ありません。以後気を付けますので……」
「……まあ、いいけどさ」
　目は無いがジト目でヘロヘロを見つめるぶくぶく茶釜が、ため息をついたようだ。
「そ、それでお二人はどうしたんですか？　餡ころさんは？」
　モモンガは話題をなんとか変えようと、二人に無理やり明るく訊ねる。

「ああ、うん。あんちゃんは今、弟の羽を毟ってる。もう少ししたら落ち着くと思うけど、モモンガさんも気を付けてね？　流石にそこらへんの分別はあるだろうけど」
「……ええぇー？」
　餡ころもっちもちがペロロンチーノの羽を毟る意味も分からないし、モモンガが気を付ける理由も分からない。
「はいこれ、モモンガさん」
　分からないが、理由を尋ねるより先にやまいこがモモンガに近寄り、一枚の書類を差し出してくる。
　疑問気に受け取ると、それは異世界に繋がる扉の使用申請書だ。ペロロンチーノから教えて貰ったのだろう。
　そしてその書類には、ぶくぶく茶釜、やまいこ、餡ころもっちもち、ペロロンチーノの名前があった。
「これは？」
「ああ、うん。私達も一回その異世界に遊びに行ってみようかなーって」
　少し驚いたモモンガの問いかけに、ぶくぶく茶釜がそう言う。そのぶくぶく茶釜の言葉に、ヘロヘロがぴょこぴょこと跳ねて自分の席に腰掛け彼女に尋ねる。
「え？　茶釜さん達あっちでインボーを利用するんですか？」
「いんぼー？」
「ええ、インキュバスボーイの略なんですけ――」
「はーい、ヘロヘロさん。少し黙ってましょうかー」
　再び妙な事を言い出しそうなヘロヘロを、モモンガは手で制す。本当この人タフだなと呆れつつ。
「……ああ、察しがついた。そういうのじゃないから」
　ぶくぶく茶釜が呆れたようにピンク色の触腕を振る。
「あっちってさ、普通のお店も色々あるんでしょう？」
「え!?　え、ええ」
　ぶくぶく茶釜の問いかけにモモンガは頷く。文明レベルとでも言うのか、そういうのにそこまでの開きは無いはずだが、何処か妙にレ

ベルが高かったりするのがあちらの世界だ。
「おまけに私達がこの姿でうろついても、悪目立ちしないらしいし。ちょっと普通に楽しんできたいなーって」
「ああ、そういう事ですか」
息抜きという事だろうと、モモンガは頷く。
確かに、向こうではモモンガ達は支配者でもなく、ＮＰＣ達の目も無い。人の姿をしていなくても悪目立ちもしない。良い事づくめだ。
サキュバス店以外の理由であちらを訪れるグループもいるのだから、当然だろう。むしろサキュバス店ばかりに目が行って、女性陣にひた隠しにしていた事を申し訳なく思う。
「ええ、楽しんで来て下さい。扉は何時利用されますか？　茶釜さん達は初めてですから、最優先で利用できますよ」
「ありがとう。まあでも、普通に順番どおりでいいよ。あんちゃんまだ落ち着かないし。もう少し弟でストレス発散させるつもり」
「そ、そうですか？」
「弟君、ちょっと可哀想だけどね」
「平気平気、アイツはあれくらいじゃ凹みもしないから」
微塵の疑いもなく断言するぶくぶく茶釜に、モモンガは姉の弟に対する信頼を見る。いや、これ信頼か？　という考えも過るが、それは捨てておく。
美談にしておけば、薄情者と叫びながら引きずられていった親友に対して罪悪感を抱かずに済むからだ。
「わかりました。あちらのお金は心配しないで下さいね。私が用意しておきます」
「ああー、助かる。あんがとね、モモンガさん」
「いえいえ」
ぶくぶく茶釜の礼に、モモンガは何でもないと笑って頷く。せめてこれぐらいはしないと、女性陣に申し訳ない。
「ところでモモンガさん達は、これからあっちに行くの？」
「あ……あー。はい……」
やまいこの問いかけに、モモンガは思わず口ごもる。もうバレてし

まったとはいえ、女性にそういう事を訊ねられるのは、やはり困る。
「ええ、今向こうに行っているグループが戻って来たら、遊びに行ってきます」
まるで気にする素振りも無いヘロヘロの言葉に、すごいなーとモモンガは感心する。そうなりたいとは思っていないが。
「へぇ？　遊びに行くお店ってどういう所？」
突っ込んでくるやまいこもすごいなーと、アインズはこちらにも感心する。
「クリエイターチームがこの間行って来て満点評価だったお店ですね。あ、その時のレビュー読みますか？」
そう言ってヘロヘロが差し出したレビューにはこう書かれていた。
『ドール・パペット・ゴーレム　性のマリオネット』
と。

◆

「むふっ。むふふふふふふ」
異世界を訪れ、お目当てのお店に向かうヘロヘロは非常に上機嫌だった。モモンガはその楽しそうなヘロヘロに嬉しくなる。
リアルでは死にそうなブラック企業勤めだったらしいが、サキュバス店巡りをするようになってからヘロヘロは非常に楽しそうだ。
それもこれも、こちらの世界のおかげかとモモンガは感謝しそうになるが、ヘロヘロに関してはモモンガに遅れる形で転移してからも割と楽しんでいたなと、世界征服完了までに彼が引き起こした数々の事件を思い出して頭を振る。
この人は、こちらあちらの世界関係なしに、こういう人だったと。
そのヘロヘロに今回の同行者の一人、ぷにっと萌えが声を掛ける。
「楽しそうですねー、ヘロヘロさん」
「わかりますか、ぷにっとさん。ほらこれ見てください」
ヘロヘロがそう言ってぷにっと萌えに一枚の紙を見せる。モモンガも覗き込んでみると、それにはイラストが描かれていた。モモンガ

は知らないキャラクターだったが、黒衣の胸が大きな女性で、網タイツをしっかりと履いている。
「ああ、ヘロヘロさんも描いて貰ったんですね。実は私もなんですよ」
そう言ってぷにっと萌えからも一枚のイラストを見せられた。
「ほら、織田信長です」
ぷにっと萌えが嬉しそうに掲げるイラストに、モモンガは首を捻る。
小卒のモモンガでも織田信長くらいわかるが、あの人物は女性だっただろうかと。
実際ぷにっと萌えから見せられた織田信長は黒衣の軍服に帽子、それにマントを羽織った女性で、モモンガが知るそれとはかけ離れている。
「ああ、ノブですか。ぷにっとさんも描いて貰ったんですね」
「ええ。ユグドラシルでもそうですが、こうしてデザインを起こしてもらえるのは非常に助かりますね。なぜか胸が増量されてますけど」
確認するように今回一緒に扉を通ったメンバー、モモンガ、ヘロヘロ、ぷにっと萌えが最後の一人に振り返る。
「出来ればメイドキャラを依頼されたかったけどね。後は胸は趣味。シャルティアにパッド設定つけてでも貧乳にしたペロロンさん程のこだわりは無いでしょう、ぷにっとさんは」
あの設定画でよくやったよと呟く異形種。
それが「メイド服は俺の全て（ジャスティス）」、ホワイトブリムだ。
「私達がナザリックのＮＰＣ達を創造出来たのは、ホワイトブリムさん達クリエイターチームが優秀だったからですしね」
そういうモモンガの言葉に、ホワイトブリムが嬉しそうに頷く。
「ゲーム性は勿論だけど、ユグドラシルの自由度と再現性が俺達にはたまらなかったし。あっちの世界でもメイドはいるけど、やっぱ俺達の創造したあの子達とは比較にもならない。あの様々に装飾されたメイド服は最高だと思わない？」
そう問われ、モモンガはええと自信をもって答える。彼女達の魅力に、見栄えという力に、どれほど救われたか。

「素晴らしいですね」
「でしょう？　まあ、帝国とかのシンプルなメイド服も悪くないけど。つまりはメイド服は何をしても最高だということ。メイド服こそ人類史上最高の発明だ。ビバ、メイド服」
　胸を張って語るホワイトブリムに、モモンガは思わず苦笑いを浮かべる。変わらないなと。
　どうせなら自分も、ユグドラシルのキャラクターかなにかのデザイン画をホワイトブリムに依頼しとけば良かったかと思ったが、まあ何とかなるだろうと、モモンガは諦める。
　なぜならもうお目当てのサキュバス店に到着したからだ。
「いらっしゃーい。お？　ホワイトブリムさん、いつもお世話になってまーす」
　木目のマリオネット人形のような受付が、そう言ってモモンガ達を出迎える。
　既に一回訪れているホワイトブリムの事を覚えていたようだが、お世話になっているとはどういう事だろうかと首を捻る。
「こんにちは。異形種レビュアーズ名義で予約してるけど、大丈夫かな？」
「大丈夫ですよー。あの子達も予約時間に合わせて空くように、調整してあります」
「ああ、ありがとうね。じゃあ行こうか」
　疑問符を浮かべるモモンガ達を余所に、ホワイトブリムが慣れたように店の奥に進んでいく。
「おおお、これはまた凄いですね」
「でしょう？　これだけのパーツパターンは、ユグドラシルにも負けてないと思う」
　ずらりと並んだ各部のパーツに、ぷにっと萌えが感心した様に呟き、その呟きにホワイトブリムが愉快そうに頷く。
　このお店は髪や目や身体のパーツを組み合わせ、自分好みの女の子ゴーレムを組み立てて楽しむお店だとレビューを読んでモモンガ達は知っているが、このパターンの多さにはやはり圧倒される。

「ここを教えてくれたゼルさんレビューにはマジ感謝。これだけのパーツパターンがあれば、再現出来無いキャラは居ないよ。俺達にはね」
確かにこれはクリエイターチームに火を付けそうだと、モモンガもまた感心する。
「そういえばホワイトブリムさん。さっきの受付さんがお世話になってるって何の話ですか？　他のお客さんも居ないみたいですけど？」
ヘロヘロが先ほどの疑問をホワイトブリムに向けていた。
「ああ、貸し切りにしてもらったんだよ。俺達、このお店の売り上げに貢献しているからさ」
「売り上げに貢献？」
「前来た時にね。まあ見てよ、俺達クリエイターチームの自信作をさ」
そう言うホワイトブリムに、組み立て済みの人形が並べてあるデフォルトコーナーに案内される。
そのコーナーには、一段高いお立ち台の様な台座がある。
そしてそこには六体の組み立て済みの人形が、ポーズを取りながら並べられていた。
それを見た瞬間、ヘロヘロがムンクの叫びの様なポーズで、あらん限りの声で叫ぶ。
「そッ、ソリュシャ――――ンッ!!」
殿堂入り。魔改造禁止。
そんな立て看板と共にお立ち台に並ぶのは、メイド服の違いや装備の違いはあるが、間違いなく六連星（プレアデス）。
その二人いる三女の創造主であるヘロヘロが崩れ落ちた。
「あ、あああ……。そ、ソリュシャン……。どうして貴方がっ！」
「俺としては外装を再現出来無くて不満だけどねー。俺達がこれ組み立ててから、このお店人気爆発らしいよ？」
胸を張るホワイトブリムにぷにっと萌えが、呆れたようにため息をつく。
「まったく。クリエイターチームは何を考えてるんでしょうか？　ナザリックの華。顔とも言うべきプレアデスを見た目だけとはいえ、こ

ういう所で再現してしまうなんて」
　困ったものです。そうぷにっと萌えが続けるが、モモンガはその間に見つけてしまっていた。
「……いえ、ぷにっとさん。六連星（プレアデス）じゃないみたいです……」
「へ？」
　モモンガの骨の指が向けられた先にぷにっと萌えが視線を移す。
「七姉妹（プレイアデス）です」
「おッ、オーレオ――――ルゥ!!」
　一人だけ巫女装束の為に、別物扱いされていたのだろう。
　少し離れた所に置かれたお立ち台に、『本指名Ｎｏ１』の掛け看板を首から掛けられた末妹もそこに居た。本指名ってなんだろうと疑問に思うモモンガの隣で、ぷにっと萌えが膝から崩れ落ちた。
「あああああ!?　アナタまでッ！」
「どう、ぷにっとさん？　隣にいるウカノミタマとオオトシの再現度も大したものでしょう。まあ、オオトシはショタから男の娘に変更しているけど」
　オーレオール人形を挟み込むように、おかっぱでキツネ面を被った少女形態のウカノミタマと、太陽をモチーフにした仮面を被った少年――男の娘に変更されているらしい、オオトシの二体のシモベまで再現されていた。
　モモンガは呆れて、骨の手で自らの顔を覆う。
「いやー、装備とかの外装はともかくとして、見た目だけなら大したものでしょう？　ほら、どの娘も何かしらの人気Ｎｏ１みたいよ」
　ホワイトブリムの言葉通り、再現されたプレイアデスには本指名だ念話指名だの、何かしらのＮｏ１を示す看板が掛けられている。
「その功績が認められてさ、俺達このお店の永年パス貰ってるんだよね。だから今回の料金は気に――おおぉぅ!!」
　台詞は最後まで続かずに、迫った漆黒の粘体で出来た拳を、ホワイトブリムは身を仰け反って何とか回避する。
　ホワイトブリムに攻撃を仕掛けたのは、いつものコアラサイズのヘロヘロでは無く、神話級アイテムすら溶かし尽くす彼の酸性を解き

放った真の姿。
　ゴリラの様なサイズにまで肥大化した全力形態のヘロヘロがそこに居た。
「……ユリ。……ルプスレギナ。……ナーベラル。……ソリュシャン。……シズ。……エントマ。そして……オーレオール」
　ヘロヘロの窪んだ眼窩から流れ落ちた粘液が、ジュッという音と共に床面に穴を穿つ。
「貴方達を玩んだこの罪は、やまいこさん、メコンさん、弐式さん、ガーネットさん、源次郎さんに成り代わり、私が贖わせます。……同じ一般メイド三柱のよしみです。せめて苦しませず一気に溶かし尽くしますよ、ホワイトブリムさん……」
　モモンガが聞いてきた中でもっとも悲しみと怒りが渦巻いたヘロヘロの声に、あ、これマジだと思う。
「まーって！　待て！　待って！　お前がその状態で暴れたらこの付近誰も住めない酸の沼地になるぞ！　異世界では無闇に暴れないルールはどうした!?」
　自分の命が掛かっているからだろう。ホワイトブリムが必死の説得を試みる。
「安心して下さい」
　普段の三倍増しに低い声のぷにっと萌えが答える。
　ヴァイン・デスの彼の体から伸びた蔓が、まるで建物を支える様に周囲に這っていた。
「このフィールドは私が支配しました。ヘロヘロさん、気にせず全力でやって下さい」
「ありがとうございます、ぷにっとさん。さあ、ホワイトブリムさん。何か言い残すことはありますか？　ああ、シクスス達の事は心配せずに。これからは私が責任をもって、彼女達も守っていきますから」
　微塵も冗談の含まれない声で、ヘロヘロがそう宣言する。
「待て！　ヘロヘロもぷにっとさんも！　これは違うんだ！」
「今さら言い訳ですか？」
「そうじゃない！　ここに居るのは外面だけを再現した紛い物だ！

そんなものが俺達の！　俺達が心を籠めて創造したナザリックのＮＰＣとでも言うのか!?」
「……む」
　必死にホワイトブリムは続ける。
「ＮＰＣ達をＮＰＣ足らしめているのは何だ!?　その心だろう！　魂だろう！　ここに在るのは心持たない空の器だ！　ナザリックのＮＰＣ達は俺達の設定（ねがい）が！　心があるから、愛おしいんだろう!?」
　再現されたユリ人形の首に駆けられた看板に「おススメ性格　ボクっ娘　女教師」とか書かれてるが、ホワイトブリムの身が本当に危なそうなので、モモンガは黙っておくことにした。
「そもそもこんな手抜きの量産品メイド服を着せた人形を、プレアデスと呼ぶのはデザイナーの一人として俺が許さん」
　まあ、そういうメイド服も趣があるんだけどねとホワイトブリムが続ける。
　その言葉に店に這っていた蔦がぷにっと萌えに戻って行き、ヘロヘロも酸性を抑えるためのいつもの姿に戻る。
「……それも、そうですね」
「まあ、今回はそういう事にしておきましょう」
　少し納得したのか、戦闘態勢が解かれる。その二人に胸を撫でおろすホワイトブリムにモモンガが尋ねた。
「さっきの言い訳、ホワイトブリムさんが考えたんですか？」
「いや、るし★ふぁー。怒られたらこう言えって」
「……ああ、やっぱりあの人絡んでるんですね」
「はぁー、まあ一件落着か。ここまで怒られるとは予想外だったけど」
　床に安心した様に座り込むホワイトブリムに、ぬっとヘロヘロとぷにっと萌えの二人が見下ろす。ヘロヘロは見上げるだが。
「何言ってるんですか」
「この子達は封印処置をとりますよ」
「え！　だって俺達もう報酬もらってるし！」
　そう言って永年パスを掲げて見せるホワイトブリムに、ヘロヘロとぷにっと萌えが意地悪く笑う。

「新たに再現すればいいじゃないですか。この子達にも負けない魅力的な子を」
「へ？」
『ドール・パペット・ゴーレム　性のマリオネット』

◇オーバーロード　モモンガ
8
色々ありましたが、とりあえずその辺は割愛します。クリエイターチームの身の安全の為に。
お店のシステム関連は既にクリエイターチームがレビューを上げてますので、そちらを見ていただければと思います。ですので、この辺も割愛します。
ゴーレムを再現するだけで今回は終わってしまいましたが、わいわいと、あーでもないこーでもないと、皆さんと話し合いながら何かを作るのはやはり楽しいですね。
ナザリックを攻略した直後を思い出して、私は楽しかったです。
しかし、ホワイトブリムさんの描くあの細緻な刺繍が施されたメイド服は、目の前で描き起こされても、やはり信じられないと驚愕します。
絵が描けるというのは、やはり凄いですね。

◇古き漆黒の粘体　ヘロヘロ
8
衣装はどうしたって既製品になるのに、イラストに描き起こされたあの刺繍の精密さは常軌を逸してます。
よく資料もなしに描けるなー。
技術は心から称賛しますよ。
とにかく、滞在時間の殆どを使って四人で新しい看板になる子達を作り上げるのに必死でした。
私としてはＡＩを組み込んで核も弄りたいんですけど、あれは魔法

技術ですからね。どうしようもありません。
それでもなんとか、時間内で同じ数のデフォルト人形は再現することはできました。
なんだかんだで、楽しかったな―。

◇ヴァイン・デス　ぷにっと萌え
８
あの綿密なデザインのメイド服を着せたヒロインの漫画を毎月連載してたって、やっぱあの人頭おかしい。あ、いい意味で、ですよ。
転移した世界でナザリックを訪れた人々が、感嘆の呻きを上げるのは見ていて誇らしかったですが、やはりクリエイターチームの力が大きかったんだなと、改めて思いました。
制限時間もあり作業に追われましたが、それでも何とか間に合いましたし。
やはり何かを創り出すというのは、楽しいですね。

◇メイド服は俺の全て（ジャスティス）　ホワイトブリム
１０
今回の罰として、俺がリアルで連載していた漫画のヒロインたちをみんなで再現することに。
とにかく急いで人気のあったキャラクターと、個人的に思い入れがあったキャラクターを描き起こして、それを元にみんなで再現していきました。
妥協するつもりはないので、事細かく色指定も含めて注文を出したんだけど、やっぱみんなユグドラシル時代にあのＮＰＣ達を製作しただけはある。見事に再現してくれた。
そして再現された彼女達を見て、ちょっと嬉しくて泣きそうになった。
もし俺の漫画が実写化されてたら、こうなったのかなーって訳も分からない感動に襲われたんだよ。
うん、この感動は忘れないでおこう。

受付の子に俺の漫画を渡しておいたら、サムズアップされた。好評らしく、この子達ならいけるってお墨付きも貰えた。やっぱ肯定されると嬉しい。

そして最後に、この子達がこのお店で看板娘としてお客さんの相手をするんだなーと思うと、これまた訳の分からない感情に襲われた。

自分の漫画のエロ同人誌を初めて見たあの時の感情に似ている。でもないかな？　立体化されてるし。

この子達が働いているところを想像すると湧き出るこの感情については、たっちさんとイイ感じに語り合えそうな気がする。

まあ、なにはともあれ。お疲れさまでした。

幕間―2

ナザリック第九階層「ロイヤルスイート」。
その中に一室だけ、一般メイドの立ち入りを禁ずる部屋がある。
正確には、部屋の一画が立ち入り禁止になっているのである。
そのロイヤルスイートの間取りは他のギルドメンバーの部屋と同じ。違うのは、壁で部屋を仕切り、その中に六畳一間を再現している事である。
ナザリックが転移した世界の素材を用いて作った畳を敷き詰め、その畳敷きの六畳間の中心に貧相なちゃぶ台がちんまりと置いてある。
それだけなら、趣味の範囲だ。一般メイドの立ち入りを禁ずる理由はない。立ち入りを禁止する理由は一つ。
その部屋があまりに汚いのだ。
汚部屋である。
足の踏み場もない程にゴミが散乱し、それが引かれっぱなしのせんべい布団にも侵食している。ゴミに紛れ、様々なものも所狭しと置かれていた。
一般メイドがこの部屋を見たら、泣きながら自らの創造主か、ナザリック支配者であるモモンガに懇願するだろう。
どうか掃除をさせて下さいと。
そしてそんな部屋でうごめく異形が一体。
この部屋の主であるナザリックの支配者の一人であり、ギルドアインズ・ウール・ゴウンのメンバーの一人、源次郎である。
「……こんなものかな?」
そう言って彼はちゃぶ台に広げていた紙や羊皮紙の分類を終える。
その紙や羊皮紙は、ギルドアインズ・ウール・ゴウンの面々が異世界で体験したサキュバス店レビュー、その原本である。
源次郎はそれを、様々な項目ごとに分類し、整理していたのだ。
「だけど弐式さんも、レビューを纏めて書籍にしようなんて、思い切った事を考えるよなー」
そうこれは、異世界を発見した弐式炎雷から依頼された作業なの

だ。
異世界に繋がる扉を発見し、その世界にギルドメンバーが訪れる様になって早半年。
毎日毎日フル稼働している扉の働きに比例するように、ギルドのメンバーが書いたレビューの束は分厚く、そして多様性を持ち始めていた。
基本のテンプレート用紙はあるのだが、あえてそれに一工夫する者もいる。クリエイターチームなどは、自ら描き下ろしたイラストを添えたりと、一手間も二手間も掛けていたりする。
それ以外にもメンバーの知らなかった一面、まあ性癖だが、を知れるこれらを一回限りのレビューとして終わりにするのは勿体ないと、弐式炎雷が何かの形にしようと提案したのである。
それが書籍化だ。勿論ＮＰＣ達には秘密なので、製本は全て自分達で行う。図書館の設備を、司書長にバレないようにこっそり利用すればいけると踏んだのである。
そしてその前段階である仕分け作業を、源次郎が請け負ったという訳だ。
「流石に風俗――サキュバス店レビューの仕分け作業なんて初めてだけどね」
一人の作業だから、こんな独り言も出てしまう。だけど源次郎はそれが嫌いなわけでは無い。もくもくと作業をするのは好きなのだ。
一通りの仕分けを終えた源次郎が、分厚いレビューの束をアイテムボックスに丁寧に仕舞う。隣の、同じ源次郎の部屋なのだが、部屋に気配を感じたからだ。その気配の主は源次郎の六畳間に繋がる扉を小さくノックする。
この扉もいつかふすまに変えたいなーと源次郎は思いながら、ノックに応える。
源次郎の六畳間を訪れるのは、ギルドのメンバーを除けば二人だけだ。
一人と言っていいかは分からないが、一人は恐怖公。同胞を源次郎の娘におやつ代わりにされて困っていると偶に相談に来る。

そしてもう一人が――

「お父さぁーん」

源次郎が創造したＮＰＣエントマ・ヴァシリッサ・ゼータである。

エントマはトコトコとゴミを避けながら源次郎の所まで歩いてくると、この部屋で唯一座れる場所、すなわち源次郎の膝にダイブしてくる。

「お帰り、エントマ。今日は何か捕まえられた？」

源次郎が自分の膝にダイブしてきたエントマの背中をさすりながら尋ねると、エントマはえへへと嬉しそうに笑う。勿論仮面状の蟲である表情に変化は無いのだが、その内側では間違いなく笑顔だろう。

「今日はぁ、弐式炎雷様をぉ、捕まえちゃいましたぁ」

「おお。凄いなー、エントマは。弐式さんを捕まえたんだ？　えらいえらい」

そう褒めて源次郎は、エントマの仮面の下の彼女の顎をくすぐる様に撫でてやる。そうするとエントマは口唇蟲の声では無く、彼女本来のやや硬質的な声でキュィキュィと嬉しそうに鳴く。

「弐式炎雷様もぉ、こんなところに巣があるなんて気づかなかったぁー。エントマは凄いってぇ、褒めて下さいましたぁ」

本当に嬉しそうなエントマに、源次郎も嬉しくなる。

エントマはナザリック内にいくつか獲物を捕らえるための巣を持つ。そのうち一つに弐式炎雷が掛かったのだろう。勿論彼が本気で捕まるわけはない。当然ワザとだ。

ナザリックのＮＰＣは設定や種族本能により、様々な欲求を抱えている。その欲求を出来る限り穏便に満たしてやるのが、創造主であるギルドのメンバーの仕事でもある。

エントマには捕食本能がある。獲物を捕らえたいという欲求がある。それを満たしてやるために、ギルドのメンバーの幾人かはたまにフラっと彼女の巣に囚われてやる。

主にエントマの姉であるプレアデスの創造主達やモモンガ、たっち・みーに武人建御雷。稀にウルベルトが捕まってくれることもある。

要するに、創造主がエントマに捕われてもその真意に気付き、理解してくれるＮＰＣを持つ者達が順番で捕まってくれるのだ。
そのためガーネットは不可だ。一度捕まって、静かに怒ったシズとエントマが喧嘩をし、宥めるのに苦労をした。
（今度お礼をしないとなぁ）
仲間を捕まえたエントマは嬉しそうに、源次郎に報告しに来るのだ。今日は誰々を捕まえましたぁと。それが源次郎には可愛くてしょうがない。
エントマがギルドメンバーを捕まえたと報告しにくるのも、恐らくは源次郎が喜ぶからだろう。でなければ、戦闘メイドプレアデスの一員であるエントマが、至高の御方を捕らえるという不敬な真似はしない。
そのため本当にエントマの欲求が満たせているのか分からないが、彼女は笑い、源次郎はそんな娘の姿を見れて幸せなので、とりあえず今はこれでいい。
「お父さんはぁ、今日はお出かけしないんですかぁ？」
「ん？　そうだね。今日はずっとナザリックにいるよ。エントマはどうしたい？　一緒にどこかに出掛ける？」
源次郎の問いかけにエントマは、「んー」と考え込む素振りをする。
「今日はぁ、お父さんとぁ、一緒にお部屋で過ごしたいですぅ。お父さんのお部屋、落ち着くんでぇ」
この汚部屋で落ち着いちゃうのは自分に似たのかなと源次郎は苦笑いしつつ、愛娘の頭を撫でてやることで、その願いに応えるのだった。

◆

――――流石に。
アインズ・ウール・ゴウン魔導国首都、エ・ランテル。そこに築かれた王城。その王たるモノの執務室に続々と運び込まれる羊皮紙の分厚い束を眺めながら、モモンガは思う。

――行き過ぎたっ、異世界！
そう骨の手で顔を押さえる。
「どうかなさいましたか？　アインズ様？」
「ああ、いや。何でも無いのだ。アルベドよ」
大量の羊皮紙、アインズ・ウール・ゴウン魔導国の主、魔導王たる自分が目を通さなければならない書類の山を見上げながら、モモンガはアルベドになんでもないと答える。
「……これほどの量を処理するには、アルベドも苦労したのではないか？」
「いえ、そんな事は⁉　定められた就業時間はしっかりと守っております！」
慌てて否定するアルベドに、モモンガは頷く。今のは質問が悪かっただろう。
「いや、この山にアルベドの頑張りが見えてな。ありがとう、アルベドよ」
そう褒めてやると、当然の務めなどと口にしているが、アルベドの背中に生えた羽が嬉しそうにパタパタと揺れていた。
（仕方がない。しばらくは魔導王の、アインズの仕事に専念するか）
仲間がいる今、魔導王アインズの、モモンガの仕事はかなり減った。仲間達がモモンガの仕事で出来る部分は絡めとり、持って行ってくれるのだ。分散したために、いくらちょくちょく異世界に赴いているとはいえ、ここまで溜まる事は無い。
単純に、アルベドが最近何かと留守がちなモモンガを引き留めるために、頑張ったのだろう。人知を超えた才媛であるアルベドの頑張りを、元々一般人のモモンガが処理するには正直手に余るが。
（いや、でも。魔導国の就労時間は定めてるんだし。それをトップが破るのは不味いよな、うん。アフターファイブを楽しむのもありなんじゃないか？）
そんな事をモモンガは考える。たぶん誘えば、ちょっと一軒感覚で乗ってくるメンバーは多いだろう。そんな事を想像しつつ――
「アインズ様？」

アルベドから、声が掛けられた。モモンガは今は仕事の時間だと、思考を切り換える。このままではボロが出てしまいそうなので、ひとまず異世界の事は頭の片隅に追いやる。片隅にはしっかり異世界があることから、モモンガのハマりっぷりが分かるが。

「ああ、アルベドよ」

「なんでしょうか？　アインズ様？」

モモンガは書類の山から一番手近な物を掴み、その分厚さに辟易しながらも、アルベドに話しかける。

書類を運び込んだエルダーリッチ達は退室し、今はアルベドとモモンガの二人だけだ。ならば良いだろうと思う。

「今は私とお前しか居ない。気にせず私の事はモモンガと呼ぶがいい」

そう言うとアルベドが、信じられないというような顔で、頬を赤く染めた。美人は驚いた顔をしても美人だなとモモンガは笑う。

「はい！　畏まりました！　モモンガ様!!」

こんな事を自然に言えるようになったのは、あちらの世界のおかげかなと思いつつ。

出会って数分で初夜なんてもったいない？

「結婚を、したいんです！」

そうペロロンチーノは、深夜のナザリック地下大墳墓の巨大図書館「アッシュールバニパル」で叫んだ。

休眠不要のアンデッドの司書長達に無理やり休息を与え、モモンガ達は連日深夜の製本作業に追われていた。製本しているのは勿論モモンガ達のサキュバス店レビューだ。今現在図書館で製本作業中なのは眠ることの出来ないアンデッドであるモモンガに、同じく眠る事の出来ないハーフゴーレムの弐式炎雷、その二人。

ペロロンチーノはそんな二人の前にふらりと現れると、前置きも無しにそう叫んだのだ。

モモンガは、もしギルドの誰か一人に背中を預けろと言われれば、間違いなくペロロンチーノを選ぶだろう。その際の相性等もあるだろうが、彼とならばそれを覆すことが出来ると、モモンガはそう確信している。

そんな親友相手だが、やはり「いきなり何言ってるんだこの人？」という思いは抱かずにはいられない。そんな気持ちを抱くのも慣れっこではあるのだが。

「……わかる」

そんなペロロンチーノの意味不明な叫びに応えたのは、隣で作業を続けていた弐式炎雷だ。

（……わかるのかよ）

弐式炎雷は製本作業の手を止めて、ゆっくりと、そして神妙にペロロンチーノに頷いている。何だこの人たちはとモモンガは二人を眺めながらも、先ほどからモモンガにも少しずつ不思議な感情が胸に湧いてきた事に気付く。

（……くそ！　俺もわかるっ！）

異世界に訪れて、様々な種族の女性とこれまた様々な経験を積んだ。

だが、この場にいる三者はそれまでは童貞だったのだ。恋愛経験な

どある筈も無い。当然、その先にある結婚など完全未知である。それだけに、憧れはある。
　以前のモモンガならばその手の願望は無かったと思うが、向こうで色々知ってしまった今では、少し事情は違ってくる。知らないことを知ってしまうと、その先に知りたくなるのだ。
「ようするに、あれか、ペロロンさん？　あの新婚のイメージプレイが出来るサキュバス店に行きたいって事？」
　弐式炎雷が分厚いファイルを取り出してペロロンチーノに問い掛けた。
「ええーと、あのお店の名前はなんだっけ？」
「源次郎さんが仕分けしてくれてますから、イメージプレイグループの結婚カテゴリーに入ってると思いますよ？」
　弐式炎雷が取り出したファイルはモモンガ達のではない。主にスタンク達のレビューが収納されたファイルだ。それもついでだと源次郎が仕分けしてくれているので、非常に探しやすくなっている。
　店名で並べるよりも、お店の内容でカテゴリー分けした方が探しやすいだろうとは、源次郎の談だ。
「ああ、あったあった。……うーん、まあ、悪くはなさそうだけど、やっぱこれ普通のイメージプレイのお店だよなー。それならさ、おかしらのアジトでも良さげだけど」
「私はあのお店軽く出禁になってるんですけど……」
「完全出禁でもないし、大丈夫じゃない？　まああそこ、割と気まぐれでイメージプレイの内容が決まるらしいから、花嫁プレイがいつになるかわからないってのはあるか」
「詳しいですねー、弐式さん」
「結構オキニだし。それに、その場で会ったばかりの子と結婚プレイってのもなー。味気ないというか」
「ですねー。この大聖堂って場所までも、それなりに距離がありそうですし」
　そんな事を弐式炎雷と話していると、ペロロンチーノが妙に芝居がかった仕草で突き立てた指をチチチと振る。

「向こうの由緒正しい場所で、鐘の音を聴きながらってのが、良いんじゃないですか。それに、二人が気にする点については俺に考えがあります」
『考え？』
モモンガと弐式炎雷の問い掛けが重なった。その問いかけに、ペロロンチーノは仮面の上からでもわかるニンマリとした笑みを浮かべるのだった。
その笑みに若干の嫌な予感を覚えながらも、モモンガは少しだけ気になっていた事をペロロンチーノに尋ねた。
「そう言えばペロロンさん、女性陣達と一緒に赴いたあちらの世界はどうでした？　楽しんでくれていました？」
「あ、それ俺も気になってた」
二人の問いかけに、ペロロンチーノは少し視線を彷徨せてからがっくりと肩を落とす。
「……その件は聞かないで下さい」
（な、何をしたんだ、茶釜さん!?）
その只ならぬ様子のペロロンチーノに、先ほど以上の嫌な気配がする。
ぶくぶく茶釜はギルドのブレーキ役でもあるが、常識人に見えてあれでアウラとマーレの創造主でもあり、何よりペロロンチーノの姉なのだ。
やまいこと餡ころもっちもちの二人も、暴走すると手の付けられない面を持つが、一度アクセルを踏み込んだぶくぶく茶釜はその比では無い。
ごめんね？　そう振り返っていつもの声で謝るぶくぶく茶釜を幻視しながらモモンガは、レビュー製本作業の手を止めて、自分達の扉申請用紙に必要事項を書き込み始めるのだった。

◆

モモンガさん達と知り合って、だいぶ経ちました。元々ボクは、ス

タンクさん達より早く食酒亭で皆さんと面識がありましたから。
なによりモモンガさん達はその見た目、って言い方は失礼ですよね。でも多種族が入り混じった下界でも見たことの無い種族の方ばかりで、似ていてもまったく違う性質だったり、異世界から来たと聞かされても、驚くよりも納得が勝ってしまったくらいの不思議な人達です。
そんな人達でも話してみると、意外と優しくて、異世界の支配者というのに驚くくらい普通の人みたいで、スタンクさんやゼルさん達と同じである意味気の良い方々なんです。
けども。
だけれども！
「なんでボクが、ウェディングドレスを着せられてるんですかーーー！」
叫びながらボクは、モモンガさんの魔法で作り出された闇の扉に振り返ります。
闇の扉を通って姿を見せるのは、普段とは違う純白のタキシードに身を包んだモモンガさんに、弐式さんとペロロンチーノさん。その三人はボクを見るなり、なぜか感心した様に頷いていました。
「おー、そういう格好をクリム君がすると、本当に女の子にしか見えないねー」
「ですね、良く似合ってるよ、クリム君」
うんうんと頷く弐式さんとモモンガさん。ボクのすぐそばで感心した様に二人に眺められていますが、今日のボクはモモンガさんの闇属性にもダメージを受けません。
理由はこのウェディングドレスに、ほぼ完全な闇属性耐性が備わっているからららしいです。
そうボクが今着ている、着せられているウェディングドレスは、モモンガさん達の世界で作られた装備なんだそうです。正確にはユグドラシルって所の装備らしいんですが、僕にはよくわかりません。
「ほらほら二人とも、そんなジロジロとクリム君を見てたら失礼ですよ」

ペロロンチーノさんが背中の羽を一度羽ばたかせてから、二人を軽く窘めます。ペロロンチーノさんもタキシードに着替えてますけど、その羽はどうやって出しているんでしょうか。そもそもこのドレスも、採寸なんてされてないのにボクの体型にぴったりでしたし。
「って、そうではなくて！　なんでボクが、こんな格好でフラスパ大聖堂まで連れて来られているんですか！」
今日の朝方にお願いがあると言われました。
お店もお休みの日でしたし、バイト代も戴けるとの事でしたので、二つ返事で了承したんですが、三人に行きたいところまでの同行を頼まれたボクは、あれよあれよという間にこんな格好をさせられて、モモンガさんの魔法でフラスパ大聖堂まで連れて来られたんです。
それなのに、まだ詳しい説明をして貰えていません。
「いやー、ごめんね、クリム君。この大聖堂の場所を知ってる人が居ないと、モモンガさんの集団転移魔法が上手く働かないからさ。スタンク達は今どっかいってるみたいだし」
「それは構いませんけど、ボクが聞きたいのはこの格好をさせられた理由ですよ……」
すると三人が少し驚いたように顔を見合わせました。
「クリム君の格好は、彼女からのリクエストだったんだが」
そう言ってモモンガさんが、開いたままの闇の扉に振り返りました。ボクもつられるようにそちらに視線を向けると――
「――なんだ？　俺の花嫁はまだグズってるのか？」
闇の扉から姿を見せたのは、
「エ…エルザさん!?」
モモンガさん達と同じ真っ白なタキシードに身を包んだ、ハイエナ獣人のエルザさん。男物のタキシードなのに、その女性らしい体型にすごくフィットしていて、女の人なのに格好良くて、男の人の格好をしているのに胸の膨らみとかがハッキリしていて、ボクはその姿に思わず見惚れてしまいました。
エルザさんの男の人の格好に、女の人の魅力に、ボクの女性の部分も男性の部分も凄く惹かれてしまって、キュンとなってしまいます。

「俺のものになるのは不満か？」
そう覗き込まれるように尋ねられ、ボクは小さく首を振る事しか出来ませんでした。
「……良い子だ」
エルザさんの突き出したマズルから零れた少しハスキーな声に、今は両性なのに、ボクの女の子の部分がキュンキュンと反応していって、抗えそうもありません。
「あぁ……、ボクが、ボクがエルザさんのものに……」
説明もして貰えてないけど。
なっちゃうしか、ありません。

◆

「うんうん、クリム君も満足そうですね」
ペロロンチーノはうんうんと頷きながら、エルザに迫られるクリムを満足そうに見つめる。
「ペロロンさんの考えって、こういう事だったんですね」
モモンガの感心した様な声に、ペロロンチーノは大きく頷きながら振り返る。
「ええ、結婚初夜プレイするのに、オキニの子に頼まないでどうするんだって話ですよ！」
ペロロンチーノの考えとは、こうであった。
せっかくの結婚初夜プレイを、出会ったばかりのサキュ嬢とするから満足度がいまいちなのである。通いつめれば話は変わってくるだろうが、異世界において時間制限のあるペロロンチーノ達ではそれも難しい。
ならば最初から、普段通い詰めているお店のサキュ嬢にお願いをすればいい。
ドレスだって、ユグドラシルでは毎年六月にはジューンブライドイベントが開催されていた。
そしてペロロンチーノ達は、相手も居ないのに、折角のイベントだ

からと完全制覇して手に入れた結婚用のイベントアイテムが山ほどある。
ペロロンチーノに至っては、課金しなければ手に入らないバージョンのウェディングドレスすら持っているのだ。結局それはユグドラシルでは使い道は無かったが、こんなところで役に立つこととなった。
ちなみにモモンガと弐式炎雷も、渡す相手も居ないのに、その課金装備を手に入れていた。
「そういえば、この教会はどうしたんだよ、ペロロンさん？」
弐式炎雷が顎で背後の建造物を顎でしゃくりながら尋ねてくる。
ペロロンチーノ達はフラスパ大聖堂のある街の郊外、外に建てられた教会に転移してきていた。街の外ならば祝福の鐘の音も届くし、多少騒いでも迷惑にならないであろうという判断からだ。
「建物ごと借りたんですか？」
モモンガの質問に、ペロロンチーノは仮面の下でニンマリと笑う。
「いえ、建てました」
『……は？』
友人二人の声が重なる。その反応に、満足そうに頷きペロロンチーノが続ける。
「現地の人にお願いして、俺達用の教会を建てて貰ったんです。完成したのは俺も今日初めて見ましたけど、中々いい感じですよね」
「……いやいや、ペロロンさん。街の外とはいえ勝手に教会建てたら不味いだろう」
「大丈夫ですよ、この辺の土地ごと買いあげましたから」
「そ、そんなお金何処から得たんですか？」
「建御雷さんとメコンさんから借りました。あの人達何回か勇者魔王案件という依頼を解決してるみたいで、結構お金持ちみたいです」
「建やん達そんな事してるのかよ。というか勇者なんているんだ、この世界」
「いるみたいですね。あとこの建物は、教会風サキュバス店として建ててますので、こっちの避妊魔法とか面倒な手続きもすべてクリア済

みですよ。俺達が利用するだけで、実際に営業はしませんけど」
　そこまで説明すると、モモンガと弐式炎雷は呆れた様な、感心した様な、何とも言えない顔でペロロンチーノを見ていた。
　一人は頭蓋骨で一人はタキシードを着ててもいつもの頭巾をしているが、付き合いが長いとそれくらいは分かるのだと、ペロロンチーノはにんまりと笑う。
「もちろんスタッフが足りないので、その辺は協力をお願いします。俺達の花嫁の準備ももう少しかかるでしょうし」
　ペロロンチーノ達の花嫁役をお願いしたサキュ嬢たちは今おめかし中だ。ドレスや小物はユグドラシル産の装備を渡しているが、髪型のセットや化粧などは、彼女達自身に任せるしかない。
　勿論出張費を含め、その他すべての経費はすべてペロロンチーノが借りたお金から捻出されている。
「はぁ、まあ、いいけど。……了解、それなら俺も少し考えがある。モモンガさん、魔法都市まで飛ばして貰っていい？」
「構いませんが、魔法都市に何か？」
「うん、この際だしね。この前貰った大量の割引券を活用しようと思ってさ」
「何かあてがあるんですね。……それなら私も一つ準備をしますか」
　二人もエンジンが、やる気に火が点き始めたようだ。やるからには全力で楽しむのも、自分達の良い所だと思う。
「よーし、じゃあ二人とも！　アインズ・ウール・ゴウン式新婚初夜プレイ！　全力で行きますよ！　全部の準備が終わったら、花嫁を迎えに行く所から始めましょう！」

◆

「……綺麗だよ、ピルティアちゃん」
　ユグドラシル産の純白のドレスに身を包み、小さな、それでいて希少なユグドラシルの花で作られた見事なブーケを手にしたピルティアが微笑みながら小首をかしげる。

会ったこともない相手だが、彼には意中の女性がいる事は知っている。何度かそのシャルティアという女性の格好をして、イメージプレイをしたことがあるからだ。
「ふふ……、今日はシャルティアさんの真似をしなくてもいいんですか？　ペロロンチーノさん？」
だから少しだけ意地悪をしようと、そう悪戯っぽく尋ねる。すると、ペロロンチーノは満面の笑みを浮かべた。
「今日の俺は、ピルティアちゃんと結婚するんですから」
そう言って彼は笑う。
本命の子だけじゃなく、自分にもそんな笑顔を向ける彼が、眩しい。疚しさなんて、微塵も感じさせない笑顔だった。
「……ペロロンチーノさんは、イケない子ですね」
きっとペロロンチーノはこの笑顔を、すべてのサキュ嬢にも向けるのだろう。
「俺はあの二人と違って、ちゃんとイケますよ？」
そう言う意味じゃ無いんだけどなと、この年下の彼にピルティアは花嫁に相応しい笑みで、微笑むのだった。

「……弐式炎雷様」
長い黒髪を彼の好みとドレスに合うように結い上げて、彼を微かに顎をあげて見上げる。
「……凄い……綺麗だ、ナーベラル」
感嘆した様に呟いてから、ゆっくりと彼は、こちらをエスコートするように手を差し出して来てくれる。
「そ、それはドレスの事でしょうか!?」
彼、弐式炎雷からの素直な賛辞に、思わず訊ねてしまう。彼はこの美しいドレスを褒めてくれているだけなのでは無いだろうか。そう思わず確認してしまうかのように。
「はは、そんな訳ないだろう。ナーベラルが綺麗なんだって」
「あ……ありがとうございます……」

彼からの言葉に、感極まったような反応をしつつ、僅かに俯いた。
「さあ、行くか。みんなが待ってる」
伸ばされた彼の手を取る。その手に触れた瞬間、自分の手が僅かに震えた。
「か……かしこま……ぷっ……くくくっ。ご、ごめん弐式くん。た、耐えられなかった」
そこで限界を迎え、思わず吹き出してしまう。
「おかしらのアジト一の演技派が、途中で笑っちゃ駄目でしょう」
「だ、だって、弐式くん。タキシード着てるのに、頭巾はいつものままなんだもん。い、違和感が凄い」
「ふっふふ！　ニンジャは容易く素顔を晒さぬのだ！」
「見せたくないだけでしょう？　あたしは弐式くんの顔嫌いじゃないけどなー。　マネキンみたいで」
「最後の言葉で嬉しさ半減なんだけど。まあ、俺もナーベラルプレイは流石に限界ぽかったし、もう普通に行こうか？」
「肩少し震えてたもんね。笑いそうだったでしょう？」
「ぬお、見破られてる!?」
「元女優志望だもん。……相変わらず仕事は入らないけど」
「……今日付き合ってくれたお礼にさ、今度の公演観に行くよ。観客席満席にする」
「えー、それって観客席一杯に分身弐式くんがいるって事でしょう？　他の子が引かないかなー」
「そこも見破られてる!?　……これがオキニかー、すごいなー」
「ふふ、いつもありがとうございまーす」
そう言って彼の手を繋いで、ヴァージンロードに向けて、歩き出すのだった。

「……良く似合っています。……とても」
嘘を感じさせないその言葉に、冥精ランパスが微笑む。
「ありがとう、悟くん」

今彼には、ウエディングドレスに身を包んだ母親の姿が見えているはずだ。
そして彼が何か言いたそうにしているが、こちらから促したりはしない。彼、モモンガという名の、死の神とも呼べる存在の言葉を微笑みながら待ち続ける。
「……その姿を、父さんにも見せて上げたかった」
「お父さん？」
「ええ。……父さんの記憶は殆ど無いんだけど、たぶん一度はちゃんとしたドレスを、母さんに着せて上げたかったはずだから……」
思わず彼の骨の頭を胸に抱え、抱き締めたくなったが、堪える。そんな事を彼は、たぶん望んではいないだろうと思ったからだ。
この幻術は、彼の記憶を読み取るというよりは、同調させるものだ。だからモモンガの中の母親を自分に投影させることは出来ても、その彼の過去を知れるわけでは無い。勿論お店のプライバシーポリシーにも抵触するので、出来たとしてもしないのだが。
彼が望むことは全てするが、行き過ぎた真似はしない方が良い。
思い出に踏み込み過ぎてもいけない。踏みにじるのは勿論、触れて欲しくない部分にも決して触れてはいけない。
難しいお客様なのだ、彼は。
「……行きましょう。みんなが待っているでしょうし」
「ええ、悟くん」
だからこそ、やりがいがある。
差し出された彼の骨の手に引かれ、そう思った。伝わってくる芳醇な魔力に酔いしれながら。

◆

「おめでとうー！」
「幸せになってねー！」
「そんな綺麗な子、どこで見つけてきたんだよ！　爆発しろ！」
ボク達は、沢山の人達に祝福されながら、パートナーと共に教会に

まで続くヴァージンロードを歩いていました。そう、沢山の、沢山の……弐式さんとデミアさんに祝福されながら。
「……お前の友達、すごいな」
エルザさんの感心半分、呆れ半分の声に、小さく頷きます。
なんかもう、モモンガさん達は凝れる所は全部全力で凝っていく人達みたいです。
「花びら、ついてるぞ」
そうエルザさんが優しく微笑みながら、ボクの髪に付着していたらしい花びらを取ってくれます。
「……んっ。　あ、ありがとうございます」
「……今のお前、完全女の顔してるぞ。もう少し我慢しろ。……その顔は俺にだけ見せればいいんだよ」
「……は、はいっ！」
「ふふ、いい子だ」
エルザさんにそんな風に耳元で囁かれると、ボクは従うしかありません。
「……どうやら、アイツらが花びらを撒いてるみたいだな」
つられて空を見上げると、そこにはライオンの頭をして四枚の羽を生やした天使？　が、上空でボクらを祝福するように花びらを撒いていました。それも六人も。
「……知り合いか？」
エルザさんに尋ねられますが、ボクにはフルフルと首を振る事しかできません。だって、あんな人達天上でも見た事ありませんから。
「ああ、あれは門番（ケルビム・ゲートキーパー）の智天使だよ、クリム君。モモンガさんの超位魔法で召喚した俺達の世界の天使。一定時間で消えるし、気にしないでいいよ」
そうペロロンチーノさんが教えてくれますが、ボクはこの場面をどうか天上のあの御方が見ていませんようにと祈るばかりです。さらりと伝えられた超位魔法って単語も凄く怖いです。
「召喚魔法使えるなら、無理して弐式さんに分身して貰わなくてもよかったかもしれませんね？」

「つっても今のメンツだと、モモンガさん頼みになるしなー。デス・ナイトとかデスじーちゃん、デスばーちゃんに祝福されたくはない」
わいわいと談笑しながら、ボク達はそろってヴァージンロードを歩いて行きます。沢山の分身弐式さんとデコイデミアさんに祝福されながら、教会に辿り着くと、そこにも神官風衣装のデミアさんがボク達を迎えてくれました。
「ようこそ、アインズ・ウール・ゴウン専用教会型サキュバス店『出会って数分で初夜なんてもったいない？』に」
「……ここ、そういう名前だったんですか……？」
「ちなみに店名は俺が考えました」
「清々しいまでに、スタンク達のレビューしたお店の名前をパクってますね、ペロロンさん」
ニッコリと神官デミアさんが微笑み、小さく咳払いして続けます。
「コホン。では皆さま、神の御前で夫婦の契りをかわすことを誓いますか？」
デミアさんからの問い掛けに、ボクとモモンガさん達はパートナー達と視線を合わせました。
ボクは照れながら、そしてモモンガさん達は楽しそうに笑いながら、その問いかけに応えます。
『はい。私達は今日一日、素敵な結婚生活を送る事を誓います』
『出会って数分で初夜なんてもったいない？』

◇オーバーロード　モモンガ
１０
今回は色々変則的な楽しみ方ですが、十分満足のいくお店に仕上がっていました。一応お店という体面を保たないと、避妊魔法の処置が取れないみたいですね。
正直、向こうの世界を訪れるまで結婚に対して憧れは、あったとしても僅かだったと思いますが、今はその憧れが分かる気がします。
なんというか、オキニの子と一夜を過ごすというのは少し照れます

が、やはり楽しいものです。
楽しい。楽しかったけど、楽しかった分だけ、大きな負債も抱えてしまったよ、ペロロンチーノ。

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷
１０
ペロロンさんの提案で、お気に入りのサキュバス嬢と結婚プレイしようぜ！　って事で行ってまいりました。
結果、最高でした。
いや、それしか書きようが無いよ。レビューも何も、各々憧れてた結婚初夜プレイしてただけだろうし。ただそれが最高。ペロロンさんに感謝だな。
だけどみんなオキニとどんなプレイしたのかは、恥ずかしいからか、俺も含めて殆ど触れてない事に笑う。
そして今回ペロロンさんが準備に使ったお金を、俺達も楽しんだから割り勘にしたんだけど、その費用だけは笑えなかった。
大盤振る舞いしすぎだろう、ペロロンさん。
まあ俺が、割引券使ったけど、デコイデミアさんを大量にレンタルしてきたせいもあるんだけどさ。

◇バードマン　ペロロンチーノ
１０
ピルティアちゃんと、とうとう結婚しちゃいました！
いい！　とてもいい結婚式でした！
やっぱりこういう事は妥協せずに、全力で取り組むべきです。お金なんて気にしちゃ駄目です。
でも建御雷さん、メコンさん。
次に勇者魔王案件の冒険が回ってきた時は、俺も噛ませてください。お願いしますね！

◇天使　クリムヴェール

１０
こんにちは。
こちらでは初めてレビューをさせていただきます、クリムヴェールです。
と、言っても以前スタンクさんが、モモンガさん達とレビューを書いているみたいですね。少しだけ気が楽になりました。
レビューは、……満点を付けさせていただきます。
久しぶりに再会した方との、本当に夢のような体験でした。夢魔さんのお店でも同じことが出来そうですけど、夢では無く、本当の体験だというのが、とても良かったです。
やっぱり最後の別れ際が凄い寂しくて、切なかったんですけど、今度は現実で『またな』と声を掛けて貰えたのが、ボクが一番嬉しかった部分ですね。
皆さんの、本当に楽しむためにお店の垣根も超えて行こうとする姿勢は、素直に凄いなと思いました。

◆

ナザリック第六階層。
そこでナザリック警護の為シモベを引き連れ巡回しているシャルティアを感知したアウラは、素早く彼女の元に移動する。
自らの創造主に課せられた使命を果たすのに、丁度いいと思ったからだ。
「やっほー、シャルティア。今ちょっといい？」
手を上げて近寄るアウラを確認すると、シャルティアは手を上げてシモベを下がらせる。それを了承と受け取ったアウラは、シャルティアと並び歩く。
「用件は、なんでありんす？」
「うん、ちょっとアンケートに協力して貰いたくてね」
そう伝えると、シャルティアは少しだけ嫌そうに鼻を鳴らした。課せられた役目の邪魔をするなという事だろう。シャルティアの仕草

から、その不満を読み取ったアウラは伝わりやすいように、露骨にため息をついてみせた。
「……はぁ、シャルティア？　あたしが至高の御方々が定めた就業時間内に話しかけているんだよ？　そこまで言えば、あたしがどの御方の命で動いているか、想像つくよねぇ？」
そう言ってやると、シャルティアはすぐさま理解したようだ。驚いたような、非常に苦手なものに出くわしたかのような、そんな複雑な表情を浮かべる。
「ぶ、ぶくぶく茶釜様の命でありんすか……？」
「ぶくぶく茶釜様の命でありんす」
頷いて答えてやると、シャルティアは観念した様に項垂れる。
もし他の者がぶくぶく茶釜の名前に、苦手とも取れる感情を見せたのならば、アウラはすぐさまそれを正す行動に移っただろう。
だがそれがシャルティアならば話は別だ。
自分達の創造主を含めた関係は、このナザリックにおいてはやや複雑だ。
シャルティアはぶくぶく茶釜に対し、他の御方には見せない感情を見せる。そして自分も、これはマーレも一緒なのだが、ペロロンチーノに対し、非常に不敬ではあるのだけど、時折複雑な感情を抱くことがある。
アウラがマーレに抱く様な、手のかかる弟に抱く様な感情をだ。
一度そんな感情を至高の御方に抱いてしまう事を恥じて、だけどもそれを自らの創造主に相談することも出来ず、シャルティアと共にアインズに相談をしたことがある。
相談を受けたアインズは非常に嬉しそうに笑い、そしてその気持ちを大事にするようにと言って下さった。
それ以来アウラとシャルティア、そしてマーレも、自分達の創造主が姉弟であるという事に起因して生まれた複雑な感情を大事にし、そして楽しむ事にしていた。
だからアウラはその観念して項垂れるシャルティアを、ぶくぶく茶釜様を前にしたペロロンチーノ様のようだと小さく微笑む。

そうしながらも、自らの課せられた使命を果たす為に、懐から尋ねるべき質問が書かれた手帳を取り出す事は忘れない。
「それじゃあ、聞いていくね。問一、最近よくお出かけになる至高の御方々に対して、何か思う事はあるか？　この質問の答えは、あたしとぶくぶく茶釜様以外知る事は無いから安心して答えてね」
質問し始めると、やはり唐突ではあったのだろう。シャルティアがアンケートに答える前に、こちらに質問を被せてくる。
「そのアンケート、他の守護者にも聞いて回っているでありんすか？」
「守護者に限ったものじゃないけどね。コキュートスとかには、デミウルゴスが聞いて回ってるみたい。ほらほら、時間ももったいないし、ぶくぶく茶釜様もその時抱いた感情で素直に答えていいって仰っていたから、手早く答えてってよ」
そうアウラに言われ、シャルティアは少しの間腕を組んで考え込み、それでもすぐさま答えを口にした。
「……不満なんて、無いわよ。本来わらわたちは、至高の御方々の留守を守護するために創造していただいたんでありんすから」
「うんうん。まあ、そうだよね。じゃあ、どんどん質問していくねー」
続けて次々に質問、アンケートをアウラはシャルティアに尋ねていく。
普段の仕事はどうだとか、就業時間に不満はあるか、そんな事をいくつも尋ねていく。
これはシャルティアには伝えないが、この質問の殆どに意味は無いとアウラはぶくぶく茶釜から伝えられていた。
いくつかの本命の質問を、それと悟られないために質問を水増ししているらしい。そして当然その本命の質問と言うのは、アウラにも伝えられていない。
「それじゃあ、これが最後の質問ね。……これはシャルティア用の質問だってぶくぶく茶釜様が仰っていたんだけど、ええーとね、ペロロンチーノ様がナザリック外の子に優しくしているのはどう思うか？
……これはカルネ村の子とか、竜王国の子とかについてかな？」
手帳に書かれた質問をアウラが読み上げると、シャルティアはそん

な事？　と言わんばかりに胸を張って答える。
「どう思うも何も、あの御方の愛はまさしく太陽！　降り注ぐ日の光が、地を這う虫も照らしてしまう事に、いちいち目くじらを立ててもしょうがないでありんすでしょう？」
「……はぁ。……なるほど？」
「そしてペロロンチーノ様を太陽とするならば、わたしは月！　あの御方の愛を一身に浴びて、一番に輝くの！」
「……うん。アンケートに協力ありがとう、シャルティア」
　その場でくるりと回ってみせてから答えるシャルティアに、アウラはぞんざいに頷く。手帳にペロロンチーノ様は太陽で、シャルティアは月とだけ書き込みながら。
「……何よ、冷たいわね」
「ペロロンチーノ様がシャルティアを一番大事にしているのは、あたしから見ても間違いないしねー」
「そうでしょう！　そうよね！　間違いないわよね!?」
　嬉しそうに瞳を輝かせるシャルティアに、アウラは再び適当に頷きながら、手帳を懐にしまい込む。
「ペロロンチーノ様。至高の御方達だけでお出かけになられる際でも、シャルティアを連れてらしたからねー。……最近はそうでもないけど」
　そう言うと、シャルティアは痛い所を突かれたように、うっと呻いて口ごもる。
　アウラはそんなシャルティアに、はぁと何度目かのため息をつく。ぶくぶく茶釜が望んでいたのは、そういう反応だろうとわかっているからだ。
「ぶくぶく茶釜様が望まれてたのは、取り繕った答えじゃなくて、シャルティアのそういう思いなんだよ？　シャルティアは最近寂しいんでしょう？　そうならそうって、ちゃんと答えなよ」
「……だって」
　シャルティアは手をもじもじさせて、言いにくそうにしている。
「他の御方になら兎も角、ぶくぶく茶釜様になら知られても構わない

でしょう？　シャルティアがあたしに聞かれて欲しくないならさ。アインズ様にお願いして、後でこの事の記憶はあたしから消して貰うよ」
「……そこまでして貰わなくてもいいわ。……それに不満って訳じゃないの。ただ……」
「やっぱり寂しい？」
　コクリと小さく頷くシャルティアの肩に、アウラは優しく触れる。そうしてやるとシャルティアは少しだけ躊躇いながらも、ゆっくりと続けていく。
「あの御方の愛が遠くなったとか、そういうことは一切ないの。ペロロンチーノ様の愛は、本当に大きなものだから。ただ偶にだけど、ペロロンチーノ様は今まで見せられたことの無い表情をすることがあるのよ」
　ペロロンチーノ様は常に仮面をされてるけどね。
　そう思わず言いそうになり、アウラはぐっと堪える。それにシャルティアも嘘を言っている訳では無いだろう。創造主の感情を読み取れないシモベが、このナザリックに居る筈も無い。
「あれはきっと、本当の男の顔ね。そんな表情を、ふとした瞬間御見せ下さるようになったの」
　それから随分長い間のろけとでも言えばいいのか、延々とそんな事を聞かされた。ちょっと優しくしすぎたかなーという思いはおくびにも出さず、アウラはうんうんと頷きながら聞き役に徹していた。
「……ただ、ペロロンチーノ様がそんな表情を見せる様になった切っ掛けを、わたしは知らないわ。それが本当に、ただ悲しいの……」
　締めくくる様に言った言葉を一字一句忘れないように、ぶくぶく茶釜に伝えるために心に留めつつ、アウラは大きく頷く。
　そういえばもう長い事廓言葉を忘れてるなこの子と思いながら、アウラは一つ質問をしてみる。恐らくぶくぶく茶釜は、こういう感情の揺れをアンケートを通じて知りたかっただろうから。
「それじゃあさ、もしペロロンチーノ様がそんな男の顔を見せる事になった切っ掛けがナザリックの外に――――うーん、なんて言えばいい

かな？　……うん、あたし達以外にあったとしたら？」
その瞬間、シャルティアはにたりと笑う。微笑むのではなく、久々に見せる純然たる敵を見つけた時の笑みだ。
そしてゆっくりと時間を置いてから、アウラの問にシャルティアは笑みのまま答えた。
「ぶっ殺す」

闇の競売　サキュバスムービーオークション

「――ひょいっと」

ヘロヘロが妙に気の抜けた言葉と共に、自身の十数倍はあるであろう毒竜に突っ込んでいく。跳ね散る水滴の様に、毒竜の腹側に小さな染みが出来た。その染みが一瞬で背中側にも出来た瞬間、毒竜の巨躯がどさりと崩れた。

よく見れば毒竜の身体の染みが、ヘロヘロにその強力な酸性そのままに体当たりをされ、あっさりと皮や肉や骨を超えて穿った穴だと分かる頃には、別の毒竜が同じく体に穴をあけて再びどさりと崩れている。

「弱いですねー」

のんきな声とともに、次々とスコアを伸ばしていくヘロヘロに、楽しそうだなとモモンガは小さく笑う。

「おーい、モモンガさーん。そっちに飛ばしたからよろしくー」

弐式炎雷の呼び声に、視線を上げる。

見上げると、スキルで拘束されたのだろう、光の紐で身動き出来ぬように縛り付けられた毒竜が三体。

モモンガは拘束された毒竜達に、悠然とその骨の手を向け、呟く。

「＜魔法効果範囲拡大化・死（ワイデンマジックデス）＞」

第八位階の即死魔法で容易く絶命した毒竜達が空中から沼地に落下し、その衝撃で泥が跳ねる。

「汚い」

モモンガは跳ねた泥が自身の装備や骨の身体を汚す前に、無詠唱の＜骸骨壁（ウォール・オブ・スケルトン）＞を発動させた。

武器を持った無数の骸骨で作った骨の壁を一瞥もせずに、モモンガが小さく指を鳴らす。骨の壁を只の泥除けとして使い、それだけでもう用は済んだとばかりに、骨の壁が崩れていった。

「弐式さん？　泥が跳ねるから、あまり高く蹴り飛ばさないで下さい」

「ごめんごめん。――よっと」

謝罪を口にしておきながら、弐式炎雷は再び毒竜の腹を蹴り上げ

て、その巨体を次々に宙に浮かしていく。
モモンガはやれやれと<重力反転(リヴァース・グラビティ)>を唱え、毒竜の巨体が落下する衝撃を、重力を中和させ殺していく。当然その間に、衝撃だけでなく毒竜の命そのものも殺していった。
「あらかた片付いたかな？」
弐式炎雷がそう呟き、沼地を見渡す。辺りには死屍累々としか表現できないほどの、毒竜達の骸。そのほとんどが最低限の損傷で仕留められていた。弐式炎雷が拘束し、それをモモンガが即死魔法で仕留めていく。
そんな流れ作業で毒竜達を仕留めた訳は――
「――うんうん、いい具合に狩れたみたいだね」
前回の結婚式プレイに使った負債を武人建御雷達に返済する為と、今日のサキュバス店巡りに使う資金捻出の為に、獲物の素材を彼に出来るだけ高く売却してもらうため。
その彼、ギルドメンバーの一人音改が、満足そうに仕留めた毒竜達を眺めていた。
「さて、手早く解体していこう。弐式さんも手伝ってもらえるかな？」
「了解了解」
そう言って解体スキルを持つ二人が手早く毒竜達を捌いていく。
「あ、私が貫通した毒竜の穴のところ。そこは大きめに肉を削いでおいてくれますか？　影響は無いと思いますが、酸性を高めた状態の私が触れた部分ですので」
ヘロヘロの言葉に、音改と弐式炎雷は了承を告げ、作業を続けていく。
こういう時、剥ぎ取りや解体に使えるスキルを持たないモモンガやヘロヘロは手持無沙汰だ。そのため少しでも役に立とうと、解体を終えた素材を肉だけ残し、次々とアイテムボックスにしまい込む。
「うーん、やっぱり巻物の素材に使うには、アイテムのレベルが足りないなー」
音改が剥いだ毒竜の皮を眺めながら、少しだけ残念そうに言う。
この毒竜達は当然モモンガ達の世界に住まう竜では無く、スタンク

達の世界に住まう竜のモンスターたちだ。さらに言えばこの世界においても龍種に数えられるようなレベルではなく、亜竜と呼ばれるワイバーンの一種らしい。
「ま、でもこれだけ量があれば、素材として普通にこっちで売り払っても、結構な実入りになるって」
そう言う弐式炎雷にモモンガは頷く。確かにこれだけあれば、かなりの金額になるはずだ。
モモンガ達がこの毒竜達を仕留めていったのは、食酒亭で張り出されていた『沼地で大量発生した毒竜の討伐』という冒険者向けの依頼の中で一番高額のモノを、奪うように掴ぎ取ってきたからだ。
それもこれも前回の結婚式プレイで多大な負債を負ってしまった為に。
今回扉を通ってきたメンバーは、モモンガに弐式炎雷。それにヘロヘロに音改。素材売却の為に音改に協力を頼み、ヘロヘロも暇だからと付いて来てくれたのだ。ペロロンチーノはペロロンチーノで、別のグループに混じって少しづつ返済しているらしい。
「それじゃあ、とりあえずこの毒竜の肉を依頼者に届けにいこうか？」
毒竜の肉はその特性から、食用として流通させることが出来ない。出来ないのだが、今回の依頼を出してきたこの沼地に生息する人々は、この毒竜の肉を無毒化させる術を知っているらしい。
予めその情報を得ていた音改は、肉と引き換えに、換金できるこの沼地に生える毒草などの素材と交換する取引を、依頼者と交わしていたらしい。
流石商売人とモモンガ達は感心したのだが、音改自身はこんなのは交渉の内にも入らないと笑っていた。
「さて、一回依頼達成報告に食酒亭に戻ったら、どこ行こうか？」
弐式炎雷が当たり前の様に提案してくる。数えるのも億劫なほどの毒竜を仕留め解体したと言っても、モモンガ達からすればさほどの手間では無かった。移動の時間も魔法で節約できるために、扉を通ってからまだ三時間程しか経っていない。
行こうと思えば、そしてお店が良ければ、ダブルでも、トリプルで

も楽しめちゃう時間はあるのだ。
その事を想像し、思わずモモンガ、弐式炎雷、ヘロヘロの顔がだらしなく歪む。
この毒竜の素材を換金すれば、建御雷達に返す分（別に一括で返す必要は無いと言って貰えている）を除いても、かなり手元に残る。
資金も時間も十分なのだから、色々知ってしまった今のモモンガ達がＮＰＣには見せられそうに無いだらしない顔をしても、まったくしょうがない事なのである。
「ああ、お店に行く前に、一つ付き合ってほしい場所があるんだけど、いいかな？　ちょっとした買い物をしたくてね」
音改がそう提案してきた。その彼の提案に、モモンガ達に異論がある筈も無い。今回の最大の功労者は間違いなく音改なのだから。
そう伝えると音改はやはり嬉しそうに、それでも異形の表情ながら、どこか悪戯っぽく笑ったのだった。

◆

「ククク、お集まりいただいた紳士諸君。大変お待たせしました」
燕尾服に身を包んだ人間の男が、壇上でオークションハンマーを振り下ろす。
コンコンと硬質な音が、薄暗い講堂に響き渡る。
「では、取引を始めるとしましょう。――闇オークションの……開催ですッ！」
エルフの、これまた燕尾服に身を包んだ男が、そう開催を宣言する。
その男二人の背後の壁に、水晶から投影された動画が映し出された。
『あんっ♡　あっ……ああっ！　あああああぁ～♡』
……すなわち、サキュバスムービーが。
「じゃあ、一本目いくぞー」
「ルールはいつも通り。欲しいやつは入札価格を言うんだぞ。五分の間誰も名乗らないと次に行く」

一瞬でいつもの砕けた感じに戻ったオークショナー、燕尾服に身を包んだスタンクとゼルが、手早くサキュバスムービーオークションを始めていく。
（音改さんが買いたかったのって、これか……）
ゲスト扱いらしく、オークションが開催された講堂の最前列に座るモモンガが思わず顔を骨の手で覆う。
記録水晶によるサキュバスムービーの存在はモモンガも当然知っている。
むしろ訪れたお店で得たその記録水晶がギルドの女性メンバーに流出したおかげで、過去に大きなトラブルが起こっている。その為モモンガは若干苦々しく、そのサキュバスムービーを眺めていた。
「３００！」
「５００！」
「７５０ッ！」
オークションに参加するこの街の住人たちが、次々に何か札を上げながら、ビッドしていく。モモンガにもあらかじめビッドする際に使えと、札が渡されていた。
ちらりと過去に、この様なオークションが開催されていると、モモンガはゼルから聞かされていた。しかし聞いていた話では、会場は小さな貸倉庫などで行われているはずだった。それが急に、それ程広くは無いが、なぜそれなりに手入れの整った会場を用意したのだろうかとモモンガは首を捻る。よく見ればスタンク達の着ている燕尾服、あれはユグドラシルの装備では無いだろうか。
そう、ちらりと隣を確認する。
そこには満足そうにオークションの進行を眺める、これまたユグドラシルの燕尾服に身を包んだ音改の姿。
（絶対一枚噛んでいますね、音改さん……）
弐式炎雷もヘロヘロも戸惑っている中、一人だけこの落ち着きようである。噛んでいないはずが無い。
（まあ、音改さんが楽しそうならいいか――――ふむ？）
「次の商品はこれだ。『二人合わせて千年紀（ミレニアム）！　エルフ母娘のエロり

旅！』」
顔立ちの似ている二人のエルフが、互いに絡み合った映像が映し出される。瞬間、会場にどよめきが起こった。
「ゲッ！　またババア映像か！　人間は、本当いい加減にしろ！」
タイトル通りならば、この二人のエルフは母娘で、しかもその年齢は二人合わせると千歳を超えるという事なのだろう。
魔力で感じる事はあっても、魔力を感じる事の無いモモンガには、普通に容姿の整ったサキュバス嬢にしか見えないのだが、どうもこの世界では年増エルフを有難がる種族は僅からしい。
出品したと思われる人間が一人、肩を落としているのが見える。
モモンガはその姿を小さく笑い、初めて札――パドルを掲げた。
「５００」
そうモモンガがビッドすると、会場が一気に静まり返る。
予想以上のその反応に、モモンガは少しだけ後悔した。別に人間の男を助けようと思ったわけではなく、折角オークションに訪れたのだから、手ぶらで帰るのも勿体なく、尚且つ年増らしいエルフモノなら安く落札できるだろうという目論みからだ。
「嘘だろ……？　モモンガさんって、ああいうのでもいけちゃうの？」
「いや、でも、確かに。あの人のレビューって結構なんでもありだったような？」
「いや、あの母親って部分に惹かれているのかもしれない」
「だからって、アレは……なぁ？」
散々な言われようである。
なまじスタンク達と行動を共にする機会が増え、様々な高難易度依頼をこなしつつ、レビューもスタンク達に混じって一緒に酒場に張り出しているために、妙に知名度が上がってしまっていた。
「……やれやれ」
気恥ずかしさを覚えたモモンガは、そう言って軽く肩をすくめてみせる。
「私からすれば、たかが千年、二千年の歳の積み重ね程度で、彼女達を忌避するお前たちの感性の方が理解出来無いのだがな」

そう超越者（オーバーロード）らしく言ってみる。
ぶっちゃけこの場に居る長命種のモノからすれば、モモンガの実年齢など子供のようなものだろうが、何とか周りは納得してくれたらしい。「なるほど」「流石だ」「マナが腐りきって骨になってる人は言う事が違うぜ」などといった声が聞こえてくる。
なんとか誤魔化せたとモモンガは胸を撫でおろし、落札を告げるハンマープライスの音を内心ドキドキしながら待つ。
勢いでビッドしたが、こんな衆目の前でエッチなサキュバスムービーを落札するというシチュエーションが、少し恥ずかしくなってきたのだ。
「７５０」
早く終わってくれと祈るモモンガを裏切る、競合者の出現。声に横を向けば、そこにはパドルを掲げた弐式炎雷の姿。
（競合されたー!?）
モモンガの視線に気付いた弐式炎雷が、頭巾の下で小さく舌を出した気がした。勿論キャラメイクに拘らなかった彼の素顔ではそんな真似は出来ないのだが、これだけ付き合いが長くなると、そういった機微も読み取れるようになる。
よく見ればサキュバスムービーのエルフ二人は、長い黒髪だ。胸も大きい。弐式炎雷の好みに一致したのだろう。さらに言えば、安くお土産が手に入りそうだという、モモンガと同じ目論見も有るはずだ。
「１０００」
それならばと、モモンガも上乗せをする。瞬間、弐式炎雷も驚愕した様にこちらに勢いよく振り返ってくる。
「１２００っ！」
いやいや、モモンガさん。別にエルフが好みって訳じゃないでしょうと頭巾の下からそう表情で何度も伝えてくるが、弐式炎雷はそんな機微を表現できる素顔をしていない。だが、さらに上乗せをしながら伝えてくる。
「１６００っ！」
最初にビッドしたのは私なんだから、ここは弐式さんが降りて下さ

いと骨の顔で伝えつつ、モモンガも引かずに上乗せしていく。１５００でも良かったのだが、争うつもりは無いと、一気に１６００まで値を上げた。
徐々にだが、確実に値をモモンガと弐式炎雷は吊りあげていく。年増エルフモノをめぐるオークションとは思えない熱の入り方だ。
しかしその値上げ合戦は、たった一言のビッドによって、更に熱を帯びていくこととなった。
「５０００」
そう言って一気に三倍以上に跳ね上がったビッドに、会場が再び静まり返り、一瞬遅れて理解できないように会場がざわつく。
その過熱ぶりに、しかも年増エルフモノにだ、オークショナ―であるスタンクとゼルの進行も止まる。
「どうしたかな？　オークショナ―、５０００とビッドしたんだ。進行を続けていただきたい」
（口調まで違う!?）
モモンガが戸惑いつつ、悠然とパドルを掲げた音改を見る。
「あー、音改？　今回のスポンサーのお前にこういうのはあれなんだが……」
「その値段、エルフモノならぶっちゃけ新品で買えるぞ？」
スタンク、ゼル。両名の忠告のようなものを受けても、音改は余裕の態度を崩さず、悠然と頷くだけだった。
「それだけの価値を、私が見出したのです。これ以上の説明が必要ですか？」
アインズ・ウール・ゴウン唯一の大商人の言葉に、オークショナ―の二人がゆっくりと頷いた。
「……わかった。ならこれ以上は何も言わない。……５０００だな？　お前らも構わないな？」
そう言ってゼルが、元々争っていたモモンガと弐式炎雷を見比べる。勿論これ以上のビッドをするつもりは、少なくともモモンガには無かった。
なぜなら５０００Ｇという金額は、ショートコースならほとんどの

サキュバス店に行けてしまうし、魔法都市まで足を延ばせば、三日もデミアを好きに出来る金額なのだ。
「それじゃあ、決まりだな。５０００で――――」
「――６０００」
ハンマープライスを告げるべく、木槌を振り上げたスタンクを遮ったのは、これまで一言も言葉を発しなかったヘロヘロ。
そのヘロヘロに、初めて音改の余裕のポーズが崩れた。
「ヘロヘロさん!?」
「６０００です。６０００とビッドしました。さあ、オークショナー。進行を続けてください」
短い触手の手を組むヘロヘロに、モモンガは違和感を覚える。なぜならこのサキュバスムービーのエルフの二人は黒髪で、彼の好みたる金髪縦ロールとはかけ離れているからだ。
「７０００」
音改がさらにビッドする。
「８０００」
間髪入れずにヘロヘロが応える。先程モモンガと弐式炎雷が行っていた値上げ合戦が惨めになるほどの過熱っぷりだ。
その二人の姿が、理解できないとモモンガは頭を抱える。
今回の毒竜の討伐で、かなりの現金収入を得た。だからと言って二人が告げる金額は、普通にお店に行けちゃう金額なのだ。
いくら希少なサキュバスムービーとはいえ、新品で手に入るものに、ここまでの値段を付ける理由が分からない。
そもそも、こんな会場にオークショナーの装備まで用意し、サキュバスオークションのスポンサーになった音改の目的は何だ。
（……もしかして……？）
モモンガに一つの考えが浮かぶ。
恐らくだが、音改は純粋にオークションを楽しみに来たのでないのか。そのために、全力で準備をした。それは前回、結婚初夜プレイで散々散財をしたモモンガにも分かる理由だ。
仲間と共に、楽しみたい。

それは、この世界を訪れるモモンガの最大の目的でもあるのだから。
「１５０００ッ！」
その考えに、弐式炎雷も至ったのだろう。さらに値段を吊り上げる。そう、仲間と共にオークションを楽しむ為に。
勿論、魔導国でもオークションを開催することは出来る。これとは比べ物にならないほどの規模のモノを。
だが、それを支配者であるモモンガ達ではどうやっても楽しむことは出来ない。支配者たるモモンガ達に競合してくるようなものは、あちらには居ないし、仲間内で行うにしても、ＮＰＣの目がある。その音改の想いを、ヘロヘロはいち早く理解したから、彼に競合したのだ。
音改のすべてを理解したモモンガは小さく笑う。
事前に伝えなかったのは、本気でオークションを楽しむためなんですねと。
だからモモンガは、全力で楽しむべく、一度は降ろしたパドルを再び掲げた。
そして告げる。モモンガの全力を。
「３００００」

『闇の競売　サキュバスムービーオークション』

◇オーバーロード　モモンガ
８
少し過熱しすぎてしまいましたが、とても楽しく参加出来ました。
事前の討伐依頼で得た報酬の殆どを使い切ってしまったのですが、それに見合った価値はあったと思います。
やはり、こうして皆さんと普段出来ない、ユグドラシルでも出来なかったことが出来るのは、とても嬉しく、そして楽しいです。
私が落札したサキュバスムービーは、第九階層の娯楽室に増設した個室に置いてありますので、興味のある方は自由に楽しんでください。

ただし、ＮＰＣの目には気を付けてくださいね？

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷

４

……やり過ぎた。

前回の負債も返済が終わっていないのに、今回の報酬の取り分を殆ど突っ込んじゃったよ。

しかも後半はもうサキュバスムービーの内容より、どれだけ落札するとかの方に熱中したから、意味不明な記録水晶が山の様に……。

この９９％ケモノの獣人モノとか万一ナーベラルに見られたら、俺は生きていけない。

いや、アナウサギって年中発情期の獣人がずっと気になっていたから落札したんだけど、これもうケモノっ子じゃなくて、ただのケモノにしか失礼だけど俺には見えない。

このサキュバスムービーに４００００Ｇも使ったのかよと思う度に、泣きそうになる。種族的に泣けないけど。

あと建やんに、めっちゃ馬鹿にされた。悔しい。

◇古き漆黒の粘体　ヘロヘロ

５

色々と、普段こちらでは出来ない事を、体験させてもらいました。

とても楽しくオークションに参加する事が出来ましたよ。

でも今のキモチは、バカみたいに課金してガチャを回して、その時の興奮が冷めたあの時にそっくりです。

……どうしましょう、これ。

可愛いなって思って落札した猫系獣人の発情音声ムービーとか、女の子の裸すら出てこない……。

ニャーニャー鳴いているのはサンプルで流れた最初の五分だけだと思ったんですけど、二時間ずっと色んな種類の猫系の方が鳴いているだけです。二時間ずっとですよ？　それも、服を着たままですよ！

何に使うの、これ！

他にも完全粘体種族のレズサキュバスムービーとか、私には理科の実験風景にしか見えない……。アメーバーの分裂と何が違うんだ、これ……？

異世界の、様々な種族のエロいお店があるって事は、それだけ様々な性癖があるって事なんですね……。

マニアック系のムービーばかり、いやレアではあるんでしょうけど、落札してしまって、ただ今プチ凹み中です。

◇大商人　音改

１０

初めて参加したオークション。

悠然と、周りが静まり返る様な高額ビッド。これがやってみたかったんだ。

また一つ、夢が叶った気がする。

ユグドラシルは、いまいちそっち方面が弱かったからね。運営的には出来るだけ未知は自分達で見つけて欲しいって方針もあったんだろうけど。

今回全員で沢山サキュバスムービーを落札して来たからさ。あまのまさんに協力して貰って、観賞用の個室をこっそり設置してみた。リアルであった個室ムービー店みたいで、結構いい出来だと思う。

サキュバスムービー集めだって、ユグドラシルのデータクリスタル集めみたいで、ちょっとワクワクしてこない？

並べたサキュバスムービーの水晶を眺めつつ、俺はそんな事を思いました。

◆

余談だが、この日を境にギルドのメンバーに元々あった収集癖に火が点き、ギルドアインズ・ウール・ゴウンは、膨大な量のサキュバスムービーを保有する事になる。

ギルドのメンバーが様々な手段でサキュバスムービーを得ていき、

その金で潤った異世界の男たちがサキュバス店を巡り、スタンク達が拠点とする街のサキュ街が更なる発展をしていく。

その膨れ上がったサキュバスムービーが、当然だがギルドの女性陣に見つかり、新たな事件をナザリックで巻き起こすのだが、それはまた、別の話である。

こげつき亭の依頼　セッ○スしないと出られない部屋

「＜魔法三重最強化（トリプレットマキシマイズマジック）・現断（リアリティ・スラッシュ）＞」

スキルを併用したモモンガの放った第十位階魔法の空間切断が、眼前に聳え立つ塔を守る門番ゲート・キーパーを分断した。

「……ふむ？」

モモンガの魔法によって切り裂かれた門番、スフィンクスに似た巨大なゴーレムだ、の破片がそれぞれ急速に再生していく。

「急速再生のスキル持ちか？　いや、分断されたパーツごとに再生し、復活するパターンか」

切り裂かれたパーツが個々に再生をしていき、それぞれが再びスフィンクスらしき姿を取ろうとしている。

「面白い能力だが、それを悠長に眺めている私では――――いや、仲間達ではないぞ？」

モモンガの言葉通り、再生を始めたパーツに、次々と放たれた光球が吸い込まれ、消滅させていく。

残ったいくつかのパーツが、まるで意志を持つかのように怯え退こうとするが、それは足元に潜んでいた、神話級アイテムすら溶かし尽くす酸の沼が許さない。

残ったパーツを飲み込んだ酸の沼が、いびつながら人のような姿をとり、すべてを溶かし尽くすと、いつもの一抱えほどしかない普段のヘロヘロの姿に戻る。

「結構強かったですねー」

門番を溶かし尽くしたヘロヘロが、のほほんと言う。

そう、この門番は確かに強かった。

結果として、チームを組んだモモンガ達の敵では無かった。だがそれでも、この門番はモモンガ達の攻撃を受けながらも、最初は反撃までしてきた。

「まあ、流石はSランクのこげつき依頼って事ですね」

いくつかの門番の破片を消滅させたペロロンチーノが、ゲイ・ボウを構えたまま油断なく言う。弓を降ろさないのは、一度倒した相手がこちらが油断する頃に復活するという、かつてユグドラシルでもあった出来事を警戒してだろう。

「こんなのが入り口を守ってたら、大抵の冒険者は弾かれるか」

弐式炎雷がそう言ってから、軽く手を上げた。周囲の安全は確保したという合図だ。そこでようやくモモンガ達は戦闘の警戒を解き、武器を収める。

眼前に聳え立つ塔の周囲は、モモンガ達の戦闘の余波で、燦燦たるありさまだ。

後々まで影響が残るほどでは無いだろうが、いずれこの場にブループラネットを連れてきて、念のため周囲の土地の浄化を頼んだ方が良いかもしれない。

まあ、それも次回以降で良いだろうと、モモンガ達は塔の入り口まで歩みを進める。この聳え立つ塔に相応しい、見上げるほどに巨大な門だ。かなり大柄な種族でも問題無く中に入る事が出来るだろう。

「さて、この依頼がこげついたであろう最大の障害は排除できましたが。……ふふ、皆と初見のダンジョンアタックを仕掛けるのは、いつ以来かな」

「……たしかに、久々だね」

そう言って、笑いあう。

感情が抑制される程の強い喜びでは無いが、それでも穏やかな喜びが、ふつふつと込みあがってくる。

喜びのまま、モモンガは扉に触れる。

重厚なその造りに似合わず、扉は然したる抵抗もなく開かれる。そのまま探索役の弐式炎雷を先頭に、塔に踏み入った。

『冒険者の酒場　こげつき亭』でうけたSランクこげつき依頼。

始祖のサキュバスタワー攻略の依頼。その達成の為に。

「さあ、皆さん。難易度の高そうなこのダンジョンを一発攻略し、こげつき亭の看板娘たちを驚かせ、私達が普通の冒険者――――いえ、普通のギルドでは無い事を、こちらの世界にも知らしめてやりましょう

！」
おお！　と溢れんばかりの返事が、塔に木霊した。

◆

「＜魔法持続時間延長化（エクステンドマジック）・妖精女王の祝福（ブレス・オブ・ティターニア）＞」
「＜魔法持続時間延長化（エクステンドマジック）・三本烏の先導（リード・オブ・ヤタガラス）＞」
モモンガの魔法によって、小さな妖精と、三本足の烏が一行の前に進み出る。
「さあ、行きましょう」
「あいよ」
モモンガの言葉に弐式炎雷が頷き、二体の魔法によって生み出された先導役の後に続く。
しばらくは一本道を螺旋状に登っていくだけらしい。
罠を警戒し、周囲に目を配りながらも、一行は雑談を交えながら歩を進めていく。
「だけど、サキュバス淫魔王の遺産とは、妙なこげつき依頼ですねー」
ヘロヘロが今回の依頼を口にした。
「ええーと、正確にはサキュバス淫魔王と呼ばれる存在が遺した塔に巣食った古代人の防衛システムの排除、ですね」
モモンガが今回のこげつき依頼状をマジックアイテムを通して読み上げる。
この塔の最上階に、サキュバス淫魔王と呼ばれる存在が後の世代のサキュバスたちに残した知識が眠っているらしい。
サキュバスたちはその知識を求めたが、なぜかサキュバスとはまるで関係ない古代文明の種族が一度塔を占拠したらしく、その古代人たちが消えた今も、防衛システムだけは生きているために、手が付けられないらしい。
その最たる存在が、門番であったスフィンクス型のゴーレムだろう。あれは並大抵の冒険者や軍隊では、歯が立たないはずだ。
かといって知識と言うあやふやなものを、サキュバスたちもそこま

で本気で追い求めていないらしく、龍種や魔王といった存在にまでは依頼を持っていかなかったらしい。
依頼の報酬も、多少の金銭に、依頼主のサキュバスたちがサービスしますよ的なものだ。正直、依頼難度と報酬が釣り合っていない。
「この先の通路に罠。踏んだら防衛システムが発動して、敵が湧くタイプ。時間効率的に正面突破が一番だと思うけど、どうする？」
罠を探知した弐式炎雷がこちらを振り返りながら尋ねてくる。
モモンガ達の答えは決まっていた。
『正面突破で！』
そう言って、駆け出す。
この依頼は通常とは違う、こげつき依頼だ。それもSランクの。
依頼達成すれば、サキュバスたちだけでなく、こげつき亭の看板娘達によるサービス付きなのだ。
勿論モモンガ達の今回の最大の目的は、仲間と共に初見ダンジョンに挑むという行為そのものなのだが、貰える報酬は多ければ多い方が良い。せっかくこちらの世界に訪れているのだ、そういったご褒美も欲しい。
そしてモモンガ達は特別な許可か申請が無い限り、異世界滞在は一回に付き二十四時間とルールも設けている。
攻略にそこまで時間が掛かるとは思わないが、その後を考えるならば、楽しみながらも、ダンジョン攻略は早めに済ましておく方が確実だ。
そのため、転移系でもない限りはわざと罠を発動させる、正面突破の脳筋解除の手段を取る事にした。
「おっ、ぞろぞろ湧いてきたぞ」
弐式炎雷が先頭で罠が設置されている通路に踏み入った瞬間、無数の魔法陣が至る所に現れ、そこから武装したドール型の防衛システムが次々に湧き出てくる。
「古代人のトラップの癖に、なんでこう見た目がアンドロイドっぽいんですかね？」
ヘロヘロが数体まとめて触手のような手でドールたちを絡めとり、

触れた箇所から溶かしていく。
「妙な文明レベルだよなー。スタンク達も当たり前の様にアンドロイドとか言うし」
弐式炎雷が体術を駆使し、次々にドールたちを破壊していった。
「そんな事言ってたんですか？　どんな会話の流れで？」
ペロロンチーノが、自身の羽を飛ばし、ドールたちを貫いていく。
「ほら、あのモモンガさんとヘロヘロさんが行ってたお店。そこの話をスタンクとしてたら『アンドロイドレベルの娘ならイケる』とかなんとか」
「ほほうー」
雑談を交えながら、ドールたちを次々に破壊していく仲間達に、モモンガは苦笑いする。完全に出遅れてしまった。どうやら今回はモモンガの出番は無いらしい。
まあこの先にいくらでも出番はあるだろうと、モモンガは今回は譲る事にし、ドールたちの破片を避けながら先を進んでいく。
そのまま、脳筋解除のままにだ、基本的に一本道を進んでいき、塔の中層に差し掛かったくらいの場所で、初めて道が分かれた。
先導役の魔法の妖精と烏も、別れ道の手前で消えた。
役割を終えたという事だろう。
そしてこのパターンは、どちらの道も両方を行く必要があるという事だ。それもチームを分けて、同時に攻略するタイプだとモモンガ達はユグドラシルの経験からそう予測する。
チームを分けるなら、探査役の弐式炎雷と魔法詠唱者のモモンガは別れるべきだ。だが、これまでのダンジョン難度からそこまでは不要と判断した一行は、各々指でコインを弾いて落ちてきたそれを手で受ける。ヘロヘロはそれっぽい動きをだが。
「……ええーと、俺とヘロヘロさん。それと弐式さんとモモンガさんですね」
コインの裏表で、そうチーム分けが決まった。
「それじゃ、この先で落ち合いましょう」
二人と一度別れ、モモンガは弐式炎雷と共に先を進んでいく。すぐ

に扉が見えてきた。構造的に、この先はフロアになっているだろう。
「扉に罠は無し。とりあえず入ろうか？」
「ええ」
弐式炎雷の言葉に頷き、二人同時に扉を通る。
そこはモモンガの予想通りに、広めのフロアになっていた。壁際に小さな彫像が置かれており、その口から飲めそうな水があふれ出ている。まるで、ここまで登ってきた一行を労わるかのようだ。
勿論飲食不要で疲労も無い二人に、小休止など必要が無い。そのままフロアを抜けようと歩みを進めていく。すると部屋の中ほどまで進んだ瞬間、モモンガ達が入ってきた扉がひとりでに閉まる。
「……罠の類はなかったんだけどな」
弐式炎雷が言う。彼が探知出来なかったのならば、これは罠の類ではない筈だ。
こういう時、ユグドラシルならば何かイベントが起こる。そう例えば、避けられない中ボスがエリアに湧くとかだ。
しかし少しの間待ってみるが、何も起きない。肩透かしを食らった二人は、軽く顔を見合わせ、出口に向かう事にする。
だが、出口の扉に触れた瞬間、これまで無かった出来事が起こった。
「……開かない。イベントはこれか？」
弐式炎雷の呟きに、モモンガは扉の付近を視線で探る。
これがイベントの正体ならば、なにかヒントがある筈だ。そしてそれは直ぐに見つかる、扉の右側に一枚の金属製らしいプレートが嵌め込まれており、何事か刻まれている。
「……セッ○スしないと出られない部屋、とありますね……」
マジックアイテムを介して文言を読み上げたモモンガに、思わずという感じで弐式炎雷が吹き出した。モモンガも、そんな弐式炎雷に苦笑いで応えた。
「だははは。そ、そういやここサキュバス淫魔王とかいうのの塔だったね。忘れてたわ」
「ええ、私もです」
「こんなあからさまなトラップかよ。流石サキュバスダンジョン。ま

あ、いいや。ちゃちゃっと開錠する」
そう言って弐式炎雷が扉に向かい開錠スキルを使用する。
彼は忍者と言う職業を得るまでに、様々なクラスの積み重ねがある。その為多種多様のスキルを持ち、モモンガを除けば、その手札の多さはギルドでもトップクラスだ。
そもそもユグドラシルプレイヤーであるモモンガ達に、ただ部屋に閉じ込めるなど何の痛痒にもならない。この扉もすぐに開かれるだろう。
「――ごめん、開錠に失敗した。……嘘だろう、そんな難度じゃないだろう、これ？」
「えっ？」
しかし、少し経ってから弐式炎雷が告げた言葉は、まさかの開錠失敗。モモンガの無いはずの鼓動が、僅かにトクンと跳ねた気がした。
「も、モモンガさん、一度戻ろうか？」
「え、ええ」
問われ、モモンガは頷き＜転移門＞を発動させる。
モモンガの魔法によって闇の扉が開かれ、二人でその扉を通る。
通るが、出た先は同じ部屋だった。試す様に闇の扉に腕だけ伸ばすと、その腕がモモンガの眼前に突き出てくる。中で空間がねじ曲がっているかのように。
転移魔法で、抜け出すことが出来ない。
「ま、まあ、ここから出ないと先に進めないしね。それに俺のスキルはあくまでも副産物みたいなものだし、こういう事もあるよ。勿体ないけど、これ使っちゃうか」
弐式炎雷が板のような形状のマジックアイテムを取り出す。
アーティファクト、七門の粉砕者エビノゴイ。
七度しか使えない、九十レベル相当の盗賊の鍵開け能力に匹敵する力を持つアイテムだ。
弐式炎雷がアーティファクトを扉に当て、力を解放する。
そして――
「ウッソだろう!?　おい!?」

信じられないと言う様に叫びだす。
瞬間、モモンガの動悸も跳ね上がり――――沈静化される。
「お、落ち着きましょう！　弐式さん！」
精神が沈静化されるモモンガと違い、それでも耐性はある筈だが、弐式炎雷は興奮のまま扉を殴りつけた。
本人は自分を非力と評するが、それでも百レベル近接職の手加減無しの一撃だ。それだけで扉が吹き飛んでも良いはずだが、揺れもしなかった。
「くっそ、俺を本気にさせたな!?」
扉が壊れない事に、弐式炎雷は虚空から二対の小太刀を取り出し構え、スキルを発動させる。
「＜鎧通し＞！」
黒い短剣が弐式炎雷の周囲に浮かび上がり、扉目がけ何本も飛んでいく。対象の防御力を削ぐスキルだ。
「＜頭殺し＞！　＜腕殺し＞！」
流麗な動きで、弐式炎雷が扉を斬り付ける。
太陽の如き眩き煌めきと、月の如き静かな輝きを宿した二対の神話級武器を持つ彼の動きに、思わずモモンガは目を奪われる。
一度シャルティアに対し振るった事のある武器だけに、その本来の所持者との違いをまざまざと見せつけられた。
しかし。しかし、それでも。
「無傷だと!?」
モモンガは思わず驚愕に声を上げ、再び精神が沈静化された。
弐式炎雷の一連のコンボを受けても、扉には傷一つない。弐式炎雷は小さく舌打ちし、素早く後ずさる。
「退いてて、モモンガさん！」
瞬間、弐式炎雷が別の武器を持ちだす。
彼の切り札である「素戔嗚スサノオ」。その三メートルを優に超える武器を構える。
様々なペナルティを抱え、振る速度が非常に遅くなってしまうが、相手が動かない扉ならば問題は無い。

ユグドラシルで様々なボスモンスターのトドメをさしてきた、一撃に限ればギルドアインズ・ウール・ゴウンでも最強とされる忍刀が、初めて異世界で振るわれた。
扉に忍刀がヒットした瞬間、凄まじい値のダメージ係数が適用された多段攻撃が入る。
「……はははは、嘘だろう？　……夢でも見てるのか、これ」
結果、扉には何の痛手も無く、依然無傷。
そのあり得ない光景に、モモンガは思わず言葉を失う。
何度精神が沈静化されれば済むのだろうか。
だが、このままでは、このままでは――
「――弐式さん。身替りのスキルは使えますか？」
「……モモンガさん？　あ、ああ！　大丈夫！　気にしないでやっちゃって！」
扉に向かい一歩進んだモモンガの真意を理解した弐式炎雷が下がっていく。その姿に頷き、モモンガもまた切り札を見せる事にする。
この扉は物理攻撃に絶対的な防御力を誇るのだろう。恐らくそれは魔法力も同様のはずだ。
だが全てに耐性を持つことなどは、不可能だ。少なくともユグドラシルでは。それゆえに絶対的な力を持つモモンガ達も、どこかしらに必ず弱点を抱えている。それがルールなのだ。
モモンガが持つ職業の一つエクリプス。
その職業が持つ、本当の意味で死を極めた死の支配者のみが、この職業に就き、日食のごとく全ての生命を蝕むと記載された、百時間に一度しか使用できないと記された特殊技術。
エクリプスの切り札。
それを使う。
「〈あらゆる生あるものの目指すところは死である〉（The goal of all life is death）」
呟きと共に、モモンガの背後に十二の時を示す時計が浮かび上がる。
そして、魔法を発動させた。

「＜魔法効果範囲拡大（ワイデンマジック）・嘆（クライ）きの妖精（オブ・ザ・バンシー）の絶叫＞」
室内に女の絶叫が波紋の如く響き渡る。それは即死の効果を持った叫び声。
まだ何も起きない。当然だ、このスキルの真価は十二秒経過してからだ。
効果的に弐式炎雷を巻き込んでしまうが、彼には忍者の特殊技術身替りがある。一度だけ、あらゆる攻撃を肩代わりさせることが出来るスキルだ。そのため心配はない。
（……十二秒が長い）
時計の針が、やけに遅く感じる。
かつてこの魔法は、人造物扱いであるシャルティアのエインヘリヤルだけでなく、生命無き空気や大地すら死滅させた。
すべてに平等に「死」を与えた。
（……頼む）
モモンガは祈る。祈る神などどこに居るのかも知れないが。
（……頼むから、通ってくれ）
扉を食い入るように見つめる。もしこれが通らなければ、扉に死が訪れなければ――
（――弐式さんとセッ○スなんてしたくない！）
それしか、この部屋から出る手段がなくなってしまう。
同時に時計の針が一周を終え、再び天を指す。そしてモモンガの切り札は発動し、瞬間、世界が死ぬ。
世界が――死ぬはずだった。
『……』
モモンガと、スキルを発動させ死から逃れていた弐式炎雷の、長い、長い沈黙が重なる。
「……イヤだ」
その長い沈黙を切ったのは、弐式炎雷。
「イヤだよ！　俺、素人童貞なのに！　モモンガさんとセッ○スなんてしたくない!!」
一瞬素人童貞が何の事かわからなかったが、すぐに理解したモモン

ガも叫ぶ。
「お、俺だって嫌だよ!?」
久しぶりにギルドのメンバーの前で一人称が俺に戻るほど動揺しながら。
「どうするんだよ、これ！　どうすれば出れるんだよ、これ!?」
扉は健在だ。モモンガの切り札を受けてなお。
＜あらゆる生あるものの目指すところは死である（The goal of all life is death）＞の効果がしっかりと発動した証拠に、部屋に流れ出ている水は腐ったような汚水になり、死んでいる。
それなのに、扉も、壁も、床も、全てが何事も無かったように、そのままであった。
「ヤダ！　イヤだ！　絶対に嫌だ！」
弐式炎雷が、子供の様に手あたり次第周囲を斬り付け、スキルを振るっている。そんな姿を、モモンガは今までの付き合いで初めて見た。
「そうだ！　モモンガさん、超位魔法だ！　＜天上の剣（ソード・オブ・ダモクレス）＞！　あれならいけるんじゃない!?」
対建築物用の超位魔法の名を弐式炎雷があげた。
「そんなのとっくに試しましたよ！　でも何の効果もありませんでした！」
弐式炎雷が半狂乱になっている間に、モモンガも取れる手段は、課金アイテムを使ってでも試していた。宇宙兵器の効果が発動した実感はあるのだが、それでもこの部屋にはなんの影響も無かった。
モモンガは、いや、これはギルドのメンバー全員がそうであろう。
油断を、慢心をしていた。
この世界でも、自分達に敵う存在は無く、その力は全てに勝ると。
その慢心が、この結果だ。
「もうこうなったら、しょうがない！　モモンガさん、モモンガ玉を使おう！」
弐式炎雷の言葉に、モモンガの精神が一気に沈静化された。
「ここで!?　セッ○スしないと出られない部屋の為に、世界級アイテ

ムを使うんですか!?　俺、そんな事でレベルダウンするの!?」
　思わずモモンガは、普段の仲間に対する口調も忘れ、まくし立てる。
「だってもう、それしかないじゃん！　世界級アイテムを使うしか無いよ！　経験値稼ぎは俺も手伝うから！」
「どれだけ時間かければいいんですか！　というか、嫌ですよ！　みんなにセッ○スしないと出られない部屋を出るために、世界級アイテムを使いましたって、どうやって報告するんですか!?」
「セッ○スセッ○ス、連呼しないでよ、モモンガさん！」
「好きで連呼してませんよ！」
　思わず動揺の中、二人でくだらない事で喧嘩になりそうになる。
「……ダメだ。ここで俺達が争ってもしょうがない」
「え、ええ、そうですね」
「だけど、この力の通じなさは、確実に世界級アイテムクラスの無茶苦茶さがあるよ。……認めたくないけど、俺達が取れる手段は、三つだけだ」
　その三つを、既に理解しているモモンガも頷く。
「モモンガ玉を使って物理的に突破するか。それとも寿命の設定も無い俺達が二人して永遠にこの部屋で過ごすか」
　指を立てながら、弐式炎雷が確認していく。
　そして最後に、三本目の指を立てて、言う。
「……俺達で、セッ○スするか。この三つだけだよ……」
　その絶望的な言葉に、モモンガもまた、頷く事しか出来なかった。

◆

「あ、ようやく出てきましたねー」
　ヘロヘロが間延びした言葉と共に、部屋の扉から姿を見せたモモンガと弐式炎雷の二人に手を振って出迎える。
「……」
「……」
　扉から姿を見せた二人は無言だ。無言でヘロヘロ達に合流する。

「いやー、しかし。面白いトラップでしたね。まさかセッ○スをしないと出られない部屋だなんて。プー、クスクス」
粘体の触手で口らしき部分を押さえながら、ヘロヘロは笑う。しかし二人からは反応は無い。その姿にヘロヘロは疑問気に首を傾げ、尋ねてみる。
「二人でセッ○スしてきたんですか？」
瞬間。二人が激高した様に叫びだす。
「して無いよ！　するわけないだろう!?」
「してませんよ！　というかなんでペロロンさんは、体育座りで泣いているんですか!?」
モモンガからの質問には答えずに、ヘロヘロは構わず質問を重ねる。
「それで、どうやって部屋から出てこれたんですか？」
「モモンガさんにデスじいちゃんとデスばあちゃんをスキルで召喚して貰って、そいつらにヤッてもらったんだよ！」
弐式炎雷が頭を抱えながら叫ぶ。デスじいちゃん、デスばあちゃんというのはデス・エンペラーとデス・エンプレスと言う名のアンデッド系モンスターの事だ。
「ほうほう。こちらではそんな事を命じる事が出来るんですねー」
「あー！　二人にセッ○スしろって伝えた時のあの表情！　思い出したくない！」
「ちょっと！　直接命令した私の前で、それを言わないでくださいよ！」
「だって、あいつ等セッ○ス終わった後、俺気付いてたからな!?　二人でそっと後手に手を繋いでたの！　何なんだよ、この世界！　なんであんな命令が通って、尚且つちょっといい雰囲気になってるんだよ!?」
「あーあー！　言わないでー！　アイツらと感覚共有を切っても、感情が少し流れ込んで来てた俺の前で、そんな事言わないでー！」
「楽しそうですねー」
「全然楽しく無いよ!?　というかペロロンさんが泣いてる説明をしろ

よ!?」
「ああ、それはですね――――」
説明しようとヘロヘロが話し始めた途端、ペロロンチーノが立ち上がり、涙声のまま叫びだす。
「け、汚れてしまった！　ごめん、シャルティア！　俺は汚れてしまった！　ヘロヘロさんに汚されてしまったー！　助けてよ、姉ちゃん！」
「ちょっと、人聞きの悪い事言わないでくださいよ。少しの間私の身体に取り込んだだけでしょう？　ＰｖＰでいつもやってる事じゃないですか」
ヘロヘロ達は一通り扉を開ける手段を試した後、早々に諦め、別の手段を試した。
ヘロヘロのスキルの一つに、対象を自身の粘体の身体に取り込んで、身に付けた装備品と共に相手にダメージを負わせるものがある。それをペロロンチーノ相手に試したのだ。
「まあ、私の普段のプレイはサキュ嬢の皆さんを身体に取り込むのが基本ですからね。そのスキルをＰｖＰとして使ってもしてる事は一緒だし、いけるかなーって思ったんですよ」
そしたら無事に扉が開きました。
そう続けるとモモンガと弐式炎雷は言葉を失い、固まった。ようやく動き出したと思ったら、再び混乱した様に叫びだす。
「嘘だろう!?　あのスキル、こっちの世界じゃセッ○スにカウントされるのかよ!?」
「あのスキル！　ユグドラシルでも、向こうでも、何回も受けているんですけど!?」
「だから、ＰｖＰとセッ○スは違うでしょう？」
ヘロヘロが呆れたように伝えるが、それでも二人と泣き続ける一人は納得できないように叫び続けている。
やれやれとヘロヘロは時刻を確認する。今日中にダンジョンを攻略するには先を急がないといけない。
「ほら、どうします？　もうそんなに時間も無いのに、まだ半分来たく

らいですよ。一応この先を偵察してきましたが、もう少し行くと、また道が分かれてましたよ？」
そう伝えると、混乱していた三人の動きがピタリと止まる。
そして――――

『こげつき亭の依頼　セッ○スしないと出られない部屋』

◇オーバーロード　モモンガ
依頼未達成のため評価無し
依頼を達成出来無かったのは、私達があちらの世界に劣っている訳では無く、時間的余裕があまりなかっただけです。
決して私達は負けていません。
ただ、制限時間と言う私達が定めたルールに従ったまでです。

◇ハーフゴーレム　弐式炎雷
依頼未達成のため評価無し
この世界のダンジョンアタックは、俺達には早すぎた。

◇バードマン　ペロロンチーノ
依頼未達成のため評価無し
泣きそうです。

◇古き漆黒の粘体　ヘロヘロ
依頼未達成のため評価無し
こげつき亭さんのSランクこげつき依頼にチャレンジしましたが、残念ながら未達成に終わりました。
エキドナのスーネリアさんにお相手して貰いたかったんですが、残念！
あの長い体を全部取り込んで、楽しみたかったんですけどね。
ダンジョン難易度的には、そこまででもありません。防衛システム自体は力押しで進めるので、苦労はしませんから。

ただ本来の塔自体のトラップが難敵でしたね。
ああいうのが、サキュバスダンジョンって言うんでしょうねー。
もう少し先に進んで、どんなトラップがあるのか、確かめたかったなー。

◆

「ククク、どこぞの誰かが塔の防衛システムをあらかた無力化してくれたおかげで、労せず最上階まで登る事が出来たな、デミアよ」
デスアビスはにんまりと笑いながら背後のデミアに振り返り、そう伝える。
この塔の存在は勿論知っていたが、依頼の報酬と塔の入り口を守る門番の強さの釣り合いが取れていなかったために、今の今まで放置していたのだった。
「サキュバストラップも、わらわの力とおぬしの万能デコイを使えばさほど苦労もない。このままこの塔に眠るサキュバス淫魔王の知識というものを、拝見しようではないか」
「んー、デスアビスぅ？　私としては、こんな火事場泥棒みたいな真似はあまりしたくないのだけど？」
「あの突如現れた神格集団のことか？」
デスアビスはそう試す様にデミアに笑い掛ける。
「……やっぱり知ってた？」
「知らないでか。どこぞの街で毒竜の希少な素材が大量に流れ出た。フラスパ大聖堂周辺に、謎の天使が六体出現したという報告もある。全部そいつらの仕業であろう？」
意地悪く笑いながらデスアビスは、最上階のフロアを突き進む。
この塔周辺の戦闘痕。あれも並大抵の存在が残せるものでは無い。
何よりこの塔を貫く、天上からの光を見たというものも居る。その者はあれはまるで天上から降り注ぐ剣のようであったと証言している。
「そんな奴らを、おぬしが放っておくわけがあるまい？」

「まあ、確かに、知り合いではあるけど。それで、どうしてほしいの？」
デスアビスはフロアの中心部に浮かぶ一枚のプレートを拾い上げる。これがサキュバス淫魔王の遺産だろう。
「紹介しろ。やつらの力を借りれば、今度こそ政権を取れるかもしれん」
「んー、あの人達。あんまりそういうのに向いて無い気がするけど。それで、デスアビス。遺産にはなんて？」
デミアの質問にデスアビスが、プレートに刻まれた文言を読み上げる。
「なになに。『おめでとう？　ここまでたどり着けたみんなの絆こそが――』」
そこまで読み上げて、デスアビスはプレートを床に投げつけて捨てた。

幕間―3　茶釜さん達の異世界訪問　前編

冒険者酒場というものは、サキュバス街に並ぶ人種の坩堝である。
様々な異種族がこの酒場で依頼を受け、冒険に出掛ける。
または、依頼と共に張り出されたレビューを片手にサキュバス街に消えていく。
そんな異種族集まる『食酒亭』だからこそ、最近になって異形の集団が四十人近く出入りするようになっても、初めこそ多少の混乱はあったが、すぐに受け入れられたのである。
「メイドリーさぁん。蜂蜜酒のお代わり下さーい！　あとカスタードプリンのクリームマシマシフルーツトッピングチョコレートソース掛け、バケツサイズでお願いしまーす！」
今日も今日とて、テーブルの一角に見慣れぬ異形の組み合わせ。
「アハハハハッ。あんちゃん、飲み過ぎだよー。フフ、フフフフ。それに食べ過ぎー。皆の目が無いからって、はしゃぎ過ぎちゃダメだよ？　ウフフフ、あっ、メイドリーさん。私もお代わり下さい」
そう上機嫌にメイドリーに大ジョッキを差し出す帽子を被った異形種。
「は、はーい！　かしこまりましたー！」
初めて見る異種族に出会う事は、そう珍しい事ではない。街を歩いていれば月に一、二度はあることだ。たとえそれが、異種族ならぬ、異形種であったとしても。
「……」
しかし今日の食酒亭は、その異形種が席に着く一画に視線が集まっていた。
ある者は好奇の視線を。ある者は驚愕の視線を。
そしてある者は、喜悦と愉悦に満ちた好色な視線を。
その様々な視線の先には、一体の粘体。
本来ならばそこまで視線を集める種族ではない。
その粘体が、ピンク色の肉棒とも言うべき姿をしていなければ。
（……サキュバスっぽい人達からの視線が熱い……）

明らかにそれを見る目で見つめられている異形種こそが、ぶくぶく茶釜。
盾役特化のビルドに、異形種ギルドアインズ・ウール・ゴウンの中にあっても、一際異彩を放つ粘液盾。
「あれー、かぜっち～？　もしかして毒耐性外してないの～？」
上機嫌の餡ころもっちもちからそう訊ねられ、軽く頷く。
その動きに肉棒がプルンと震え、一部のお客、主にサキュバスらしい種族の女性から黄色い歓声が湧き起こる。
「ウフフー、今日は思いっきり羽目を外そうって、最初に言ったのはかぜっちだよー？　耐性外して、一緒に楽しんじゃおうよー」
普段滅多に見せない酔った姿のやまいこに、ぶくぶく茶釜が再び曖昧に頷く。そしてその肉棒の震えに、再び歓声が上がる。
（……なんだこれ）
ぶくぶく茶釜だって、正直に言えば一緒に耐性を外して楽しみたい。
しかしそれをして万一意識を失いでもしたら、正直サキュバスの方々に拉致られお持ち帰りされそうで怖い。
その懸念から、ぶくぶく茶釜はちびりちびりと飲食はしても、耐性を外す所までは出来ないでいた。
「……今日のおまえらは、これまた一際だな」
「言わないで下さい」
「お前の鎧も大概だが、それの上がいたか。あれぶっちゃけチン――」
「だから言わないで！」
隣のテーブルから放たれた遠慮なしの言葉を、弟のペロロンチーノが遮っていた。
そんな言葉を聞きながら、ぶくぶく茶釜は昔のことを思い出していた。
ユグドラシルを始めた日。粘体の異形種を選択して、このピンク色の肉棒をキャラメイクした際は、自分でも大笑いしたものだ。そのあんまりな見た目に。

まあ、すぐ飽きるだろうと始めたゲームが、仲間達との出会いによって楽しみに変わり、気付けば後に引けなくなった。
「お代わりお持ちしましたー」
そう言って天使の給仕、たしかクリムと言ったか、その子がバケツサイズのプリンを震わせながらやってくる。
「ありがとー、クリム君！」
天使の子が両手で震えながら支えるバケツサイズのプリンでも、餡ころもっちもちからすれば片手で軽く支えられるものだ。礼を言いつつ、受け取っていた。
「ああ。クリム君、私も追加注文していい？」
「はい、承ります」
そう言ってぶくぶく茶釜は、ふよふよと漂いながら近づいてくる天使の少年の耳元に、囁き掛ける様に注文を伝える。
「～～～～～～～～～!!」
瞬間クリムが顔を真っ赤にし、声にもならない声を上げ、フラフラとプリンをのせていたトレイで股間を隠す様にしながら下がって行った。
これくらいの遊びは、構わないだろうとぶくぶく茶釜は思う。本音を言えば、クリムにスカートを履かせてみたい。それを我慢するのだからこれくらいはねと、ぶくぶく茶釜は頷く。
だが、この場に共に訪れた弟は違うらしい。立ち上がってこちらに詰め寄ってくる。
「……おい、姉ちゃん」
「なんだよ？」
「……いま、クリム君に何を耳打ちした？」
「普通に注文伝えただけだけど？」
「嘘をつくな！　絶対『ひぎぃ』とか『らめぇ』とかそういう類の台詞をクリム君に言ってただろう!?」
「私がそんな事言う訳ないだろう？　……もっとえぐい奴だ」
「おぃ！」
「お姉さん。その台詞、俺にも下さい」

「いや、まてスタンク。今はそこじゃない。……ペロロンチーノ、お前ら姉弟なのか？　粘体と有翼人なのに？」
　そうして、再び騒がしくなる。
　その頃には、ぶくぶく茶釜に対する好奇の目も少なくなっていた。やはりこの世界の許容というのか、懐は深いらしい。
「ペロンとかぜっちは正真正銘姉弟だよー。だってあたし二人のご両親に会った事あるもん」
「まって、餡ころさん。……いつうちの親と会ったんだよ？」
「えぇ～？　転移して来る前ー。感謝しろよー、ペロン！」
「一体なにに!?」
「ウフフフー。あんちゃん、色々してくれてたらしいもんねー。私もありがとうねー。アハハハハー。あー、楽しー」
　やまちゃん、こんなにお酒弱かったっけと思いながら、ぶくぶく茶釜ははしゃぐ親友二人に、こちらでモモンガ達が知り合ったという人間にエルフに天使、そして素面の為か、一人右に左に動き回る弟に視線を向ける。
「ねえー、ブルーズさんだっけ？　餡ころもっちもち王国の住人にならないー？　衣食住にお給料だって一杯出すよー」
「……勘弁してくれ」
「位階魔法の仕組み？　ウフフ、いいよー。やまいこ先生が教えてあげますよー。まずはリングコマンドに魔法を十二個セットして、それを覚える事から始めます！　魔法職は記憶力だからね！」
　エルフからの質問にやまいこがそう真面目に答えているが、それはユグドラシル時代の話じゃんとぶくぶく茶釜はちびりと酒杯に口を付ける。
　口なんて無いし、どこからでも吸収できるのだが、なんとなく自分の中ではここが口という部分はあったりする。
（二人ともはしゃいでるなー。まあ、無理もないか）
　そう小さく笑って思う。
　久々にギルドの仲間以外の前で、支配者でもない、創造主でもない、ありのままの姿をさらけ出すことが出来ているのだ。

（男連中がこっちにハマる理由がわかる――――ん？）
弟の視線が、自分の親友二人と、こちらで知り合った友達――――らしい、から外れている。少しだけそわそわしていた。
小さい頃から、こういう時の弟は要注意だ。目を離そうものなら何処かに消えてしまうか、何か問題を持ち込んでくるか、どちらにしろ面倒な事になる。
弟の視線を悟られないように、目で追う。目は無いから悟られようが無いのだが、ぶくぶく茶釜はそうしたのだ。
（……こいつの好みから外れてるけど。……そういう事か）
ペロロンチーノの視線の先には、衣服と表現するよりも、薄布を纏ったと表現する方がしっくりくる薄着の女性。ドライアドの一種なのか、緑色の髪が、広がった双葉のようにも見える。
その彼女が大きめの酒杯を両手で抱えて、あからさまに落ち込んでいた。
酒場の隅、喧騒から離れた先。そう気づくものでは無い。だからこそ、弟が気づいたのだろう。悲しそうな子が居ると。
（しかし、こいつの目敏さは何処から来るんだ？　それをもっと別の場所でいかせよ）
そうすれば、もっと安心できるのに。そんな事を思いながら、ぶくぶく茶釜は息を吐く。フリをする。
「……行って来いよ」
顎をしゃくって、弟を促す。すると弟は弾けたように破顔し、俯き一人暗く沈むドライアドらしき彼女の元に向かっていく。
「……失恋とかの相談されたら、アイツどうするつもりなんだ？　何も言えないだろう、素人童貞のアイツが」
「フフフ、かぜっち。そんな事言ったら、弟君が可哀想だよ」
そうやまいこが言う。先ほどまでの笑い上戸がすっかり鳴りを潜めていた。
切っていた毒耐性を再び付けたか、状態異常回復の治癒魔法を唱えたのだろう。
恐らく、そわそわし始めた弟の様子にやまいこも気付いていた。だ

から素面に戻った。たぶん彼女にとって弟は、目の離せない手のかかる生徒と同じカテゴリーに入っているから。
「本当に、弟君は良い子だね」
そう弟を評する親友に、ぶくぶく茶釜は同意はせずに、けれど否定もせずに小さく息だけを吐いた。
さて、弟が持ってくるのは解決したという報告か、それとも厄介ごとか。
時期にやってくるであろうそのどちらかを、ぶくぶく茶釜は酒杯を口に運んで、待つのであった。

◆

『サキュバス店の経営を立て直してほしい？』
テレースと名乗ったドライアードの彼女が、やまいこと餡ころもっちもちの確認の声にコクリと頷く。
正確には彼女はドライアードではなく、ドリアードらしい。その二つの違いを気になりはしたが、ぶくぶく茶釜は尋ねなかった。
「うん、なんとか俺達で力になれないかな」
無理。
そう即答しようとして、ぶくぶく茶釜は言葉の代わりに息を吐く。
テレースが非常に落ち込んでいる事と、弟が縋る様に自分を見ていたからだ。
「いやいや、ペロン。それは難しいでしょうー。経営とかの問題なら、もっと詳しい人連れて来ないと」
餡ころもっちもちのもっともな言葉に、ギルドの仲間には何人かそっち方面が強いメンバーが居たことを思い出す。
「ち、違うんですぅー。確かに経営もヤバいんですけど、私達がヤバいのはそういう理由じゃ無いんですぅー」
涙声で語るテレースが続ける。
「私たちが絶叫すると、お客様を殺しちゃうんですぅ」
「テレースさんは、マンドラゴラのドリアードらしいんだ」

その弟の言葉にぶくぶく茶釜たちと天使のクリムを除くすべての異種族が、一斉に距離を取った。
その姿に、なるほどとぶくぶく茶釜は頷く。
「マンドラゴラって、マンドレイクの事だよね？　ユグドラシルでは錬金術素材じゃなかったっけ？」
「餡ころさん、テレースさんに失礼だぞ」
「わかってるよ。ちょっと確認しただけじゃん」
動じていないのは、ユグドラシルプレイヤーの自分達に、耐性があるであろう天使のクリムだけ。それ以外の客はそそくさと会計をすましていた。
マンドラゴラは引き抜かれた時に絶叫し、その声を聞いた者を殺す。そこは素材と種族の違いはあっても、ユグドラシルと違わないらしい。
「具体的に、どういう時に相手の人を殺しちゃうの？　普通に話す分には問題ないんでしょう？」
やまいこの確認に、テレースは言いにくそうに身を捩らせる。その姿に察しがついたぶくぶく茶釜が、代わりに答えた。
「イッた時の声で、殺しちゃうんだ？」
その答えにテレースは頷き、ペロロンチーノは姉の発した言葉に嫌そうにした。そして下ネタは平気でも、生々しくなると一気に耐性を失う餡ころもっちもちも言葉も失う。
「確かにそれだと、そういうお店は難しそう」
「不死系の種族を相手にするとかは？　アンデッドとかゴーレムとか」
こちらに繋がる扉を見つけてから、せわしなく行き来している骨のギルマスと覆面の忍者を思い出しつつ、ぶくぶく茶釜はそう提案する。
「そういう人たちも、別のお店に取られちゃって、全然来てくれないんですぅ！　私達絶叫で相手を殺せる以外はただのドリアードだから、全然特色が無いんですよぉー！」
そうしくしくと泣きながらテレースが答える。

まあ、それもそうかとぶくぶく茶釜は納得する。以前チェックしたギルドのメンバーが訪れたレビューだけでも、相当な量だった。それだけの候補がある中で、わざわざマンドラゴラのドリアードを選択するモノ好きは少ないだろう。
「だから俺達で、テレースさんたちのお店に何か他の店にも負けない特色を作ってあげようよ」
「おねがいですぅ！　こんな私達だから、誰も相談にのってくれないんですよぉ～」
泣き崩れるテレースには悪いが、そんな義理は無い。そもそも今日だって、ぶくぶく茶釜たちは息抜きに遊びに来ただけなのだ。面倒ごとを抱えるつもりは無い。
つもりは無いがと、ちらりとぶくぶく茶釜は弟に視線を合わせる。
まるで関係の無いはずの弟が、なぜか縋る様にこちらを見ていた。どうしてこいつは、関係無い事にここまで必死になるんだと思いながらも、かつて弟達が訪れたというマイコニドのお店でのレビューを思い出す。
そこで弟は、不人気とされていた毒性の強いマイコニドを指名したらしい。
そして仲間達は、弟はそういう人だと、付き合ってくれた。
やれやれと、ぶくぶく茶釜は肩をすくめた。
実際それはぶくぶく茶釜の身体を僅かに震わせただけだが、親友二人には伝わったらしい。
やまいこは苦笑いしながら頷き、餡ころもっちもちも大きく頷いた。
人の良い二人にも小さく笑いながら、ぶくぶく茶釜はテレースに向き直り、口を開く。もちろん実際には開きはしないのだが。
「テレースさん。一個作戦思い付いたけど、試してみる？」
ぶくぶく茶釜は何時だって、縋る様な弟の瞳には勝てないのだから。